



市民と専門家による仙台市役所本庁舎建替シンポジウム

CITY HALL

仙台ラウンドテーブル

-
- 第1回仙台ラウンドテーブル
「市役所（シティホール）を考える」
2018年11月26日〔月〕 13:00 - 18:45
 - 第2回仙台ラウンドテーブル
「みんなの市役所（シティホール）を模索する」
2019年1月27日〔月〕 13:00 - 18:45
 - 第3回仙台ラウンドテーブル
「地域コアとなる市役所（シティホール）を育む」
2019年4月23日〔火〕 13:00 - 18:45

主催

仙台市財政局理財部本庁舎建替準備室
一般社団法人 宮城県建築士会
一般社団法人 宮城県建築士事務所協会
公益社団法人 日本建築家協会東北支部宮城地域会

0.0	目次	2
0.1	仙台市役所本庁舎建替	3
0.2	論考	4
0.3	論考	4
0.4	論考	5
第3回仙台ラウンドテーブル「地域コアとなる市役所（シティホール）を育む」		
1.0	前半ラウンドテーブル	7
1.1	テーブル A1 「都市ビジョン」の一翼を担う市役所本庁舎とは何かを考える 中心部他施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える	8
1.2	テーブル B1 「これからの仙台を担う仕組み」を考える 市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える	8
1.3	テーブル C1 「基本計画検討委員会資料」をレビューし、様々な市民目線を網羅する 基本計画検討委員会資料レビューする	8
2.0	後半ラウンドテーブル	63
2.1	テーブル A2 「都市ビジョン」の一翼を担う市役所本庁舎とは何かを考える 周辺エリアのビジョンの一翼を担う「役所市（シティホール）」を考える	64
2.2	テーブル B2 「これからの仙台を担う仕組み」を考える 低層部の必要機能と運営手法を考える	64
2.3	テーブル C2 「基本計画検討委員会資料」をレビューし、様々な市民目線を網羅する 勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える	64
3.1	「仙台ラウンドテーブルでの市民議論の関心のありか」	114
3.2	主催・企画委員会	115

市民そして専門家の皆様の熱意への感謝

はじめに、仙台市役所本庁舎の建替えに関し、仙台ラウンドテーブルの開催から報告書発行までの一連の活動にあたり、宮城県建築士会、宮城県建築士事務所協会、日本建築家協会東北支部宮城地域会の3団体の皆様が連携し、多大なご協力を賜りました。また、本市内外を問わず多くの専門家の皆様にご登壇いただき、3回の開催で全18テーブル、合計2,580分間の議論を通じて忌憚のないご意見を頂戴することができましたこと、そして何より、市役所本庁舎の建替えに関する皆様の熱意に対して心より感謝申し上げます。

市役所は誰のものか

市役所の本庁舎は通常、行政の執務と議会の運営がなされる場です。しかしながらその執務は市民生活に直結しており、市民が人生の様々な節目において少なからず利用する場でもあります。海外では市役所は「シティホール」と呼ばれ、様々な活動の場として利用されるとともに、市民が地域のアイデンティティを感じる場の役割も担っています。

このことから、市役所は職員が働く場、市民の手続きの場としてだけでなく、市民一人一人が思い描く地域の姿を象徴した「みんなの庁舎」であると考えられます。

庁舎の設計条件

自治体の公共建築物の建設では、行政の担当者が予算の中で建築物の内容を企画し、アンケートや説明会、ワークショップ等を通じて地域住民等の意見を聴き、設計条件を整理している事例が多く見られます。また、大規模な建築物や重要な建築物の場合には有識者等で構成される委員会で意見を聞き、設計条件をまとめる事例も見られます。

一方で公共建築物の設計条件整理の課題は、①全ての住民等の意見を聞く物理的・時間的余裕がないこと、②多数の住民の中から抽出した者の意見に頼らざるを得ず、抽出方法は行政が設定するため、フィルターを通した「地域の意見」となっていること、の2点と考えます。

このような課題を解決するため、意見を聞く人数を増やす事例や、ワークショップ、説明会を複数回開催など、各自治体が地域の特性に応じた意見の聴取方法で取り組んでいます。

ラウンドテーブルの特徴

仙台ラウンドテーブル形式は、次の特徴があると考えます。

①市民、専門家による意見聴取の場

各回のテーマ設定、登壇者選定、発言の形式などは全て建築設計3団体の主体的な企画提案によるものです。これは東日本大震災の教訓から皆で考えることの大切さ、そして仙台市民に市民協働の素地があったからこそ開催できたのではないかと考えます。

②検討委員会委員の情報収集・情報共有の場

基本計画の策定にあたり本市も有識者等による検討委員会を設置しています。

ラウンドテーブルを開催し、検討委員が参加することで活動支援

のひとつになると考えました。これにより情報収集や専門家としての共通認識の形成、新たな視点の発見の場として機能できたと考えます。

③ゴールや結論を求めない

各テーブルに結論は求めないため、意見の全体像から様々な方向性を見つけ出すことができると考えます。

ラウンドテーブルの活動を通して、従来の行政手法にとらわれず、仙台の地域性をふまえた意見聴取の場を設けることができました。今後は頂いた貴重なご意見をもとに「みんなの市役所（シティホール）」の実現を目指し設計に活かしてまいります。

仙台市役所財政局 本庁舎建替準備室

室長 菅原大助

ラウンドテーブルの面白いところは、

- ・ 建築に関わる三団体が、テーブルセッティングし、多方面の方々を招き、テーマについて自由に意見を出し合い、話し合ってもらったところ
- ・ 多方面の方々による討議が多岐にわたり、微妙に違うニュアンスで語られ、発展していくが、他者の意見や行政に対しての否定や批判はなく、結論は出さないところだと、思う。

ラウンドテーブルでちょっと大変だったところは、

- ・ 担当したテーブル討議をまとめなければならなかった時
 - ・ 140分のかかなり濃い討議内容の、深いもの、軽く発せられたもの、意見の強弱をフラットにして、さらに集約しなければならなかった時と、実感した。
- ラウンドテーブルについて建築士会は、主催ではなく、後援という立場になったが、
- ・ 誰もが一市民（県民）として自由に意見を出すことのできる、テーブルをセッティングし、多様な意見を共有することは、地域社会に関わる建築士として、意義がある
 - ・ あらゆる方面の多様な意見を聞くことは、刺激的でさらなる思考に繋がると、魅力的なことがたくさんあった。

今後もシティホール、大規模ホール、文化芸術施設、といったラウンドテーブルが開催されるかもしれない。そんな単語が目に入ったら、建築士の方には是非、ご参加頂きたい。

(一社) 宮城県建築士会 小林淑子

※建築に関わる三団体

(公社) 日本建築家協会東北支部宮城地域会、(一社) 宮城県建築士事務所協会、(一社) 宮城県建築士会

「建築家の責任」

私たち建築家は「建築士」としての資格で仕事をしています。一般に「士業」と称して弁護士や司法書士と同じで専門性の高い国家資格で建築物の設計・監理を独占的に請け負って生業としています。その業務は建物の安全性や、機能性、衛生面のみならず街づくりや、環境への配慮、景観、都市計画まで幅広く人々の生活に大きな影響を与えることからその社会的な責任は大きいものと考えています。また建築物は一度作ってしまうと50年以上存在し続ける、歴史を刻むものであることも考えると未来への責任があるとも考えます。

その建築を生業とする団体が3つあります。「建築士会」「建築士事務所協会」「建築家協会」それぞれに設立の趣旨が異なりますが、お互いに切磋琢磨して建築を文化に高めるべき、社会の質を上げるために日々活動をしています。

東日本大震災の時もこの3団体を含めた建築関係者が行政に協力をしていたち早く建物の応急危険度判定に出勤して各地からの応援もいただき、安全、要注意、危険の判断をして震災の2次災害を防ぐべく活動しました。そのあとも国の復興補助を受けるために公共施設の被災判定に奔走いたしました。私たちに与えられた社会的責任を全うできたと考えています。

今回の「仙台ラウンドテーブル」もその延長線上にあります。

建築の作り方も近年大きく変わりました。公共事業をつかさどる行政も変わり、納税者である市民の意識も変わってきています。「仙台市役所の建て替え」という仙台市民にとってとても大きな買い物であり、日々の生活に密着する施設の計画に建築の専門家として役に立てることは何かあるのではないかとの考えから行政の方と一緒に私たち建築3団体が企画いたしました。

宮城県建築士事務所協会 石原修治

第3回仙台ラウンドテーブル
市民と専門家による仙台市役所本庁舎建替シンポジウム

「地域コアとなる市役所（シティホール）を育む」

市民のための本庁舎建替プロジェクトをみんなで模索する

せんだいメディアテーク 1F オープンスクエア

2019年4月23日 [火]

13:00	挨拶・趣旨説明
13:10	前半 ラウンドテーブル
15:40	休憩
16:00	後半 ラウンドテーブル
18:30	閉会挨拶
18:45	閉会

仙台ラウンドテーブル

仙台ラウンドテーブルは、建築設計を生業とする地域の三団体と仙台市が協働して立ち上げた「市民のための社会づくり」を担うシンポジウムです。私たちは誰もが、一般的に言う市民であると同時に、様々な専門分野の専門家として日々働いています。バスの運転手は公共交通に関する専門家であり、福祉施設で働く方はその分野の課題を良く知り、公務員は行政手続きの専門家です。また、主婦の方々は教育問題や介護の問題を広く扱っています。私たちはそういった専門スキルを学び、それを業務として社会に参加し対価を得て生活を送っています。

百年前であればいざ知らず現代では、様々な分野が高度に専門化され、専門知識が無ければ、その専門の方に通用するまともな意見が出づらいつい状況にあると思います。よく耳にする「素人に意見を求めてもまともな意見が出ない」という行政側のボヤキの原因はここにあります。行政職員はどんどん高度に専門化し、しかし一方で市民は専門性を持たされない市民でしかありません。

仙台ラウンドテーブルは、市民でもある専門家が中心となって、専門知識を持って行政側の計画を分かり易い市民の言葉に変換し、また、市民の純粋な言葉に専門的な位置付けを与えて行政側に伝えます。普段は専門知識を業務として行って対価を得ている専門家が、未来の地域づくりのために、業務受注以外の社会参加を行う取り組

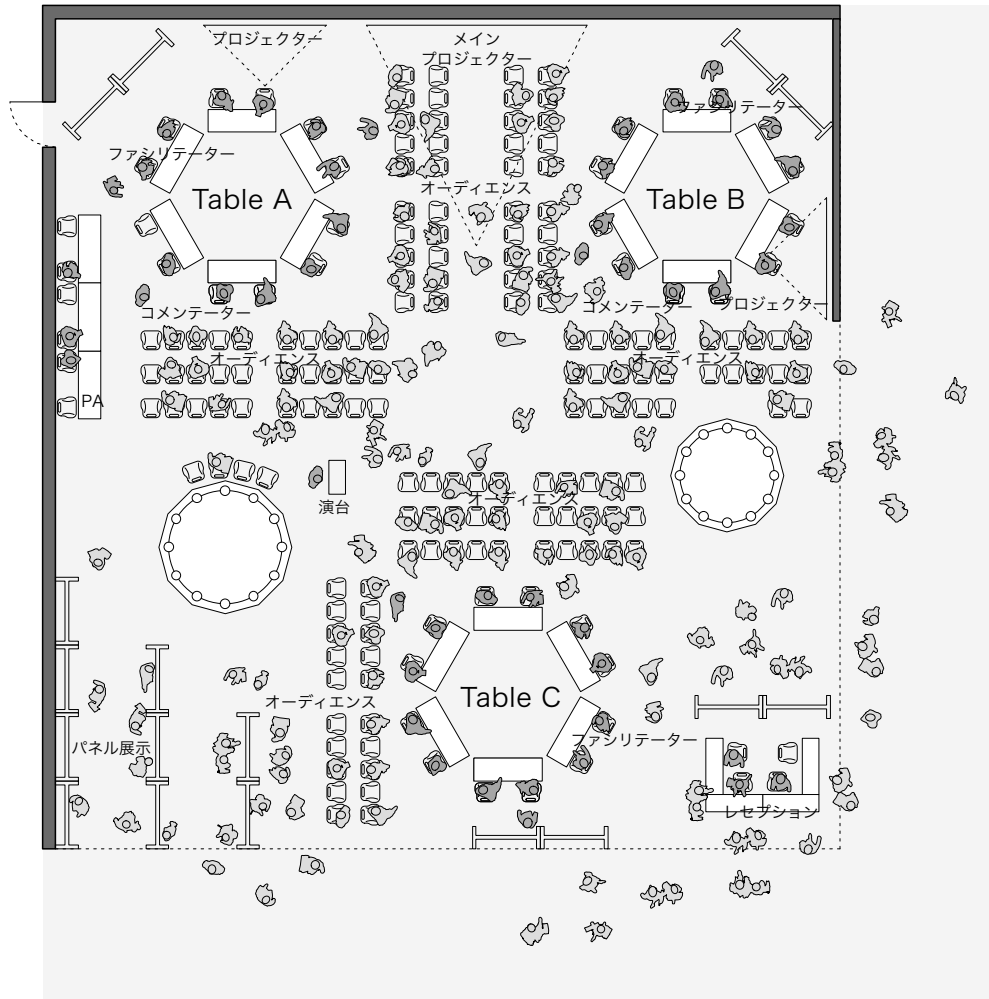
みです。この「仙台市役所本庁舎建替」については、私たち建築設計の専門家を中心となって担いますが、医療関係のことであれば医療従事者が中心になり、教育関係の課題であればその専門家が中心となってラウンドテーブルを行えば良いと考えています。

この仙台ラウンドテーブルは、何かを決める会ではありません。個人の意見はどうしても偏りますが、しかし、議論を積み重ねることにより「意見の広がりはどこからどこまであり、関心の中心はどこにあるか」が共有され、ひとつのぼんやりした共通認識が形成されます。こうした共通認識がみんなで共有されることが仙台ラウンドテーブルの大きな成果だと考えています。

時代の転換点とも言える、東日本大震災の復興を経験した私たちの社会は、震災復興の現場での合意形成の重要性とそれが社会運営の原動力となることを思い知りました。また、そういったみんなで考え、共同体を運営する力こそが「東北らしい力」であることを強く認識しました。それが、仙台ラウンドテーブルの出発点でもあります。

こうしたラウンドテーブル的合意形成の試みを「仙台方式」として、仙台市の未来をつくる様々なプロジェクトに広げてゆければと、運営に参加した専門家はみんなで考えています。

JIA 宮城地域会 手島浩之



せんだいメディアテーク1F / オープンスクエア

Table A1

中心部他施設とのネットワークから
「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

文責： JIA 宮城地域会
佐伯裕武、阿部元希

第1回仙台ラウンドテーブルにおいて、仙台という都市に欠如を指摘する声が多く寄せられた「大きな都市ビジョン」は、議論を重ねることによりはおぼろげながら見えてきました。今回のラウンドテーブルのテーブルAでは、それをまちづくりに落とし込んだ「まちづくりビジョン」の側面から、この市役所本庁舎が何を担うべきかを考えたいと思います。

まず、テーブルAの前半（A1）では、中心部に計画される他施設とのネットワークの視点から、この本庁舎の果たすべき役割を考えます。仙台市中心部では、メディアテークが拠点として大きな位置を占めていますし、今後、歴史エリア、音楽ホール、メモリアル施設、県民会館など…、整備が予定されています。そういった施設と動相乗効果を醸し出し、魅力的なまちづくりの一翼を担うのか、考えます。

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから
「市役所（シティホール）」を考える

文責： 宮城県建築士事務所協会
栗原将光、佐々木昌喜

これまでのラウンドテーブルでは、市民協働こそが仙台の誇りであり、次世代に受け継いでゆくべき市民の財産である、との意見が多く寄せられました。

テーブルBの前半では、これから100年にふさわしい市民協働・公共の在り方を摸索します。市民（民間）×行政×議会の話し合い・協働の場として、公共を掘り下げていく場をどのように設定し、市民がどう新しい市役所を使っていきたいかを考えます。

現在の計画の中で想定されている低層部の機能をどう使えるか考え、そのような「市民・行政・議会の協働の場」の運営にはどのような体制が必要かを考えます。

Table C1

基本計画検討委員会資料レビューする

文責： 宮城県建築士会
小林淑子

検討委員会は2019年7月下旬までに合計7回の開催が実施、予定されています。このラウンドテーブル（C1）では第4回の検討委員会資料をまちづくり、建築設計、建築計画、市民協働といった多様な視点でレビューし、その方向性の確認、評価を行うとともに、残り3回の委員会で何を決めていくのか、どのような方針を固める必要があるのかを論じる場所とします。さらに、基本計画検討委員会での検討や資料、ここでの決定が、今後どのようなことをもたらすのか、その専門性に従事する専門家ならではのコメントをし、多岐に渡る分野と、長い時間軸の中での位置づけを考えるテーブルを目指します。

キーワード

- 分庁舎が集約される市役所は、全体を見直すスタートになる
- 市役所に防災センター要素を入れて、市街地の避難施設に
- 震災の記憶を将来に渡すために、企画展を継続的に開催
- 内外の人が集まる市民協働のプラットフォーム
- 仙台が都市としてどういうことをすればいいのかを考える
- 市議会のあり方も変えられるようなアーキタイプ
- 政宗が育んだ「伊達な文化」を再生する契機づくりの場
- 「私の場所」と思える人が出てきて「みんなの場所」になる
- 歩いている人たちのネットワークをつなげていく

Table A1

中心部他施設とのネットワークから
「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

キーワード

- 多様な意見を寛容な精神で受け止め、特定の人に偏らない場づくり
- マイノリティー、子ども、若者、女性などが自分たちの声を発信できる環境
- 取引コスト（時間、手間、場所）を下げる
- 市役所と市民広場を一体的に整備し芝生敷きの歩行者専用空間
- 低層部にコンシェルジュ機能を備えたワンストップ化
- 300人程度が集まれるホール
- ものを張ったり、書いたりできる白い壁

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから
「市役所（シティホール）」を考える

キーワード

- 一番町からの正面性を意識した配置計画（記憶の継承、軸線の意識）
- 市民との接点となる低層部の作り方の重要性（境界、用途、空間）
- 四周に開かれた建物配置と外部空間デザイン（敷地周辺との関係、建物と外部空間の関係）
- 基本計画検討委員会で決めすぎず設計者に委ねる必要性（基本計画検討委員会の役割、決める範囲）

Table C1

基本計画検討委員会資料レビューする

Table A1

中心部他施設とのネットワークから
「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

Table A1

中心部他施設とのネットワークから
「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

企画
手島浩之
JIA 宮城地域会

テーブル補佐
佐伯裕武
JIA 宮城地域会

テーブル補佐
阿部元希
JIA 宮城地域会

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから
「市役所（シティホール）」を考える

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから
「市役所（シティホール）」を考える

企画・テーブル補佐
栗原将光
宮城県建築士事務所協会

企画・テーブル補佐
佐々木昌喜
宮城県建築士事務所協会

Table C1

基本計画検討委員会資料レビューする

Table C1

基本計画検討委員会資料レビューする

企画・テーブル補佐
小林淑子
宮城県建築士会

企画・テーブル補佐
石井順子
宮城県建築士会

ファシリテータ
坂口大洋
仙台高等専門学校建築デザイン学科 教授

ファシリテータ
手島浩之
JIA 宮城地域会

登壇
増田聡
東北大学大学院経済学研究所 教授

登壇
北原啓司
弘前大学教育学部 教授

登壇
桂英史
東京芸術大学大学院メディア映像専攻 教授

登壇
本江正茂
東北大学大学院工学研究科・工学部 都市・建築学専攻 准教授

登壇
リズ・マリ
東北大学災害科学国際研究所 准教授

登壇
田邊いづみ
コピーライター

登壇
梅内淳
仙台市役所まちづくり政策局

登壇
二郷精
「atelier NIGO」主宰・環境カウンセラー

Table A1

中心部他施設とのネットワークから
「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

ファシリテータ
遠藤智栄
地域社会デザイン・ラボ 代表

ファシリテータ
小島博仁
(株)UR リンケージ

登壇
柳井雅也
東北学院大学教養学部 教授

登壇
河村和徳
東北大学大学院情報科学研究科 准教授

登壇
大橋雄介
NPO 法人アスイク 代表理事

登壇
鈴木祐司
公益財団法人 地域創造基金さなぶり 専務理事・事務局長

登壇
鈴木平
ユースソーシャルワークみやぎ 代表幹事

登壇
齋藤敦子
コクヨ株式会社 ワークスタイル研究所

登壇
今野彩子
株式会社ユーメディア 取締役 経営企画担当

登壇
谷津尚美
認定特定非営利活動法人アフタースクールばるけ代表

登壇
菅野拓
一般社団法人パーソナルサポートセンター理事

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから
「市役所（シティホール）」を考える

ファシリテータ
安田直民
JIA 宮城地域会

登壇・説明
菅原大助
仙台市財政局理財部本庁舎建替準備室

登壇
小野田泰明
東北大学大学院工学研究科 教授

登壇
青木ユカリ
NPO 法人せんだい・みやぎ NPO センター事務局長

登壇
伊藤彰
久米設計 設計本部建築設計部統括部長

登壇
桂有生
横浜市役所 都市デザイン室

登壇
阿部重憲
仙台地域計画研究所代表取締役／都市プランナー

登壇
榊原進
特定非営利活動法人都市デザインワークス 代表

登壇
久保田敦
(株) 竹中工務店

登壇
安本賢司
パシフィックコンサルタンツ株式会社

登壇
渡邊宏
JIA 宮城地域会

Table C1

基本計画検討委員会資料レビューする

Table A1

中心部施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

坂口：
 進行を務めます、仙台高専の坂口と申します。よろしくお願いいたします。
 会場は、3つのテーブルが同時進行なので、少し聞きにくいところがあるかもしれません。多分、皆さんは、しゃべれる方だと思いますが、少しゆっくり目に話してもらえればと思います。よろしくお祈いします。
 まず、このテーブルの趣旨ですけれども、大きなテーマとしては「都市ビジョンの一翼を担う市庁舎の建て替えをともに考える」ということになっております。前半と後半に分かれていますのですが、前半は、市役所周辺エリアを中心に、メディアテークもそうですが、その中でも特に文化施設を中心に、市役所との連携の可能性を考えていきたいと思ひます。そもそもこういったところに文化的なアクティビティーが集まったり、あるいはつながることによってどういった意味があるのか。その中から、例えば市庁舎自体は文化施設ではないかもしれませんが、いろんな人が集まる施設なので、うまく連携をしていくと、将来的には1つの仙台における有力なコアになる可能性もあるかと思ひます。

その一方、県民会館の建て替えがありそうとか、あるいは市民会館もちょっと将来的にわからないとか、公園の使い方もそうなんですけれども、これから20年、30年の中で、ここも変わっていく可能性がありまひす。

約30年前ぐらいに、仙台市が政令指定都市になったときからでも、まちも変わってきたところがありますので。今日はそういった歴史的な経緯にも詳しい方もいらっしやいますし。そういった部分の情報を共有しながら、将来的なビジョンの、ビジョンがこうだというのは難しいと思うのですが、少なくともこういった切り口がありそうだとか。こういう点だと今後の市庁舎の建て替えであるとか。あるいは、その後が続くこのあたりのビジョン形成におけるヒントが少し出てくれればなと思ひております。

全体の進行は、私が行います。サポートでJ I Aの手島さんに関わっていただきますし、サブでJ I Aの阿部さんと佐伯さんにも随時フォローをしていただこうと思ひております。よろしくお祈いします。

梅内：

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

遠藤：
 本日のテーマは、「これからの仙台を担う仕組み」を考えるである。皆さんと一緒に、市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考えるについて意見交換をしたい。まず、企画担当のスタッフを紹介する。

栗原：
 宮城県建築士事務所協会の栗原です。よろしくお祈いします。

佐々木：
 同じく事務所協会の佐々木です。よろしくお祈いします。

小島：
 URリンケージの小島です。皆さんへの案内にはせんだいリノベーションまちづくり実行委員会委員長になっていたと思ひます。また、3年前までは市役所の職員でした。よろしくお祈いします。

遠藤：
 以上のスタッフで進めていく。

登壇者の皆さんの、名前と所属を紹介するので、一言ずつお祈いしたい。まずは大橋さん。

大橋：
 NPO法人アスイク代表の大橋です。よろしくお祈いします。私は、主に生活困窮と言われる子どもや家庭の支援事業を仙台市などと共同で実施をしているが、ばりばりのソフト事業なので、こういったハード面の話は素人である。気楽に感じていることを話したいと思ひている。

遠藤：
 河村さん、よろしくお祈いします。

河村：
 東北大学の河村です。専門は政治学である。どちらかというト

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカイライターの構成を考える

安田：
 皆さん、よろしくお祈いいたします。C1テーブルの安田と申します。
 先ほど総合司会から紹介がありましたが、このテーブルともう一つ、この後のC2テーブルは、基本計画の検討委員会の資料をレビューしましょうというテーブルです。レビューというと何となく批判するようなイメージがありますが、まだ基本計画検討委員会は終わったわけではなく、全部で7回ある中で、今4回まで終わっているという状況です。あと3回ありますから、そこにつながる話をぜひやっていきたいと思ひます。あれをやったほうがいい、これをやったほうがいいというような内容が一番建設的だと思ひます。
 このテーブルの趣旨を簡単にご説明いたしますと、基本計画検討委員会というのは、仙台市役所本庁舎建て替えの基本的な計画を定める、仙台市役所本庁舎建替基本計画（以下、基本計画という）を策定するに当たり、有識者等の意見を反映させるために設置されるものと決まっています。したがって、この委員会は、有識者を含めた一般の市民の方からさまざまな意見を、集めるというよりも、実際の計画に反映させる1つの方法もしくは手段になって

いると考えてよいかと思ひます。もちろん、この後にパブリックコメントもありますから、これだけではありませんが、1つの手段ということですよ。

先ほど基本計画検討委員会は7回予定されていると申し上げましたが、当初6回だったものが1回増えて7回になりました。6回では間に合わないということで7回になったというお話ですが、さまざまな内容が網羅された基本計画検討委員会の資料というのが、毎回このような厚みで検討委員会に配られています。これは、基本計画の内容そのものに、ほぼイコールであると言ひていいと思ひます。出せない部分はこれ以外にあるかもしれませんが、概ね出せる部分はここに書かれている内容ということで、これが現在進行中の計画そのものですよと言ひていいかと思ひます。

これについて、専門家の皆さんにぜひ色々な視点で論じていただきたい。さらには、この市役所というのは、今後80年ぐらいですか、維持しなければいけないということですから、そのような時間軸も含めて、皆さんに少しでも建設的な意見を伺ひたいという内容ですよ。

先ほどの打ち合わせでも申し上げましたが、この後のC2テーブルでは環境やBCPといった内容について専門的に論じていただ

皆さん、こんにちは。仙台市役所の梅内と申します。
今、まちづくり政策局というところにおりますけれども、この局は、震災前は企画調整局と言っておりました。震災前、私はその総合計画課長をしまして、2011年度から10年間の長期計画をつくってました。奥山市長が就任されたところでありました。市民協働を藤井市長のときに立ち上げて、奥山市長はその市民協働を第2ステージに上げたいという思いも強く、市民力ということを非常に重視した総合計画をつくったんですが、総合計画ができると同時に地震が来ました。

震災後、私は、震災復興室に異動になりまして、仙台市の震災復興計画の策定に携わりました。まずそれをつくって、その後は復興庁との交渉窓口とか、庁内の各関係部署の相互調整とか地域説明とか、そういったものを担当しておりました。3年やって、その後、経済局に3年おりました、今企画に戻ってきて3年目です。

今は、次の総合計画の策定の作業が始まっておりますので、それに携わっています。あとは、震災復興の関連事業として、中心部のメモリアル施設の検討委員会なども立ち上げております。本日

ロセスを作ることを専門に活動しているが、全国的にも市民活動として市役所の話をすることは珍しいケースであり、貴重な機会に参加させてもらっていると思う。よろしく申し上げます。

遠藤：
菅野さんよろしく申し上げます。

菅野：
パーソナルサポートセンターの菅野です。仙台で生活困窮者の自立支援や被災者の生活再建支援をやっているNPOに所属している。仙台市と協働して活動している。本職は研究者で、大阪市立大学の都市研究プラザと人と防災未来センターに所属し、そこでも災害やNPOについて研究している。そういう立場でも議論に貢献できればと思っている。よろしく申し上げます。

遠藤：
菅野さんは所属が3つあるので、今回は代表して地元の団体として登壇してもらっている。

きますので、このテーブルでは、その分野に関しては少し割愛し、メインのテーマにはしないということだけ申し上げたいと思います。
それでは、早速ですが、皆さんのお手元にある基本計画検討委員会の資料を元に、仙台市役所の菅原室長より第3回、第4回についての内容の概略をご説明いただきたいと思います。よろしく願いいたします。

菅原：
仙台市役所本庁舎建替準備室の菅原です。よろしく願いいたします。
今から15分ほどお時間をいただきまして、今日集まっていたいる傍聴の方々簡単にわかるように、基本計画検討委員会の資料を簡単に説明させていただければと思います。中央のスライドを使いながら説明しますので、ごらんいただければと思います。
第3回の検討委員会、第4回の検討委員会で説明した事項、考えた事項についてスライドにお示ししております。その中でも赤で書かせていただいております整備パターンの検討や配置の検討等

のスピーカーの皆様の中には本当にいろんな場面でお世話になっている方が多いので、自己紹介するまでもないのではないかと思いますけれども。

今、定禅寺通りの活性化も、まちづくり政策局の方で始めています。定禅寺通りについては、30年以上前から市民の皆さん、地権者の皆さんと一緒にシンボルロードとして、より魅力的にしようということで、さまざまな取り組みをしてきました。中央緑地帯の拡幅ですとか、歩道の拡幅、そこで行われるジャズフェスのようなイベントとか、今では市を代表するイベントの舞台となっておりますけれども、こういったものも地域の皆さんと一緒につくってきたものであります。しかし、それが30年経ちまして、実行主体の皆さんも世代がわりをしようとしているんです。日本が高齢化するのと同様に、地域の担い手であった商店主の皆様も高齢化し、代がわりに非常に苦労されている状況があります。一緒につくってきた定禅寺通りについて、これからも市民の皆さんと一緒にさらに魅力アップをしたいという時に、そういったところで市役所の中も地権者の皆さんも連携し、ともに次の世代にその魅力を伝えていかなきゃいけないのではないかとということで。そうい

今野さんよろしく申し上げます。

今野：ユーメディアの今野です。来年の1月で創業から60年を迎える会社である。広告印刷、メディアプロモーションの仕事をしています。仙台オクトーバーフェストや市民広場をお借りしたイベントのバル仙台を企画運営している。また、グループ会社では、S - s t y l e、闊歩などの地域情報誌の出版もしている。本日は、地元の中小企業の立場で参加をしています。よろしく申し上げます。

遠藤：
齋藤、よろしく申し上げます。

齋藤：
齋藤です。普段は東京で活動している。仙台市で基本計画の検討委員会の委員を委嘱されており、本日は登壇してもらっている。私も所属先がたくさんあり、コクヨという文具・家具メーカーにも所属しているが、フューチャーセンター・アライアンス・ジャ

が今回C1テーブルの中で皆さんに議論をしていただきたいところになっております。

第3回の検討委員会では、説明事項、ポイントとありますが、1棟、2棟、どちらにするかという検討をさせていただいて、方向性としては1棟でまずは検討していきましょうということを決めさせていただきました。

そして、第4回の検討委員会では、敷地内の棟の配置の比較に関しては定量的な比較をしようという話と、議会棟、低層棟を先行解体してから新庁舎を建設しようということ、また敷地内につくる広場は、体験型のイベントにも対応できるようにしよう、駐車場については、公用車は地下、来庁者は地上、そういった形の方向性が決まったという内容でございます。

では、初めに、配置検討の考え方につきまして、どのような流れだったのかを簡単に説明したいと思います。

第3回の検討委員会では、整備パターンの案を比較として出ささせていただきました。その上で、議論がまだ深まっていなかったということで、第4回の検討委員会で配置検討のそもそもの考え方、そして、整備パターンの検討項目としてどういった項目で検討すべきかというのをまとめたというのが第3回、第4回の流れになっ

Table A1

中心部他施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

Table A1

中心部他施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

う意味では、震災のメモリアル施設と同じようなミッションを持っていますけれども、次の世代に向けてまちをどうしていくか。それも総合計画といった長期ビジョンの役割でありますし、そういったことをやりたいと思っています。

定禅寺通りは、やはり仙台市の核となる場所であります。今は仙台駅の方に人の流れが集中しているんですが、まちの魅力をつくるためにも、多角的な魅力のある場所が必要です。その1つは、間違いなく定禅寺通りだろうと思っていて、そのような取り組みも始めました。震災の間に遅れていた本庁舎の建て替え、今日のテーマのコアですけれども、それも動き出しました。音楽ホールの話も震災前からあって、そういった話も動き出したところなんです。震災の間、仙台市は震災復興に全力を注入しておりますけれども、その間に進められなかったこと、あるいは都市間競争の中で他都市がどんどん進んでいってしまっていて、遅れようとしていることに対して、急いで追いつきながら、その先の皆さんにどうやってこの街をつないでいくかという共通したテーマの中で、それぞれのテーマについて検討を進めているという状況でございます。

自己紹介だけになってしまいました、すいません。

坂口：

どうもありがとうございました。では、田邊さん、よろしく願います。

田邊：

私は、広告の企画制作をしています、コピーライターの田邊と申します。

私は、地元の企業さんよりも、どちらかというとナショナルブランドの仕事が多いものですから、外側から見ると仙台ということで、考えることがたくさん出てきました。中でも、人の動きとか人の動向というものを一番広告の中では考えますが、仙台は、地元生まれで地元育ちという方が、どんどん減っています。よその土地からこちらに入ってこられた方が多くなっていること、訪れる方が多いということ、その時に、仙台の魅力ってどのように伝えていくかということが、すごく問われているような気がするのです。仙台は、どちらかというと、これまでの日本と同じように、いろ

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

パンという市民参加協働（最近、リビングラボとかという言い方もある）について、全国の動きを調査しながら、それがどうやったら成功するかという支援も行っている。仙台市の役に立てるよういろいろなアイデアを出してしていきたいと思う。よろしく願います。

遠藤：

鈴木さん、よろしく願います。

鈴木平：

ユースソーシャルワークみやぎの代表を務めている鈴木平です。よろしく願います。ユースソーシャルみやぎは、アスイクや石巻で学習支援をやっている団体と協働して、人材育成や支援者のケアを行っている。年間100数名の学生たちと一緒にプロジェクトをやっており、今日は若者や子どもの代弁者のつもりで参加しているので、そういった視点で話をしたいと思っている。よろしく願います。

遠藤：

鈴木さん、よろしく願います。

鈴木祐：

地域創造基金さなぶりの鈴木です。私どもは、東日本大震災の震災当初は復興に向けた財源を国内外から調達をして岩手県・宮城県・福島県の各地域に助成していく財団の役割を果たしてまいりました。時間の経過とともに、復興の文脈を含みながらも持続可能なまちづくりのために、いかに財源と人材育成並びにこれらをつなげた仕組みづくりに貢献をしていくかということを民間の立場から貢献をするという立場で財団というものを捉えて日々取り組んでいます。よろしく願います。

遠藤：

谷津さん、よろしく願います。

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカイライターの構成を考える



んな魅力があるのに、何か自信喪失の感じで、自分たちの魅力とか、文化遺産とか、そのことに対して何か誇りを持って自慢げによその土地の方にお話しするというような意識が、あまり見受けられないのが、残念だなと思っております。

私なりに、時間軸、空間軸というものを伸ばしてみても考えてみますと、本当に仙台は歴史なことから、未来に対して、いろんな防災的なことから、本当にいろんな努力をしてきているところで、市庁舎を今、計画されて立ち上げようとしている中で、これを契機にして、もう一度、仙台の魅力というものを明確にして、コントロールタワーのような市庁舎から何か発信できるようなことを今後考えていきたいということで、出席させていただきました。

坂口：

では、本江先生お願いします。

本江：

東北大学の本江でございます。よろしく申し上げます。

谷津：

認定NPO法人アフタースクールばるけの代表をしている谷津です。当法人は、平成14年から障がいのある子どもの放課後ケアやその家族の支援を続けている。現在は、放課後デイサービス3カ所と、障がい児者のヘルプサービスの事業所1カ所と、障がい児者の相談支援事業所を運営している。きょうは障がい児者とその家族の立場で話しができればと思う。よろしく申し上げます。

遠藤：

柳井さんよろしく申し上げます。

柳井：

東北学院大学の柳井です。専門は経済地理学です。今日はコミュニケーション・ビジネスや地域経済という視点から発言したいと思っています。

遠藤：

ております。

今、お示ししているのが、基本計画を検討する前の段階、基本構想の段階のときにはどういう検討をしていたのかというのですが、1棟案のときには新庁舎を今の庁舎の南側に建てたらどうかという案、そして、2棟案のときには先にピンク色の新庁舎をどんと建てて既存の庁舎を解体した後に水色の部分を建てたらどうかという、2つの案しかお示しをしていなかったという状況でした。

検討の背景としまして、ポイントとして2点ほど上げさせていただいております。現在、市内のオフィス需要が非常に高いということでオフィスの空室率が、ほぼ残っていない状況になっています。それで、市役所全体をどこかに仮移転して、まとまった大きさのオフィスを更地につくるということは現実的ではない状況なので、現在の庁舎を使用しながら、必要最小限の範囲を解体して新庁舎を建設するという方向で進めております。現在の本庁舎の高層棟の南側の範囲内に新本庁舎を建設する前提での検討となっております。

第3回で検討しましたそれぞれの整備パターンについて、簡単に説明をさせていただきます。

工学部の建築学専攻におりまして、普段は建築の設計のことを教えて研究をしています。坂口さんからもたくさんお話がありましたが、震災のメモリアル施設を考えるということ、仙台市の委員会ができた当初から関わっております。僕自身が市になりかわって説明する立場ではないですが、当初から関わっていた者として、どういうビジョンでメモリアルのことが議論されていて、市庁舎のこととどう関わるかというところの話を主にできればと思って、今日は参りました。

震災のメモリアルの話について言うと、震災の直後の混乱を乗り切った後にすぐ、メモリアル等をどう扱うかということで市の中で委員会ができて、2年ぐらい議論をして、報告書をつくりました。いろいろな論点があるんですが、2つのメモリアル拠点をつくらうという話になっています。1つは沿岸部、もう1つは中心部のメモリアル拠点です。

沿岸部の方は、何と言っても震災のインパクトが大きいのは津波で。その津波の爪跡、そこに何が起きたのかということ、まさに現場で見ていただくために、沿岸部に何らかの拠点が必要である。一つは遺構として荒浜小学校を整備して公開をすると。もう

ありがとうございます。地域社会デザイン・ラボの遠藤智栄です。普段は、地域づくりの支援や人材育成、組織開発に関わらせてもらっている。よろしく申し上げます。

では、本題に入る前に、これまでこのテーブルに関係するテーマで、どのような意見が出ていたのかを簡単にサマリーして、積み重なる形で皆さんからも意見をもらいたいと思う。今回、皆さんと低層の市民協働・市民が使える施設について、市民協働の観点からどのような意味合いを持たせて使っていきたいかを、後ほど詳しい資料を提示するので、改めて確認をする。B1では、これから100年にふさわしい市民協働をみんなで模索をしていきたい。それでは、市民協働のアクターは誰かということももちろん市民やNPOや民間団体や行政及び議会である。議会も交えて考えるという部分は他のテーブルテーマとかなり異なる点だと思う。ぜひ議会も含めた意見をいただきたいと思う。そして、この市民・行政・議会の協働の場がシティホールの低層部で、どういうふうに行えると、これからの公共を担っていけるのか意見をいただきたいと思う。

これが東側の配置案です。濃いピンク色で囲まれている部分が高い部分、高層部と書かせていただいております、薄いピンク色の部分、低層部というのが、一、二階程度の屋外広場との関係性を示すために、今形状はまだはっきり決まってはいるのですが、このような形でどうかというイメージを書かせていただいたものです。そして、南側のほうに市民広場がありますので、この市民広場との関係性も考えて配置を検討したというものです。

あと1点、大前提としまして、ここに線が引いてありますが、こちらの線よりも下の部分、これが本庁舎の高層部よりも南側の部分ですので、第1期としてはこの部分のところで建築ができる。そして、高層棟を解体した後に初めてこの第2期工事、この上の部分のところが整備に着手できるという流れになっております。これが全体の鳥瞰図になっております。この東側配置案は、市民広場との一体利用ということで南側に屋外広場を設けるといいます。そして、少しわかりにくいですが、これが西側の街区から一番離れているということで、周りの住環境への影響が少ないだろうと考えた案です。

次に、西側配置案です。こちらの特徴としましては、屋外広場が東側にありますので、市民広場と繋いで北側のほうに伸びるよう

Table A1

中心部他施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライズの構成を考える

Table A1

中心部他施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

1つ、震災後に開通しました地下鉄東西線の一番海に近い駅、荒井駅。その駅のコンコースに直結して、せんだい3.11メモリアル交流館という、これは大きくはありませんけれども、施設を開業して、仙台市の沿岸部の特に被害の大きかったところに、実際に現場を見に行く、そこでどんな暮らしがあったのかということについての情報を集めていく拠点とする。この2つのものがあります。

もう一方の、中心部にどのようなメモリアル拠点を考えるか。メモリアル「施設」をつくるとは言わないようにして、それは何か建物をつくるのかということ必ずしもそうでもないということがあるので、メモリアル「拠点」を中心部にも持つという議論をしています。これは、まさに委員会が始まったところで、具体的にこういうものをつくろうということまで行っておりません。当初の報告書では沿岸部の、まさに現場に行くための案内をする拠点に対して、中心部はやはり交通の便利がいいところ、新幹線の駅があり、空港があるところ。東北にこれから出かけようとする方が立ち寄られる仙台ですので、その方が来られる場所、あるいは最も大きい人口集積である仙台で、その震災についてのさ

まざまな情報をパノラマ的というか、包括的に知ることができ、それについての情報を集めて、編集して、さらに提供して未来につないでいくという、そういうアーカイブとキュレーションの機能を持った拠点が必要であろうと。それは、さらに言うところ沿岸部はやはりその2011年のザ・震災を扱うわけですが、中心部のメモリアル施設はもう少し俯瞰的に、2011年の災害もありましたけれども、400年前にも津波はあったし、世界ではいろいろな津波を中心とする大規模な災害はある、そうしたものの全体の中で、今回の災害をどう捉えて、それを乗り切ろうと頑張っている仙台にどういう活動があったのかということを見る、そういう施設になるんだろうという位置づけをしています。

まさに議論の途中なので、どのぐらい話せるかということ微妙で、あくまで僕の個人的な言葉として聞いていただきたいんですが、仙台市が持っている市民と協働でいろいろなことをやっていく能力、そのあらわれとして災害文化がある、という言い方をしています。災害とともに暮らしていく文化、そういうものをちゃんと市民は持っていないといけなし、それがどういうものかということ突き付けられて、答えを出そうとしてもがいている仙

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

これまでの議論から紹介をすると、

(低層部に関するコメント)

- ・行政サービスや地域固有の課題は区役所が対応している。
- ・全市的なビジョンや課題や施策及び政策横断テーマは本庁舎で議論するのがいい。
- ・市民協働の歴史と積み重ねが仙台市の特徴。よって、市民・行政・議会をつなぎ連携する場が必要。
- ・対話から始まって行動につながるプロセスを見せる場が重要。
- ・合意形成の場。
- ・多様なままでいいことを共有する場も必要。
- ・NPOなどの団体にとっては、制度を使いこなして、その制度が固定化することをともに見直していく場も必要。
- ・ラウンドテーブルのような、課題解決や未来創造を行う場で、つないだり活かしたり促進するコーディネーターやファシリテーターの役割が重要。

(議会に関するコメント)

- ・NPO法人と行政、議員がともに視座を広げる必要がある。

・政治、利権、選挙に結びつかない協働や話し合いが大事。

- ・議員さんがクレームの受け手から共創のつなぎや専門性のある議員さんになっていく必要がある。
- ・多様な議員、女性や若者が活躍し、ワンストップで相談できる場が必要。
- ・チーム議会として議会事務局が政策提案や共同研究の窓口にならないか。
- ・身近な議会になるために、市民・行政・議員が出合い、語れる市役所が必要。

・議会はガラス貼りでフラットな設えで、委員会室を開放したり情報公開を積極的に実施したりやるべきではないか。場合によっては、民間委託してもいい。

(他都市の事例に関するコメント)

- ・他都市では低層階で市民サービスや市民協働交流、市のプロモーションを実施している。
- ・行政の執務内に小さな協働スペース、低層部に大きな協働スペースがある。

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物の構成を考える

な形の広場、さらに、北側に駐車場がありますが、この駐車場のつくり方によっては、北側から市民広場の南側のところまで一連で広い空間がつかれるのではないかと考えた案です。こちらがパースになっておりますが、今申し上げた内容というのがこの辺の空間ですね。こういう形でフラットな空間が広げられるのではないかと案です。

次が中央配置案です。こちらは建物自体が少し長方形になっておりますが、横長の形で屋外広場の部分と隣接しているという形で、この真ん中のところに線が入っておりますが、この線が一番町通りの商店街からの真正面の軸になっております。こちらにパースをお示ししておりますが、こちらの赤い線の直線上に真正面に建物があるという形になっている案です。

もう一つ、南側配置案と書かせていただいておりますが、これは建物をできるだけ低く、フットプリント（建築面積）を大きく、建物としての空間を地上部分にできるだけ大きくとった案になっています。こちらですと、建物の高さが13建てぐらいまで抑えられますので、市民広場に行かれた方はわかるかもしれませんが、三菱地所等が入っているパークビルディングと大体同じぐらいの高さでこのボリュームができて上がることを想定したというものです。

お手元の資料、第3回の資料4にあると思いますが、棟の配置によるメリット・デメリットを整理させていただいたものでした。ただ、これはあくまでも定性的な表現になっておりますので、一長一短がありますが、どれが重要なのかとか、どれがどのぐらい影響が大きいかがわからない状況でした。

ですので、第3回の検討委員会では、委員の方々から出されたご意見としまして、このようなご意見がありましたが、赤字のところだけ読ませていただくと、「低層部と広場がどのようなかわりを持つのか」低層部のつくり方によっても変わりますが、「建物ができることによって表と裏がはっきり生まれてしまうということは余りよいことではないのではないかと」いったご意見が寄せられました。また、そのほかにも、「広場をどの辺りにとってどのように繋いでいくのか」とは、「庁舎のビジョン、思い、未来像や思想的なものが必要なのではないかと」いったご意見が寄せられたところでした。

これを踏まえまして、整備パターンを検討を進めていったのですが、考慮すべき項目が多岐にわたり、それぞれが密接に関連しているという理由で、現在、1つの検討項目の観点だけで整備パターンが決定できないという状況になっております。ですので、それ



Table A1

中心部他施設とのネットワークから
「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

などの意見があがった。
これらは、これまでの意見である。皆さんには、これらをもっと
深めていただき、つなげていただき、場合によっては問題提起と
なるような意見をお願いしたい。
本日は、論点が3つある。論点1が、これからの市民協働や公共
のあり方。論点2が、論点1を実現するために、具体的に協働の
場や公共を話し合う場、市民が主役のまちづくりが実現する場と
はどんな場なのか。それが市役所の低層部などを含め、どんな場
があれば論点1が達成されるのかという部分である。
最後に、論点3が、具体的な機能や運営などを具体的に話したい
と思う。
では、今後の市民協働のあり方について話したいと思う。河村さ
んをお願いします。

河村：
仙台市はもともと大きいまちなので、市民協働は実はやりにくい。
田舎のように、行政と住民の距離が近過ぎ、利益相反になるほど

それぞれの項目を整理しながら、7月の検討委員会までに最終的に決
定することとさせていただきます。
これは、第4回の資料の一番後ろに参考資料1がありますが、そ
ちらに書かせていただいたものでございます。これからの検討を
どのように進めていくかということですが、まず手順の1とし
まして、現在、書かせていただいているコンセプトにつきましてキ
ーワードを抽出すると。そのキーワードの中から新本庁舎の整備
で配置を検討する上で影響を考慮すべきという項目をリスト化しま
しょうというところでした。
第5回、次回ですけれども、そのリスト化された項目を順次検討
しまして、新本庁舎の整備に盛り込むべき定量的な表現とか指標
のある表現の中で整理をしていきたいと考えております。第6回
では、定量的指標表現につきまして、それぞれの議論を経まして
整備パターンを絞り込んで、7月に開催する最終回までにはパター
ンを1つに絞っていききたいと考えております。
例えばの例ですけれども、ここの例、小さく書いてあるのですが、
コンセプトのところに「市民に親しまれ、まちの賑わいに貢献する」
と記載をさせていただいていますが、それを具体的に新本庁舎で
実現するとした場合には、敷地内に広場を整備すると読みかえて

の親密さではない。遠い方と近い方がいると何が起るのか。不
寛容な方、極端な意見を言う方が出てくる。だから、仙台市の市
民協働で情報共有がされたときに、いろいろな意見があることを
寛容な精神で接することができる市民協働の場をつくってあげる
必要がある。
それと同時に、寛容をつくるには出会いが必要である。例えば田
舎の政治がなぜ信頼されているのだろうか。距離が近くて会っ
たことがあるから。これはゼロと決定的に違う。そうすると、行政
と市民及び議員が出会いやすい、接しやすい場をつくってあげる
ことが重要だ。おそらく、次の3つのポイントではないかと思う。
僕らの研究で市民協働をやると、必ず時間がある人、知識がある人、
お金のある人しか参加しなくなるということが昔からある。それ
を、なかなか話せない人、なかなか来る時間がない人も含め、特
定の人に偏らない場をつくらせるところも検討されるべきだと考える。

遠藤：
情報と寛容な出会いと、あと会ったことがあることも大事ではな

キーワード、項目を出したというところ。その手順の2とし
まして、広場の検討を進めるにあたり、具体的に広場の大きさは
何平方メートル以上必要なのかといった、明確に判断できるよ
うな表現に整理をしていくという作業を進めたいと考えております。
その上で、何平方メートル以上整備するという条件に対しまして、
それぞれの整備パターンが合うのか、合わないのか。そして、合
わないとすればどのぐらい合わないのかといったものを比較検討
しながら、最終的に整備パターンを絞り込んでいきたいと考えて
おります。
これがコンセプトイメージ図です。これらを踏まえまして、どう
いったキーワード、そして、どういった項目を検討すべきか、とい
ったものをまとめさせていただいたのが、お手元の資料の第4回資
料の資料4番です。それぞれのコンセプトに対応する形でキーワ
ード、そして影響を考慮すべき項目等をまとめさせていただきました。
これらを今後数値化し、定量化するという形で合致するのか、
しないのか、どのぐらい合わないのかといったものを検討してい
きたいと考えております。
この検討委員会に関しましては、ご意見としまして、「垂直方向の
配置も含めて検討すべきではないか」、「そもそも庁舎の機能とか

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから
「市役所（シティホール）」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や
建物配置・規模・スカライライズの構成を考える

Table A1

中心部他施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

台。都市が災害文化を持つということについて、何らかの情報発信をする資格が仙台市にはあると思いますので、資格があるんだからその責任を果たさないといけないという意味もあって、都市のアイデンティティーとしての災害文化を取り扱う拠点が必要なのではないかというような議論になってきているところでもあります。それが、具体的な施設として新しい建物が建つのか、あるいは複数の施設で分担するのか、メディアテークも重要な役割を果たすような気がしますし、新庁舎がまさにこのタイミングでつくられるということは、何かその都市のアイデンティティーとしての災害文化を考えるという意味では、市庁舎が何らかの役割を担っていいはずだろうとは思っていますので、そうした関係があるのではないかなんかという事を思っています。

そんなことで、今検討中のパラレルで、市役所とその中心部のメモリアル拠点の議論が進んでいるので、うまくシンクロしてつなぐことができるといいなとは思っているところがございます。自己紹介とメモリアルのお話をさせていただきました。ありがとうございます。

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

いか。そのあたりが公共を生み出していくのではないかということだろうか。

河村：
ロビンソンクルーソーの世界には行政がない。自分の力でやっていかなければいけない。助け合いが人間や集団で生活することの一番大きいところである。先ほどの震災のサポートも、孤立してしまうと辛いということは、その部分にあたるので、それを防ぐためにはどうするかを考える必要がある。ただ、そういう方々は、参加するときのコストを担うことが難しいため、市民協働などに参加することに無関心になりやすい。行政への願いは、参加するコストについても少しフォローしてあげてほしい。おそらく、本日登壇されている方は、コストを考えずに参加されていると思うが、そういう人たちばかりではないということを抑えておかないといけないと思う。

遠藤：

規模を検討しないと難しいのではないかとといったご意見、「中で働く人たちのための環境建築とか健康建築の視点を目指してもいいのではないだろうか」といったご意見が寄せられました。そして、そのほかでは、「内部で働く職員の働きやすさの議論が後回しになっているのではないかと」というご意見、あとは、「配置を考えるとときには日射のコントロールとか断熱性能も重要だ」といったご意見も寄せられました。

1点だけ補足をさせていただきますと、職員の働きやすさの議論に関しましては、先々週あたりに、執務環境調査をさせていただくということで会社も決めさせていただいて、これから現在の執務環境が、簡単に言うと、どれだけイケていないかということ調査して、その上でこれからどうあるべきかを検討していくというのを今年度前半でやっていく予定です。また、日射のコントロールや断熱性能に関しましては、今後検討していきますが、次のテーブル、C2でZEBに向けての詳細を検討している内容をご説明したいと考えております。

簡単に、ZEBの検討状況としましては、建築計画的な手法としましてこのようにパッシブの建築を検討している内容や、省エネということでエアコンとか熱のやりとりなどを検討しているとい

坂口：

どうもありがとうございました。今、本江先生がおっしゃったように、多分このラウンドテーブルも、仙台市庁舎はそうなんですけど、何か新しい拠点を仙台市がここにつくるという意味では、施設と拠点は近いところもあるけど違うところもあるので。むしろ、拠点として考えていって、地域コアをどうつくるかというビジョンが必要ということですね。

では、リズ先生お願いします。

マリ：

皆さん、こんにちは。私は、マリ・リズと申します。マリが苗字で、リズは、エリザベスから。リズと呼んでも大丈夫です。よろしくお祈りします。

アメリカ出身で、今、東北大学の災害科学国際研究所に勤めています。日本で10年経って、仙台の住民になって、もうちょうど5年になります。まだまだ勉強できていないところもあり、すごく興味深く勉強のためにいるという気持ちであります。あまり日本語はまだまだ下手なんですけれども、よろしくお祈りします。

鈴木さん、今後の市民協働・公共のあり方について聞かせてほしい。

鈴木平：

前回は、若者を初め社会的に弱いというか、声を出しづらい人たちがきちんと声を上げられることや社会に参加できること及び山形の子どもの議会の事例を話した。

河村さんの話にもあったが、こういった場や市民協働に、参加する方たちは、お金がある、時間がある、声大きいと勝ちのような方が多い。マイノリティーの方、子ども、若者、女性がきちんと自分たちの声を発言できる、あとは、我々NPOは市民の代弁者というアドボカシーの機能も担っているの、そういった部分をきちんと出していくことが大事ではないかなんか思っている。

今回のテーマを見て考えなければいけないと思ったことは、市民協働という言葉はあるが、人によって言葉の捉え方が違うと思う。市民と企業の協働もあれば、市民と行政の協働もあれば、そもそも市民という言葉が指すものも地域住民、仙台市民という捉え方もあれば、アクティビズムみたいな市民もあれば、大衆みたいな

う内容でございます。

次に、まちづくりから考える新本庁舎ということで簡単に説明をさせていただきます。

これは、お手元の資料の7をダイジェストにしたものです。そもそも勾当台エリアは明治時代から続く行政機能の場所でした。これからの勾当台エリアはどうあるべきか、ということで、赤で2つ書かせていただいております。勾当台エリアが東北を代表する賑わい創出の拠点であるということ、もう一つ、今までのように行政主導のまちづくりではなく、これからは市民役のまちづくりにしていくべきではないかということを書かせていただきました。その上での整備の検討ですが、お手元の資料では右上に書かせていただきましたが、賑わいに貢献する場、行政と市民が協働して戦略を立てる場、そして、仙台の文化を発信、体験する場、こういったものが必要ではないかと考えたところでございます。

続きまして、市の中心部を振り返ったときに、この場所がどういう位置づけにあるかということを考えました。スライドで書かせていただきましたが、白く雲みたいにもやっとした空間、これが仙台市の中心部で歩行者が回遊するエリアと考えております。南北方向で、少しわかりにくいですが、ここで0.7キロ、東西方向で

私は、もともとは建築の勉強をしていました。災害の研究は、住宅復興のこととかをやっています。神戸の伝承博物館、地震博物館にも勤めたことがあります。先ほど、本江先生が説明されましたが、同じメモリアル施設の検討委員会に入っています。私は、海外からの立場で、です。あんまり上手なことは言えないと思いますけれども、海外からの立場と、頭の中にぱっと出てくることを言おうかなと思っています。

午前中のセッションは、ちょっと遅れて参加したのですが、仙台市のビジョンで、市役所に勤めている人のウェルビーイングのことがあって、すごく大事ななと思いました。海外からの視点で見ると、私は研究者だから自分の部屋を持っていますけれども、大学でも市役所でも大変な環境で勤めている。ウサギ小屋みたいな。自分のところしかないみたいなどころで、暗くて窓がないかもしれないみたいなどころで。ぜひこの機会に、仙台市役所に勤めている人も、もうちょっと広い、明るい仕事場ができるとすばらしいし、仕事にいいプライドを持つことができると思います。あともうひとつ、手島さんも言っていた、アメリカの視点から見ると「シティホール」はどういう意味かについて。アメリカには、

市民もある。協働という言葉が人や立場によって異なってくると思っている。市民同士の協働やNPOは市民の声を代弁してネットワークづくりをサポートし、コミュニティオーガナイズングの様な考え方が大事だと思っている。何か議論を進めていく中で、そういった部分にも気をつけながら、話を聞いたり発言したりしていければと思っている。

遠藤：
声を出しづらい方がより参加できる場がもっとこの分野に必要なかということが、話したいことか。

鈴木平：
貧困や弱い立場の当事者とはなり切れない自分もいるが、まちに関われないことやコミュニティの中でいづらさを感じているという部分では当事者性は持っていると思う。いろいろな当事者性の中の代弁者として語れればと思っている。

大体1.5キロの範囲、このぐらいを仙台市に来られた方々が歩いているだろうというエリアと考えたときに、東側の玄関口の仙台駅、西側の玄関口として高速道路をおりて出てくる西道路の辺り、地下鉄東西線をおりた青葉通り、一番町、そして地下鉄南北線をおりた勾当台公園、こういった4つの出入口がある中で、勾当台公園のエリアはこの回遊のエリアの北の玄関口と考えさせていただきました。

この歩行者の回遊性を向上させるために市役所に必要な機能として、赤字で書かせていただきましたが、3つ上げました。敷地を通り抜けできる。例えば、夜間とか土日とか、行政の庁舎だからということで閉じてしまうのではなく、そこが使えるような機能、そして、市役所を訪れたり市役所に集ったりできるような機能、そういったものが必要ではないかと考えたところでございます。これを踏まえまして、皆様の裏面の資料に、市民広場でどういうイベントが行われているのかを簡単に分析をさせていただきました。こちらの裏面のところの右側にありますが、市民広場で100回前後の様々なイベントが行われていますが、お客が来てステージ発表を見たり、何か買ったり、何か食べたりというイベントがほとんどです。それ以外の赤丸で書かせていただいた体験型のイ

市役所はないです。日本の住民は、何かあって市役所に行く、用事があって市役所に行く機会がありますが、私は市役所に行ったことがないです。研究のために、訪問でアメリカに行きますけれども、本当に今回の日本のシティホールは、そういう住民が行けるような場所と機能がすごくおもしろいと思います。

それも午前中に手島さんが言ったことですが、訪問客が来るということについて、仙台市には、2つのアイデンティティーがあると思います。1つは、仙台市には、すばらしい伊達氏の歴史がある。緑の木がいっぱいあるまち、美しいまちで、文化がある。いろいろな宝物がある仙台、すばらしいまち、暮らしやすい、私も大好きになった仙台市。もう1つは、東北地方の窓口になります。それは特に、海外からの人を。日本に1週間～10日間ぐらいで、東京5日間、京都5日間ぐらい、だからその次に仙台に来てもらって、仙台から出発点として東北地方につながる。

「震災後の仙台はどうになりました？」と、言われて、荒浜小学校に行けば、仙台のことが勉強できますけれども、中心部でも、本当に東北全体のことを説明ができるような機会になると思います。さらに、仙台の歴史がわかる。私も恥ずかしいのですけれども、

遠藤：
谷津さんが考える今後の市民協働や公共のあり方、市民・議会・行政のあたりはどのようにでしょうか。

谷津：
アフタースクールは、平成14年から障がいのある子どもの放課後支援を始めた。最初は、健康福祉局障害者支援課とのやりとりだけであったが、活動を進めていく中で、障がいのある子どもが、支援学校だけではなく地域の学校に増えており、放課後ケアだけではなく児童館や民間の学童保育、放課後子ども教室などで過ごす障がいのある子どもが増えてきたことを受け、放課後の支援を発展させていきたいとなった時に、一つの制度だけでは網羅できなくなり、ほかの制度との協働が必要になってきたという経験がある。

そうした時、放課後等デイサービスは健康福祉局、児童館は子供未来局、放課後子ども教室は教育局ということで、同じ子どもの放課後支援だが、3部局でそれぞれ放課後の支援をしているので、

イベント、例えば冬のときに、仙台にいらっしゃる方はわかるかもしれませんが、光のページェントのときにスケート場ができてスケートで遊んだりとか、あるいは、ワークショップがあったりとか、何かつくったりとか、そういったイベントは実は少ないのではないかと考えておりますので、我々のアイデアとしましては、体験型のイベントに対応できるような広場を考えていきたいと考えました。

これに対しまして、検討委員会の委員の皆様からいただいた意見としましては、「パブリックスペースで色々な活動しているのに面としての魅力をつくっていくことが重要ではないか」、「子供や家族連れを中心部に呼び込む機能があるとよいのではないだろうか」、「体験型のイベント広場については、仕掛けづくりがうまくいけば実現できるのではないか」といったご意見が寄せられたというものでございます。

次々進めてまいります。新本庁舎の機能別の棟内配置の考え方について、簡単にご説明をさせていただきます。皆様のお手元の資料の8番をご覧ください。こちらにざっくりと庁舎の断面構成を書かせていただきました。地上が一番近いところに市民利用機能、そして、その上に行政機能、最上階のところに議会機能の配

Table A1

中心部他施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライズの構成を考える

Table A1

中心部施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

仙台の歴史はまだ勉強不足、住んでも勉強不足で。だから、1日でも来て、仙台の歴史が、ちょっとだけ勉強できると思います。あと、いろんな観光向けのこと、コンシェルジュみたいな機能があり、案内ができる、ツアーがある、素晴らしい温泉がどこにあるとか、そういうことを紹介できる機会ができるんじゃないかと思っています。あと、フリーマーケットとか市場とかそういう機能も、おいしいコーヒーを飲めるし休憩できる、外国人だけじゃなくて、高齢者の方もそういう休憩ができるスペースも大事だなと思っています。

最後になりますけれども……あと2つ。

住民のことを考えて、海外の人と仙台市民の交流ができるような場所をつくと。観光客だけじゃなくて、国際的な交流できる体験場所とか、英語、日本語を勉強できる場所はおもしろいと思います。

もう1つ、私の立場としては、海外からの人を案内しないといけない機会が多くて、今までは被災地とか復興の勉強している人が多いので、沿岸部に行って荒浜、閑上、岩沼に行って1日。それでメディアテークにまた帰って。この間も3月末にそういうアメ

リカの研究者、先生方を連れて行ってあげまして、最後にメディアテークに。もう大満足でメディアテークもすばらしいと、住民が集まる場所がいいと。それは、すごい宝物で、仙台市は海外から見ても宝物で、メディアテークとどういふふうに関係、バランスをとるのがすごく大事だと思います。

ちょっと長くなりましたが、以上です。ありがとうございます。

坂口：

では、北原先生、よろしくお願ひします。

北原：

弘前大学の北原です。よろしくお願ひします。

僕は、1994年まで東北大学の建築学科にいました。その5年ぐらい前から、定禅寺通りの計画にいろいろと関わらせていただきました。その当時は、定禅寺通りまちづくり協議会というのがある、僕らが考えたことは、もう今そういう話になってきていますが、ここをトランジットモール化しようと。実は、僕はその後、この地域の地区計画の委員をして、地区計画の文書をつくったもので

Table B1

市民協働・これからの仙台的な「市役所（シティホール）」を考える

一緒に協働していかなければならないという現状がある。それは制度やお金の問題、縦割りで運営されているために、「ここまではうちの範疇だけれども、ここからはそっちよね」、「それでは、はざまの子どうするの」などどっちがカバーするのかしないのかという話が現実にある。

震災後は特に、家庭の養育環境の問題などにより行動が心配な子どもが増えてきていると言われていて診断は受けていないが、児童館などでも本当に大変な子どもが沢山いると聞いている。「この子は放課後等デイサーブの方がいいのではないかと」という話にもなりがちなのですが、そういうことでは子どものサポートは大変難しくなっていると感じている。そうすると、部局を超えて、制度を超えて、横断的に重なり合いながら子どもたちを、身近な地域の中でサポートしていかないとサポートできないという現状がある。

100年後の仙台の市民協働を考えた時に、一つの部局だけでは完結できない問題が増えてくると思う。縦割りの部局を取っ払って一緒に考えていける仕組みや予算もあるが、関係部局が重なり

合ってそれぞれが助け合いながらサポートしていく視点が大事になってくるのではないかな。

予算の問題もあると思うが、限られたお金の中で予算取りをし、1部局ではできないが、3部局集まったらできるということなど、柔軟にやっていたり、発想や取り組みが大事になってくると思う。そういう制度を運用していくのが市民であったり、一緒に改善していったり、行政ができないことを私たちがやったり、私たちができないところを行政がやったりということがどんどん必要になってくると思う。

今、子どもだけの話をしたが、結局障がい者の話も同じである。障がい者は将来障害を持つ高齢者になる。障がい者の制度に介護保険が入ってくる。そうすると、子どもだけの問題ではなく、その年齢に応じていろいろな他の制度やその担当部局と絡み合いながら、障がいのある方たちの生活をサポートしていくという視点が必要になってくる。そういう柔軟さが必要だと思う。そのための仕組みとして、行政の部局の再編成を考えてもらいたいと思う。例えば横断的になり得る部局は同じフロアにする。子供未来局と

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカイライターの構成を考える

置を考えております。なぜこのような配置を考えたのかということですが、市の中心部の歩行者の回遊性に寄与させて賑わいに資するということを考えたときに、2つ大きくあります。低層部に市民利用機能を配置して市民の方々に集っていただくということ、そして、平日の夜間や土日祝日に低層部を開放して、この赤い線から下の部分を市民に開放したいという思いがありましたので、行政機能や議会機能を上に配置させていただいたというものでございます。

では、その低層部のところで何をさせたいのか、何をしてくれるのか、というところを次のスライドで書かせていただきました。少し小さいのですが、赤線を3点書かせていただいております。皆さんのお手元の資料だと、資料8の裏面になります。大きく3点あります。市民共同スペースとしての共用会議室等、情報発信機能としてのデジタルサイネージ、そして、市民と職員の多彩な協働ということでワーキングスペース、こういったものを盛り込んでいきたいと考えております。

1つ補足をさせていただくと、なぜこういうものが必要なのかというと、東日本大震災のときに、市役所がやるべき仕事を皆さんにどんどん手伝っていただいているいろいろやっていただいた、ある

いは、ほかの周辺都市の方々がどんどん応援に来てくれて、色々市役所がやるべきところを皆さんに手伝ってもらったという、そういう東日本大震災で得られた大きな経験がありますので、そういったことができる空間を、常に空っぽの空間で用意するのではなく、常々使えるような空間として用意したいと考えてこのような機能を入れたというところでございます。

次に、この必要性を精査するかどうかというところで、このような機能を考えているというところを上げさせていただいております。例えば、NPOの活動拠点、東北の魅力の情報発信、障害者の方々の製品販売、バスターミナル機能、定住促進コーナー、保育所や託児所、外国人の支援スペースなどの必要性を今後検討していきたいと考えております。

こちらのスライドでは、市役所を中心としまして半径500メートルの円を赤で、半径750メートルの円を緑色で描かせていただきました。周辺を見ますと、市役所に求める機能だけではなく、周辺にも結構いろんな機能が分散していて、例えば、メディアテークは市役所から直線で500メートルぐらいの距離、エルパーク仙台も500メートル以内にありまして、少し歩きますが750メートルぐらいのところまで歩いていけば、仙台市民会館、そして南側

すから、当然半分は人が歩く道にしていこうという計画をつくって、仙台市の中央警察署の署長が、いいねと。市役所の担当の人も。もしかしたら、半分車を減らす、そのために国分町に曲がついていく右折をやめさせるとか、そういうふうな形で、相当今につながるいろんなことをやったんですけれど。ちょっと悔しかったのは、署長さんがいいねと、そういうふうな形でやっていこうという話をしてくれたその年の4月1日に署長がかわりましたら、止まりました。それから、トランジットモールが直るまで何年かかっただけでしょう？という形ですけれど。でも、そういう形で、私は都市計画の人間でも、大きなネットワークとしての交通とかということよりも、歩く人たちを中心にしたまちづくりというのをやってきたつもりです。

当時、定禅寺通り劇場化計画というのをつくりました。同僚だった東北大学の小野田さんと2人でいろいろと絵を描いて、さまざまやりました。その当時、ミュージカルの女性と2人で、1時間番組で定禅寺通りの緑道を歩くという、今となっては恥ずかしいビデオもあったりしますが、そんなことをした時代は楽しかったです。

教育局は分庁舎にあり、障がいのある子どもの担当している健康福祉局は本庁にある。障がいのある子どもは仲間に入れない壁がある。そういう物理的な壁も取ってほしいと思う。

遠藤：

部局ごとに分かれ、制度ごとに会議がある。誰のための制度であり政策なのか、非効率な状態に谷津さんご苦労しながら、その制度をつないで編みながら支援を続けているのだと思う。結構、柔軟性や双方向とか、行政が担うのか民間やNPOが担うのかをお互い話し合い、双方向で考えながら市民協働・公共にインプットできるということはとても重要な観点ではないかと思った。では、引き続き、ご自分が考える市民協働や公共のあり方、議会のことも意見をお願いしたい。

大橋：

私たちが8年間、震災後から自治体と一緒にいろいろな事業をやり、プロセスでうまくいった時を思い返すと、アドバイスをして

のほうには市民活動サポートセンターがありますので、そういったそれぞれの施設の機能と連携しながら建物を考えていく、建物を使ってもらうことを考えていきたいと我々は考えたところです。これに関してのご意見としましては、意見として赤字で書かせていただきましたが、「情報発信機能があるといい」、「障害者の方々が例えばおにぎりなどを持ってきて食べられるようなスペースが余らないということなので、寛容な空間、自由に使える空間が必要ではないだろうか」、「LGBTなどあらゆる人に門戸を開いた庁舎になってほしい」そういったご意見をいただいております。また、「色々な用途に使えるような柔軟性を持ったスペースにしておくことも必要ではないか」というご意見をいただいております。

最後、少し駆け足になりますが、庁舎の敷地利用ということで工事の範囲と駐車場について簡単に説明いたします。

先ほども言いましたが、建て方の順番としまして、現在の議会議棟と低層棟を先に解体させていただきます。解体した上で新しい庁舎、これは西側配置の例ですが、新しい庁舎を建てて、その上で既存の高層棟を解体し、周りの低層部分を追加していくという考え方で全体を進めたいと考えております。駐車場に関しましても、

今ここに僕たちがいる空間に、昔、パチンコタイガーというパチンコ屋がありました。そのパチンコタイガーの跡が、図書館とか新しい空間になっていったらいいねという風なことを小野田さんと言いながら図面を描いたものです。その後、コンペが始まり、動き始めたので、ちょうど桂先生とすれ違いになったんですけど。そういう意味でいうと、そのギリギリまでいて、このメディアテークができる時も、1階のこの空間の外の部分が、建物の中だけど公開空地にできないかなという話があって。東京でやっているから大丈夫だよ、という話をして、ここの部分のドアを開けるといことをやりながら、セットバックした空間をどんどんこのまちにつくっていききたいという話をずっと議論してきました。だから、僕の友人もジャズフェスティバルを始めて、今のプロデューサーも友人だし、ハロー定禅寺村というのものもあつたし。そういうところのこの文脈で、そこに今シティホールができていくという話を議論できたらと思っています。

つまり、僕も東北でさまざまなおと、北海道も含めた市役所の建て替えコンペの委員長をやっている、キーポイントは何かということ、その市役所の中だけ、さっき、リズムも言いましたけれど、

くれる人、協働の仕方についてすごい識見や経験を持っている方がおり、そういう方とうまくつながって突破口が開かれたという経験が結構あった。そういうキーパーソンと出会えるかがすごく大事だと思う。それを偶然の出会いに任せておくだけではなく意図的にそういった出会いが生まれる機会があるといいと思っている。仕組み化というキーワードもあったが、その一つとして、キーパーソンとの出会いをつくっていくことが仕組み化の一つになると思って聞いていた。

あと、NPOは現場の代弁者であるという話は、もともとだと思った。私たちが、困り事を声に出しにくい子どもや生活で精一杯の母子家庭が、何に困って何を欲しているかを伝えることすら難しい。自分の考えをまとめることすら難しい人たちがたくさんいる中で、どういう代弁ができるのか本当に考えていかなければいけないと思っていた。

現場の状況をいきなり自治体と一緒に取り組もうとすると、すごくジャンプ感があって、わかるけれども何をしたらいいのかと悩むと思う。だから、それを事業や施策の形に変換して行政などに

現在、来庁者用駐車場は地上につくるということで、その検討をさせていただいているという状況でございます。

現在の検討状況は以上となります。

安田：

菅原さん、ありがとうございます。

今ご説明いただいた内容は、概ね基本計画検討委員会の主に第4回ですね。第3回部分は配置の話が主ですが、第3回を踏まえた第4回の説明ということになるかと思っております。

今回登壇いただきます皆様、棟内配置やその辺の話は少し置いておいて、まずは配置パターン、あるいは、まちづくりから考える、その辺りについて、自己紹介も兼ねて反時計回りで皆さんにご意見を伺いたいと思います。

では、青木さんからよろしいでしょうか。青木さんは、基本計画検討委員会のメンバーでもありますので、実際、委員会はどのようなものなのかということの紹介も含めてご説明いただければと思いますので、よろしくお願いたします。

青木：

Table A1

中心部他施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

Table A1

中心部他施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

そこだけに行く人は少ないので、そこに行くこととまちとどうやって関わらせるかという話です。その時に、どうしても僕ら建築の人間って、空間のその施設がどうやって連携していったらいいかという話をしてしまう。ネットワークと言うんだけど、問題はそこをつないでいるのは、当然そこを歩いている人たちのネットワークなので、そういう人たちのネットワークということは、その人たちが生み出していく私の場所と思うところがどんなネットワークをつくっていきけるのだろうかということに興味があって。施設も大事なんだけど、その施設の場所性みたいなものを生み出していき市民の活動と一緒に考えていく、そういった主役のネットワーク論をしないと、ここにこの建物ができたから便利ですよねという話じゃないんじゃないかというあたりを、後で少しお話ししたいと思います。よろしくお祈りします。

坂口：

では、増田先生お願いします。

増田：

公的な立場は、建替検討委員会の委員長ですけれど、あんまりあっちの席では言いたいことが言えないので。今回は、ちょっと外して議論したいと思います。

図の上の方を映して、スクロールして上の方。ほとんど見えないと思うのですが、青丸の下のところに、仙台市公共施設マネジメントプランに基づき云々と書かれていて。既にもう仙台市の公共施設全体像をどうするかという議論はやっているはずなんですけれど。でも、あんまり市民には意識されていない面があって、特にその合併市町村、仙台も合併市町村ですけれど、もうちょっと小さな石巻とか登米とかでいうと、複数あった元の市役所をどうするかとか、体育館たくさんありすぎるとか、それをどうするかという文脈で総務省の中から出てきたマネジメント計画ですが、仙台市もそういうことをやっています。下の地図を全部映してください。この中心部他施設とのネットワークが今日のテーマなので、この緑色で示した施設が仙台の中心部にあるいくつかの公共的施設になっているわけです。個人的には、たまたまサポセンが街のあっちの方（本町）からそこ（一番町）に移ってくるときの、あそこ（旧日専連ビープ）でいいのかなみたいな話で関係してい

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える



Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物の構成を考える

皆さん、こんにちは。青木と申します。ご紹介をいただきましたが、検討委員会の委員としても参加させていただいています。所属は、せんだい・みやぎNPOセンターでございまして、菅原さんのご説明にもありましたが、仙台市民活動サポートセンターの指定管理もさせていただいています。

毎回委員会では、非常にボリュームのある資料の説明を伺っているだけでもいろいろな多岐にわたるポイントなので、私は建築や設計の専門ではないところもあり、何をポイントにして、どう見極めて何を発言したらよいか、毎回非常に難しいなと思いがら委員会に参加をさせていただいております。

逆に言いますと、この検討委員会で論じて次の設計に行くというプロセスのところ、今回のような専門家の方からのご意見や視点という部分については、ああ、なるほど、そういう見方や考え方もあるのだ、と非常に私自身の考えも整理ができ、参考になる視点というところがある、と毎回感じておりました。ぜひ今日も、私の不足しているような視点、あるいは、そういったことも考えられるのかといったところを、委員会の皆さんに少し共有ができれば、と思って今日は参加させていただいております。

今のお話の中で1つ、1棟案で決まった経過で、高さの問題が非

常に気になっていました。2回目まではたしか19階の資料でしたが、3回目のところに13階で1棟、2棟という案が出てきました。それまでは何となく2棟案がいいのではないかと個人的に思っていたのですが、色々なパターンで1棟でも高さの部分の工夫ができるのだということがわかりました。委員会の皆さんでもいろいろな視点はありましたけれども、一旦1棟案で議論が進んできていて、今、低層部分のさまざまな機能についての議論に入ってきているというような状況です。

私自身も全てに納得し切れて臨んでいるかということ、そうでもないところはありますが、資料を拝見しながら、例えば、先ほど後半でお話がありました市民利用の機能の検討といった部分で、いろいろ今まで出ているところが活字になっているなというところがありました。私どもの通常の市民活動の支援といった視点からしますと、共同のスペースや活動の拠点というフレーズはあるのですが、お伺いしたところ、この具体のイメージは余り精査されてはいないというお話だったので、市民協働ってフレーズはいっぱい出ているのですが、実際に誰がそこでどんなことをしていくのか、あるいは、そこで何を起こすのかというようなことが、まだまだ個々のイメージによっているなという気がしているので、

たのですけれど。でも、もうちょっと広く考えると、この市役所が昭和40年にできて、その後、都心部の中にかくかこういう公共施設が整理されたというのがあって。いずれも、昭和40年から50年ぐらいにできて、今後どうするかという議論が同時に10年後ぐらいに出てきて、その先陣を県民会館が走っているということになるんだと思います。

その後、仙台は政令指定都市になって、各区に科学館とか、青年文化センターとか、そういうのをたくさんつくっていきます。このまちなかの施設ネットワークをどうつくり直すのかというのが1つの課題として存在しているわけです。その中に、このシティホール、市役所の問題も位置づけられるということが1つ。もう1つ、そこに赤い点で示されていて、借上げの庁舎もあるのですけれども、分庁舎がまちの中に点在しています。今回、これを市役所の部分に集約するということなのですけれど、集約した後、空いたところをどうするかという議論も、実は同時にあって。この後、この地域の再開発プロジェクトをあちこちで立ち上げるようなことはないのかもしれませんが、でも新しい種として、この都心部北部分の全体像を見直すスタートがこの市役所から始

まって、その後順次ローリングしていくか、民に投げて新しいプロジェクトをお願いするのか、公園化してそこは空地化するのか、多分いろんなアイデアがあると思うんですけど。そのきっかけにもこの市役所がスタートポイントにあるという、そんなことを考えています。

さっきの公共施設のマネジメントの話は、トータルとしていかに公共施設を減らして効率的に安く上げるかというのがあるんですけど、一方で、お金をかけるところにはどうかけるかという議論も同時にやっていくことになると思うので。市役所は、ある程度その1つの候補地だろうなというふうにも思ったりもしています。でも、市民会館をあのままあそこに、当面はリニューアルでしょうけど、どうするんでしょうみたいな話も次々に出てくるんだらうと、そんなふうには思っています。よろしくお祈いします。

坂口：

では、桂先生、よろしくお祈いします。

桂：

翻訳する、そういった機能がNPOには求められると感じているが、そういった能力が十分備わっている訳ではないので、いろいろな知見を持っている方々と勉強し、互いが成長できる機会をつくっていくことも大事であると考えており、意外とノウハウを持っている方が自治体の中に存在すると思うので、そういった方々がもう少し現場と一緒に、考えてくれる機会があってもいいと思う。

遠藤：

大橋さん、キーパーソンとの出会いから事業が好転したり救われたり発展したりがあったという話であったが、そのキーパーソンとの出会いというのは偶然だったのだろうか。

大橋：

偶然と言ったが、必然的なところも当然あったと思う。精神論みたいな話にもなってしまうが、諦めず言い続けていると、そういう人にだんだんつながっていくということはあると思う。

少し具体的なものを想定しながら、あるものを増やしていくのか、あるいは、ないものを新たにここでどうつくっていくのかという辺りの、少し想像力をかき立てられるような議論の場があるといいのではないかと感じています。

ただし、委員会の中では、非常に時間も限られていますし、毎回メディアの方も入られていることもあって、自由闊達な議論というよりは、割と淡々と進めざるを得なくなっている、というのが個人的にはありますが、今日は特に低層部のやや具体的なものもあるので、いろんな可能性がどういったパターンであるか、あるいは、今想定されているようなところでは、ちょっとここが懸念されるのではないかとというような、ご専門のご視点などもいただけるのであれば、私自身も少し学ばせていただければと思って今日は伺っておりました。

安田：

ありがとうございます。

今、青木さんからいろいろお話がありまして、特に配置について1棟案、2棟案という最初の段階の話までさかのぼって少しご説明いただきましたが、検討委員会はこの配置には大変ご苦労され

遠藤：

それを意図的に仕組めないかということだろうか。

大橋：

意図的には、どういうことかということもぼやっとしているが。

遠藤：

わかった。あと自治体の中にも、担当課でない職員も、知見がある方や行政や、いろいろな制度に詳しい方もいると思う。大事なリソースなのかなと感じた。

大橋：

先ほど谷津さんからも話があったが、貧困というキーワードをとっても、いろいろな課題が複合的に絡まっていることがほとんどなので、例えば教育委員会と話をしてもそこで終わってしまう、福祉と話をしても、それは教育委員会のテリトリーだからみたいな話で終わってしまうことは結構起こりえる話だ。分野横断的に話

ているようで、最終的には決定するためのキーワードを集めましょうと。やや今、後退したような状態になっているかと思うんですね。それを1回増やして7回で最終的に決めましょうというようなことで、大変慎重に検討委員会自体は進められているという意味では、普通の検討委員会とは少し毛色が違うような印象を、私個人的には持ちました。

その中で、そうは言っても決めなければいけないことがたくさんあると思いますので、淡々と進められているというようなお話がありましたけれども。私個人的には、まちづくりから考えるというポイントと配置のパターンというのは切り離せないかと当然考えてお祈いまして、幾つか市民役とか歩行者の回遊とか、まちの話、色々説明いただきましたけれども、そういった点も含めて、配置のパターンというか配置を決定させる要素のようなものについてもぜひ、安本さんは実際にまちづくりという視点をお持ちだと思いますので、そういう視点も含めてお祈いいただければと思います。

安本：

今、ご紹介ありました、パシフィックコンサルタンツという建設

Table A1

中心部他施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライズの構成を考える

Table A1

中心部施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

東京芸大の映像研究科の桂と申します。どうもはじめまして。僕は、ハンドアウトに1995年、約20年、メディアテーク、桂と書いてあって、ああそうか、仙台ではそういう位置づけかと思って、さっきちょっと考えて思い出してみたんですけど、もうほぼ25年です。このコンペ、僕がここをお手伝いするきっかけになったのが、磯崎新さんですが。彼は、いい意味でも悪い意味でも若者を振り回す人なんですけど、いまだに振り回されていますけど、メディアテークが一番いい振り回され方をしたと思っています。それは、一番当時のことを思い出して考えると、いわゆる25年前ですから、インターネット以前なんです。それで、インターネット以前の公共施設のあり方と、それからの公共のあり方というのは、明らかにこれは違うと思います。それで、そういう意味で非常に計画の最中、いわゆる建築が立ち上がっていくときに、まさにインターネットが商用化という、96年ですけれども。クリントン政権が情報スーパーハイウェイ計画を打ち出して、世界中にいわゆるコマーシャルなインターネットが急速に普及していったのが96年です。つまり、このプロジェクトのプロセスの間に、インターネット時代が突然到来した。その境目という意味でも、このメディア

アテークというのは非常にメモリアルなものであるというふうに僕は思って、時々感慨深く思うときがあります。非常にいいタイミングで、このメディアテークという施設が立ち上がったと感慨深く思う反面、これからやっぱり公共施設を考えると、これまでと同じようにサービスとか、僕はどちらかという開館支援、メディアテークだけじゃなくて、いろんなところの公共施設の、図書館それから複合施設の開館支援をしてきましたけれども、明らかにやっぱりプログラムを立てる上で、日々刻々と変わっているメディアの環境というのもの、どんどん紙が後退しています。市役所のことだけ考えても、紙というものがあまり、いわゆるエビデンスではなくなっている。これは、実は非常に重要なことで、役所の言ってみれば公文書主義という考え方は、歴史的に言ってもプロテスタンティズムの非常に大きな役割だったんですけど、それが要するに紙ということで、紙で例えばサインをする、もしくははんこを押すということで証文になり得た、いわゆる担保されていたものが、どんどん今ネットの中に抽象化されている。そのいわゆるエビデンスがどんどんネットで電子化されている中で、リアルな場所では何かお墨付きを与えたり、

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

せる場が必要だと思っている。

遠藤：
先ほど鈴木さんから、協働という言葉に対するみんなのイメージもばらばらなのではないかという話があったが、谷津さんや大橋さんの話でも、課題を真ん中に置いて、それに関係する人が集って対話して問題解決することも協働だと、そういう協働の像を描いていない方もいると思う。いろいろな人たちで問題とかビジョンを真ん中に置くという考え方も協働だとは思いますが、そういう多様な協働像をつくったり共有したり、新たに書き直したりということがどうやってできるのかなというも考えていきたいと思う。菅野さんお願いします。

菅野：
私は、宮城県民ではなく大阪府民である。その観点からも話をしたい。私は、人文地理学が専門である。大阪市内の釜ヶ崎など都市問題を扱う水内俊雄先生の弟子で、どうしても地理や都市社会

史に注目をして、都市政治を常に追いかけて、社会問題がどう解決されるのかというアプローチで、NPOを見ているというのが研究者としての一番の大きな意識である。

震災直後の約1週間後に仙台に入って、NPOの立ち上げをした。仙台に来たときに驚いたことがあった。大阪とか関西だと、市民と行政のつき合いとかNPOと行政のつき合いはどこか壁があって、端的に言うと、行政から見ると、「あっ、NPOが来た。何だろうね」と、「話は聞いておくよ、建前で」というのが基本的なつき合い方のように見える。このような付き合い方は、当然歴史に裏づけられている。人権問題、差別問題が沢山あったところなので、市民と行政は闘ってきた。当然行政としては構えながら最低限どう調整するかでつき合いをしていく場合が多い。そういう政治文化の中で活動した後に仙台に来ると、部長局長と普通に立ち話して楽しそうにやっている。近くて本音ベースでしゃべれている。これは、全国的に見てもかなり特異な地域だと認識したほうがいいと思う。そういう政治文化を仙台市はつくってきた地域だと思っている。

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物の構成を考える

コンサルタント会社でまちづくり、都市計画を専門にやっている安本と言います。本日はよろしくお願いたします。

今回、配置の話ということですが、先ほどからスライドを見ていて、1点気になるのが、やはり南側にある市民広場との関係性とか連携性という言葉は出てくるのですけれども、あくまでも今の現地の敷地の中で考えられて、外の市民広場との連携、関係性というようなイメージをどうしても持ってしまうのです。今回、今の噴水の場所に壊されて建てられるということであれば、敷地として市民広場と一体的に考えられて、真ん中には実は車道が入るので非常に難しいところはあるのですが、考え方としては一体的に考えてやられたほうがいいのかなという感じはしております。

特に、私は建築の専門ではないので、市民というか素人の目線からしますと、市役所がどのように見えるかというのは、将来建てる上でも非常に重要なのかな。要は、正面の軸線をどう持ってくるか。ちょうどアーケードから抜けてきて、今の庁舎というのは、抜けてきた軸線の真ん中に建物のセンターがあると思うのです。やはりその線というのは意識する必要があるのかなという点、それから前回も言ったのですが、今、市民広場のスタージは民間のビルを背景に建っていますが、新しくできる象徴的な市庁舎を背

景とできればよいのではないのでしょうか。市民広場と言いながら、写真を撮ったときに仙台市だけが民間のビルが背景になっているので、少しその辺も同時に考慮しながら、配置というのは検討されたほうがいいのかなという気がします。

もう一つは、資料にもありますが、鳥瞰的に見たときに19階なのか13階なのかは非常にボリューム感などの違いは出てくるのですけれども、もう少し目線を、歩いている人や市民広場にいる人に向けると、実は今ちょうどバス停があるところなんて本当に、市役所の旧庁舎は横に建っているのですが、あれが13階だろうが19階だろうが見えているのはここだけなのです。その境界の部分のつくり方というのをどうするかといったところが重要ではないのでしょうか。配置の場合も、そこに空間があることがよいのか、空間があることで建物は余計自分の視野の中に大きく入ってきますが、近づけてメディアテークのように透過性を持たせると中が見えるので、建物自体の意識って多分減っていくと思うのです。その辺、もう少し目線の位置を、バードアイではなくヒューマンアイの高さで検討しても面白いのかなとは感じております。

感覚的には、やはりそのセンターのラインというのをきっちり合わせて、通りの軸と建物の正面というのは合わせていくべきな

それからこれが何かの証拠ですよというときに、市役所の役割というのは一体何なんだろうというふうを考えざるを得ない、つまりサービスの側面ですね。

それから、やっぱり人が集まるって、先ほど何人かの方がおっしゃいましたけど、本当に市役所ってこれからも人が集まることになるのかというのは、僕は非常に疑問だと思っています。どんどんサービスは分散化していると思うんです、既に。にもかかわらず、人が集まる拠点として市役所を考えるというのは、非常に危険だと思いますね。もちろんオーバースペックになりやすいというのものもあるし、それから、建物とか、その周辺の役割というのを読み違えてしまう。なので、このメディアの環境を前提にした人の集まり方、そこに誰がどういう理由で集まっているのかということを考えないと。これは、市役所だけじゃなくて、公共性のある施設というのは、図書館も含めてですけれども、もう当然突き付けられている、向かい合わなきゃいけない課題だと思います。

ちょっと長くなってごめんなさい。僕、今、横浜にいますね。東京芸大の映像研究科って、横浜市にちょっとご面倒を見てもらって仮住まいしているんですけど。仮住まいというか、もう本住

そういうところに関心があり、災害のときにNPOを追いかけたが、何でこんな簡単に話していろいろなことを協働できるのかということで、歴史研究もしており、仙台市の市民協働は、ほぼ50年前、1967年が起点で生まれていることが分かった。それぐらい古い文化を持ったものである。

その当時どんなことが起こっていたか。当時は島野武という社会党の市長さんで、議会は自民党が中心であった。二元代表制がずれているという構造があって、議会が言っていることを市長として聞けないとか、市長の言うことを議会は通さない。議案の否決が出るなど大変だったのであるが、調整をしようとするときに、「市民が言っていますから」という論法を生み出した。そのために、市民から直接意見を取り入れていくという政治スタイルをしたのが島野武という人物であった。今も跡が残っているが、市役所に入って応接間みたいながあると思う。「市民のへや」となっているが、あそこで相談対応をして、その意見を政策立案に使っていた。あそこに局長や場合によっては市長まで並んで、市民からの意見を受け付けていた。要は、議会ではない意見調整のルートをつくっ

のではないかなというところで、どの案になるのかというのは厳密に見ていませんけれども、そのように感じておりました。以上でございます。

安田：

ありがとうございます。今、幾つか視点を投げかけていただいたと思いますが、1つは正面性、既存の庁舎も持っている一番町に対する正面性という話ですね。それから、広場のステージの話が少しありましたけれども、バードアイではなくて低い視線で見たときにどう考えるかというような話も少しいただきました。以前もこのテーブルで出た問題で、現在の市役所の北側は市民目線的にはあんまりだろうという話が少しありましたけれども、そういうものも含めて新しい庁舎では周りの、いわゆる人間の目線ではどうなるかというのは非常に大きい話題だなと感じています。

安本さんの隣は、関・空間設計の渡邊さんです。建築の専門家の視点からもぜひ、配置について何がキーなのか、まちづくりの視点といった安本さんのご指摘とまた違う視点で何かあるかと思えますので、ぜひその辺も含めてお聞かせいただきたいと思います。

まいですけどね。そこで、うちのその校舎の近くに横浜の市役所が超高層で建っているんですよ。横浜市役所、市の職員の削減に随分取り組んできて、一時期55,000人いた人たちが、3万人切っているんですね。一生懸命削減して3万人切っているにもかかわらず、一体どんな人たちがどういう理由でこれからこんな超高層の中で、どんな仕事をするのかというのが、さっぱり想像がつかないんですね。少なくとも、僕はイメージができない。居場所としての、つまり労働環境としての市役所というのと、それから、サービスのやりとりをする場所としての市役所というのは、これは両面あると思うので、これも両方考えなきゃいけないんじゃないかなという気がして。僕は、いつも、どんどん立ち上がっている横浜市役所を毎日のように見て暮らしているところです。よろしく願いいたします。

坂口：

非常に多角的な問題提起、ありがとうございます。そもそも、人がなぜ集まるのかということ、集まる前提で物事がスタートしているのだから集まらなくてはいけないのかということも一方

ていったというのが、もともとの仙台の市民協働の発想である。

67年に市民のつどいという市民とのワークショップのような事業がはじまるが、それをきっかけに出てくるのが、今でいうところの市民運動団体のようなもので、期せずして仙台市は市民運動団体と全部局が対峙する経験をもつこととなった。例えばこどもの城運動というのがあった。子供の保育や医療の話が出ると、子供部局の話だったのに、医療の話も、歩道橋をどうつくるとかの交通の話も出て、様々な部局と市民が対峙するようになっていった。

それが、市長がかわりながらも受け継がれ、今の市民活動サポートセンターができるのは藤井市長のころだが、そのころに制度としてルール化し固定化した。しかしその前から文化的にいろいろ話し合っただけというのを仙台市役所はもっていたし、仙台市の市民運動や市民社会も持っていた。それをルール化したというのが仙台市の市民協働。そのため、全国的に見ても先進で特異なものであるということだと考えられる。

だから、仙台でできなければいけないことは、おそらく山ほどある。

渡邊

ありがとうございます。渡邊でございます。私は、関・空間設計という設計事務所を主宰しながら、日本建築協会の一員で、特に震災後、みやぎボイスとか被災地とかのかわりや、そういうことで地域とのネットワーク、あるいは、そのネットワークに関連づけるためのここにいらっしゃるような専門家の人たちのプラットフォームが重要だなということを感じて、最近活動しております。その辺の中から、こういう場もそうですけれども、やはり日頃からの関係性をいかにつくっていくか。その都度その都度、課題があったり、問題があったり、あるいは、外的な条件が変わったりということがあつたわけで、そのときにどうやって未来を見て解決をするかというときに、やはりこういうプラットフォームの重要性を感じて活動しております。

私は、1972年に仙台に来ましたので間もなく半世紀になります。多分、ここにいらっしゃる皆さんの中では古手になるかと思いますが、高齢者の域に入っていて、多分この庁舎ができるころは間違いなく後期高齢者になっています。そうすると、多分、こういうものづくりの活動などに参加をするというよりは、庁舎の周りにときどき来てその環境を楽しむような立場になるのかなとい

Table A1

中心部他施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライズの構成を考える

Table A1

中心部地施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

であると思うので。そういった非常に広がるコメント、ありがとうございました。

じゃあ、二郷先生、よろしくお願ひします。

二郷：

私は、民間を中心とした事業企画設計をしてきた、元建築やの二郷と申します。45年ほど前。「仙台城の復元模型づくり」に関わりました。今は、何とか実現したいとの思いで「仙台城大手門、脇櫓とその周辺整備」についての復元活動を続けています。今日は、自分の今の状況をお話しながら、この新市役所計画に関係する、提案、歴史に関係する何かをお話したいと思いますが、今、私が関わっている活動はその枠外です。今回の計画と、どうつないでいくか難しいとは思いますが、思いつくままお話ししてみたいと思います。

現在の市役所、宮城県庁の立地は、どうしてここだったのでしょうか。今でこそ、仙台の中心に立地し、行政、市民サービスを提供していますが、この地は、江戸期より街の郊外地に近い処でした。仙台の街中には少ない丘陵地で、若者達の学問所「養賢堂」

のあったところです。先生方からは、現在から未来へ向けたお話、検討すべき課題等が色々出ました。将来を考えれば、桂先生がおっしゃったように、出来ればその機能空間、エリアはコンパクトに納め、新しい時代のシステムに対応したものであるべきとお話は納得できます。一方、今後ますます発展するであろう情報化社会の中では、市政業務は多様に変化してゆくと思います。しかし、多くの職員の為の大きな職域空間をここに作るのではなく、ここには市政の執行者と市政決定者の為の施設を中心として、街として必要な、多様に変化できる空間を計画することはいかがでしょうか。市政に必要な事務处理的な実務、事業集約、検討、決定の為の専門職域空間はこの地でなくともよいと思います。現在、泉区役所の改築の計画も出ているようですが、ここに市政決定に必要な職域空間を持ってゆくのも方法だと思ひます。今回計画の下層空間は、市政とは別な空間として、中心部の商業空間とつながり、多面的展開のできる、市民が活用できるサービス空間として整備して、直接的に求められる市民サービスの提供は、区役所等で対応することには出来ないのでしょうか。

このエリアの外で活動している観点から申し上げます。先ほどマ

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

この市民協働の先進性は地域固有のものだと認識をしている。

セクターを超えて政策の調整、立案及び統合をしていくのが一番の働きだったはず。子供という一点で政策を統合していった。鳥野さんが掲げた都市ビジョンで一番大きかったのは健康都市。いまだに「健康都市・仙台」っていろいろなところで見える。要は、健康のためだったら何をやってもいいという政策理念であった。道路をつくらなければいけない、下水道をつくらなければいけない、子供の病院も健康都市、そこにある彫像、あれも文化がちゃんとしていないと健康になれないとなる。こういった理念のもと様々な調整の中で施策をつくっていく行為を何十年も続けてきたまちが仙台である。そのため様々な新しい都市問題とか課題をどのように高度に解決していくか、効率的に解決していくかのルール、様式及び調整の手法が、いわゆる市民協働としてつくられてきたと思ひている。そうすると、市民協働とは部局の話ではないということになる。どの様にして市民や様々なセクターと政策を一緒につくっていくのかという、普遍的な理念を当時からあらわしているということにもなる。極めて特殊だと思ひますが、

仙台市において非常に多くの部局がNPOなどと付き合う。これは、かなり他の都市と比較しても特殊なことに思える。普通だったら行政職員として外の意見なんて聞きたくないから、「ああ、市民系の話だから市民協働の窓口へ行ってください」で終わってしまう自治体も山ほどある。そのため、行政全体として、部局ベースではなく、異種な人・セクター・地域などと付き合っていくことが、市民協働とか公共をどうつくるのかということの、仙台の考え方だろうと思ひている。

遠藤：

仙台にはそういった歴史やほかにはない特性があり、そこから今後の市民協働・公共を考えたときに、部局ではなく、どうやって一緒に政策をつくるかが、さらに重要ということであったと思ひます。

菅野：

重要だと思ひます。おそらく市民局の話ではなく、あらゆる政策がそうやってつくり上げたり、行政が担ったり、行政以外の人が

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物の構成を考える

うことで、そういう視点も盛り込んで議論に加えていただければと思ひました。

安田さんから基本計画の配置パターンについての意見を聞われましたが、1回目、2回目も出たときにお話ししたのですが、やはり重要なのは、この基本計画で何をまとめていくのか、整理していくのかということが重要で、私は建築設計をやっていますが、多分基本計画検討委員会で配置はこうだ、下位構成はこうだ、市民との関係はこうだということは決めるべきではないと思ひます。それは、やはりこの次にかかわられる設計者、建築家に委ねるべきだと思ひし、そのほうが、人格があつて顔の見える対応ができるのではないかと。ですから、基本計画というのは、そのためのいろいろな条件を整理していく、あるいは、課題を探っていくということで、今の7回をかけて決定するという方向性には、それも1つの方向だということでは否定はしませんけれども、それでいいのだろうかと思ひます。

それはなぜかという、先ほどの菅原室長さんのお話でもそうだし、これまでの4回の委員会の議論を聞いてみると、非常に多様な意見が出ています。多様だけれども、聞いているほうは、芯がないよねと僕は思ひます。その芯をつくるのが、まさに設計

士だったり、建築家だったり、デザイナーだと思ひますので、そういう仕組みを早くつくる、あるいは、基本計画検討委員会なり基本計画の策定者がその立場になるというようなことが重要だろうと思ひます。欠点のない案を一生懸命つくっているのかなと思ひます。先ほど言った僕が10年後来たときに、ああ、ここはうまくいかなかったけど、でも、ここ、なかなか味わいがあるよねとか、楽しいよねとか、そういう特徴のある案をぜひ仙台ではつくっていくべきだと思ひました。

配置検討の中で、安田さんの質問に少し答えようとする、このプロジェクトの特徴というのは、庁舎やその敷地だけではなく、周辺のエリアを全体で考えようという方向になっています、まずエリアデザインを考えていると。あともう一つ、このプロジェクトの特徴は、市民協働参画というコンセプトがあつて、いかに市民、専門家がかわっていくかという、そういう視点からおのおの答えが見えてくるのかなと思ひし、それを期待したいと思ひます。あと、先ほど菅原さんもおっしゃったけど、2011年にあれだけの災害を受けたということも大きな計画のバックボーンになると思ひますので、そういう形から配置パターンを考えて答えが出てくるというふうに関心しています。



Table A1

中心部他施設とのネットワークから
「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

担ったりする施策がいろいろありながら、効率化していくことが、人口も減り税収も上がらなくなっているなかで重要になる。あらゆることが協働と考えたほうが正しいと思う。そのときに、多分議会は意見集約の一つのルールではあるが、それだけではできないから市民協働を発達させてきたわけで、どちらもあるという状況こそが正しいやり方だと思う。

遠藤：

いろいろな形の政策ができてくるところがさらに皆さんの話でも、場でもできるといえると思う。

今野：市民協働について10年くらい前から考えている。私たち企業が市民協働の市民の中に入ることを、市民の一つの担い手であることを企業自身が認識する必要があり、全体としてもクローズアップされる必要があると考えてきた。多分もっと持っている力を発揮すれば、今の地域課題に対する解決の力とか実行力があると思うが、市民協働の市民の一つであるという認識がないため

ただ、唯一、具体的な話をと言うのであれば、北側との関係がどの案も非常に薄い。既存の庁舎を使いながら、ということで、最後にそこは駐車場にしようというような計画ですが、それで果たしてよいのでしょうか。北一番町から北側のあのエリアとの連続性が、例えば西側配置にして東側にオープンスペースをとったとしても、都市空間としてはなかなかそうなりにくいのではないかなということなので、いずれにしても、東西南北にそれぞれ目的のあるオープンスペースが出てきますから、そのデザインをぜひ考えていくべきではないのかなと思いました。

安田：

ありがとうございます。

1つ、渡邊さんから芯がないというお話がありました。本来は私もその話を実はここでぜひやりたいと思っていたのですが、ほかのテーブルでそれがメインになっていますので、それは譲って、ここでは少し抑えるという形にしておきたいと思っています。渡邊さんからご指摘があった北側との関係は、前回久保田さんからも同様の話があって、俺の通勤路をどうしてくれるというような話がありましたけれども。問題設定の中で北の玄関口だという

に、経営資源を投下し切れていないところがあるのではないかなと反省も含めて思っている。

私どもは、「仙台・宮城と、ともに。」、ずっと事業展開をしてきたということがアイデンティティーで、社員自身も、事業を通して地域に貢献していることが一つのプライドであるという思いは全社的にあるが、果たしてそれが言語化されメッセージとして対外的に伝わっているのか特に気になっている。

個人的には、「企業は社会の公器である」と最近本気で考えており、そのことがどう発信できるかと考える。例えば若い人材を地元で雇用し定着する責任、事業を通して人材を育成していく責任、それが市民協働の一つであると意識してやっていきたいと思う。

本日この後、弊社のこの事業が地域課題の解決につながっているということをメッセージとして伝えるサステナブル方針を全社的にまとめ、全社で発信する。

平成4年につくった行動指針をみんなで大事にしてきたが、それは全てお客様のためという言い方になっている。今も、ステークホルダーをちゃんと意識しようと、広い方針が必要だということ

ような都市分析が、この基本計画の中でもあったと思うんですね。僕は何かすごくそれに、後ほ榊原さんもいらっしゃるので何かおっしゃっていただけたらと思いますが、違和感があるということもあって、今のご指摘は大変重要な指摘かなと思います。

その後、また建築の専門家ということになりますけれども、竹中工務店の久保田さんから同様の質問でお願いいたします。

久保田：

竹中工務店の久保田です。私はずっと建築の設計一筋でやってまいりましたので、今日はそういう視点で考えたものを準備してまいりましたので、見ながらお話しさせていただければと思います。私は、学生時代、こちら（仙台）にいて、10年ぐらい前に仙台に戻ってきて、今はすぐ近くのビルで働いていますので、市役所は身近なところ。コトとモノということでお出ししたのですが、最初はちょっと柔らかいところから。

東京タワーと通天閣ってありますが、何が違うかということ、実は、東京タワーは下を通れないのですが、通天閣は通れるのです。通天閣は下を歩いて、繁華街の酔っぱらいが夜中歩けるというのが通天閣なのです。これ根本的な違いですね。大阪の話はどうして

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから
「市役所（シティホール）」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や
建物配置・規模・スカライライの構成を考える

Table A1

中心部施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

り先生がおっしゃった様に、「仙台城」というのは、仙台の象徴であり、伊達の文化空間の他、緑の自然空間として大事であるとお話、その通りだと思います。多くの計画には、これから求められる機能整備はもちろん、仙台市として象徴的な歴史、自然が共に語られ検討されます。しかし、これに対する情報、知識、思い、そしてその価値をどのくらいの方々が共有しているのでしょうか。多くの計画では、伝承すべき歴史、自然空間は語られても、過去は言葉だけで、その為の空間はいつの間にか切り捨てられるという残念な思いをしまりました。そこで、仙台という街の「過去・現在・未来」と連なる知識と情報を発信できる空間を、今回の計画の中に据えていただき、若者たち、子供たちに、少しづつでも街の持つ「時間軸」に触れていただきたいと思います。新市役所の下層階には、多くの年齢層の方々が集い、誰でも、簡単に扱えるような今時の「情報発信システム」、集い楽しみながら扱えるネットワークが展開できる多機能なシステム、モニュメント的な簡単な遊具があって、多様に変革のできる広々とした空間等が出来ないのでしょうか。新しい仙台市役所の一階は、仙台のすべてにつながる広場で、人々が集散するだけでなく、市民生活に結び付

く発信の場でもあってほしいものです。こんなところから、「仙台の歴史・風習」「仙台城」「四ツ谷用水」「貞山堀」「仙台のまち」「大手門、脇櫓の復元」「自然・動植物」に興味を持ってくれる市民、子供たちが増えることを期待いたします。

「仙台城址」の中には、仙台市民にとって「城跡」だけでなく、大きな財産があります。「東北大学植物園」です。仙台駅から車で10分、全国でもまれな、街の中心近くにあるこの植物園が、国指定の「天然記念物」の植生林であることはあまり知られていません。そこには、城の水源であった湧水「御清水」があり、遊水池である「中島の池」へと注いでいます。この池一帯は戦後、色々な使い方をされ放置されていますが、隣接する植物園、史跡指定地域と合わせますと、緑に覆われ、動植物たちの「ビオトープ空間」、「仙台城址」として貴重な、再生・復元が可能な場所となります。というようなことを言い始めるとキリがないので、一旦これで終わります。

坂口：

ありがとうございます。ちょっと補足しておく、多分、1階部

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

でつくっている。
内容は、持続可能な地域の未来に向けてステークホルダーの皆さんと対話と共創をするや事業を通して地域社会の課題を解決するために、メディアとコミュニケーションの可能性に挑戦していこう、社員のCSRリテラシーの向上のために教育の機会を創出していこうといった内容である。
あともう一つ、社会課題の解決に挑戦をして、その解決がされるほどうちも成長していけるとか稼げるといふ図式が成り立っていると、企業が市民協働にかける本気度というの少し高まると思っっている。まだまだ実行段階にはいっていないが、そんなことを最近思っている。

遠藤：

今野さんの会社を初め、「企業は地域の公器である」を認識して事業活動する企業がふえるほど、協働や公共の担い手がふえるというイメージであろうか。

今野：市民協働の発信の仕方は、市民・NPO・行政のようなイメージができており、発信側に企業も必要なのではないかと思っている。

遠藤：

発信側の、見せていく側の。

今野：見せて行く側としての企業側の自覚である。

遠藤：

見せ方と自覚を促す取り組みも必要だということであろう。では、齋藤さん、いろいろな自治体や地域とも関わっていると思うので、これからの協働や公共はどうでしょうか。

齋藤：

何で仙台市役所のこのようなプロジェクトに興味があって来てい

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカイライターの構成を考える

するのだという、ただ、仙台に来ると、次のページですけど、ここ（せんだいメディアテーク）がやはりオープンというスペースについては、もう本当、建築史にマイルストーンを打ったような建物ですので、これを下回ってはいけないと思います。
設計手法的なところから、共通項を考えるということで配置の共通項を見てみたのですが、条件としましては、周辺への取りつけに配慮するとか施設の連携を考えるとずっと言われていることですが、配置を見ますと、何か表と裏というのがはっきり書かれてしまっていて、建物があったら表と裏ができるよ、ということが、どうしてもこの描いている方にとってはそのようになってしまっているのかと。
次に、それを立体で考えると、どうして表と裏とってしまうのだろうと思うと、どうやらこの箱が壁に見えているみたいだ。壁に見えてしまっているがゆえに、表と裏になって描いてしまうのだろう。これを回避するにはどうするかというと、断面で考えるというのが定常なものです。表と裏と考えると、扱われている断面図は実は1個しかなくて、建物があったら表と裏、断面の構成をもっと欲しいというのが、私の1つ目の提案です。
もっと欲しいということで、簡単にやってみますと、地上の建物

を上げると、当然表が入ってきます。建物が2つになると、表が間に入って行って裏の感じが、裏ほど悪くない状態になったりとかしますね。地下を入れると、地下でつなぐというのも駅前ではよくされていることですので、地下でつなぐということも当然ありますね。そうすると、それ2つを合わせると、一番最後の絵で、地下もつながっていて通り道もあって建物は中空に浮いているよ、というような話になりまして、これは実は、次のページ（設計事務所のプロポーザル案）です。

次に、断面から見えてくるインターフェースということで、今回市民との接点というお話がありますので、それを断面に置いてみますと、こんな感じで表というところと建物の間にインターフェースが出てきて、ではどの配置が、インターフェースが一番大きいのでしょうか、と見始めると、いろいろなことが変わってきます。ただ、狙いとしてはコミュニケーションなのですが、課題としてはセキュリティが出てきてしまうので、そのバランスがこういうところではとても、いつも重要になってきますね。

これは技術提案の中ではかなり具体的に提案されているので、少しこういう考え方を検討委員会でも諮っていたらいいのではないかなというのが意見としてあります。

分にシティプロモーションの機能は、ある程度くると思います。要は、市を売り出して、その案内をするような機能は、はいと思います。

二郷：

その機能は絶対必要だと思うのですが、しかしそのとらえ方、空間表現が問題です。私は子供たちの遊び場にしたら、そこで触って、何かを知る、そんなシステム整備もありだと思います。ただ単なる案内、休憩室、観光案内だけで、年寄りが時間つぶしにたむろする空間であってほしくないという事です。

坂口：

ありがとうございます。せっかくなので、手島さんも一言しゃべりますか。

手島：

日本建築家協会の手島と申します。このラウンドテーブル全体の企画も担当しております、毎回それぞれテーマを割り振って、

るかという、いろいろな地域へもやっているが、震災の後に仙台市はもちろん、石巻や南三陸にも伺っている。地域にこそリアルな課題や未来があると感じている。私が一般社団や公益社団をやっている理由でもあるが、これは大事、これはおもしろい、これを広げたいと思った時、それらを違うものをつなげる時に、必ずブリッジする役割が必要だと思ひ、いろいろなものをブリッジしたいがために、活動をしている。

市民協働で、私が個人として一番今関心を持っているのは、共創、'共に創る'という意味のコ・クリエーションの部分である。市民協働とコ・クリエーションは、近いけれども違うことを言っていて、どうしても市民協働というと全ての市民の人に平等に、ある意味、貧困で困っている人も裕福な人にも平等に機会を与えて、その中で協働のテーマを探していこうとなる。

主に社会課題がテーマになってくると思うが、子ども食堂などのアイデアは全国で広がっているが、一つのモデルにはなりつつある。

私は、仙台に住んでいないので、震災の経験というのは、ある意

通り抜けでき、壁がない、インターフェースがあるというのは、実は何かといいますと、道なのですね。建物はどうしても用途や面積など、そういったものがあるのですが、道路をつくる時にはそれが一切ないのです。逆に、それが無いために、道路で物を売ると捕まるのです。ということで、道という話、前回、道の話をしたのですが、それを一言で言うとopenedということですね。openという完全な動詞でなくてopenedというのは、開くよという意味決定をしないとイケないのです。これは開いたままにする、置いておく。先ほどの話と一緒に、決めないという意思決定、そのカギ括弧の中というのを少し決める必要があるのではないかと。

少し戻っていただいて、ここをしゃべらせていただいて。

確認するという、それは使う人、あるいは設計者、そういったものに委ねられる領域なので、これはコンテンツのコトであり、モノ、ハードでありといったものを、どういった部分は開いた状態にするという意思決定をするというのが、今必要なことなのではないかと思うのです。

何でも決めようとする、やはり決められないという、決めたいけれど決められないというジレンマがどうしても発生するので、

専門家が中心になって。これまでは、業務受託以外で我々がいろんな計画に携わることはできなかった。それを、業務外で専門家がきちんと自分のまちのことに関与していくような仕組みをつくりましょうということで、仙台市さんと一緒に始めています。とにかく、これぐらい専門性が高くて、ある程度複雑で、勉強していないと本当の意味が理解できないようなことですので、ぜひそれぞれの、行政の専門家だとか、あるいは建築、まちづくりの専門家だとか、いろいろな専門家の方に集まっていただいていますので、そういった視点でご意見をいただければと思っています。

坂口：

どうもありがとうございました。

皆さんからのお話が多岐にわたって、あんまりまとめるとつまなくなる気もするのですが、今皆さんのお話を聞いていて、少し大ざっぱな切り方なんですけれども、1つは、さっき北原先生とか田邊さんとかがおっしゃったように、桂先生もそうかもしれませんけれども、公と私の役割の中に、そのビジョンを考える1つの手がかりがあるのではないかという点。ひょっとすると「公と私」

Table A1

中心部他施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

味日本の原点、この21世紀の原点だと個人的には思っており、失われた物の中から何をつくり直すのか、そこは協働だけではなくて共創、がとても大事だと思っている。住んでいる方はそういう意識でやられていると思うが、具体的に仙台からいろいろな取り組みが、日本に向けて、世界に向けて発信されているかという、ちょっと物足りないと思ひはいる。

全国に市民協働や共創・リビングラボの様な活動が増えているが、今、関わっているのが徳島県の小松島市。人口4万人にも満たない市で、昔はすごく栄えたまちだったが、近年は人口が減ってきている。かつての栄えたまちを取り戻したいと思う高齢者の方、商店会の方と、そんな昔は知らない高校生が同じ場に集まって対話をしている。高校生にとっては、そのまちが好きでも、遊ぶ場所がないから外に出ていくしかない。普通にこれらの住民の皆さんをあつめても世代間の意見はばらばらである。

それぞれの思いを地域の未来につなげていく行為は簡単ではない。最初はわかり合えないから空中分解してしまうが、そこに外の人があるとか何かコーディネーションの能力があるという話もさっ

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

やはりそこは決めないという決定が必要なのではないかというのが今のフェーズかなと。フェーズと言いましても、設計の段階において、この段階でこれ決めちゃいけないねというのが、我慢する瞬間がありますので、そこはよくよく考えたほうがいいのではないかと。最後になりますが、こういったことを確認した上で、多分このメディアテークはできているのではないかというように思います。

安田：

ありがとうございます。貴重なご指摘がたくさんあったと思いますが、前回から引き続き、低層部のデザインというのが基本的には、今回の計画では市民との接点という意味で圧倒的に重要だというのはずっと久保田さんが主張されている内容だと思います。そこをどのように扱っていくのかというので、今1つご指摘いただいた開いたものにしていくという、「決めないという決定」という言葉がありましたけれども、そのようなスタンスが必要ではないかというようなお話だったと思います。検討委員会の中でも、そういう意見が幾つか出ていたかと思ひます。さらに加えれば、この建物、80年というスパンで考えたときに、今想定しているものが、

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

Table A1

中心部地施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

の間に、何か自分たち事というか、社会の状況がかなり変動する中で、行政と民間だけじゃなくて、その中間的な部分というものも、あるのではないか。昔もそうだし、多分これからも少し変わっていくとすると、そもそも市庁舎の役割みたいなものも少し変わってくるとそのあたりがまず1つあると思います。

もう1つは、先程、リズ先生がおっしゃった窓口とか、いろんな人をつなぐとか、あるいは玄関みたいなことかもしれないですけども。先ほど梅内さんが指摘された担い手が変わってくることにについて議論したいと思います。例えば今、メディアテークが2001年に開館しましたが、前段の動きを含めて、1993年からだと約30年経っているんですけども。30年ぐらい前、僕は学生だったんですが、要するに30年スパンぐらいで考えていくと、当時学生だった人がこの場でシンポジウムに関わっている。つまり市庁舎が30年後こうなっている将来像について議論したいと思います。約30年前、政令指定都市になって。そういうスパンで考えていくと、ひょっとすると担い手というか、物事が引き継いでいくような仕組みみたいなものもちょっと考えられるのかなというふうに、皆さんの話を聞いて思っていました。

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

き出てきたと思うが、何となく触媒になってつなげることで、住民の方が、あっ、こういう未来が創造できるかもって、瞬間が来るのだと思う。それには、協働を超えたクリエイションの部分がないと、なかなか体現できないと思っている。

その市では2年目で、一生懸命試行錯誤しているが、みんなでつくっていくという感覚が持てるということが重要である。仙台市は100万人都市で、東北の中では人が集中してくる地域、それを活かさない手はない。草の根活動をうまくつないでいく役割を行政がになっていくのではないだろうか。

渋谷区とも一緒にやっているが、ダイバーシティをテーマに「ちがいを力に変えるまち～渋谷」と明確に協働のあり方を打ち出している。だから、仙台はどういう市民協働・共創を目指すのか、わかりやすい仙台ならではの市民協働のビジョンがあれば、皆さんの動きがもっとわかりやすくなるし、そういった場になってほしいと思う。

遠藤：

どれくらい続くのかというようなことも当然わからないわけですから、そこに一定の冗長性とか決めないみたいなことは重要な視点になってくるのだらうと思います。建物を浮かせるとか、道のようなデザインというのは、設計者としてはやはり一言言っておきたいという気持ちが伝わります。

配置の視点も含めて榊原さんからぜひ、仙台市のダウンタウンと言っているのですね。まちなかという視点で見たときに、あの配置は北の玄関口なのか、ということも含めてぜひ、まちづくりから考える配置パターンという意味でご意見をうかがえればと思います。

榊原：

都市デザインワークスの榊原です。仙台を拠点に市民主体のまちづくりのサポートや、自ら実践して楽しいまちにしていきたいということをしています。

いろいろ仙台市との仕事があるので、ほぼ毎日のように市役所には行ってまして、ちょうど真裏に事務所のあるマンションがあるので、市役所の夜な夜な電気がついてる北側の裏を見ているというところです。毎朝正面から入って裏口から出るという通勤

今のせんだいメディアテークが構想されたときから、北原先生たちは定禅寺通りをつくられていたときから、桂先生に物事を引き継がれたときも、多分将来的なイメージが何かしら共有できていたからこそ、つながった部分も少なくないと思うんですね。だとすると、今ここで話されているビジョンみたいなものを、これから5年か何年後かにできる市庁舎であるとか、そういったことに引き継ぐためには、どういったことをうまく共有していくと、次の担い手に伝えていけるか。それは、ビジョンというのは非常にある意味抽象的になりつつあるんですが、少し具体的なイメージと、大きな社会認識みたいなものがきちんとあったから、ひょっとするとその北原先生たちが書かれたものがうまく引き継がれた可能性もあるので。なので、昔から引き継ぐべきヒントは、何があったかということと同時に、なぜうまく引き継がれたかということが、これから考えていく上で大きなヒントになるのかなという気がしています。それは、多分メモリアル拠点における過去の被害みたいなもので、引き継ぐためには何があったかということと同時に、どうするとそれは引き継いでいけるかというヒントもひょっとするとそこにあるのかなというふうに思いました。

協働のプロセスの重要性というのを齋藤さんすごく感じていて、その上でブリッジの役割や共創をともにつくっていくってほしいということであろう。協働に、コ・クリエイションまで含めて協働だと捉えている方もいる。先ほど鈴木さんが話したように、言葉の理解の仕方は皆さんちょっとずつ違うのかなと感じた。

わかりやすい協働のビジョンを言葉にして、共感をまた紡いでいくことが、これからの協働・公共の課題なのかなと感じた。

では、鈴木さんが考える、これからの協働・公共はどうでしょう。

鈴木祐：

既に多様性やマルチステークホルダーの様な話が出ており、仙台における今後の市民協働という文脈において、必要とする資源の内訳や量という視点もあれば、官民でどのような資金の種類を調達できるかという両方の視点が必要であると考えている。例えば、従来の地方交付税や中央官庁からの財源もあれば、今後増えるかどうかという視点に立てば、公助だけに頼らない共助の部分の拡充も必要であり、地域の中で民の活用もあるでしょう。もっと

路であります。

もう言いたいことは全部言われたという感じがしますが、基本構想では、敷地内にとどまる話ではなくて、もっと広い、エリアとしてどう考えるのかという議論がもう少しあったのではないかなと思ったのですが、やはり基本計画になると敷地にとどまっていて、少し残念だなと思っているところが1点です。

配置のことを言い出す、エリアのビジョンや市民広場との関係性、表小路のことも含める話になってくると思うのですが、ここは市役所の敷地ですとか、ここは市民広場の敷地ですとか、ここは道路ですとかの管理区分を極力曖昧にしてほしいと思っています。ほんとうに細かい話なのですが、市役所の東側は、東二番丁の歩道の部分は国交省が持っていて、実は市役所のところも同じ体（しつらえ）でやっていたのが、1年か2年ぐらい前に、国交省のほう予算をとれたのでしょね、全部変えたのですよね。そうした途端に境界が明確になったのですよね。その辺の、細かいのですが結構そういうことは、境界を曖昧にして管理区分を明確にしないでほしいと思っています。使っている側からすると管理区分は実はどうでもいい話なので、何となくここは市役所の敷地ですっていうようなことを極力主張しない形がよいのかなと

もう1つは、例えば増田先生がおっしゃっていた、市庁舎なりの公物管理を全体で考えることについてです。ひょっとすると、公と私の役割のあり方みたいなものに言及していくことが、減らし方とか、優先順位をつけていくという話があったと思いますので、そのあたりのところを。現状の仙台の課題が何で、市庁舎の建て替えのときにどういったことの議論が今、委員会の中での議論もそうかもしれませんし、増田先生のご指摘もあるかと思いますが、そこも後でお伺いできればなと思っています。

北原先生は、総括的に定禅寺を見られていて、逆に引き継がれなかったことがたくさんあると思うんですけども、そのあたりの話と。もう1つは、さっきお話があったトランジットモールというのが当初の構想としてあったと思うんですが、そもそもなぜそれだったのか。これからのまちづくりを考える時に、なぜ歩く人にフォーカスを与えなきゃいけないのかというのが、時代がかなり変わってきた上でも共通していることが何かとか。それは、このあたりのビジョンを考えていく上で、1つポイントになるのかなと思ったので、少し周りのお話を聞いて考えるとところもあるかもしれませんが、ちょっとそこを言っていただけといういなと思

えば、民間財源がどういうふうにも共助や公共のところにも活用できるかも今後にも必要な視点になると考えている。

一つのシナリオとして公共財源が今後ふえないという仮定をすれば、議会や市役所の役割そのものが今後大きく変わっていくと考えている。従来、陳情や署名が地域を変える手段であり、対処をする役割としての行政があり、一時期は行政内に「すぐやる課」というような即応性や対処をする意識を明示した部局の設置もありました。市民やNPOセクターの役割や価値も、制度を変えるという視点で政策提言を重視することもあるでしょうが、より主体的にコトを起すことも求められるでしょう。現実的にその大きな国の制度の成り立ちを見ていくと、介護保険の成立に10年～15年かかり、児童の虐待防止法に至っても、研究レポートによれば10年弱の時間がかかっています。国の制度をゼロから提案して我が地域の課題解決となるとこれは10年、15年ぐらいいは見ないといけないし、今後は制度ができたとしても予算措置がしっかりとつかさえて危ういという想定もありうると考えている。一方で、昨年、市民活動に携わって20年目を迎えた。この間、

思っていました。

先程の久保田さんの話、表と裏がないというか、どこも裏であり、どこも表かもしれないというようなことだとか、何かその辺はありますし、率直に駐車場150台ほんとうにつくるのですか、というのがあります。これだけ公共交通使え、使えと言っているのに、ああ、つくっちゃうんだと残念に思います。それで、駐車場の配置が多分困っていて、裏ができてしまっているのだろうなと思っているので。もう、つくらないならつくらないって決めてしまって、皆さん、コインパーキングにとめてくださいって。また駐車場需要が大変なことになりますけど。何かそのぐらいい話を、10年先を考えたときには、してもよいのではないかと。現状がどうというよりはもう、市役所は駐車場はありません、皆さん、車で来ないでください、と言ってしまったほうがよいのではないのでしょうか。そうすると、もっと自由度が高まるかなと率直に思ったところでした。

あと、できるまで最短で多分10年って考えたときに、ほんと今の段階で10年先のことをどこまで決めるのかというのは、基本計画のこの委員会に委ねるのか、それこそもう少し設計の人に委ねるのか。どこかの段階で建築は入るので、どこかの段階かで決めな

いました。

桂先生には、メディアテークを構想したことだけじゃなくて、そこから、20数年経っていて、これから仙台市は音楽ホールの検討とかもあるんですが。一方で、建て替えられる文化施設もあつたり。そもそも、施設じゃなくて、活動をどうやって生み出そうかということの議論をやりつつあるんですけども、その社会状況がこう変化していく上で、ここから先の20年、30年をどう考えていくのかということ。要するに、建物が建つと当然50年、60年経っちゃうので、それは市役所と同時に他のメモリアル施設もそうなんですけれども、そのときに文化的アクティビティを引き継いでいったり、そういった場を考えていったり。仮に、市庁舎ができて、1階にそういったアクティビティの場所ができて、やっぱり古くなっちゃうので、何かそれをうまく、古くはなるけど使い続けられるためのヒントみたいなものが、今桂先生が関わられているプロジェクトでも構いませんし、何かこういった見方があるんじゃないかと。できれば、それが仙台というローカルな条件を落としたときに、どういう視点がありそうかということについて、少し言っていただけといういなと思

多様性や参加あるいは当事者が集まってそこで何か発信をしていくということは、随分取り組みとしては進んだと思うが、一方で、行政や地域の公共という部分を主語に考えた場合には、NPOの力不足はまだまだ否めない。内閣府の調査でも、半数は1千万円以下、5千万円以上は2割弱という状態は、地域の課題解決そのものを担うものにはなっていない。規模だけが重要なのではなく、多様性や当事者性や非営利性の重視も価値があるけれど、企業等の事業性が低いために参入がなく、行政が公共事業として取り組む多数派の意見が無いものがどんどん着目されず支援されない時代が来ると考えており、共助をどうしていくかということころを考えれば、つくづく誰がどのような財源でどういうふうにも動くかが問われると思う。

行政と市民活動、学術、そして産業も、個々で「もっと頑張る」のも一つの価値ではあるが、仙台が全国一協働の進んでいる街を自称するのもいいだろう。

仙台圏には13もの大学があり、人口も108万人、京都と並ぶぐらい大学生の率も高い。そういう資源が、地域外から5割ぐら

ればいけないのですが、その10年先というものをどう今の状況で見ると、少し柔軟に対応できるようなバッファがこの計画の中にも盛り込まれてくるといいのかなと思ったところでした。

安田さんの問いに全然答えていないかもしれませんが、以上でございます。

安田：

ありがとうございます。

今、ご指摘があった管理区分を曖昧にするというのは、多分、誰かが決意すればできてしまうような話のような気がしますけど、実際に実現するというのは大変だと思いますが、ぜひそういうことで先進性がある市役所というものが実現できれば、それこそ日本に誇れるようなものになっていくのかなとは思っています。

ちなみに、駐車場の話は私も一言あるのですが、後でやりたいたいと思います。

次の阿部さんも、同じくまちづくりとかそういった視点での専門家と言ってよいかと思うので、辛口かとは思いますが、あらかじめ言っておきますが、ぜひ今回のこの検討委員会の流れ、それから第4回目までの落としどころとして阿部さんからご意見

Table A1

中心部他施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライズの構成を考える

Table A1

中心部他施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

ちょっと話を戻すと、まずはそのメモリアル施設に関して、引き継ぐ話ということを含めて、本江先生から非常にロジカルにご説明いただいたので。アウトラインはわかってきたと思うんですけども、そのあたりを少し。

もう1つは、海外でそういった震災のアーカイブって、どうやって引き継ぐ話をされていて、国によってかなり違いますし、被害も違うとは思いますが、という部分と。今の仙台市で行われているメモリアル拠点のお話、特に中心部における部分について、何か少し補足があればと思います。

マリ：

災害のことを記録する施設をつくるということ自体は、全世界であちこちありますけれども、博物館的な施設が多いので、多分これから仙台市がつくるものが、もうちょっといろんな意味で、博物館もある、展示もあるかもしれないですけども、本当に被災地とつながることとかで、その窓口の役割になれるかなと思います。

今の質問とちょっと違うのかもしれないですけども、海外の

スペース的なことを考えると、ヨーロッパの町は、行政の建物、パレスなどの目の前に住民が集まる場所という基本的なデザインがありますので、アメリカはあるところにはあるんですけども、そういう都市の美しさは多分ヨーロッパのほうがまだまだ、いろんなことが勉強できると思います。海外のイメージもつながるといことで、二郷さんが提案したものが私もすごくいいと思います。1階がオープンで、いろんな人がいろんな方法でつながること、発信の広場という名前をおっしゃっていたんですけども、それもすばらしいと思います。多分まちのステージとか、まちの縁側とか、そういうイベントの場になることもありますけれど、災害博物館ということを考えて、津波があったインドネシアのアチェの博物館も、展示のことは、何年か経って展示の専門家がやってきて、少しずつ展示の施設とか進んでいるんです。本当に週末に住民が来て楽しんだり、空間の中に入って時間を過ごしやすく、家族の遊び場があったり、みんな大人気です。建物そのものも魅力的で、建物を見に来たいという価値もありますから、いろんな意味を深めていくのだろうと思います。建築にも魅力があって、おもしろいものがあれば来るだろう、いろんな人を呼び込んでい

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

い来て、地域外にまた5割ぐらい出ていく状況で考えると、非常に大きなロスをしていると外から見ていると思う。そういう意味では、縦割りの状況が結果的に課題を温存し機会を活かしきれていない感も否めず、意図を持ってセクターを超えたプロジェクトを創出し、そういう触媒、その場なり、人の専門性なり、そういうところは非常に必要だと感じています。私の立場からいうと、そこにどういった財源がつけられるのかということが大きい。

とはいえ、財源ありきで始めると、ほとんどの場合いいことはないと思うので、その地域の中で課題の共有や担い手自身による頑張りや周りを巻き込んでいくことをやりながら、最後に財源の組合せをどのようにするのか。そういう意味では、東北からの財源流出を非常に大きく懸念をしている。これは、民間財源が、死亡時の保険解約や預金解約という意味でいうと、25%以上が県外に流出しているという統計がある。宮城に限らず東北全体として、非常に流出が大きい。

一方で、様々な理由で個人資産を相続する近親者がおらず国に帰属する個人資産（相続人不存在という）も全国で500億円を超え、

この5年で1.5倍に増加をしている。

公共の交付税は減り民間の個人資産は地域外へ流出をする、既に七十七銀行や東邦銀行でも、預金の流出に具体的な手打ちを始めている。社会的投資と言われる新たな資金は、すぐ近くまで来て案件を探している。

NPOは一定の市民権を獲得しつつあるが、まだまだ担い手としての力不足や信頼感が高くはない。それは、情報公開だけでは担えるものではない。我々が先行投資的に資金を入れながら、行政は事業者あるいは研究者の皆さんとともに、市民活動ならではの取り組み、あるいは学術あるいは産業そのものの少し質を変えていく中で、その地域益を受け取る。多様性と連携・協働であり、森も海もあり、市街地も田畑もある豊かな仙台市だからこのビジョンを、これからつくっていくべきだと思う。つくるための材料は、ひよっとするとある程度そろっているのかなと感じている。ビジョンを改めてつくっていくのがポイントになるのではないと思う。

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカイライクの構成を考える

を伺いたいと思います。

阿部：

今ご紹介いただきました、何か辛口でという事ですが、仙台でまちづくりに40年以上かかっています。今日この場でこういう話をしていること、こういう場があるということが、とても大事だというふうに私はかねてから思っていました。それも、突然この場ができたわけではなく、やはり仙台の都心の歴史、人々の歴史、それが何十年という積み重ねの中で、こういう場があったらいいね、こういう場があったのだという、そこにかなり問題が潜んでいるのではないかと僕は思います。

それで、まちづくりという点で3つぐらいお話ししておこうかなと思います。1つは久保田さん、榊原さんがおっしゃいました、決める必要がないものは絶対決めないという視点がものすごく重要というふうに思います。大体失敗するのは、決めなくていいこと、取り返しのつかないことを決めてやってしまっ、大体失敗だという話になるわけです。そういう意味では、やはり勇気を持って決めないということを大原則にしていく、というぐらいの覚悟でやるべきだと思います。

それからまちづくりという点では、やはり定禅寺通りの持つポテンシャルです。やはり市役所だけでも考えられないという意味で、定禅寺通り全体の地域マネジメントというか、その中に市役所をきっちり位置づけるというか、この議論がまだまだ足りないなという感じがしています。ですからこの資料を見ていますと、結局一般的な話になって、勾当台エリアイコール賑わいスペースみたいな話になっています。全部賑わいではないと思うのです。やはり定禅寺通りの隅々までその場所の持つ顔というか、特性というか、それをしっかり育てていくということも含めて、みんなで確認する必要がある、ということを考えて、市役所の低層部というのはいと難しいと私は思っています。下手に決めてしまうと、結構スペースとして大きいので、とんでもないことになると思っています。ですから、できるだけこの場、マルチスペースというか、非常に多様な使い方ができるというか、汎用性の高い空間というか、そのように考えることが大事だろうと思います。

実際のところ、使うということに、時間軸があると思っています。成熟していくというか、使い方に。そこを見極めが大事です。ですから賑わいのイベントを入れるとか簡単に書いてありますが、そう簡単ではないと思っています。やはり一つ一つ、民間のいわ

こうというところに、災害復興に対するひとつの目的がある。答えになってないと思いますけれど、いいですか。

坂口：

ありがとうございます。ちょっと難しい問いで、申し訳ありません。本江先生、今のリズ先生のお話を引き継ぐ形でも構いませんし、本江先生は、オフィスの研究もされているので、人が場所をどう使っていくのかということにも関係があるのかもしれないんですけど。

本江：

僕も、先ほどからのメモリアルの話と、桂先生が言われた、役所にあんなばかでかいオフィスが要るのかと、あそこで何をするつもりかという話があると思います。

直接関連があると思うので申し上げますと、荒井駅に、3.11 メモリアル交流館というのがあります。これは、もともと専用につくられた建物ではなくて、当初は駅舎と一体で保育園と、市民センターという公民館みたいなスペースとして計画されていて、もう内

装もできていたんですよ。だけど、ここにそのメモリアル交流施設をつくろうということに、これはどういう経緯かは知りませんが、決まって、すでに内装を仕上げているけれど、一度も使っていないけれど壊していいですかとか言いながら、直して使って、メモリアル交流館を沿岸部につくりました。

1つのチャレンジは企画展示があることです。展示部門の中に、常設している震災前の暮らし、直後の混乱期があって、復興プロセスがこうなっていますよという大きい年表があります。これはオーソドックスなものなのですが、半分ぐらいのスペースは企画展示室なんですよ。美術館だと当たり前だけど、メモリアル施設で企画展示室があるというのはあんまりないはずで。企画展示室をつくって、その隣にさらにその地域の人たちに使ってもらえる、簡単に言うんですけど貸し会議室で、無料で使ってもらえるスペースを取っています。かつ、運営部門にその企画展を回す人材がいなくてできないから、直営で店番2人が市から来ましたというのじゃだめだと、ちゃんと企画展を年に数本回せる体制にしないとだめです。ねという話をして、同じ事業団の人たちに入ってもらって、交流館を運営しています。

Table A1

中心部他施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

遠藤：

話の中で、意図を持ってセクターを超えるという言葉がとてもピンときた。財源もふえるということは余り考えられない。資源が活かされずに流出していることを、認識しているのだろうかも含め、新たなお金の回し方、循環のさせ方も勉強不足、それをもっと学んだり考えたりアクションしたりする必要があると感じた。

柳井：

来年からゆっくりと仙台の人口は衰退に入る。もう一つは、2025年くらいよいよ東京の人口も減り始める。つまり、今までのように「東京と連携」を強めて、そのプラスの影響で成長していく戦略は、修正を迫られると考える。

建設業について、震災前と震災後について、GDPベースで比較すると2,000億円前後から5,500億円前後まで増えてきた。建設「特需」で経済の下支えを行ってきたのである。しかし、これがいよいよ減少していく。その年々の差額2,500億円分をどういった形で埋めていくかが課題となっている。これは議論になっ

ていくだろう。長期総合計画や新しい仙台の2030新経済政策も、その危機感が背景にあると考える。

現実のハード面に目を転じると、老朽化マンションが問題になってきている。最近では、中心市街地に築50年前後のマンションも多数出てきた。人口減少下では、やがて空き家問題につながっていく。空き家にならなくても維持管理も厳しくなってくる。

商業も、商圈調査を見ると、中心市街地はこの10年ぐらい傾向的に売り上げを減らしてきている。その一つの象徴が、さくら野百貨店の倒産である。もう今までの成長戦略は終わりを告げる。やがて税収が上がらなくなると仙台市の予算は徐々にタイトになって、市民協働についても、「去年までは1,000万円出ていたものが、今年は300万円」とか、場合によっては集約ということが出てくる。

また、行政には、縦割り行政による組織横断的な取り組みに弱い（注：施策の合わせ技に弱い）問題がある。実際に活動する市民の側も、ノウハウはあるけれどもお金がないことが多い。

行政にも思惑があり、NPO法人や市民にも思惑がある。例えば

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

ゆる経営的な要素を入れるのでしたら、それなりのマネジメントも必要ですし、マーケティングも必要です。それは時間をかけていろんなトランザクションをやっていくようなことも含めて、そういう場に位置づけていくという、場所の持っている力の使い方です。

それから都心全体でやはり考えるのは、駅前と定禅寺通りと、そのポテンシャルで考えていく必要があると思っています。それは何かと話していると少し長くなりますので後にします。

もう一つ言っておきたいのは、やはり徹底したプロセス・プランニングといえますか、この話に尽きるのではないかと。要するに、決めないという話もプロセス・プランニングの1つなのです。最近ようやく、70過ぎてわかったのですが、アレグザンダーのプロセス・プランニング、結局、どんな本を読んでも彼が何を言っているのかわからないのです。わかる人はいると思うのですが、ようやくわかった事は、決めないということと、あと永遠に問い続けること。要するに、市役所の広場とは何かです、単純なことを言えば、それは何かということをとにかく問い続けるということが、まさにプロセス・プランニングの神髄ではないかということです。仕事をやめてからわかったような感じです。そんなことで、

やはり場所の持つ意味と、プロセスをきっちり踏まえるということをやっていたらいいと思います。

それぞれのところで非常に真摯な議論をされているので、とても安心しております。

安田：

ありがとうございます。

渡邊さん達三方からは、決めないことの重大さというようなこととか、どういうふうに進めないことを決めるのかというようなお話がありました。そういう匙加減というか、それが多分この基本計画のみそであって、これがさらに次のプロセスにうまく移行できる鍵になりそうだということは、何となくわかってきた感じがいたします。

それともう一つ、定禅寺通りという視点を阿部さんのほうからいただきました。これはもちろん前から言われているお話ですけども、一番町を考えたときに、何かゴールというか、突き当たりというか、そういうイメージがあるかと思っています。言葉を変えれば玄関口と言ってしまってもいいかもしれませんが、定禅寺通りの視点からすると、やはりどちらかという通り道という

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライズの構成を考える

Table A1

中心部施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

企画展、実際に2016年にオープンしてから年に3つか4つずつやっているんですね。そうすると、もう10本か15本ぐらいいやっています。企画展は、そのキュレーターになる人たちが地域の人たちを回って、もともとその辺に住んでいた人たちが、津波でなくなっちゃった集落でどんな暮らしがあったかという展覧会をやったり、あるいは、直後はなかなか口にすることができなかったけれども、消防署の人たちとか、あるいはついこの間までやっていたのは下水処理場の再建プロセスですね。そういう市の中の人でインフラを担当していると動いて当たり前なので、ダメージを食らって大変でしたという話はなかなかできずにいたのが、やっとならなくなったので、その展示をしています。それも、下水処理場の人に展覧会をやると言っても、まあ無理なので、どうすれば展覧会に持っていけるかということ进行交流館の人たちがサポートして、もちろん一次資料は提供してもらいながら展覧会を構成してインタビュー映像を作ったりしている。そういう企画展のスペースが必要で、継続的な企画展をやる必要がある。何でそれが必要かという、災害で何があったのかを我々はまだ知らない。だから、企画展を継続的にやることで、何を伝えて

いけば、我々は震災についての記憶を将来に渡すことができるのかという、そういう探索自体をやらなくちゃいけない。市民の皆さんがそれぞれにやっておられることをちゃんとすくってまとめていくことが必要だということで、企画展示室をつかって、かつそれを回せる体制にさせていただいたということがあります。

これは、自信のなさや謙虚さの両方があるんだけど、検討委員会で語るべきことはこういうことで、こういう展示があればいいじゃんと言って、安定した展示室をつくることもできたとは思いますが、そうしないで。まだわかんないからいろんなことをやるんですというスペースを取ったというのが、画期的なところ。でも、うまく回せない弱点にもなる。特に見に来た人が何か満足しないという弱点があって、これっぽっちなのと言われるんです。でも、何があればちゃんとあの震災を捉えることができるのか、俺たちにもまだわからないんですという率直なステートメントにもなっているというのが半分言い訳、だけど半分本気でそう思って、蓄積をしているところです。

そこから、メモリアルはそういうもんですよという話で、もう1つ、その市役所のオフィスの役割の話でいうと、ルーチンワーク

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

行政側は予算がないので節約したい、NPOに肩がわりして欲しい。あるいは課題をかわりに見つけて欲しい。場合によっては市民との折衝までお願いしたいという思惑がある。NPOや市民側は、予算があれば、時間はあるしノウハウを持っている。市民同士をもつなげる力もある。

その矛盾を空間的に解決する一つとして、市役所の建て替えによる「場の確保」であると私は考えている。年々の支援に関する予算のうち、場所代を行政が負担することで、歳出を軽くし、NPOや市民団体が事務所の悩みや家賃負担のコストを軽くすることができる。人が集まることで、新たな取り組みや発表の機会も期待できるなど、シナジー効果も期待できる。

遠藤：

仙台が、来年から経済的に衰退期に入るのがわかりやすくなるということだが、そういった経済観点も含め、市民や企業及びNPOもそこをどう担っていきけるか。

マリアージュを担う場が、ある意味、この後、皆さんにまたご意

見いただく市役所の低層部分ということになってくるのではないかな。その部分については後半で発想をもらいたいと思う。

それでは、一緒に進行を担当する小島さんは元仙台市役所の方である。皆さんの意見を聞いて、協働・公共のこれからのあり方もお願いしたい。

小島：

感想でしかないが、市役所に30数年勤め、菅野さんの話は初めて聞いた。何か褒められているようで面映い感じだ。確かに島野市長の時に市役所に入り、石井さんの時逮捕されて傾いて、藤井さんの時に「市民協働元年」だと言ってきた。

行政は、トップの意向に従って運営されているということと、一方において、社会的にまだまだ未熟なときには国の政策を実現していくところがある。補助金の選択は行政側にあるが、メニューは国が用意している。全部縦割りになっている。その延長で一生懸命やっている時代はよかったが、政策横断とか格好いい言葉もあるが、実際には一つのセクションで課題が解決できてい

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカイライターの構成を考える

か、広場も含めれば定禅寺通りの一角を担う一街区であるというような考え方も当然できるかと思います。そのときに定禅寺通りの性格を考えると、賑わえばいいというわけでもないというような視点も重要なのではないかと思います。

それでは、少し視点が変わるかもしれませんが、市役所を担う、担ってきた先輩といいますが、桂さんから、今回のこういうプロセスも含めてご意見を伺えればと思います。

桂：

横浜市役所都市デザイン室の桂と申します。私も、もともとはずっと建築の設計をやっていたのですが、ひょんなことから横浜市役所に入ってまちづくりに携わり、今、まさに横浜は市役所を建て替えています。横浜の場合は敷地を変えて、155メートルの高層を建てているのですが、似たような議論の中で、都市デザインの視点から新市庁舎のコンセプトブックというものを発注のタイミングにあわせてつくりました。それがご縁で前回のラウンドテーブルにも呼んでいただいて、今回もお声がけをいただいています。

先輩というより、ただ単純に先に行っているというだけで、プロセスは圧倒的に仙台のほうが開かれているというのがいまのとこ

ろの私の印象です。前回にも申し上げたのですが、私たちがこういった開かれた場をつくったのは基本設計がほぼほぼ終わってからです。ですから、建物の設計がほぼ固まりつつあるときに、やっと市民の方たちから意見を聞いたりできたというのが現状だったので、そういった意味では、このラウンドテーブル、しかも検討委員会とのひも付き方とか、専門家の方たちとの関係のつくり方とかが非常にうまくできているということも含めて、羨ましいなというのが感想になります。

今日見せていただいた資料も、漏れがないという感じです。言わなくてはいけないところはきちんと押さえていて、しかも、かくあってほしいという形におさまっている。よくも悪くもというのが多分今の皆さんのご意見なのかなとは思っていますが、そこはやはりよくも悪くものところはあるかなと思います。確かに今の敷地の読み込みの話なんか、外からの目線ですが、駅からは、アーケードをずっと通っていった最後、少し手前で歩行者空間としては切れて、定禅寺通りを越えないと行けないところがあって、その後、市民広場がある。市役所ともう一步距離がある訳ですが、本当に市役所の低層部について、通り抜けられないといけないのか、例えばそういうことです。どちらがいいかと言われたら、それは通

で対応できるサービスについてはどんどん機械化されるに決まっています、それは末端の窓口、区役所でいいです、コンビニでいいです、スマホで済みます、みたいなことになっていく。そうするとどんどん人が減っていくはずなんですけど、その分メモリアル交流館の企画展示室でやっているみたいな、市民とともによい都市であるためには何をしたらいいのかを、中の人と、その周りにいる人やみんなで作業をしながらプロジェクトをつくっていくためのスペースが必要で、それはどこでやるんですかといったら、市役所でやるんだらうなと思います。なので、ボリュームがあって、今仕方なくルーチンワークをやっている部分が、どんどん圧縮されるなと思いますが、その分で市役所の役割がトータルで減るのかということ、そういう思想もあるなと思いますが、能力のある人たちがいる市役所にたくさんの地域の人たちが来て、仙台が都市としてどういうことをすればいいのかというプロジェクトワークをするためのスペースは必要で、それには専門的な知識や予算や法的なことや技術だとか、内外の人が集まりながらやるということが要るんだらうなと思います。

なので、メモリアル交流館に半分企画展スペースがあるというの

ない、できなくなってきているというのが今の行政の実態だ。まちづくりをずっとやってきたが、仙台は民間の開発の力を活かしながら、間延びした市街地をつくってしまった。郊外住宅地、住みやすいということはひところ言われた。まちづくりは100ヘクタールぐらいを一つのワンパッケージとして、社会資本がストックされたが、人口減少や少子化と、社会資本が歯抜け状態になるとコミュニティが崩れてしまう。

ハード系の担当部署が、コミュニティの衰退や福祉や子育てなどにぶち当たると当然何もできない。実は奥山市長時代に課部局を集めて情報の共有化しようと、その中で、あるエリアは何の課題が大きいということをお互い確認しながら、健康福祉局がちょっと力を出してくれとか、やりましたけれども。行政側も隘路に入ってしまったののだろうか。一つのセクションでは解決できないと菅原さんが言っていたが、市民と接していく中で、それをどうするか行政側も課題である。皆さんも、そういう意味では、一つの部局ではなかなか解決できない、総合的なサポートが必要だということが一つのキーワードになると思っている。それを市民

は、ある種の公共施設のひな形で、市役所も大きいんだけど、半分ぐらいは何だかわからないことをやるために使う。お金のことを言い出すと、どの程度やるのかということはあるが、外側はあんまり変わらないけど、内部でそのルーチンワークを淡々とやるためのセクションは減るけど、その分何をしたらいいかまだわからないでいることをやるための組織やスペースが要るようになるんだらうなと思います。それで、その時には市民の役割は大きいから、1階部分にみんなが入ってこれて、仙台の歴史なり文化なりのことが理解できて、やるべきことはこれだとわかる、何かそういう関連は必要かなと思うところですね。ちょっと抽象的で、数字がないので粗っぽいですけど、役割はそういうことかなと思いました。

坂口：
ありがとうございました。何をもって担保するかという話ですよね。つまり、先程のエビデンスがない中で役所の役割は変わってくるんだという話と同じように、震災の被害も、これで被害だということはなかなか言いにくいけれども、そのエビデンスを

協働というよりも、総合的な調整を新しい庁舎の中でどう具現化していくかが、本日のテーマの一つ、論点の整理だと感じた。

遠藤：
皆さんの意見聞いて、これからの協働や公共のあり方で追加して話したいことがあればお願いしたい。

河村：
最後の話で2点ある。
1点は、法律に基づいて組織ができているので、そうすると、そこも理解していただく必要があると思う。先ほど言ったように、全部をポリシーオリエンテッドで解決するのはなかなか難しい。それを前提として市民も行政も相互理解が必要だ。また議会の話も出てきたが、議会もどちらかというポリシーオリエンテッドになりやすいため、共通理解を増やしていくことは必要だということが、話を聞いていて思った。
もう1点が、先ほど圏内に多くの大学があるということだが、人

Table A1

中心部他施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える



Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

Table A1

中心部地施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

ていくことによって、結果的に新しいエビデンスを発掘したりということですね。メディアテークも、ある意味空間の自由度を担保しているところがある。それはシチュエーションとか用途によって違うということなんですかね。ありがとうございました。

桂先生、今の本江先生のコメントに対して、何かあればよろしくお願いします。

桂：

駅の交流施設は、昨年の夏に見せていただいて、思った以上にきれいにまとまった感じで、ああそうなのかと思いました。普通は公民館のしょぼい展示施設みたいになりがちなんですけど、思った以上にきれいに整理されていた。ただ、今本江先生がおっしゃった意味での継続的なプログラムという意味では、施設の問題と同時にディレクションの問題が非常に大きくて。実は、僕は最近いろんなところで、台湾がいろんなところで成功しているんですけど、レジデンスのプログラムをうまく応用すると、外からの視点で地元の人たちといろんなことができる。つまり、外から来た人は、地元の人たちに対して非常に謙虚に話を聞く、一生懸命話を

を聞く。仙台メディアテークの甲斐賢治が、僕の友人の川俣正に貞山運河に橋を架けるといって荒唐無稽なことをやらせていますけど、あの荒唐無稽なプロジェクトの中に、川俣がここに来て何をするかというと、人の話をよく聞くわけですね、彼はね。

世界中でいろんなプロジェクトをやっていて、何をまず成功の秘訣としているかということ、そこの場所に行ってもまず人と話をさせるんです。つまり、僕は何が言いたいかというと、このレジデンスプログラム、つまりよそから人が来て、よく人と話をするという機会、このチャンスがなかなか、その地元例えばキュレーターとかがいても、なかなか難しいんですね。それよりも、一時的なプロジェクトで、ここからここまでの期間に自分はこういうことをやりたいから、あなたたち、私たちと話して1つの何かを達成しませんかということのほうが、よっぽど情報が圧縮されて、伝わる。伝わり方も伝わりやすいということがあるので、僕はこれは、最近いろんなところで建物を建てるよりも、まずは人を呼んで、アーティスト・イン・レジデンスはそうですね。それから、アーティスト・イン・レジデンスだけじゃなくて、台湾はリサーチャーもレジデンスプログラムを多くつくっているんです。それによって、

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

口が増えているところは高等教育機関があって、そこからイノベティブで話が出て残っていくところに、どうしてもアジア的な都市発展の仕方がある。そのときに、大学がどれだけ行政に近いのかというのを可視化できるという。記者クラブはあるが、大学と行政を結びつけている場が、市役所の話になるが近隣にない。文部科学省の仕組みは、郊外へどんどん大学を転出させ、農学部が山へ来てしまって、むしろ役所からの距離を遠ざけている実態もある。

大学には知識を地域社会に還元する部分と先端の研究をやる部分を両立させようとするときに、行政と包括協定、そのつなぐ接点は、希薄化していると思う。

東京の駅に地方大学の東京オフィスがある。韓国人が言っていたが、「大学が地方に点在しているいいよね」と。韓国では「Go ソウル」であり、「Goto」ではない、都市の力の差となつてあらわれていると考えると、研究者の窓口や仲介地点で、街中の役所棟の近くにあるのかということも気になるところだ。

遠藤：

ありがとうございます。先生たちもちろん大学の皆さんも、ある意味地域の大事な資源だが、そこが有機的につながりながらこの公共をつくっていくのかということでしょうか。

齋藤：

今のお話に少しつけ足したいことがある。ヘルシンキ市がヘルシンキ大学に委託をして、シンク・コーナーという場を運営している。大学施設の一角に市民が自由に使えるカフェとコワーキングスペースがあって、大学生が産学連携のコーディネートをしている。だから、大学の研究室は研究に集中し、若い大学生が市民目線で、「未来をどうしていきたいのか」ということからテーマをつくり、行政と企業と連携してプロジェクトを動かしている。そこが誰でも市民が入れるカフェスペースが中心になっているので、何かそのようなイメージが今の話を聞いて近いと思った。

遠藤：

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物の構成を考える

り抜けられたほうが良いと、第一印象としては思いますが、本当にそうなのか？と踏みとどまって考えることも大事かと思いました。

また、先ほどの話でとがった部分がないというようなご意見があったと思いますが、とがった部分をつくろうと思うと、裏と表をつくるといって、メリハリをつくらないといけない部分が出てくると思います。何かを捨てなければいけないと思うのですが、今のところ全部拾っているみたいな感じになっているところがある。先ほどの話で決めないというのがありますが、役所側で決めたいところ、設計者に委ねないほうが良いところというの明確にあるので、その取舍選択が、今後残りの3回の検討委員会とか、今後行われるだろうラウンドテーブルを通じてできていくと、いいなと思いました。

あと、職員の利便性の話とかも含めて議論されているというのが、本当に先行的だと思いました。まさに我々、引越しの話とかしているのですが、荷物半分にしるとか言われていて、みんなのテンションがかなり下がっています。既に職員のことも考えていて、しかもそれをオープンに議論しているのはある意味、頑張っているし、なかなかとがった話をしているとも思います。

安田：

続けていきましょう。

桂：

それから市役所の位置づけが、大事だと思います。前回もその話をしたのですが、横浜市の場合、低層部を開かれた施設にしているときに、「庁舎」という位置づけのままなのか、役所の中で「公の施設」という、公民館みたいに市民に開くこと自体が目的の位置付けにするかで、自由度が全然違ってきます。テクニカルなところで、開くことのできるようなしつらえに先に計画がなっていると、後から手を入れようとしても実はできなかった、ということもあるので、そういった議論もされるとよりよいのではないかと考えています。

取舍選択、役所のほうで決めるべきところ、決めないほうが良いところ、後に委ねたほうが良いところという取舍選択もあると思いますし、裏表つくったほうが良いのか、つくらないほうが良いのかとか、そういったところも議論を深めていく中で、逆にこういった開かれた場所での議論をしていけば、ある程度の納得感

研究者とか、それからジャーナリストもやっています。そういう他者の視点で、そのローカルの人たちの話を聞き出す。それから、それをうまく情報として圧縮して、人に伝える伝え方を、アーティストならアーティスト、ジャーナリストならジャーナリスト、リサーチャーならリサーチャーの視点で情報をコンパクトにまとめて、メッセージとして出していくというプログラムを、いろんなところでやっています。

これは、そんなにお金がかからないんですよ。建物を建てたり、人をずっと雇ったりするよりも、はるかにお金はかからない。それと、地元に住むことになりまますから、レジデンスというものを考える。要するに、そこに人がいるということを考えるチャンスにもなるので、僕は、川俣が貞山運河周辺でやっているようなことを、もっといろんなところで広げていくと、わざわざ市が企画して大上段に構えなくても、やってきた人が勝手にやってくれるということが、自動的にやってくれればいいと思います。僕は、仙台城もそういうふうに、人の視点で、いろんな研究者の視点とかを入れて、歴史的なものも含めて、もう少しそういうことでプログラムが柔軟に拡張していくと、いろんな人の意見が入って、まあじゃあこれは

そうすると、コーディネーター的な役割を、大学や学生さんが担うということも可能だということであろうか。

菅野：

歴史的には何があったかという話を最後この分野で置いていこうかなと思うが、実はかなり早目に自治体シンクタンクを仙台市は設置した。最初は仙台都市科学研究会という形で、東北大学関係の学者と、仙台市の局長級であるとか、そういう人たちが構成メンバーになりながら、割と若い職員さんの育成の意味も含めて、最新の都市課題なんかを研究していき政策立案していった。石井市長の時に潰されて、藤井市長の時に仙台SURFができる。その時に、シンクタンクに市民という概念が入ってきて、市民研究員制度というのができる。そのため、実はアカデミアと職員だけではなく、それ以外の市民運動の人たちもここに入っていきというのがあったが、潰されてしまった。

遠藤：

というか理解を得られながら結論に達せると思います。そこを閉じた中でやると、やっぱり後で何なのだからこれは、という話になると思うので、開かれているというのはすごく大事で、そういった意味でも羨ましいなと最初の話に戻るのですが、そう思っています。

安田：

ありがとうございます。
決めること、決めないこと、まさに今回の基本計画の特に検討委員会にとってはこの辺がすごく重要なところだと思います。もちろん市役所のほうでもその辺の判断をこれからきっちりとしていかなければいけないという立場だと思います。

もう一つ、市民に開かれるといった場合の位置づけのお話もいただきました。この辺が今から間に合う話なのか、私はわかりませんが、市民に開かれるということと市役所、あるいは公民館の位置づけ、それ以外にまた選択肢がひよっとしたらあるのかもしれませんが。これは前に、室長もおっしゃっていましたが、広場をどの部門が管理していくかというような話ともつながっていくことだと思います。榎原さんのご指摘もあつたとおり、管理区

やりましょうかという機運も高まっていくんじゃないかなという気がします。なので、それがまず前半の分。

それから、後半の分。オフィスのあり方というのは、これは公共だけじゃなくて民間も同じように、ターニングポイントを迎えていると思うんですね。オフィスの話は、サービスのところと、ルーチンのところ。ルーチンというより、プロジェクトベース、タスクフォース的になっていくというお話をされていましたが。僕は、もう1つ市役所の側面として、議会という非常に特殊な、特殊というよりも当たり前なんですけれど、シティホールの部分の重要な役割を担っているのは、市議会ですね。議会を開催するために市役所の人たちは、目の前にいて言いにくいですけど、どれだけオーバーワークになっているかというね。僕は、その市議会のあり方も変えられるようなアーキタイプとか、それからプランであってほしいなという気がするんですよ。

例えばどうなのかというと、議会がもうちょっとスペクタクルになると。要するに、今、どこのシティホールも、議会自体が伏魔殿になっているんですよ。つまり、傍聴して、かなり形式的な手続をとらないと見えなくなっている。それから、ケーブルテレ

では、論点2のほうに移っていききたいと思う。

今の市民協働や公共であつたらいいのかということ、かなり資源もネットワークも考え方もいろいろな多様なところを出してもらったので、それを踏まえて今度は庁舎、この市役所の庁舎のところ少し話を移していきたいと思う。

本日の冒頭で話したように、低層階は市民利用ができるように考えているが、新しい市役所に協働の場とか公共を話し合う場とか、あとは市民協働の歴史、歴史もつなげなければ途絶えてしまうので、市民が主役のまちづくりが、低層階を含めて、どんなものがいいのか、庁舎建設の思いを寄せながらアイデアや意見をもらいたいと思う。

鈴木さんお願いします。

鈴木祐：

震災に関する進捗みたいなものが、いろいろなメディアで取り上げられるけれども、論点2にあるような公共について話し合う場において、基本的な定量的なデータみたいなものは既に行政や大

分をやめてはと。やめるわけにいかないが、曖昧にしていくというようなこととも繋がっていく話だと思います。今から議論ができるというのは、そういう意味では幸せなことかもしれませんので、ぜひ成し遂げていきたいというような内容かと思っています。基本計画検討委員会についてさまざまなご意見を伺いましたけれども、伊藤さんのほうから、直接ご担当いただいているというような立場も含めまして、今の意見について、そうはいつでもというようなお話もあるかと思いますが、ぜひお言葉をいただきたいと思っています。よろしくお願いたします。

伊藤：

久米設計の伊藤です。今、基本計画の策定支援業務という形で、庁舎建設の方々に対しての検討委員会の資料作成にかかわる支援をさせていただきます。

私も、当然設計という立場なので、先ほど来からいろいろな指摘もありましたことは理解できますが、まずこの基本計画策定業務というものは何かと言えば、やはり基本設計の与条件を策定することということだと思います。そういうふうに私も気持ちを切りかえて、設計という立場でありながらも、基本設計をする上での

Table A1

中心部他施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライズの構成を考える

Table A1

中心部施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

ビとかで中継とかもやっていますけれども、僕はもっともっと、例えば広場で、外で行われてもいいんじゃないかなという気がするぐらい、議会のあり方があまりにも世の中とかけ離れている。もう少し、あれがスペクタクルになると、あれを見に来る人たちとかがもうちょっと違って、要するに僕は投票率とかそういうことにも関わってくると思うんですよ。その市民意識みたいな、要するに政治的なポテンシャルみたいなものが、もうちょっと上がるような場になってほしいなという気がするんですね。

僕は、実は、メディアテークで、このプランのときに、ここで市議会をやったらどう？っていうことを言って、奥山さんに目を白黒されたんですけど。そのくらい僕が市役所で気になっているのは議会です。あの議会を中心に、いろんなルーチンが今でも渦巻いている、うごめいているはずなので。もちろん、入札のシステムとかそういうのも全部含めてですけども。だから議会っていうもののあり方、それから議会が出てくる情報、それからそこに入出入りする人たち、もちろんその議員とか、いわゆる党派性のある政治意識を持っている人たちということも含めて、もう少し集まってくる人たちのあり方を、もう少し透明にできるような建物

だったり。あと僕は、広場の役割が一番大きいと思っているんですよ。特に、シティホールみたいなものについては。僕は、もう超高層なんて最悪だと、横浜の超高層なんて最悪だと思っているんですけど。要するにここを見ると、市民広場があつてどうのこうのって、ちょっと邪魔のような書き方がされているんですけど。むしろ、僕は市民広場が真つさらに状態になるとどうなるのかなという、何もない中でいろんなことがそこで行われて、そこがもっと本当の意味での公開空地になって。本来の意味での政治的な場所としての広場という意味合いも含めた、むしろ僕は建築からその外構としての広場を考えるんじゃないなくて、広場からボトムアップされるような市庁舎のあり方というのは考えていただけないものなのかなって。それは、僕は、やり方としては新しいような気がするんです。本江先生からの話を受けた提案ですけど。

本江：

議場が大事だというのは全く同感です。民主主義というプロジェクトのためのアリーナとして議会があつて、いろんな市民団体がそれぞれのプロジェクトを持ち込んで、その正当性を主張しながら

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

学や商工会議所等で保有しているものもあり、現場のNPO等にもデータがあり、それを積極的に活用すべきと考えている。

集約をする際には、2つの切り口が必要で、一つは専門家同士の議論にも堪えられるエビデンスとしての正確性をきちんと説明できることも必要なので、精緻さが求められる。一方で、市民の大半は分厚い論文を読めるわけではないので、データの適正さを担保しながら、誰が見ても、3分でわかるような簡素化されたものと両方必要だ。市民協働においても、現状認識や定量的なデータを話し合う双方が持っているうえでの議論になっていない点もあり、データを開かれた共通資源になっていることが更なる深い対話に至る必要な資源であり必須であると考えている。

遠藤：

市民利用の場所だから、そこに行けばそのデータが見られるとか説明が聞けるとか、現状を理解できる機能も必要だということだろう。

河村：

セコム研究所に頼まれ、共同研究でオープンデータの調査をしているが、行政のデータしかない。例えば、仙台市の歴史のは恐らくあるが、ばらばらに分散され、統合できない状態にあると言える。また、レプリカでもいいのだが、ワンストップで情報を集められるというもある。私も震災直後の世論調査のデータを持っているが、貸してと依頼は来ていない。それは、「仙台の持っているデータって何があるの」ということについて、実はその蓄積すらできていないのだと思う。

それで、「持っている」それさえあれば、多分検索かけてひっかかれば、何々先生が持っているってデータすらないので、あつてもそれに興味がなくて、要するにデータエビデンスでない人が多いので、皆さんがこういう調査があつたらいいよねとって、実は大学が持っていたとか、医療関係のデータもそうだし、かこつた言い方からすると、復興したときにデータが失われたのかもしれないから、きちんと仙台市自体が全部持っている、大学も含めて持っているデータというので出せるものってなんだろう、特

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物の構成を考える

与条件を確定していくということに気持ちを置いて業務をずっと支援をしているという状態です。

そうすると、設計の与条件って何かということだと思うのです。前回も含めて聞いていると、検討委員会の中でもそうなのですが、どうしても議論が、その与条件を越えたいいわゆる設計のゾーンであるはずの解決をするゾーンになってしまいがちです。何かしらまちづくりの視点から見たらどうすべきだという部分の解決策を与条件にするというのは、果たして正解なのかということと言うと、渡邊さんがおっしゃっていただいたように、やはりそこまでは決められないのではないのと。解決策とかそういうものは、設計者が独自に考えるものであって、幾らここでこういうガイドラインを引いたところで、それが本当に正解なのかということそうではないところがあるのです。

面積とか規模とか高さとかという定量的なものというのは、比較的与条件として明確に出しやすいですが、今回肝になっているまちづくりという視点における与条件というのは、なかなか定量的に出しづらい、言葉にしづらいところもあつて、その辺が一番混沌としているのかと思います。皆さんが、「いや、ちょっと待てよ」「ただ、四角い箱つくられては困るぞ」ということで、拳

を振り上げたものの、じゃあどこにおろせばいいのかということが見えないところだと思うのですが、その気持ちもわかります。でも、具体的にそのガイドラインを示したほうが本当にいいのかもしれない、ないほうがいいのではという気もしています。

せっかく専門家の方々がこうやっている以上、先ほど定禅寺通りの話もありましたし、やはりまちづくりという視点から、強いて言えば、公共建築をこれからつくる上での建ち方やあり方についての方向性みたいなものなど、与条件になるようなキーワードとありますが、そういうものを議論していくほうがよくて、形が右とか左とか、裏とか表とか、そういうことではないのではないかとはいっております。

安田：

ありがとうございます。

なかなか基本計画、どこまで決めるのかというのは、この後半にぜひお話ししていただくのかなと思っておりますが、では一体策定業務の中で何ができるのかというお話の中で、あり方、キーワードというような言葉がありました、やはり定量化が難しい内容については、どうしても文字とか言葉というような形でまとめて

ら予算を取り合う議論が行われているということが視覚化されると、その市民のプロジェクトとしての都市の運営ということが視覚化されると、それは大変すばらしいと思います。

桂：

ベルリンの国会議事堂が、やっぱり見下ろせるような感じになって、あれだけでももう全然違いますよね。あれをもっともっと僕は、ちょっと画期的なぐらい透明なものにするとうなるんだろうというふうに妄想はしていますけれども。

坂口：

ありがとうございました。

じゃあ、田邊さんにお聞きしたいんですけど。桂先生が、最初に、川俣さんがやられているプロジェクトというのは、他者がその場所を発見することによって、そこの人たちがある意味その良さに気づくと話されました。田邊さんもある意味外側から取材とか、仙台というまちとか、あるいは人とか活動を見られていると思うんですけども、1つは、これまでずっと見られてこられたので、

にそれが政策に使えるものはなんだろうというところはある。

あと一方で、仙台市が例えば、僕は選挙を研究しているが、選挙の調査の結果は、仙台市選管でデータをとっているが、「貸し出しただけなの」という話もあります。他人の持っているデータを。でも、よくオープンデータの議論の中で大事なことは、そういうデータを出してくれることで、市の政策の検証を市民もできるようになる。特に、さっき言ったように仙台市の場合だと高学歴者が多いが、大学生が、実習の形で政策データさえあれば、例えばこの福祉の政策はどうなのだろうみたいなのが検証できる。だから、人を育てるデータを置く場所は必要だと思う。

さらに、先ほどのことで追加して言うと、執行部と議会と市民が、情報を取りに来て環境をつくる大きな部屋があれば、議会の人々が来ているとか、そこで会った人が何か同じものを調べていたとか、先ほど出た出会いみたいな形ができると思う。

現在、県の情報公開室は地下にあって、湿度が多くムツとしたところで、奥からごそごとデータを取りに来ている。冊子があるから、コピーしていただきって、そっけない対応では、「仕方がな

いくのしかないのかなとは思いますが。ただ、そこで漏れてはいけないことというのは、ある程度基本計画の中に盛り込んでいかないといけないなどは個人的には思っています。

それでは、今まで配置を主にお願ひしましたけれども、配置というとうどうしてもまちづくりの話からになります。基本計画検討委員会の最終的な目標は、あくまでも基本計画をまとめ上げるということだと思いますので、そういう意味で小野田先生から、資料もありますのでご説明をいただければと思います。よろしくお願ひします。

小野田：

お疲れさまです。こういう議論が行われるのは非常にいいことだと思っておりますが、専門家としてちょっと辛口な意見を。

おいしい料理を食べるのに、おいしかったと議論しても全然おいしい料理にたどり着かないのと同じで、やはりおいしい料理を食べるには、ある専門家とある対価があって、それに対する準備が絶対必要です。何となくですが、議論はすごくしているけど、その準備がほとんどされていないので、多分、残念な結果になると思います。

他者から見ると、ここ30年ぐらいで変わってきている部分もいくつかあるのかなという部分。もう一方で、そういった他者を許容する空気というか、完全によそ者としてちょっとリジェクトするか、いや、いてもいいんだよというふうにするかによって、結果的にそのまちの深みみたいなものが変わってくる場所もあるのかなと。あるいは、話す機会みたいなものが、そもそも実はコストもかからないけれども、なかなか設けられていないということが、少し課題な気がします。

田邊：

私は、仙台のアイデンティティーをいつも考えたいと思っております。確かに東日本大震災というものが大きかったので、国際防災都市の指定を受けたりしましたから、防災というキーワードはすごく大きいと思います。でも、仙台というものを考えたときに、もう少し時間軸で考えていきたい。もちろん、今から未来へどんなことを標榜していくかということは、大きなことです。例えば、仙台市が「ひとが輝く杜の都」というテーマを出しております。杜の都仙台というのは、私たちにするともう常套句になっている

いから出してやっているぜ」と捉えかねられない。だから、3者が同じデータに基づいて分析でき、政策を考えられる場があってもいい。国立国会図書館は基本的にそういう話のスキームがあると思う。そういうところが仙台市として見ると、情報の収集が滞っていると思ってしまう。

遠藤：

ありがとうございました。

柳井：

施設をつくる話にだんだん論点が動いてきたので、より具体的な話になるが、場でイノベーションを起こすというキーワードを提起したいと思う。一番目は、現代社会、仙台における課題は複合的になってきている。これを解決するのは、単独・単発の施策やNPOだけの取り組みでは難しいと思う。コミュニティービジネスなどより広範な組織や団体の参加が求められる。二番目は、行政と市民、研究者などの生きた経験やデータの蓄積と公開の拠点

その責任は我々というか建築サイドにもすごくあると思っていて、今、日本建築学会で、これは昨日東京でディスカッションしたのですが、発注者が設計者、施工者をどう選んだらいいか、この選び方が非常に日本は稚拙なので、それを改善しようということをやったシンポです。

これは、建築界のノーベル賞と言われるプリツカー賞の歴代受賞者です。上から順番に、ブルーがアメリカで赤が日本です。一番右下が今年なので、今年日本人の磯崎新さんがとられたので、これで日本とアメリカが逆転して、組では同じ数ですけど、日本ではSANA Aが1組ですが2人なので全体で8人ということで、建築界のノーベル賞は日本が一番とっているという状況です。ほとんど誰も知らないですけど、これはある意味非常に重要なことじゃないかなと思っています。

これは、大野秀敏さんがそのときにプレゼンしたのですが、日本は建築大国だけれども、今の仕組みというのは成長期の仕組みなので、なかなかうまくいってない。

(資料の)4番目ですけども、現在の設計者選定方式は、設計者の能力を引き出し、高い費用対効果を得る方法としては不十分である。これは何を言っているかということ、重要なプロジェクトを任

Table A1

中心部他施設とのネットワークから「市役所(シティホール)」が担う役割を考える

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所(シティホール)」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライズの構成を考える

Table A1

中心部施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

ものの、例えば本当に外側から訪れた方が、緑の多いまちということだけで、本当に仙台の魅力をキャッチすることができるのかなという疑問があります。緑が多いまちは世界的にも多く、決して仙台はそんなに多くはない。それを価値観としてボトムアップしていることは、やっぱり政宗が杜の都の機縁をつくっているのです。「いぐね」という屋敷林をつくったことによって、今から昔のことを考えれば、その歴史性というものに裏づけられてエビデンスがあって、杜の都仙台というものの魅力があると思うのです。私は金沢に行って、仙台をどのように思っているか聞いたりすることが多いです。皆さんは、仙台って、城下町ってというイメージもあり、緑が多い城下町というイメージで語る方が多く、仙台はいいですねって皆さん仰います。ただ、本当に仙台を訪れて、ギャップみたいなものを感じて帰る方も多いようです。それはどういうことかという、確かに杜の都仙台というものの魅力を増幅させようというんなことをやっています。ジャズフェスだったり、冬のページェントだったり、人が集まる要素もプラスして、そういうことがだんだん浸透しているものの、何かそこで整理されていないのは、歴史性を意外に市民の方はご存じないからなんです。

多分「いぐね」ということを言ったときに、それをちゃんと理解して答えられる人だってそんなにいないような気がするのです。市庁舎は、定禅寺界隈の都心の中のセンターにはなっています。定禅寺を渡って、西公園まで行って、西公園から見える青葉山と仙台城の境界について、何かそこから崖が落ちているようにぐんと情報がないような要素になっているのが事実です。だから、二郷さんがおっしゃっていたように、子供が仙台の歴史性を感じるほどの歴史的建造物とかそういうものが残っていないので、それはいたし方ないと思いつつ。日本がだんだん日本文化ということに自信を持ってきて、全国でもそのお城、城郭文化みたいなことで名古屋城の復活だったり、それから熊本城の修復だったりとか、何か少し後ろに対して原点返しじゃないですけれども、見直してきている動きというのも大事だと思っています。もう1つは、あそこの青葉山界隈が、文化庁から「政宗が育んだ”伊達”な文化」という日本遺産に認定されたことも、仙台市民の中でどの程度ご存じなのかというぐらい、まだまだわかっていないのです。今、教育庁の文化財課の方で、仙台城界隈の保存と活用をどうするかという計画をしているのですが、そういうこと

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

づくりである。三番目は大規模にこれらのP D C Aサイクルを行うことである。これらを場のイノベーションでどう解決できるか。それは一緒に集まるということによってだと考える。例えばN P O法人の事務所も、ワンフロアに多様な人々が仕事をする。そこに行政職員も参加したり、一緒に昼食を取ったりしながら意見交換を行う。当然、N P O法人同士でも意見の共有を図り、その場でイノベーションを起こしていく。その効果は、大きくは3つあると考える。1つは節約効果だ。これはノウハウの横展開がよりスムーズになることで、行政コストと時間コストを節約できる。2つ目は、相乗効果である。テーマに応じてチームを作やすくなることで、各自の経験値を活かす機会と相互交流がよりスムーズになる。そういう効果が見込める。3点目は、育成効果である。新しく入ってきた人に対して、場の活用で学びと育てがよりスムーズになると考える。そこに教育カリキュラムを打ち込んでいけば、さらなる育成効果も期待できる。せっかく集まるのだから、節約効果と相

乗効果と育成効果の全体最適が目指せるように、低層部の設計を考えていく必要があるのではないかと考えている。

遠藤：

ありがとうございます。菅野さんどうぞ。

菅野：

私もほぼ同じ意見である。政策や課題に関して何か対応していくとき、なるべく取引コストを下げる発想にする。時間や人の手間、まさに情報は1カ所に集約し、誰でもアクセスできるほうが費用は安い。とにかく、取引コストを下げるのが大事だと思う。今仙台市の中でいろいろな諸資料を出している、ネットを出しているもの以外に、実は3カ所に分かれている。市民向けのものとして、議会図書館と、もう一つ、実はさっきの都市科学研究会とかの資料が公開されずに市役所の奥底に眠っている。それは1カ所にして、いろいろな人が使えるようにしていくべきだと思う。物を決めるのも、できるだけその場で一緒になってすぐ決められ

Table C1

既存市庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物の構成を考える

せるのに、非常に稚拙な方法で選んでいるということです。伊藤さんを隣にしてちょっと言いにくいのですが、事務所の規模で選ぶとか、あと実績だけで選ぶ。実績もその事務所がどれぐらいやったかという延床数だけで選んで、それがどれぐらいのクオリティーかということは全く評価の中に入らない選定がほとんどという非常に嘆かわしい状況にあります。こういうリソースがあるにもかかわらず、そのリソースはほとんど活用していないという悲しい状況にあります。景気浮揚を建築で図るという方向ではなくて、もっと別なやり方をやらないといけない、停滞期とか縮小期というのは需要が頭打ちになる、税収不足になって建築寿命が延びるから、それぞれの地域に合った丁寧なやり方をしないとイケませんということが基本です。けれども、国交省から出ているガイドラインは、その逆のガイドラインとなっていて、案じゃなくて人で選ぶから、できるだけ簡単な提案にしないとされています。こういう状況なので、デフォルトがかなり設計者選定にとっては非常に難しい状況なので、むしろクライアントが努力して設計者選定をちゃんとするというふうにしないと、ろくなことにならない

いということ、はっきり申し上げておきますけれども。どういうものが食べたいかと議論だけしていてもだめで、どういう店に行ったら、シェフに信頼されて、いいものを安い値段で出してもらえようにそこに行ったら努力しないとイケないのに、シェフをどう選んだらいいかについては誰も議論してない。例えば、マクドナルドとかではどこに行っても同じ物が出てきますけど、こういう市庁舎というかなり大きなもので非常にすぐれたものは、誰にお願いしても同じものができるといことはあり得ません。やはりすぐれた建築家なり、すぐれた設計事務所とコラボレーションする必要があって、それが誰なのか、それをどうやって選んだらいいのかということが全く議論されてないのは、まことにとってかわいそうというか、悲しい感じがします。それがどうなるかという、先ほどのプリツカー賞で一番だという、それは業界だけのことでしようと言うかもしれませんが、例えばノーベル賞なんかでも非常にアジアでは気を吐いている。だけど、ノーベル賞をとった日本人の多くが言っていますが、これは今だけで、今みたいに大学が疲弊していたら、多分10年後、20年後には誰もノーベル賞はとれないだろうと。それと同じことが今日本でも起きつつあります。今はいいけれど、全然日本は尊敬

がもう少し市民サイドの中で浸透したり。定禅寺通りのウォーキングの延長上にせめて西公園とか、もうちょっと足を伸ばせば青葉城という風な何か歴史性みたいなものも大事にアピールしたいと考えています。市庁舎を考えたときに。確かに区役所ほど人は行かない、集まらないので、例えば、市庁舎の1階、2階ぐらいは、市民に開放された区域、仙台を発信する空間として確保することも提案されます。ネットとかITを使えば、もっと情報を整理した発信機能も持てるわけですから、その中で歴史的なこととか防災とか、仙台の大きな魅力を語れるキーワードに対しての手当てがなされていて、その魅力のポイントとなる情報とか、いろんな目に見えるものとか、そういうものを集めた展示も可能だと思います。それが、別にメモリアル記念館みたいな建物にならなくても、何か工夫すれば市庁舎のところから発信する機能が用意できると思うのです。シンボリックな展示があってもいいと思います。そういう使い方をして、市庁舎に集まらないのじゃなくて、むしろ集まってほしい。要するに、市民に開かれた市庁舎を形にしてほしいと思っています。

メディアテークができたことって、まちづくりにすごく大きなメ

るようにするべきだ。そのため、空間のしつらえも、恐らくいろいろなものがフレキシブルに使える形に設定しておくということだと思う。課題が複合的でリスク社会みたいな言われ方をしているが、何が起るかわからないので、すぐ反応できるようにするというのが基本原則で、間仕切りなんかぼんぼん変えて、しつらえをどんどん変えられるような形で、別にそこに、行政だけでなくNPOのオフィスがあってもいいし、民間企業のオフィスがあってもいいし、そういう形でかなりフレキシブルにいろいろなことを、一緒に合わせて組成できるような空間構成のほうがいいと思う。

もう一つが、初めての人同士がいっしょに何かやるのは大変、つまりは、取引コストが高いので、取引コストを下げるための、おそらく人とかプログラムというのが一緒についていないといけないと思う。この論点は新たにつけ加えておきたい。いわゆるコーディネーターと言われたりとか、行政内の例えば政策の調整者であったりとか、そういう人がその場に来てくれないと物事は動かないので、しつらえや空間だけではなくて、こういった役割の

されない国になるという方向に向かってまっしぐらなのです。やはり地方の時代で、地方でずっとみんなが生き続けるためには、その環境が独自なものであって、それを丁寧に見てくれる設計者と一緒に生きなきゃいけないのに、議論はするけどそういう人にアプローチしてないのは、本当に不思議な事です。

それで、今、お手元にお配りしたのは、建築学会でつくったガイドラインの基本です。市庁舎用のコンセプト版というか、意思決定版と具体的にそれをどうやったらいいかという実務版と2つに分かれていて、実務版のほうは私がつくりました。

設計者選定にもいろんな方法があるので、別にコンペだけではなくて、プロボもあるし、品質評価という方法もあります。もしかしたら、桂さんのところの市役所は、デザインビルドですけど、デザインビルドでもうまくコーディネートすればやれます。相当技術は必要ですけど、コーディネートの。横浜の場合は、デザインビルドの中ではすごくよくいっているほうだと思いますが、デザインビルドだから限界も多いのではと思います。

そこで、幾つか問題があって、前提で一般の人が建築や環境に全く興味がないから、結局首長の問題になるのだと。首長がちゃんとしないとだめで、行政の中でも本当に建築が好きだというのは

リットをもたらしました。メディアテークは、建物のつくり方が、環境と建物内のコミュニケーションがしやすい場所になっている。複合施設ということもあって、人同士もコミュニケーションしやすい施設になって、何かとても開放的な、世界的にも注目を集める、その思想性がすごくすばらしい。私は、仙台の魅力を語るときに、自然と共生する都市の中でも、都市機能が上手に自然と共生しているまちということで、市庁舎もシンボリックな存在であってほしいと願っております。

坂口：
ありがとうございました。
では、北原先生に少し伺いたいですけれども。
先生がさっきお話しされたような、歩くという視点でまちを考えようということもあると思うんですけど、メディアテークの利用者は、1日3,000人から4,000人ぐらいで、年間100万人ぐらいだと。4方向にエントランスがあるので、南が60%ぐらいで、西が25%で、北が10いくつで、東も1~2%、人は常に流動している中に空間があります。

人やプログラムを必ずセットにすべきである。

遠藤：
取引コストという言葉でご紹介してもらったが、違う言葉でいうと何て言うのでしょうか。

菅野：
調整にかかわる費用をできるだけ下げましょうということである。「一回持って帰って検討します」ではなくて、その場で決めようとか、みんな来ていて「そうだよ」と言ったほうが早いし、時間もかからないし効率の。

遠藤：
時間も含めてということだろうか。

菅野：
時間も手間も、そういうものをできるだけ下げようということ。

数例で、建築すら見ない。でも、割と仙台はそういう意味では、メディアテークもあって恵まれていると思います。私もこの計画のメンバーだったのですが、でも、これができてから20年たって、メディアテークはちょっとやり過ぎた感もあるので、反省点も多いのですが、別にこれをつくれと言っているわけではなくて、これぐらいの知的レベルを持った建築が20年間全く建てられていないというのは、我々の力不足もありますが、やはり何か引き継がれていないということだと思います。プレデザインというのですが、設計の前にはしっかり考えていかないといけない。そのときはやはり専門家が整理しないといけないという話とか、選段階とか。次に、いい設計図書をつくったら、それを施工者にリスク移管しなきゃいけないので、それをちゃんとできるかどうか、不落の問題です。それを運営までフィードバックできるか、創造的な住民参加ができるかみたいな話をしました。

結論としては、そのときに出口さんという設計者が説明したTSURUMIこどもホスピスという本当にすごく素敵な建物がありまして、難病の子供たちが時間を過ごす建物です。それを民間で高場さんという情報系の事業をやられている経営者の方が、ご自分のお子さんもそういう難病にかかれて、それでも本当に難

Table A1

中心部他施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライズの構成を考える

Table A1

中心部施設とのネットワークから
「市役所（シティホール）」が担う役割を考える



Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから
「市役所（シティホール）」を考える

遠藤：

なるほど。これ議事録になったときに、取引コストでわかるかなと思ひ、いろいろな方に見てほしいので。ありがとうございます。ほかの皆さんも、ぜひこの新しい市役所の低層階のところの協働・公共を担う場……。鈴木さん、どうぞ。

鈴木平：

石巻の事例になってしまうが、子供の貧困の実態調査というのを昨年度行ったが、親や学校の先生も共通して話すことに、社会資源がどこにあるかわからない、あと使い方がわからない、そもそも知らないとなったときに、市役所にそういう制度がいろいろあるのは何となく知っていたとしても、それでは児童扶養手当は子育て支援課で、就学援助は教育委員会で、生活保護は保護課へ行っても、本当にいろいろなところを回らなければいけないとなったときに、結構生活に直結する情報が欲しいというのが本音だと思う。もちろん課題解決者としていろいろ考えていくときに必要

な機能とかというのもあると思うが、それでは市民が主役となったときに必要な機能って何かと思う。

仙台市の市庁舎に全ての機能を集約することは無理かなと思っていて、第2回の議論の中で、本庁舎と区役所の役割の整理があったが、そういった機能は、本庁舎、区役所、あとはコミュニティセンターや集会所や町内会など、幾つかのアクターと場所ごとに整理をすることが必要だと思った。

NPOに関しても、サポセンがあったり、せんだい・みやぎがあったり、中間支援組織や取りまとめをする人たちは幾つかあるが、重複やパイの奪い合いが起きている現状もあると思っている。それらを整理することも、このタイミングで必要な話だと思っている。

最後に、キーワードは対話だと思っていて、例えば仙台市庁舎にそういったデータや話が上がっていた機能があったときに、ほとんどの人が理解できないとなったときに、それを翻訳する人やいろいろな主義主張がある方がいて、その様な方が訪ねてきたら現場の窓口の方はすごく困る。その様なときに、そこのファシリテ-

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や
建物配置・規模・スカイライターの構成を考える

病にかかる社会から完全に切り離されてしまいますので遊びにもいけない。どこにも行けないのはおかしいということで、それを改善するために自分で事業を起こして、こどもホスピスを建てられたのです。彼がやったのはデザインビルドですが、すごくいい環境ができています。彼はもう圧倒的にすごくて、やはり強い理念で、重病になった子供たちの生活の質を向上させるためにはいい環境が絶対必要で、いいっていうのはこういうことだとはっきり言う。それで、いいものをつくるためには、そのために能力ある専門家を雇う。普通の人たちではできないので、そういうことに能力を持った人たちが彼が集めてきた。また、そういう専門家がちゃんと議論してクリエイティブなことができるように、そういう環境を彼がつくってあげた。この建物はクライアントの強い理念の下で、いい建物になりました。

やはり事業というのは、上に書いたようにリスクバリュー案件なので、バリューは出ますけど、同時にリスクも出るんで、リスクだけを回避して案をつくっていくと、ろくなものにならないのです。だから、今のプロセスを僕が危険だと思っているのは、リスクをどうやって回避しようかと一般の人が一生懸命やっている事です。我々からすると、リスクあるスキーマの中にもバリュー

はあるから、その可能性を入り口で、しかもシェフにも会わないうちから捨てているのは、本当に大丈夫かと思ひます。これはもう今すぐやめたほうがいい。高場さんは、そういうことはしなかったんで、すごく安いコストで非常にいい環境ができています。後で検索していただくといいと思ひます。

専門家を活用する、という専門家とは何か。専門家を活用する、というのはどういうことかということですが、先程申し上げたように、今の市庁舎計画のプロセスでは、SM的環境の実現は絶対しなないと思ひます。別につくらなくてもいいのですが。議論が多いことはいいのですが、なぜ議論が一生懸命かわされてもいい環境につながらないかということ、ほかにもいろいろあるのですが、まず建築は物体であり、設計は技術なので、おいしい料理が食べられることについておいしい料理を語っても、決して自分がすごくおいしい料理をつくれないうと同じように、やはりそういう人をどこかからちゃんと見つけてこないといけない、ということなんです。

それから、建築はトレードオフ案件なので、あちらを立てればこちらが立たず、不利と思われる条件でもスキーマによってはプラスになります。例えば、この仙台メディアテークは、敷地いっば

まちづくりを歩く視点で考えると、今の2019年in仙台で考えると、もう少しこういった視点があるべきだということもあるような気がします。まちも、つくるためよりは、今のまちをどうやって生かしていくのか。場合によっては、これからも空きオフィスが増えたりする可能性もあるので、そういった縮退化していくような状況を受け入れつつ、歩きたくなるようなまちを考えるためには、今からやらなきゃいけないことと、今後出てくるであろう問題点みたいなことについてお話しいただけますか？

北原：

難しい振られ方をしているので、わかりやすく2つくらいにしたいと思っています。

1つは、なぜ僕がそのころに歩くことを考えなきゃいけなくなったかということ、仙台の歴史を考えると、今から30年前の大きな問題は、ケヤキ論争だったんですよ。ケヤキがどんどん朽ちて枯れてきていると。そのときの1つの理由として、定禅寺通りについては、車の排気ガスじゃないかという話を言う人がいっぱいいました。理学部の先生も調べていました。僕は、地区計画をかける

トをどうするかや立場が違う人たちの意見調整をどうするかというところが、実際窓口立つ人やそこに来る人で考えると必要になってくると思っている。

遠藤：

ありがとうございます。多種多様な資源と情報がある中で、それを整理していくことも必要だということでしょうか。あとは、情報や物の翻訳者やコーディネーターやファシリテーターの必要性でしょうか。先ほどプログラムと人がセットになるという話もあったが、翻訳する人が必要でないかという意見もあった。その辺とつながってくるのかなと思う。

菅野：

先ほどの話は、西日本の政令市の市役所に行くときとすごいわかると思う。仙台は意外と窓口に来ないと思う。北九州市役所にヒアリングに行ったとき、ずっと同じ人が3時間しゃべっている人を見かけた。相談をする人と、自分で能動的にデータを取り

いぎりぎりに建っています。だけど、このスキーマを選んだときにとでも怒られました。定禅寺通りがどんなに大切か、ここはセットバックするべきだと。でも、そうではなくて、この1階が外部なのです。1階が丸々外部なので、だから、天高が6mなのです。また公開空地にも設定しました、ということを一生涯やりました。そういうふうな、不利な条件でも、逆に取り込んでいっていい環境になるということは普通にあるので、やはりこれを絶対捨てるべきではありません。

具体的な検討なしに条件だけを、あるいは、検討しているといえれば検討していますが、我々専門家からするとあのブロックだけをどこに置くかというのは、ほとんど検討とは言わないです。あれだけで条件を詰めるのは、厳しい言葉で言えば自滅行為です。

それから、専門家をどう使うかということの次に、プロセスをちゃんとしないといけないのですが、渡邊さんのお話の決めないことは決めないほうがいいというのは、まさに私も同じだと思っていました、このトレードオフ案件ということを専門家として感じておられるからこれはやらないほうがいいということです。そのとおりだと思います。

その一方で、早目に決めて要求水準として確定させたほうがい

ときに、そういった外圧もあって。皆さんはもう忘れたかもしれませんが、この近くにガソリンスタンドがあったんですけど。ガソリンスタンドのガソリンでケヤキが枯れてしまうということで、地区計画では。この近辺に自動車関係施設は入れていないですよ。そうせざるを得なかったんです。もっとひどいのは、魚屋さんも撤退しました。そこに大平さんという魚屋さんがあったんですけど、魚の水で脂が出るだけでもだめだと。それはすごくシビアでした。

そういうふうなことに、そっちの方にばかり行ってたんだけど、そもそもケヤキの中を歩きたいことをしないでやってきたネットワークがあって。ネットワークって、効率的に、早く行きたいと考えているから、車が来ると。そのときに、48号線から45号線までみんな経由して、定禅寺の前をみんな走っていくわけです。まだ西道路が完成していませんでした。西道路ができれば、ここは車が走らなくても大丈夫じゃんという話をしていったんだけど、どうしてもそういう話もありました。

その時に、自分たちの道路だ、自分たちのまちだ、みたいなことできないかなという話のできたので、わざと劇場化計画みたいな

に来た人と、ある種さっきの本庁舎と区役所の分け方をしなければいけないと思うし、あとは、先ほどの生活に関係する身近な財布の話をする人と地域全体の話をする人と、ある種ボーダーを超えるか超えないかぐらいの関心で来る人は、本庁舎へというような、ボックスをつくって議論をやってほしいところはある。とりあえず区役所というのともよくないし、理念を持って本庁舎と区役所間の整理をすることをこのタイミングでしてほしいと思う。

遠藤：

ありがとうございます。では今野さんお願いします。

今野：実は、社内でプレラウンドテーブルをやって本日臨んでいる。弊社の20代から40代の社員の意見もぜひこの場で紹介したいと思っている。視点は、情報をいかに共有するかが大事だという話と、一緒に出合える場、にぎわいをつくれる場の視点で話したいと思う。

15人ぐらいで行ったが、20代の社員はほとんど市役所に入っ

ともあります。だから、今やらないといけないのは、要求水準としてたたき出すものと、一応検討結果を条件とはしないけど、これはこういうふうな検討しましたということを参考資料として出すこと。検討することは悪いことではなくて、それを条件として縛ることが悪いので、必要条件として確定させるところと、これは参考ですのでこういう検討があったとをどこかにとめおいてくださいというところの整理をする。

それから、すぐれた設計者選定をどうするかというのは、皆さんのお手元にお配りしたガイドラインに書いてあるので、そのガイドラインもテスト版なので、まだいろいろと議論を、ぜひして頂きたいのですが、そこで書いてあることは、専門性の高い審査委員団をつくってほしいという事です。別に全員が建築の人ではなくてもよくて、建築を中心とするいろんな人たち、志の高い人たちが審査委員団に入っていてほしいと。別に仙台市民が全員入っていないといけないというわけではなくて、このメディアテークでも仙台市民は2人かな。5人審査委員いたのですが。残りの人たちは、さっきプリツカー賞をとった磯崎新さんとか山口勝弘さんとかに入っていました。そういう志の高い人に審査委員団に入っていたら。

Table A1

中心部施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライズの構成を考える

Table A1

中心部地施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

ことを言って、つくったんですよ。僕は、まさにまち歩きが始まってきた頃で、タウンウォッチングがあった頃で、そういう時期です。今でこそプラタモリとかがあるけど、その当時はまだ自動車全盛ですから。なおかつ、泉パークタウンだとうたって、どんどん広がっていますからね。そういう風なときに地下鉄も延びていく。ネットワークってさ、スピードのためじゃなくて、その場所につながっていることが大事なんじゃなくて、そのつながりに行く途中が大事だと、パスが大事だと。そのパスを歩くスピードで見たら、地下鉄は違うよ、感じ方が。という話をしていた時があります。

ですから、今回もいわゆる中心部の施設とのネットワークという言い方の時に、そこに公共施設としてつながっているということが大事なんじゃなくて、個人のトリップの中でつなげていくような、そういうものをどうやって創っていくかが大事なので、そういうふうな意味でのネットワーク論というものをもう一遍やるべきだという風に思っています。その時に、1つのヒントが、歩くスピードだということです。

もう1つは、その当時こうなっていったほしいなと思って、でもなかなか引き継がれなかった考え方をいうと。実は、僕らは外部

空間がどうやって生み出されていくかというのをすごく楽しみにしたんです。例えば、さっきこの建物は後ろに下がればいいという話をしましたけれど。このメディアテークだって、北側も南側にも外部空間があって。桂さんがおっしゃった話で大事だと思ったのは、建物の残余空間が外部じゃなくて、外部空間がメインで、逆転する考え方というのを、やっぱり図を描く時に考えるわけです。僕がそれを初めて感じたのは、韓国に行ったときに、韓国は庭のことをマダンと言うんだけど、建物の残りじゃなくてマダンを先につくっていくんですよ。それで建物をつくっていくの。そういう意味で、小さな外部空間がいっぱい出来ていくわけです。定禅寺通りを広くするだけじゃなくて、その建物のところも、そういったおもしろい外部空間がありながらつくられていかなきゃいけないねと言ったんだけど。バブル全盛でしたから、そんなもったいないことはできなかったわけですよ。今の時代だからこそ言いたいわけです。外部をうまく生かしながら私的なネットワークがつくっていく、その楽しみ方みたいなもの。つまり、私とブリックの逆転みたいなことができていくようなまちができたなら、どんなにか楽しいんだろうなという気がして。そういうことも

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

たこともないし、何をやっているかわからなくて近づきたくもない印象だといっていた。必要なことは全部区役所で済むので、正直言って全く縁のない場所だという認識だった。

1つ出たのは、うちの会社の特性でもあるが、情報を伝える仕事にしている、仙台市と共同していろいろなことをやっているが、果たして自分たちの手がけた仕事が市民にちゃんと伝わっているのだろうかという疑問がある。市の政策とか事業が伝わっているのだろうかということに対して、心配や実感を持っていないという意見があった。

低層階に、そういった仙台市の市政に関しての取り組み自体を市民に伝えていく、広めていく場が必要ではないかと思う。それが、一方的に伝えるのではなく、双方向性のある伝え方や、もしくは市民が参画できる伝え方など、全体の広報のグランドマネジャーのような方がいて、ビジュアルや場づくりをコーディネートして伝えていく場になることが非常にいいと思うという話が出ていた。

もう一つは、イベントプロモーションを担当している社員の意見だが、仙台市役所の前の市民広場を一体として考えるべきだとい

うことであった。市民広場に芝を敷いてくれという話をとにかく言ってきてくれということだった。イメージは、豊島区に南池袋公園という公園があり、区が主導で全面芝生に改宗したようだ。そこにはカフェがあり、オフィスワーカーやテイクアウトしたお弁当を持って、青空を見上げながらご飯を食べたり、ヨガをやったり、いろいろな市民の方がそこに集う場所がある。そういう場所が市役所の前にあれば、市民が日常的に集ってくる市役所になるのではないかと思ひ、芝の話をした。

それともう一つ、定禅寺通のイメージだが、どうしてもNHKがあつてメディアテークがあつてって、何となく年配の人が行くストリートのイメージがまだまだ強いと思う。平日は、ビジネスマンにとっておもしろい場であり、休日はファミリーや若い世代にとって非常に開かれた場になると、平日と休日の顔が変わるおもしろさがあると思う。市役所から芝の市民広場を抜けて定禅寺通を歩くことで、仙台が好きになる場の起点となる市役所になればいいなという話があった。

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカイライターの構成を考える

それから、創造性と技術性、技術力、両方を評価する方法。創造性というのは、これを捉えたときに、伊東豊雄さんは50歳ぐらいだったと思いますが、ほとんど公共建築の実績はなくて、大丈夫かなあ、ということも随分言われたのですが、やはり彼のような能力がある人であれば、これだけのことはできるのです。でも、市役所であまりそういうリスクなことをされても困るという声もあるから、それは例えば、実績ある事務所と若手とで組めるような条件を誘導するとか、いろんな方法があるのですが、そういった参加要件をぎりぎり厳しくせず、この両方を満足させるような参加要件をしっかりつくる。

それから、公開の原則と市民参加です。これはもうマストです。要求水準書を改訂できるようにしておくということです。最初に出た要求水準が後で設計者が入っていろいろ変わっていくと、変わることがあるのですが、それを絶対変えない、というのではなく、それが意味を持たばどんどん変えていけるようにしておくのです。イギリスなんかでそういうふうになっているのですが、そういうふうにしたほうがいいです。

それで決めた後、その案がすばらしい、大先生が決めたという、そういう話ではなく、それを設計者と市民と一緒に練り

上げていく。それは絶対やったほうがいいです。全体で決めるのではなくて、ここに時間を残しておいたほうがいい。市民と一緒に考えて、設計者に委ねながらやっていく。

それから、今の検討の経緯を見ていると、ちょっとポリティカル・コレクトネスっぽい。要するに、誰も反対できないという言葉が積み重なって、それが創造的かという決してそうではないのです。ここをやったとき私は、大学の助手でしたが、仙台の色々な偉い方々に、こうしろ、ああしろといろいろ言われました。市役所の中の人ではありません。市役所の人たちは守ってくれましたが、ポリティカル・コレクトネスなことはいっぱい言われました。だけど、それは話はわかりますけどこうですよ、と調整しました。もちろん反省点はいっぱいありますが、ある種のクリエイティブができています。

それから、運営の仕組みを早目につくり上げるということです。例えば、イギリスの例ですけれども、日本の10倍の設計料を払って、だけど、設計図書をきっちりやりながらコントロールして、建設費は抑えながらすごくいい環境ができています。これができるためには、日本は1年でやっているのですが、イギリスでは4年間かけてすごく丁寧に調整しているのです。発注と契約までの調整

のの中の1つのきっかけに、新しくできたシティホールがあって。そこからそういったネットワークに自分が出ていくみたいな、そののきっかけになるような建物になってほしいなと思って。みんながそこに集まらなきゃいけないという話ではないような気がするの。

そういう意味で言うと、この通りはいい大きさだと思うんです。当時僕らが研究しました、500メートルというのはぎりぎり歩いて楽しい距離だと。仙台の場合には、駅前降りてから中央通りと一番町歩いて。結構みんな歩かされます。定禅寺通りのところを市民会館まで歩くだけでもみんな嫌がりますけど、距離でいうといい距離なんですよ。こういう風なものをおもしろくしていくのは、建物だけじゃなくて、外部空間とかそういったものをうまく使っていくことであって。そんなネットワークができていったら、それに見合うような建物を出発点として、あるいはもしかしたらゴールかもしれないけど、スポットとしてシティホールがあれば、おもしろい。僕らが書けなかった定禅寺の物語みたいのが書けるんじゃないかなという気がして。それを期待したいなという思いがあります。そういう意味で、すごくおもしろくなってきているので、

遠藤：

平日と休日のコントラストはおもしろい。では、齋藤さんお願いします。

齋藤：

仙台市民ではないので発言は控えるが、まちづくりラボのようなコンセプトで、子供側に関われるのがいいなと思っている。これは別にふわっとしたことではなく、きちんとやらなければいけないことだと思う。市民が主役となったときに、どうしても大人がこうしたい、大人は賢いので方向を示してしまうが、子供たちがこうありたい、ビューな部分からまちのあり方というのは大いに考えていく必要があり、それは小学生なのか高校生なのかによって随分変わると思う。

文科省の学校業務改善アドバイザーという仕事もしているが、教師の負担がすごく大きい、しかしながら先生が教えられることって限りがあると思っている。その授業を一個ここに持ってきて、まちづくりを子供たちが体験しながら、民間人や大学生に入って

というの、ある種の技術なのです。すごく高度な技術で、これをないがしろにして、もしくは、今までの市役所のやり方、市の中でやってきたやり方でオッケーというのではなかなか難しい。あり方も含めて考えていかないといけない。こういうプロフェッショナルな検討が少し不足しているように思います。

ある市で非常に悲しい出来事がありまして、非常に発注がひどいことになって、検討はいろいろ頑張っていたのですが、発注がひどくて非常に悲しい市役所になりました。こういうこともあり得るといことです。だから、決して設計者選定を、みんなが頑張るって真面目に議論すれば、これが何かと言いませんが、一生懸命議論すれば普通にできるだろうという時代はもう過ぎ去って、設計もある種ビジネスなので、発注者もしくは発注者の周りにいる人たちがシェアにプロフェッショナルなことをきちんとマネジメントしないと、こういうわけのわからないことになるのです。

最後に。東京とかいろんなところに行くと、僕はずっと仙台で、仙台に生まれたわけではないですが、人生の3分の2ぐらい仙台にいますので仙台のことは好きですが、仙台の人が思っているほど、ほかの人たちは仙台いいと思いません。定禅寺とか半タンおいしかったとか言ってくれますが、はっきり言うけど、つまんな

まさにその時につくる空間が、間違っ僕らの考え方、公共施設って公共がつくって管理する施設のことを公共施設と言うんじゃないで、本当の意味での新しい公共性を感じさせてくれるような空間を、場所をどうやって持つていかみたいなのを考えるべきじゃないんですかという話をしたいと思います。そんなところで

坂口：

ありがとうございました。

北原先生、新しい公共性というものを、もう少し共有できた方がいいと思うんですけど。単にそれはシステムとか制度だけじゃなくて。個人のトリップの中にそういった公共空間、公共の場、あるいは、自分以外の場所がどうあらわれてくるのかが大事だというお話があったと思うんですけど。それが切り替わるきっかけとか、今はないとするとういうタイミングでとか、どういった仕掛けがあったりとか、どういったステップでそう変わっていくのかとか。もちろん、その個人の生活が変わったりとか、そこがすごく魅力的な場所だということもあると思うんですけど、

もらいプログラム化していくことやつながっていくことが、子どもたちが大人になった時に、すごくいいのではないかなと思った。

遠藤：

ありがとうございます。子どもたちが実際に地域を考え、大学生と一緒にできる空間があれば、仙台は学都仙台とも言われ、大学生向けのプログラムは結構あると思うが、小中学校の方も関わるプログラムはいいアイデアだと思う。

齋藤：

教員の負担軽減にもなり、小中学校にもぜひお願いしたいと思う。

遠藤：

多様なかわりかまたふえるし、子供たちの声も聞こえる場所になるといいという感じでしょうか。他にいかがでしょうか。谷津さんどうでしょうか。

いと結構みんな言っているということは自覚したほうがいいと思います。ですが、素肌美人ではないけど骨格はいいではないですか。広瀬川があって、定禅寺もあって、いい感じだと思います。骨格はすごくいいと思うのです。ただ、それを生かし切ってないのです。ですから、自分たちが想像可能な範囲内だけに物事を閉じ込めるのではなくて、まだ見ぬ可能性をともにつくる強い意志、これは強い意志がないと絶対だめです。強い意志を持つべきだと思います。設計者選定、プレデザインの専門家なので一応、述べさせていただければ、今のままではちょっと残念な結果になってしまうような気がします。あまり否定的なこと言わないと言われましたけど。もちろん、議論はいいのです。議論はすばらしいけど、本当にやらないといけないことが結構ごそと抜けているので、その辺りはちゃんとやられたほうがいいということを思いました。

安田：

ありがとうございます。やや、このテーブルの内容を越えるような話かもしれませんが、最終的には基本計画というものが完成すれば、いずれ設計者選定というプロセスに移っていくわけですから、今のお話は非常に重要というか、これからまさに考えて

Table A1

中心部他施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライズの構成を考える

Table A1

中心部施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

何かそう変わっていくためのきっかけのヒントというのを、もう少し具体的に教えてください。

北原：
公的な空間だから、ここでやっていくから公共的な活動であったり、その機能であるというふうな考え方じゃなくて。ある意味ですごく曖昧な空間だと思いますけど、そのパブリックとプライベートの境目みたいな空間が建物の外に出てくるのがおもしろいわけで。それは誰の空間ですか、それは公共用地です、という話ではなくて。つくっていかなくちゃいけないと思うんですよ。僕らが今議論しているこのメディアテークの1階だって、多少音的にはしんどい空間ですけど、パブリックスペースですよ。パブリックスペースだけど、建物の中なんです。それは特別をつくってますよね。そういう形が外の部分でもできる、そこでジャズが聞こえればいい。ジャズフェスティバルはそういう実験ですよ。そういうふうな空間ができていて、本人がパブリックのためにしているわけじゃない、プライベートで楽しんでいることだけでも、ある意味でまさにパブリックなスペースだということなつくり方が

あっていいんじゃないかなという気がして。それは、所有権じゃないんだろうなという気がして言っています。

手島：
僕がこのテーブルの企画を考え始めたときに、まさに北原先生のおっしゃったことを考えていて、例えば、このメディアテークもそうだと思いますし。新しい音楽施設の検討委員会に傍聴に行くと、やはり、「みんなに開かれた広場」というような言い方で施設をつくらうとしているんですね。今まではホールというと、がちり防音のための壁で区画されて、お金払った人しかその中に入れないというようなイメージがあるんですけど、大きな柱として、みんなの広場だというふうな言い方をしているんです。一方で、市役所本庁舎の話で、ラウンドテーブルで話をしている、ずっと市民協働をやっていた方に話をすると、これは「みんなの場所」なんだというふうに言うんですね。特に、市民広場を使っている方だとか、あるいはジャズフェスとかの運営をしている方に聞いてもそうなんです。僕、このまちの一番の特色って、多分そういう曖昧な場所があることなんじゃないかという気がす

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

谷津：
私も今のお話と同じことを考えていて、仙台市では「25歳の自分づくり」を教育委員会で行っている。いわゆるキャリア教育に取り組んでいるので、それを仙台市役所の中でもやれるといいと思う。子供たちが市役所に足を運ぶ機会が創出できて、そこで自分の生活に近い行政の話やそれを聞いた子どもたちが、自分たちが住んでいる仙台をよくしたいという気持ちを育み、市役所の職員になるかもしれないとかということも含めて、子供たちが行ける場、学べる場ということではとても素敵だなと思った。
あともう一つとしては、皆さん今お話にあったように、私も市役所に例えば相談をするときに、どこの課に相談していいかわからないというのは多々あり、大きい病院の総合診療科ではないが、とりあえずそこに行って、そこで問診を受けて、それならこの科ですみたいな、いわゆるホテルのコンシェルジュみたいなところが低層階にあって、まずはそこに相談をして必要なところにつなげてもらったり、必要な人たちを集めてもらって話す場をつくってもらったり、というようなところがきちんと部署であると

いいと思った。
最後に3点目として、仙台市のほうでは5年くらい前から、仙台市の職員がNPOのほうに5日間留学生として行って学ぶという「NPO留学」というシステムをやっている。私の法人もアスクも受け入れ団体として協力しており、5日間ぐらい行政の方が来て一緒に体験してもらって、NPOの理解を深めてもらうという事業である。協働の担い手を多分育成するという意味があるのだろうと理解しているが、そういうことはとても大事だと思っている。私は、この活動にとっても賛同しているが、残念ながら毎年参加したいという職員さんが減ってきているように感じている。それは、多分すごく多忙で、平日業務を抜けていくのは大変なかなと思ったときに、仙台の中にチャレンジでもいいと思うが、NPOの団体が市役所内で活動していて、そこにNPO留学などで行くことで相互理解を深めながら、お互いの協働の力を育てていくというような仕組みとかというのは継続してやるのではないかなと思っている。
震災後、特に若い人たちが起業するというのを仙台市はとても

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物の構成を考える

いく必要があるだろうなというところです。耳が痛いのは、議論は多いけど専門家を生かしてないというお話なのだと思います。こういう場、あるいは検討委員会にしても、もちろんそれをやられている当事者の役所の方とか、あるいは伊藤さんを初め設計の方はもちろんいろいろ考えておられますけれども、それを受ける人間が準備をしていますかとか、あるいは、専門家としての知見を生かしていますかみたいなことで言うと、言い方が微妙ですけども、大変不十分な状態が続いているという事です。

小野田：
まだ選ばれてないからいいのですが、これから選ぶに当たって下準備をしておいたほうがいいですよということと、皆さんが言っているように、いい建築家、いい設計事務所を選んで、そこで議論すべきことが先んじて決められてしまうと、可能性が著しく減ってしまう、未来にあるべきオプション価値が失われてしまうというのは、合理的に見て良くなるのではないですか、そして、そのことをもうちょっと自覚されたほうがいいですよと、そういうことです。

安田：
決める、決めないというお話もこの前にありましたけれども、要求水準のお話に繋がっていく話だと思うのです。そこで最終的には当然設計者を決めていくといった中で、小野田先生の話では、その設計者を決めてからどういうふうに持っていきけるかということも大変重要だと。そこでこそ市民ときちんと協働して決めていくということが、最も重要なことなのかもしれない。それ以前のところで、いわゆるポリコレに陥って身動きがとれなくなるというのは、不幸しか待っていないのだというようなお話だったと思います。
今の先生のお話も踏まえながら、時間がある限り、この基本計画検討委員会の資料の中で、結構重要なのが棟内配置の話だと思っ
ていまして、実はその棟内配置の話をしなくて皆さんに配置計画のパターンで議論をしていただきましたが、棟内配置についてもぜひ皆さんからご意見を伺いたいと思います。
棟内配置というのは、今、菅原さんのほうに資料のイメージを出していただこうと思いますが、検討委員会の資料の中では、断面構成図が第4回の資料の8にあるかと思っています。この中で何点かあるのですが、例えば、議会の配置は、構造上の特性や整備構想

るんです。それもあって、その中心部につくる施設のネットワークをどうするのかと言われたって、答えは難しいんですけども。僕は、何となくこういう空間がずっとつながっていくと、それが定禅寺通りのような、ジャズフェスをやったりページェントをやったりできるような、個人の場じゃないけれども、何となくみんなの場だということで、供用されているようなもので仲介されていると。それがすごく仙台らしい都市空間の良さかなという気がしました。

北原：

「みんなの場所」という表現が、「みんなの公共的な空間」を説明するには、ちょっと違うと思っていて。大事なことは「私の場所」だと言えることだと思っていて。「私の場所」と思える人たちが出てくることによって、それは「みんなの場所」になるんじゃないかという気がします。その「私の場所」になるためには、その土地は何も公共の土地じゃなくて、民間の土地でもいい。わかんないんだけど、その曖昧さによって、俺あそこに行っていつも座ってコーヒー飲んでるんだよねという空間があっていいし。

促進しているようなイメージを持っていて、それは民間の企業であったりNPOだったりしていて、仙台市は相談などを無料でいろいろやっているのだらうなと思ったときに、そういう人たちが最初の一步を踏み出せるチャレンジの場というのを市役所の中で確保できるようになるとか。あとは、障がいのある人たちの働く場では工賃が上がらないというところがある。いわゆる販路がないというところがあるので、各区役所などで販売会とかはやっているのですが、それも月に1回だったり何カ月に1回のチャンスしかないの、いわゆる常設でそういう障がいのある人たちがこういう物をつくっている、売っている、またはこういうカフェを運営しているみたいなものをチャレンジとしてできる、それを市民の方たちにアピールしたりできる場というのも、一緒に市役所の中にあると非常にいいのかなというふうに思った。いわゆる必要な人たちがアクセスできる、または、新しい物を市民の人たちに広報する、アピールするという、そういう双方向の場というところが必要なのかなと思った。

の検討、市議会の答申を踏まえて高層部に配置するとあります。これは検討委員会での議題には上がっていないのですが、そういうふうになっているということとか、あるいは、市民協働の場所については、東日本大震災を踏まえて低層部にコワーキングスペースとか、そういうものを積極的に配置しようとなってます。それから、情報発信のどういう形になるかはこれから決めることだと思いますが、そういうような話が少し載っています。先ほどの小野田先生のお話も踏まえて、当然ここには決めていいこと、あるいは決めちゃいけないことみたいなこともひよっとするとあるのかもしれませんが、そういう冗長性みたいなことも含めて皆さんにご意見を伺いたいと思います。ここではぜひ駐車場についてもご意見を伺いたいと思います。

検討委員会の内容、議論のプロセスみたいなことについて、ぜひ青木さんからお話を伺えればと思います。プロセスというか、構内の話はどんな話で検討委員会の中で議論されたかというようなことを少しご紹介いただければと思うのですが、よろしいですか。あるいは、特別な意見があればぜひ言っていたらいいのですが。

そういう意味で、青森では「わの場所」と言うんですけど。一緒に飲んでいて「わの場所じゃない」というふうにみんな言いながら、つまんねって言うんですけど。僕は「わの場所」がすごく大事だと思っていて、そういうものが本当の意味での公共性じゃないかという気がします。

坂口：

ありがとうございました。

では、ちょっと切りかえて、増田先生にお伺いしようと思うんですけど。ここでは大きなビジョンを考えるということで、さっき増田先生がおっしゃった、もう少しある意味マクロとか、例えばその公共の施設のあり方とか、あるいは今後数十年単位で考えていくときに、今の状況がこう変わっていくので、わかりやすい言葉でいうと公共性の再編とかっていうことも視野に入れながら、市庁舎もそうだし、こういった文化的な施設も考えるべきだって観点はあると思うんですが。その一方、今ここで出てきた議論は、新しい公共という観点に立ったときに、個人あるいは団体が、あるいはいろんなアクティビティーが、自分のまちとか自分の

遠藤：

ありがとうございます。総合科コンシエルジュのようなところがあり、あとチャレンジの場、そこを発信する場にもしていけたらいいのではないかということでしょうか。大橋さんどうぞ。

大橋：

谷津さんの話を、すばらしいなと思って聞いていた。何度も言われているとおり、何とか課とか縦割りの機能別な組織は上のほうに来るのしょうけれども、組織した瞬間にどうしても壁ができてしまうことになるので、低層階はそういった上のほうの壁とまた違った世界ができるといいなというイメージがある。

それに関連して、柳井先生の話にあった、NPOのオフィスができたなら絶対うちは入りたいと思っていた。ただし家賃など、テクニカルな話はあると思うが、菅野さんが話していたコーディネート機能を担う人を雇うのは大変だが、入居する人はコーディネート機能を果たすることやそのようなことができる団体に入ってもらうなど、いろいろな話がかみ合っているなと思っ想像して聞いて

Table A1

中心部施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライズの構成を考える



Table A1

中心部施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

場所としてまちを使っていくような仕組みができて、歩くということを中心としたまちづくりを考えていくと、個々の活動とか私の場所がつながっていくんじゃないかということは出ているんですけども。でも、それは単に拡大していきただけじゃなくて、もうちょっとマクロで見ると、もう少し集中するところとそうじゃないところだったりとかっていう議論がきちっとないと、結果的に終わってしまうところが多いと思うので。もうちょっと数十年スパンとか30年とか40年とか先を見たときに、先程出たような公共の考え方というものに立ったときに、このまちづくりであったりとか、市庁舎を周辺とするような、この定禅寺境界でもいいと思うんですけども、こういったものをもう少し考えるところがあれば、コメントをいただけますか。

増田：

その緑の南のほうに震災復興記念館という施設があって、仙台市のひと・まち交流財団ですか。でも、残念ながら貸し館になっちゃっていて、地下には展示があるんですけど、あんまり見に行かないですよね。リニューアルしようとしている市民会館も、会議室み

たいなものがあって、会議室の貸し館と、その地下に下りたところが音楽の発表会みたいなものに使われているということなので、逆に言えばそういうのはもう市でやらなくてもいいよねという感じもします。そこにサポートセンターもあって、1階の部分はややオープンスペース的になっているし、途中階のいつ行っても自由に使える机が並んでいるところは、ややそのときに行った人がそこでいろんな活動をやっている。だけど、地下のところとかその他のところは、小さな部屋の貸し館、会議室になっていて、TKPと何が違うのというような空間になっちゃっているんですけど。でも、そこは、せんだい・みやぎNPOセンターの指定管理で、ややいろんなことをやろうとしているので、やりようとしては、そういうところをもっとうまく使うにはどうしたらいいかみたいなところを巻き込みながら。仙台市役所のオープンスペースや、市議会に直接切り込むのは難しいと思うけど、市議会が持っている会議室スペースみたいなものを、もっと市民が使えるようにして、そこに日常的にいろんなNPOの人たちがいるみたいな空間になるといいなというような、そんな感じはいくつか持っていて。多分、やれることはいくつかあるんじゃないかなと。

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

ていた。

新しいことを生み出すときは、機能・職能別の組織を超えて動く人がいるときだと思うので、そういう人がNPOとか市民の人と関われるような場に低層階になるといいと感じている。オフィスも大事だが、職員が気軽に来て、ふらっと交流できるような機能があるといいと聞きながら感じていた。

遠藤：

ぜひ入りたい。こうやって縦割りとかな分野を超えて動ける人が重要で、担える団体がある意味入っていくことが、イノベーションや地域の資源および地域益を考えることも含めて、コーディネートできるいい場になるのかなという感じもした。鈴木さんどうぞ。

鈴木祐：

これまで割とソフトの話が多かったと思うので、素人ながらハードの話もしておきたいと思う。いわゆる建築設計の話だと思うが、

今回新設する拠点なり建物は恐らく50年ぐらい変えられない状況になると思うので、ぜひ壁がない空間か壁が動かせる空間、もうこれは必須だと考えている。時間の経過とともに、小部屋を増やしたい時期もあれば、大部屋にしたほうがいい時期も揺れ動きがあるでしょう。イベントがあるときは取っ払えるとか、可変であるということは非常に大きなことだと思う。細かな点でいえば、しばしば美しい壁で画びょうが貼れないとかマグネットが使えないということは、非常にそういう意味では「対話や集積の壁」になるので、美しい壁というより、白板にマグネットが使えるとか、実用的な壁をつくれるのであればちゃんとつくって欲しい。ICT的な文脈における連携も進むでしょうが、ハード部分でも実は結構規定をする要素が多いので、建築のときにはぜひ検討をしていただきたいと思う。

遠藤：

そうですね、50年ぐらいを見据えて、一応100年を目指しているが、その後どういうふうに使っていかかというところが

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカイライターの構成を考える

青木：

何て言ったらいいのでしょうか。熟議ができるほど委員会の中では意見交換というような感じではなく、一定程度資料でこういった案ですというご説明があって出てきているので、それに対しての所見か何かのやりとりというようなふうに私の記憶としてはあります。ですから、この案に対してこっちだこうなるのでは、では、それは何故か、というようなことを一つ一つ委員会のときに議論し尽くしているのかというと、なかなかそこまでには至ってないというのが私の感想です。

書いてあることについて、どういうことが起こるのかとか、何故かということやなかなか納得できるまでの時間がまず難しいということもあるので、もちろんご理解いただいている方もいらっしゃると思うのですが、今のようにどういう議論があったかと言われると、出たものに対してどうですかという感想所見的なやりとりというのが、委員会の実情だというふうには感じています。

安田：

青木さんご自身で、今回の第4回は欠席だったということですが、

これまでの棟内の配置について何かご意見があればお聞かせいただきたいと思います。

青木：

建物と広場の関係とか、先ほどもご説明にありましたけれども、周辺と市役所のある境界の部分とで、そもそも市役所に用事があって来る方の利用ということもあれば、何となく近くにいってフラッと立寄るとか、ほかの用事が周辺にあって、たまたま市役所の周辺で過ごす時間というのがあると思います。今具体的に出てくる機能というものが賄えるところもあれば、目的を持たずとも何かそこにおいて居心地がいいとか、近くに住んでいる人がその空間のところに出てきて一日の何時間かを過ごせるみたいなこととか、何かそういったことが融合できているような空間であったらと思います。

あとは、市役所ならではのところで、前のCテーブルかどこかで議論されていたような気がするのですが、市役所の中でいろんな審議会とか日常たくさんある中で、今どういうことにどういう議論があって進んでいっているのかということや、委員会を通

もう1つは、外部の空間、駅東のエリアマネジメントでも、あそこにはだっ広い通りがあって、もっと何かに使えるよねという風に思っているんだけど。せいぜい何日かキッチンカーを並べるぐらいのところまでしかできない。市民広場からにじみ出してくるようなところに、最初から仕組みとして自由な空間ですというのを入れ込んでしまえば、全体ににじみ出していく。そこから辺のところから議論が始まり、定禅寺通りの真ん中の緑道部分みたいなものも、かなり自由に使うようになってきていると思うんですけど、そこからの動きは何かもうちょっと出ていくんじゃないかなという、そんな気がします。でも、1世代経ったらどうなるのかというのは、なかなか難しいですね。

坂口：

少し戻すと、さっき手島さんから、音楽ホールで広場の議論があったという話があったんですけど。僕も音楽ホールの議論に参加したんですが、あそこで出た広場というのはもうひとつ抽象的な理念もあって、それは社会的包摂というか、いろんな人がそこに開くようにしましょうと。音楽ホールだけじゃなくて、そういっ

あると思う。ちょうど鈴木さんからお話いただいたことなど、この論点3の管理や運営や活用のところに入ってきていると思うので、少しそれらも含めてどういう場であつたらいいのか、どういう機能があつたらいいのか、どういう運営だと皆さんが今話した場が機能していくのか、そのあたりも発言して欲しいと思う。ちょうど残り時間が20分ぐらいになったので、多分皆さん一言ずつぐらいは話できるかと思う。

小島：

先ほど遠藤さんが、前回までの議論で、区役所、サポセンがあって、それを全部集約すべきかという議論があったと言われた。今日は、市民協働を切り口としてやっているが、今回の本庁舎にあるべき市民協働の場としてどうあるかということも、市当局に問題提起をするという点で、なぜ必要かということ、それにプラス運営ということ、それを踏まえて意見ができれば、非常にインパクトのある討議になると思っているので、よろしくお話ししたいと思う。

さないといけないということではなくて、日常の市民の困りごとやつぶやきのようなものがそういった議論のプロセスの中に混ざっていけるような仕組みとか、何かそういったものが市役所の中であればこそ、反映できるような市民の参画のあり方というようなことが、形や機能というところに反映されていたら、という感じはします。もちろん、難しいことはあるとは思いますが。あとは、区役所や現場というのはそれぞれ地域にあるので、そういったところこの市役所というのがどんなふうに機能でつながっていくのか、というのがあります。それは、何かICTを活用したもので繋がるということもあると思うのですが、何かそういった機能や空間ということも、わざわざここに来なくても繋がることのできたり知れるというような、そういうアクセスができるようなことというのも何かあつたら、こっちにもいるけどそっちにも行ってみようという行き来が生じるような気がします。

安田：

ありがとうございます。

だんだん時間がなくなってきてしまったので、安本さんにぜひ伺いたいのは、先ほどの要求水準の話というのも少しありましたけ

た文化的なアクティビティーのマイノリティーをどうやって包摂する場所にするかということも一方ではあったので。外部空間と内部空間の話と同時に、公共と私とプラスいろんなインクルーシブな状況をどうやってつくるかということも、議論としてありました。それを具体的にどうするか、いろいろ方法はあると思います。ここまでの話を聞いて、梅内さんに市役所としてはどう引き取れそうかということも1回コメントしてもらった方が、なかなか話すタイミングが出てこないと思うので、よろしくお話しします。

梅内：

さっき桂先生のお話の中で、広場の話があって、北原先生もそうなんですけれど。市役所の隣に、道路を隔てて市民広場というスペースがあるんですが、あのスペースはもともと勾当台公園の、戦後復興区画整理公園の一部だったんです。市電を廃止して地下鉄を通すときに、公園を2つに割りまして、西側部分について、市民の方がイベントができるような広場ということ、今のようにならなって30数年が経っているんです。この季節はもちろんなんですけど、毎日イベントをやっている、週末なんていうのは

遠藤：

やはり場所も限られているので、そのあたりも含めて、お願いします。それでは、菅野さんどうぞ。

菅野：

まさに機能を集約するというよりは、セクターや、局部を超えていろいろ一緒にやらないといけないということだと思う。これは同時に、できるだけ資源や手間をかけずに調整をしようということだと思うので、様々なセクターを超えて、効率的に政策立案であつたりや、政策イノベーションを行う場所にしようということ。先ほどの間仕切りが余りないとか自由に変えられるとか、要はどんなリスクが起きてくるかわからないので、それよりも時期に応じて自由に変えていこうというという考え。何かそこから生まれたり、そこからイノベーションが起こったり、特に一番の主眼は公共財であるとか準公共財のような、行政が関与すべきものとしての領域のイノベーションは行政だけでは十分にひき起こせないということだと思う。

れども、実際に今青木さんが出席されている検討委員会で決めること、決めないことといいますが、あるいは、ある一定の振れ幅を持たせて考えることみたいなことも含めてご意見を伺いたいと思います。棟内配置の件も私としては個人的にはぜひ伺いたいのので、その辺と絡めてお話しいただくと大変助かります。

安本：

マイクが回ってくるまでは棟内配置、と思いついて見ているのですが、事前に棟内配置のこの絵を見たときに、これが機能としての配置を概念的にあらわしているのか、形状をあらわしているのか、いつの間に張り出しになったのかとか、いろいろわからないところがありました。そもそも市民利用と言いますが、活動のイメージが見えない中で、これが果たしてここにあるのがいいのかどうかといったところがあります。これは専門家云々ではなくて、一番気になったのが、議会と市民活動のスペースが離れていることです。市民の現状とか活動を見ないといけないのは行政ではなくて、本当は議会、議員さんのはずなのですが、なぜそれが一番高いところにいて、それで行政が市民と接するという、今の歪んだ日本の民主主義というのをまさに象徴したような配置だとい

Table A1

中心部他施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

Table B1

市民協働・これからの仙台区の仙台区の「市役所（シティホール）」を再考する

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

Table A1

中心部施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

何年も前から予約しないと取れないような状況になっているんですが、できたばかりの頃、私が市役所に入ったばかりの頃は、こんなにイベントは多くなかったです。それが、どんどん市民の方が使うようになって、今では外部の方も使われますし。東北中の方が、東北から仙台へのシティセールスの場として使ったりということで。マリさんから、仙台は東北を代表する玄関みたいなお話があったんですけど、そういう使われ方も増えて、非常に活用が進んでいるなどというのがあって。今回の市役所の建て替えを考える時に、市民広場と隣接した敷地を持つ仙台市役所を建て替えるというような時に、市民広場が大きいイベントのときには手狭になりつつあるので、人がたくさん来られますので、それを市役所の敷地あるいはその低層階の使い方とうまく連動させることで、30数年かけて利用の仕方が非常に変わってきたというか、利用頻度も上がってきたこの広場を、市役所のほうにも拡張させることで、広場としての価値を上げることができるんじゃないかと思っています。あとは、先ほど、先生方からお話があったような、市役所の低層階が、市民の方がよく寄ってくれるようなものになる、広場との関係の中で、市役所の側が何かを用意するというこ

とだけではなくて、そのような場として使われ得る余地があるのかなというふうに思っています。市役所の中でも協議、検討があるのですが、その中で、私の方でも使われ方というか、使い方というのは、非常に意識すべきじゃないかということをよく言っています。

また、二郷さんから、田邊さんもそうですね、歴史のお話がありました。やっぱり仙台の杜の都というのは、田邊さんがおっしゃった「いぐね」のように、人の手が入ってつくられてきた都市の中の緑という、そういう作為の入った杜でありますので。みんなと一緒につくってきた杜という意味で、杜の都という言葉も、みんなと一緒につくってきた杜という、そういう意味を込めて、杜の都という言葉が多用しているというか、そういう状況があって。そういう歴史、つくってきた歴史のようなことをきちんと見せるような場というのは必要だと思っています。

横浜市役所のお話があったんですけど、横浜も関東大震災で1回全焼して、戦争があってまた全焼して、またそこから立ち上がって380万の都市になってきたということがあって。横浜の港湾のところで日本丸ですか、あそこのところで横浜の歴史を見せ

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

例えば、協働政策イノベーションセンターとか協働政策デザインセンターのような、何かそういうコンセプトが体现されるような空間の間仕切りであったりプログラムであったり、調整する人が必ず存在し、情報がコモンスのようにそこにある、そういう場所じゃないかと思う。メディアテークも構造材まで見えるようにし、いろんなものをできるだけ取り払い、自由に動かせる、そういうものをしつらえに合わせてやるというのが、ここの設計コンセプトではないかと思うが、市役所低層部はこれの発展形ではというふうに思う。

遠藤：
議会も、「段差がなく透明がいい」といったご意見もあるがどうでしょう。

菅野：
議会もガラス張りがいいと思う。委員会室までガラス張りといったら困るとかもしれないが、本会議場は全然ガラス張りで問題な

いと考える。議会の様子が横ですぐ見えて、普通に子育て支援の政策立案をNPOと企業と行政と一緒にやっていて、その横では何かホームレス支援の炊き出しがやられている。これからのパブリックというのはそういう像だと思う。

遠藤：
セクターを超えてイノベーションが進むようや、ベースは行政だがそこに、ものやデータが状況としてあるということでしょうか。

菅野：
そこで例えば、企業の人たちもまさにランチを食べながら次の企画のディスカッションをしてもいいと思うし、そういう場ではないかなと思う。

柳井：
市民広場の利活用について、NPO活動やコミュニティービジネスに関連するイベントが見られるといいと思う。「あっ、あれやっ

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

のが、ぱっと見の印象が一番気になった部分です。なかなか難しいとは思いますが、建物の規模も絡んできますが、どういう種類の機能を持たせるのかです。市民利用というのは、あくまでもユーザーの区別であって、活動の区別ではないのです。行政は行政で事務というのがありますが、市民利用といったときに、本当は行政レベルの中に入り込んで市民活動とか市民利用機能というのものではないかというのがあって、その辺りもう少し。またそう言うと、働き方まで話が及んでややこしくなるのですが、何を議論するのかなというのがまだ見えてこないというのが正直なところありました。

安田：
ありがとございます。午前中にここであった今までのラウンドテーブルを振り返るところで、市役所というのは、本来は特にアメリカとかそういう場所では何を象徴しているのかと言えば、まさに議会であるという話がありました。それは議会というものが民主主義というものを代表しているからというストーリーだと思っておりますが、安本さんのおっしゃった市民とかそういったものと議会が離れているというのは、建築計画的にもある意味では大き

な問題で、もっと言えば、ここは本当にここで決めるのかというようなことも私としては少し感じる場所ではあります。それこそ設計者なりそういう方にぜひ任せざるべき場所なのかもしれません。ただ、こういう議論があったということは当然踏まえるべきだとは思いますが、何となくそういう気が個人的にはしております。

では、同じような質問になりますけれども、渡邊さんにも、この棟内配置を踏まえて、先ほどの決めないこととは一体何かということもぜひお願いします。

渡邊
この断面というか構成は、庁舎の1つの典型的な形です。議会が上にあるのか横にあるかの違いぐらいで、多分、今回本庁舎で求められている建築というのは、できればこういう絵ではないのかなと思っています。要は、先ほどもお話ししたように、市民が参加をする、あるいは、周辺のエリアと連携関係をしていくことを考えていくと、多分レイアウトが決まってくるのです。例えば今、安本さんが言われたように、議会と市民はもっと近いのではないかな。だからといって近くにつくる必要はなくて、と私

るような施設があって、私が行ったときも小学生のお子さんがいっぱい遠足で来られて、勉強していました。まちの歴史を考える時に、戦災や震災を乗り越えてまちをつくってきた我々の先輩の世代から次の世代につないでいく時に、やっぱりそういうものを見ながら一緒に考えられるようなスペースというのは、何かあってもいいんじゃないかなと思っています。メモリアル施設の検討もしていますけれども、それがこの前の震災だけでいいのかという議論は、本江先生やマリさんはじめ、委員会で協議していてもよく出るんですけども。そういったことも考えていかなきゃいけないなと思っております。

坂口：

ありがとうございます。

例えば二郷先生が最初提案されたものも、梅内さんの話にも少し出てきたと思うんですけども、先ほどちょっとお話し足りなかった部分も含めて、コメントをいただけますか。

二郷：

ているな、あれだったら、俺たちこういうのできるよね」というように、市民活動の可視化と気づきの提供ができる場だったらいいと思う。

結果的に、市民広場は発表や社会実験の場所として活かし、低層部のフロアでは、勉強してレクチャーできる場所として活かしていく。これを仙台らしくやってみたらいいのではないかなと思う。

谷津：

今の仙台の本庁だと、8階に300人ぐらい入るホールがあると思う。障害関係で年に何回か仙台市が主催をして、仙台市民向けの勉強会や研修会もよくやっているのだが、それを低層階でやれるといいと思っている。

遠藤：

現在の市庁舎ではホールが8階にあるので、下と一緒にやれるといいということでしょうか。齋藤さんお願いします。

は思いますが。あるいは低層部に市民利用レベルがいっぱいできているけれども、例えば、私が利用するとしたら、委員会でも日々のわいわいがやがやる議論でも、別に市役所に行く必要がない場合はいくらでもあります。むしろメディアテークを使ってがやがやと議論したほうがより目的に近づくような気がするので、必ずしも関係性が強いということでこういうのが決まってくわけではなくて、まさに仙台の市民の参画の仕方とか、これからそれを通して見えてくる庁舎のあり方ということを実際に考えれば、条件として設計者に示せるのではないかなと思っていて、そのつくる順番とか味加減というのは、建築家がやればいいのではないかなというのが先ほどの話です。

何かこれを見ると、真ん中にどん、と行政機能があって、あまり周りと関わらないで仕事したいというふうに見えてしまいます。でも、求めているのは、そこではないでしょう。そんなこと誰も求めてないわけだから、そういうことを考えていくと、絶対何か出てくると思います。あるいは、絶対何か出してくれる人を選ぶということだと思います。

安田：

新市役所のホールのお話が出ました。先にもお話ししましたが、今の市役所の場所は、安政の絵図にもある養賢堂の御用地です。そして、後ろには待屋敷があって、そこにまたがって現在の市役所が建っています。これらの歴史的空間、変遷も伝承すべきです。

又、仙台が「杜の都」というお話がありました。この杜は屋敷林を指し、東北大学植物園の自然林、青葉山一帯を覆っている現在の緑の空間とは意味が違います。仙台市の「百年の杜計画」では、仙台城東側崖地の緑を、素晴らしい植生で次の時代まで残すべきとしました。しかし、明治の「廃城令」以降放置され、崖崩れの崩壊をそのままにしておいた結果での緑の壁です。屋敷林、自然林、放置崩壊林を一緒にし、「杜の都」の象徴の杜として、同じ緑生として扱うことには問題があります。又、自然空間として放置されている「竜の口溪谷エリア」は、「仙台城」を守る南側の要害でした。周辺部丘陵地の開発、崩壊放置、流入水による水質汚濁、放置したが故の多様な動植物の消失等、「杜の都」の緑空間が理解されないままに展開しそうで心配です。

歴史とは何か、自然とは何か、文化財とは何か、杜と緑とはどう扱うべきか考える必要があります。

齋藤：

空間や場については私も思うところはあるが、あえて人について話をしたいと思う。こういった場所にフューチャーセンターをつくると、必ず出てくるのが人の話である。そのブルーラルとか、いろいろなセクターを超える人というのは、よほど傾聴力があって、ひらめきがあって、思いやりがあって、イノベティブじゃないと、そういった人材はなかなかいないという話に必ずなる。それは、例えば有名なディレクターを連れてくるという話ではなく、ディレクターシップが必要だということだ。市役所で働いている方々は、こういった横申を通していく仕事をするための、例えばコーディネーター力とかファシリテーター力とかキュレーションとか、時にはデザイン思考的な能力も必要だが、そういう人を育てなければいけないので、多分まだ先7年ぐらい猶予があると思うので、ぜひ時間をかけて人を育てることをして欲しいと思う。あとよくやるのは、この庁舎建設がゴールではなく、先の10年、20年が勝負になってくるので、「まだ7年あるね」ではなく、3年後にプロトタイプでそういう場をつくってみようとい

ありがとうございます。

少し確認しますが、何をするかを考えていけば、そのための条件を示せばいいということで、こういう断面を出せという話ではないのだということでしょうか。

渡邊

断面は結果であって、あるいは、物事を考えるときの1つのタイプであって、最初からこれが出てくるわけではなくて、条件を示すといえますか。今、この議論のこの計画の中でまた批判してしましますが、決定的に足りないのが熱意です。小野田先生の話もそういうことなのだろうと思うのですが、そういうことを本当に考えれば、答えは出てきます。

もう一つは、もっと時間をかけませんか。10年といわれたけども、ほかの事例を見たらもっと時間かけています、これだけのものですから。もう少し時間をかける意味は、もし間違えたら戻れるようにするとか、考え方を変えるとか。もっと世の中が変わっていくと思います。小野田さんが言われるように、人です、と言っているわけです。

Table A1

中心部他施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライズの構成を考える

Table A1

中心部施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

防災、地震について歴史の視点で見ると、仙台は多くの地震に見舞われてきました。マグニチュード6以上の地震は、江戸時代9回あり、明治時代には5回、大正時代には一回、昭和では7回、平成に入り12回あったとの事です。江戸時代の記録はしっかりしておらず震度、回数についてはあいまいな部分はありますが、その度、多くの建物が崩れ、改めてまちづくりをしてきました。その度に侍屋敷が、町屋になったり、区画が変わったりと町がどんどん変わってきています。

市役所周辺にもめぐらされた「四ツ谷用水」は、戦前まで一部が残されていた「芭蕉の辻」の街道中央をも四方に流れていました。ここにあった角の四つの櫓は街道筋の櫓としては大変珍しく、特徴的なもので、地震の度、何度も修理改修され、戦前まで一部が残されました。そのような事象、記録も発信してゆく必要があります。過去の地震の事を申し上げたのは、今回の計画に、都市の防災センター的要素を新市役所のホールが持つべきと思ったからです。仙台一番の繁華街に連なるこの場所に、一番町周辺を訪れる多くの市民が万が一でも災害に遭遇した場合の為、ここに避難場所として展開できる機能を持たせたら如何でしょうか。防災セ

ンターとしてやってゆく上では、救急活動はもちろん、自立できるエネルギー、省エネ、太陽エネルギー、水源等を確保する必要があります。

手島：

ありがとうございます。実は、二郷さんに今回ご登壇をお願いするときに、悩みを、僕は何回かこのラウンドテーブルをやっていて、悩みがあるんですね。というのは、歴史まちづくりの方々は、すごく熱心なんです。ただ、なかなかこれが実際に融合して1つのまちの何かのビジョンになるまでに、まだ距離があるんですね。今日も僕はそう感じたんですけど、本当はこれ、1つのまちのことで、1つの歴史を共有しているはずなので、本当はどこかの答えが見つかるはずなんですけれども、なぜかそれがなかなか見えない。見えるまで本当はやりたいと思うんです。でも、やっぱりこれはすごく難しい問題なんですよ。何ででしょうね。

例えば、震災の経験をどうこの市役所本庁舎に生かすのか、何となく僕の中ではイメージがあるんですね。その直接的な震災をどう受けとめるか、あるいはそれをどう防災に生かすかは、多分メ

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

うような計画を立てながら、まず人を育てていく活動をぜひやって欲しいと思う。

遠藤：

ありがとうございます。つくって終わりではなくて、そこから先、そして、そこですぐに活躍できるような人を育てるということも含めてということでしょうか。

鈴木平：

先ほど冒頭で、小島さんから市民協働の話があったが、ボランティアがキーになってくると思っており、先ほどの議論の中で、恐らく仙台市庁舎は集約機能を持つ性格が強くなるのだらうと思っていた。ボランティアを担う機関は、大学のボランティアセンター、社協、ボラセン、各NPOがコ・ボランティアの募集をしているところがあると思うが、ボランティアをする側の人からすると分散していてわからない。社会参加をしたい人が市役所に行けば、地元や近くでやっている情報が全て集約されている。そこにコー

ディネーターもいて、ちょっとやってみようかなと思うのではないかな。詳細は自分の近くのコミュニティセンターへ行こうやボラセンへ行こうと、市民の参加という部分は進んでいくと思う。

そこに、情報なのでデジタルマップや紙媒体など、そこに情報が集まるということは、そこでボランティアや市民参加に対する情報が、参加した人の情報も集まってくると思うので、そこで調査研究やさらに改善した部分というのでできるようになると思う。それが、既存のボランティアセンターや市民協働の部分を余り変えずに、そこを活かしつつ、集約機能としてさらに発展させる部分があれば、仙台の市民協働の歴史というのを踏まえながら、さらにそういう市民協働をより発展させていくというふうにつながるのではないのかなということを考えている。

遠藤：

ありがとうございます。集約機能と地域で活動する機能をコーディネートする部分もということでしょうか。

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物の構成を考える

安田：

ありがとうございます。

では、小野田先生のほうから少しお願いします。

小野田：

渡邊さんが言われていることは、ああいうふうに設計条件を空間化するのではなくて、隣接関係を示して重要度を確定するだけで、これをどこに置くかというのは、建築のボリュームとか、どういうふうに位置づけて都市の中に置くかという建築の設計と深くかわるので、ああいうふうに決められない、普通にやれば、という事です。それで、あれが決められているのは、普通の庁舎をつくりますという構想があってという、そのプロトタイプをそのままとってきているから決められるのですが、そういうものをつくるわけではないのでしょうか、ないと思いますけど。そういうものを絶対つくってはいけなく私は強く思います。特に委員の先生方に言いたいんですけども、この激動する21世紀に向けて、20世紀型のああいう基壇型の建物をつくるというのは、全くナンセンスだと思います。今の常識かもしれないけどナンセンスだと思います。大事なのは、あの敷地の中でどういうふうにこの6万平米

があるべきか、というのをボリュームをチェックしながら、その中でどういうふうに各機能が連携すべきかを丁寧に精査してそれを空間化することです。そうすれば機能は満たします、必ず。だけど、それで議会が上に来るか下に来るかはスキーマによるから、それは幾つか見ていただいて実際に5つか6つぐらいを、最終のプロポーザルの段階で5つぐらい何かそういう傾向のものを絞り込んで、その中で市民も参加した中で、やはり我々の未来はこういうことだというふうに決めたほうがよろしいのに、もう入り口から標準設計みたいなことで可能性を狭めるのは、そういうところがあってもいいと思いますけど、メディアテークを建てた、震災があったときに非常に市民力が盛り上がって非常にスムーズな復興ができた仙台市が、やるべきことではないと私は思います。

安田：

ありがとうございます。

今、画面に示していた点、少し字が小さくて見にくいですが、多分市役所の中の機能を関係性の中でひもとくと、大変複雑ですが、こうなっています。これをまとめていくことが1つの、これはどちらかという市役所の内部の話なのかもしれないんですけど、あ

モリアルとかそういう方でやればいいと思うんです。もっとあれが世界の、あるいは日本の社会の転換点であるならば、それを実際の社会の中で我々はどう消化しましたと。要は、民主主義や市民社会のあり方であるとか、あるいは住民の合意のあり方であるとかについて、どう消化したかを市役所本庁舎に移しかえればいいんだと思うんですね。なので、それは実際にできる能力が僕らにあるかどうかという話は別ですけども、何か連絡してやるということは何となくイメージできるんですけど。どうも歴史は難しい。何なんでしょうね。

坂口：

僕が手島さんのコメントを聞いて思っていることは、前半田邊さんがおっしゃったんですけど、たまたま仙台にいる、リズさんもそうなんです。結構、流動化しているまちなどがある。もともと仙台に、生まれ育ちは別に関係なくてもいいと思うんです、今仙台にいる私たちが、このまちに対してどういった認識を持って、それにどういうふうな期待を持って、かつどう使っていくかという視点と、過去数百年とか、どこからスタートするか

菅野：

今の仙台市役所ってどうできたかって知っているだろうか。実は、仙台市は塩竈市と合併したかったのです。港が欲しかったから。仙塩合併と言っていたが、そのときの中核として、グレーター仙台の拠点だといって今の市役所を建設した。おそらく西洋の市役所などもイメージしていたと思うのだが、「これちょっと写真見えますかね」、噴水の前で結婚式を挙げている。この噴水は今でもある。50年前ぐらいのほうが自由に使っていた。こういう感じの余りかたくなならないほう、柔軟なほうがいいと思う。歴史に学ぶべき。

遠藤：

なるほど。結婚式する上でも車は邪魔だということでしょうか。

大橋：

市民活動サポートセンターの機能強化委員会みたいなものがあって、私もそこに参加して話をしていたが、あそこもコーディネー

る意味では設計者ができない部分というか、前提にしなければいけない部分ということなのだと思います。学生でもこういったような関係性をきちんと整理できることは、存じ上げておりますが、少し整理します。渡邊さんが言われていた時間をかけるという話があったと思いますが、菅原さんからご説明いただきたいのですが、今回の時間軸的について大雑把にご説明いただくことは可能ですか。何年にできますというのでいいと思いますが。

菅原：

年度単位で、時間をかけて検討すべきだというのは、確におっしゃるとおりだと思います。ただ、どこまで時間をかけられるかという話も実は一方でありまして、午前中、同じように話があったのですが、市役所の本庁舎の耐用年数というの、コンクリートの中性化だけの話でいうと耐用年数は平成42年度とかなので、今から10年後とか11年後ぐらいにコンクリートの中性化が進み、かなり爆裂とかもしてくるので、補修すれば何とかなるかもしれないですが、そのぐらいをめどに建てないといけないところがあります。

これからの設計とか工事とかの話でいくと、設計とかで2年とか

わからないですが、歴史的な変遷みたいなものの接点がある。もう少し、それが教育的な何かかわからないんですけど。そこに至らないけど、ひょっとすると昔の仙台はこうだったかもしれないということだと思えます。

前半に、梅内さんもおっしゃった、市民協働でまちをつくっていくときのスタートラインが、まだばらばらなところがある。思いもあるし、やる気もあるし、多分ノウハウもあるんだけど、ちょっとスタートラインにばらつきがあることが、結果的に何か議論がなかなかちよつとうまくいかなかったり、ささいなことで対峙しているところもあるのかなとちょっと僕は思うんです。だから、歴史教育なのか、日常的な何か。さっき北原さんがおっしゃった個人の行動の中に仙台の歴史が入ってきているのかどうかということも、僕はちょっと今日のお話を聞いて思ったんですよ。

北原先生も、仙台に永くいらっちゃって、関わりはあると思うんですけど。ちょっとアウトサイダーな目も実はお持ちなところがある。そういった部分が僕は逆にいいのかなと思ったんですけど。個人のトリップの中に、そのまちの歴史とかそういった観点を生

ト機能をどうするか結構肝になっていたが、非常勤で雇っている職員が、いろいろな課題ごとに複雑化して、制度も違えば、ネットワークも広がっている中で、コーディネートするってやっぱり難しいわけである。ただでさえ難しいものを、非常勤の職員がやっていくのは難しいという話は何回もされていた。同じような話になってしまうが、こういった場を設けても、コーディネート機能を持たせるかまで考えないといけないというのはそのとおりだと思っている。一方、財政が厳しい中でコーディネーターを雇って育成することもなかなか難しいと思う。それならば、現場でやっているNPOが一番詳しいので、ネットワークは持っているわけで、そういう人をうまく活用して、コスト削減をしながら効果を上げていくという発想がやっぱり大事なのだと考えているので、これは本当に実現したいと思っている。

遠藤：

そういった活動上で、セクターを超えるような動きをしている方が、うまくこの場とマッチングしながら、役割やコーディネー

3年ぐらい、そして工事とかで4年から5年ぐらいというのを考えますと、トータルで8年とか9年とか、そのぐらい先での完成を目指しているというような状況です。

安田：

ありがとうございます。大雑把に言うと、8年後にできるというお話ですので、時間があるのかなのか、あるいは、時間がかけられているのかということも含めてお考えいただければと思います。久保田さんにも同様の内容でお願いいたします。

久保田：

1点突破で意見を述べさせていただきたいのですが、資料のほうで今もお話があったとおり、説明資料がいわゆるビルディングタイプの形を使って説明されています。この断面図もそうです。皆さん、これが機能要件なのか、それとも建物を示しているのか、あるいは、3回目のコアの質問がありますが、これはコアをこういうふうな、これテナントビルのコア、今だと、ヘッドクォーターで今後こういうタイプのオフィスをつくる人はいないと思います

Table A1

中心部他施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライズの構成を考える

Table A1

中心部施設とのネットワークから
「市役所（シティホール）」が担う役割を考える



Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから
「市役所（シティホール）」を考える

ト機能を果たしていくと。そのためだけにつくらなくてもいいじゃないかというご提案ですね。どうぞ、鈴木さん。

鈴木祐：

つくづくきょう皆さんと話して、新しい市民協働の水準を定義するのだからと、それを仙台から改めて発信をしていくぐらいのことが必要で、その中の中核的な情報や状況を開示すること、オープンにすることで、時代の開拓をするほうの拓くという新しい課題がそこで拓かれるというか。人材の流入を促すことは、これはハリケーンのカトリーナがあったニューオリンズだと非常に顕著で、支援に入った人が地域で起業する、あるいは課題が明示されることで、アイデアを持っている人がわざわざニューオリンズに行こうという流れがある。例えば東京や関西の起業家が自分のアイデアをどこかで具現化しようといったときに、究極、九州でも別に関西でも東京でもいいのだけれども、でもやっぱり仙台でしょって言わせる何かがある街だといいなと考えている。実はデータや課題が開かれていて、仙台の利益になるアイデアであれば一

緒にやろうよということを出せるかどうかではないのだからかなと思う。

そういう意味でいうと、新しい施設の管理運営も、いろいろな課題だと状況だとか、あるいは情報が持ち込まれることによって、これは行政でどこまでをする、あるいはこれは民間の事業に事業化してしまったほうがいいじゃないかとか、これだったら金融がいけるとか、これやっぱり寄附じゃないとだめみたいところが、場合によっては、その3分の1ぐらいは子どもや若者が入るとか、その半分はもう絶対的に女性だよとか、そういうことはもう極めて配慮した上で、この地域益のセクター横断型の課題をどういうふうにやっていくか委員会みたいなのはあっていいのだからと思う。

つまりそういう意味ではいろいろなコストも下げるし、あるいは行政自身も、あるいは市民自身も役割意識を変えるということが必要で。つまり、地域課題そのものが、表現は異なるが、営利系のビジネスチャンスにもなるし、非営利系でいえばいわゆる仕事になるということ、直結をしたある種の情報の集約の機能とし

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や
建物配置・規模・スカイライターの構成を考える

が、今後ヘッドクォーターオフィスでこういうコアタイプのオフィスをつくるのは、相当なくなると思います。これテナントビルですから、というようなことも含めて、こういったビルディングタイプの図を使って機能の説明をするというところから一旦引いていただいて、もう少し概念的な説明をしていただいたほうが、理解がしやすいのではないかと思います。

安田：

ありがとうございます。

この検討資料にはかなりそういった具体的に建物を想像してしまうようなイメージ、図が多用されていますけども、小野田先生のお話からかなり議論になりましたけれども、やはり決めてはいけないというか、ある意味では設計者に委ねる部分というものを少し明確にしつつ、準備をしなきゃいけない部分はきちんと準備をしていくということが、今の段階で最も求められているのだからということだと思います。

だんだん時間がなくなってきましたが、榊原さんも同じような内容でよろしく願います。

榊原：

やはりこの図がほんとに誤解を生むのだからというの、もう率直に見えていて、例えば1棟案でこういうふう到低層部があるという図を見たときに、仙台市は市民協働と言っている割に市民協働する気がないというのがわかります。どうぞ下で活躍してくださいという事です。上下とか関係なくですが、もう融合する気ないですという、そこがありあります。セキュリティのレベル感で示されている段階で、そんなことさらさら考えてないということ、言葉で言っているのと資料で示すのと違うというのが、もう率直に見えています。多分そうではないと思うので、そうではないということをしかり示さないと、と率直にそういうふうになりました。

安田：

ありがとうございます。まさに、市民協働を図面にあらわすというのは、こういうふうにあらわしてしまうと結構危険な内容かと思えますし、いろんな役場で市民協働のスペースというのは、分散して配置されるというのも最近よくあるタイプですし、何となく低層部分にぼぼっと入れるっていうのは少し違うという違和

み出すために、何か北原先生なりのヒントはありそうですか。例えば、いろんなまちづくりやっていくときに、歴史家の方とか、多分接点があると思うんですけど。そのまちをつくっていく話と、まちを使っていく話と、そこのまちにもともとあった歴史的な変遷みたいなものと、何かしらちょっと接点を持たなきゃいけないかったり。場合によっては、それを乗り越える部分も出てくるかと思うんですが、どうですか。

北原：

そんなに難しく考えないんですけど。さっき言っていたように、僕はとにかく、もう25年前になっちゃいますけど、引越しました。家族は、こちに住んでいました。そう見えて、逆に言うと、僕は弘前だと来たばかりの人なので、満喫しました。リンゴの木まで持ちました。それで、リンゴをとにかく見ようと、リンゴがなっているときじゃなくて、冬に耐えているときに見て、子供たちに「いいか、この今見ているリンゴが後で食えるぞ」とか言いながら歩いたんですけど、とにかく歩いてみるしかなかったわけ。

て、あるいはそれをいろいろなところで役割分業をするのだというコーディネーション機能としての低層階、そういうものがつながると、それがすなわち仙台の持続可能性の向上になるので、それはあらゆる面でビジネスであり、あるいは仕事になる、それをもって市民の暮らしがよくなる、そんなようなことをきょうの話から少し感じたところである。

遠藤：

課題をオープンにすることで、そこに人が、いろいろな方が問題意識を持ってやってきて、そこでアクションを起こしていくことが、セクターを超えて動きが出てきて、そして課題をどうするか委員会、目安箱委員会みたいな、ある意味、コーディネートとマッチングとファシリテーションを、一人でやるのではなくて複数でやるということでしょうか。多世代で。ありがとうございます。

小島：

皆さんお手元になと思うが、いわゆる各機能の諸室として、市

感を持っている一般の方もかなり多いかなと思います。これから、市役所の機能は80年間で当然変化していくということも踏まえると、ほかのやり方も十分検討すべき、あるいは、設計者に委ねるべき内容なのかもしれません。

阿部さんもぜひお願いいたします。

阿部：

なかなか難しい議論だと思います。こういう図面で示されてもなかなか判断、一市民としては判断できないというか、私などは建築の専門だから、なおさらそうなのですが。

それから、小野田先生が関係図を示されましたが、あの関係も随分変わっていくのだろうという、行政の。特に今の行政の流れだと、どんどん公共サービスを市場化していこうという、すさまじい勢いで、その良し悪しは当然あるのですが、そういう動きもあって、ボリュームそのものが果たしてフィックスできるのかという議論もあるということです。ですから、相当柔軟に考えていくというか、発想をまるで逆に変えていかななくてはならないというか、そこまで多分我々は迫られているのだろうと、特に当事者は大変だろうと思います。そこのところをどうやってお互いにわかりやすく情

それで、結局地域のことで歴史的なこととか、うちはこうだよねとわかっている方々も、実はそう言いながらも、自分たちで歩いてしっかりと自分の目で記憶しながら仙台を楽しんでいるのかという話をすると、弱いと思ったわけ。僕は、仙台でいろんなまちづくりをやりましたけど、まだ足りないと思った。行ってわかりました、まだまだ知らないやって。だから、そういう意味から言うと、接点云々の前に、僕らの時代の中で歴史的なものを自分の目の中で、そして自分の考える余地の中で感じるができなければ、意味がない。そういう意味で言うと、僕らは基本的にまだストレンジャーなので、そこをしっかりと自分たちで見て、その理解の仕方はみんな人によって違っていいから。だから、私の場所という言い方が違っていいと思うんだけど。そういうふうな形で各自が楽しむ楽しみ方というのは、歴史を考える人、新しい自由さを考える人、さまざま人がいていいと思うし、その見方というのは、参考になる人もいるし。違うものを持ってきて、そこに旅行者の目も必要だし、自由なそういう多様性みたいなものを見ていくべきであって。何か決まったような見方で、このまちをやりましょうという話とは違うんじゃないかなという気がします。

Table A1

中心部施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

民協働施設は市の会議室と共用するとか、いわゆる市が運営してしまう、管理してしまうということが前提にある。そうすると、今までの皆さんの議論が雲散霧消する可能性もあり、運営管理については、ぜひ市民とかそういったところが主体的にとかを、誰か市に言っていただければと思っている。建物自体を指定管理でやることは、市に監督権限があるので、今の制度だとなかなか難しい。別な運営のほうがいいと思うが。

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

遠藤：

指定管理以外にも何か提案があれば。鈴木さん、どうぞ。

鈴木平：

直接的ではないが、市の職員の方も上の部局長の方も、もしかしてNPOも、市民社会が何かそもそもわかってないと思うので、それでは、いきなり何か管理方法はこれというふうには持ってきても、余りうまくいかないのかなというふうには思っている。なので、例えば、それこそ遠藤さんにワークショップを開いてもらって、

報を共有化していくか、まさにその知恵を出すところなのだろうということで、こうあるべきだという話は多分なくて、そのあたりの知恵の出し方を少し練ってもらって、合意形成したらいいのではないかという感じがします、今の点は。

それから、ボリュームで西側、東側の話がありますが、やはり周辺の方々との調整といいますか、冷たく言うと商業地域だから、日照とかそれは関係ない、住民権みたいな話に市の条例ではそのような話になります。本当にそれでいいのかどうかというのはやはり、問われていると私は思います。やはり市街地の質を上げるというのも、市役所をつくる事の1つの命題ですから。まちづくりなんて一般的に言っても、どんどん住環境の質が悪くなってくれば意味ないことです。だから、それはそれできちんとした調整の議論をやってしかるべきです。この際、仙台市のまちづくりの大きな原点という意味でも、いわゆる商業地域というか、都心部の環境のありようについても周辺と議論していくという、ぜひそういう取り組みにしていっていただきたいなと思います。

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライズの構成を考える

安田：

ありがとうございます。

Table A1

中心部地施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

坂口：
ありがとうございます。
あと、15分です。ちょっと全員均等に話しすることは難しいと思うので、ぜひ田邊さん、お願いします。

田邊：
私は、広瀬川景観協議会という中流域の景観を守る市民活動をしています。私たちって、常に青葉山に向かって風景を見てますが、実は青葉山側からこちらを見ると、杜の都にしてはどんどん緑が減っているのです。西公園の向かい側のところに武家屋敷跡があって、そこがマンション開発で、やっぱり緑が減ってしまいました。そのように、杜の都と言いながら、どこかでものすごく欠落してきて、どんどん緑も歴史的な景観もどんどん減っていくことにすごく残念だと思っています。それは、都市化していく中で避けられないことだと諦めるのか、仙台って政宗のつくった城下町らしい風情があるわけで、少なくとも守れるものは守ってほしいものです。

確かに、市庁舎の中で、それをビジョンとして歴史をどういうふうに取り入れるかということは非常に難しいのですが、プロ的な、専門的な力を持った人々が集まって、これからの仙台をどうするかということを話し合って実践していく、市民協働のプラットフォームを、市庁舎の中につくってほしいと願っています。

坂口：
ありがとうございます。
増田先生は、市民協働なんかにもお詳しいと思うんですけど、ちょっと言い足りなかったことも含めて、このタイミングであればコメントいただけますか。

増田：
あんまり詳しくないんですけど、仙台の。他のところには遠藤さんとか長谷川先生もいらっしゃいますけど。恐らく、第一世代にいろいろなNPOを立ち上げた方々が世代交代の時期を迎えていて、いろいろなNPOをもう1回新しい形に考えなきゃいけないなと思っているときに震災が起こって。外からいろんな人たちが

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

そこに行政の担当者とNPOと市民というようなマルチセクター、もちろん企業も入って、その中で、「それでは市民社会って何だろうね、我々というのはどういう役割なのだろう」ということを深めていって、お互いが異なるセクターだけでも、役割分担しようねとか、ここはクロスオーバーしようねというようなものややっていく中で、多分見えてくる新しい制度ができるのかなというふうに思っているので、安易に今の何か、どこかに出しましょうとかではなくて、そういう議論をちょっと入れてほしいなと思っている。

遠藤：
その新たな仕組みを考える場をつくっていくことも必要ではないかということでしょうか。
菅野さん、どうぞ。

菅野：
まさに、市だけで運営・管理を決めてはいけないというのは大前

提である。様々なセクターやいろいろな人が入って決めるべきだと思う。そのときに、運営コストが下がるということを重視するのではなく、地域とつないだり、セクターを超えたり、コーディネーションできるプロがいることが必要。その2点が重要なことだ。

齋藤：
外部の人も一緒にやるのはもちろん、そうしていかなければいけないが、市役所に勤めている行政の方々自身の意識改革や今までとは違うマインドセットを持ってもらう機会とか、場とか何かトレーニングとかをぜひ、それこそ市民協働でやったらいいと思う。

遠藤：
この場ができる前からということでしょうか、それともできてからでしょうか。

齋藤：
できてからでは遅いと思う。

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物の構成を考える

ボリュームの話が少しあったと思います。やはり80年で、単純に言うと人口統計をしてしまうと、仙台市というのはもうどんどん人口が減っていくということは、仙台市に限らず、日本の地方都市は減っていくということはほぼほぼ間違いない。その中で、当然市役所ですから、どこかで区切ってボリュームを決めないといけないというタイミングはあると思います。それが8年後に完成しないといけないというタイミングで、現状でボリュームを設定していく、その中で80年ということ考えたときに、冗長性というか、例えば、もっと小さくなったときにどうしますかとか、そういうような可能性みたいなこともひよっとすると踏まえる必要があります。何も19建ての大きなカチッとしたオフィスビルを建てて、はい終わりということではなくて、動かない部分は当然あるけども、それ以外のところで、例えば少し仮設で対応というわけにはいかないでしょうけども、耐用年数の短いようなものをセットで加えていくとか、そういうような可能性もひよっとすると設計者の選定の中によっていくのかもしれないけれども、提案として受け入れる余地があるのかもしれない。そんなこと絶対行政はできないのだという話も当然あるのかもしれないけれども、そういう可能性があるということもあるでしょう。

それと、市街地の質を上げる。これは、言葉で言うとももちろんそのとおりですが、実際にはなかなか難しい話だと思います。これこそまさに、メディアテークが20年という時間をかけて定禅寺通りがある意味では象徴になっていくというプロセスをつくり上げた1つの成功例だと思いますが、仙台市役所も、シチュエーションは違いますけれども、同じような責任を担っていて、当然そこを見越した建物ということが求められます。それは、今のところ多分言葉でしか言えないけれども、形としてぜひ見せていってほしいということだと思います。

余り時間がなくなってしまって申しわけないです。桂さんに今、決めること、決めないことという意味で、横浜市の中ではどこまで決めて、どこまで決められなくて、設計者選定という意味ではどういうプロセスをたどったのか、デザインビルドだったというお話も少しありましたけれども、その辺も踏まえて少しご説明いただければと思います。

桂：
行政と建築の設計と両方またいでいる立場の僕からしますと、実は今の議論には違和感もあって、設計者に全ての権限を与えてし

たくさんやってきて、新しい刺激を与えたところまでが今なので。ここからどういうふうにやっていくのかというのが、この次の動きになっていくんだろうと思います。

一方で、かなり震災の資金バブルみたいなものがあって、それぞれの活動団体はかなり水ぶくれしてしまったようなところもあって。本来のまちづくりとか、環境保全とか、歴史探索とかというところを、もう一度どういうふうにつくり直していくのかというのが、重要だなというふうに思っています。その中でいうと、震災復興記念館とか、仙台市博物館とか、音楽ホールとか、いくつか今後そこをある種の拠点としてもう1回、公共施設も建て直すし。そこでの運営の仕方もあるし。市民協働のまちづくりとどういう風につながっていくのかという中で、もっと開いてくれれば、それぞれいいんじゃないかなと。そうすると、両方から見ても、新しい動きをつくり出せるきっかけになるんじゃないかと。

仙台市庁舎本体は、なかなか難しいんですけど。でも、さっき、市議会の議論がありました。直接市議会に市民活動がというのはなかなか難しいですけども、まちづくりや財政再建みたいな方向に関心を持っている人は、オンブズマンも含めてだと思っ

遠藤：

できる前から、そういった行政の職員の方々と、改革とかマインドセットを変えていくような取り組みをした後に、市役所ができ上がるみたいなのところであろう。なので、その場で活躍できるとかでしょうか。どうぞ、谷津さん。

谷津：

今、仙台市の自立支援協議会の委員をさせていただいているが、その仙台市の自立支援協議会の検討する内容というのが、どうしても障がいのある大人を対象にした内容で話が進むのだが、私の立場からすると、障がいのある大人の人たちの制度の中で、障がいの子の話ってすごく難しいことなのである。だから、子どもは子どものことを考えるところをつくってほしいというふうにお願いをして、子ども部会をつくってくれというのをここ2年くらいずっと言い続けているのだが、なかなかできない。これ批判ではない。それは多分、部会をつくるというのはお金もかかる、意見

まうというの、かなりリスクだと思っています。建築の正義は一方のところがあって、今まさに建築のほうも多様性を獲得している最中だと思うのですが、それがうまく機能するようになるのはもう少し先なのではないかと思っています。

その中で、発注する技術という話が出てすごくいい言葉だなと思ったのですが、今このタイミングでは発注する技術が特に問われています。小野田先生に見せて頂いた相関図のような、クリエイティブな発注の仕方ができるのであれば、多分設計者は最後のところで力を発揮すれば良くて、発注者側のほうもうまくリードできる。うちの市役所は、最終的にはまさに先ほどのプリツカー賞をとった先生が設計をしているわけなのですが、正義感が一方向というか、多様性を獲得できないというか、こちらからするともっとコミュニケーションをとって、それによって案も変えてほしいと思うことがありました。シェフに任せたいほうがうまい料理出てくるという話は確かにある。私も設計の出身なので信じたいし、きちんと筋の通った建築の良さは何にも代えがたい。一方で悩ましいところもあるというか、正義感やデザインの方向がひとつしかない方は、この先、難しいかなとも思います。

あとは、民主主義、先ほども、第1回のときも民主主義の話になっ

てですけど、やや市政のあり方自体に新しい提言をしようというふうに思っている市民活動の組織もあります。市議会の人たちの発言録を自ら掘り起こしているような活動もあったりもします。新しい方向があって、それは既存のシステムを上から壊すというのはなかなかうまくいかない面もあると思うんですけど、市議会も少しこっち側に出てきてもらって、市民活動のほうも、要望団体というよりは協働の何とかみたいな形で、こういうテーマのこういう議題があるので、そこでは市民の人たちはどういう活動のあり方があるのか、議員の人たちはどういうところに特化していくのかみたいなことを、本当はやればいいのかというふうに思ったりもします。

もう1つ、各地に点在する公開空地なんですけど、まちの中には誰も入らない公開空地もたくさんあって、でもそれを拾い起こすと、相互でかなりのネットワークになっていくので、そこら辺どういうふうにするかというの、もう1回あるのかもしれない。私の土地と市有地の中間みたいな土地も、議論としてはあるので。そういうところを歩き回るとか。でも一方で、メディアテークの中に20世紀アーカイブの活動など、こういう動きを進めている人

は聞くけど、その体制をつくるために市はお金を使うとか、人を充てなければならぬという、多分そういうのがあるのだろうなと思っ

遠藤：

そうすると、その子ども部会を谷津さんがコーディネートして実施した場合に、そうした場としても使いたいというようなことでしょうか。

谷津：

仙台市が設定しないと意見を聞けないというような仕組みではなく、きちんとこちらが必要だということのアクションを起こしたら、そこが実現できて、そこで話したことがちゃんと市政に反映できるようにしてほしいということである。

たのですが、難しいですね。非常にゆっくりしか変わらない。建築家は設計・建設時にしか関われないのもあって、革命を起こしたがる、今、ガラッと変えることを望みがちなのですが、そうではなくて、例えば10年先が一番大きく変わる手法をとる。そのため市庁舎を設計する。使用する設定の80年後よくなるためには、10年後一番変われるという建築を選べたら、多分80年後には一番大きく変わっていると思うので、その時間をどう設計するか、建築としてではなくて、仕組みをどうつくっていくかというところが、行政側のやらないといけなところなので、そこさえうまくいけば、いい発注にもなるし、いい市庁舎にもなるし、いい10年後になって、いい80年後にもなる。そこが描けるかどうか、勝負のしどころではないかと思っています。

安田：

ありがとうございます。10年という区切りを今出していただきましたが、80年というのは、そもそもここにいる誰も生きていないという可能性もあるので想像しにくいんですけど、10年というのはある意味では想像しやすい。そういう意味では、このメディアテークも20年たったという意味での評価ができる段階になって

Table A1

中心部他施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

Table C1

既存市庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライズの構成を考える

Table A1

中心部施設とのネットワークから「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

私たちは色々な機会に色々な場所で様々に動かれているので、彼らがもう少し常設の何かをやるようなところがあってもいいよねという、そんな気もしますし。仙台のまちの中のいろんなところを歩き回る小さな旅行会社みたいな活動も出てきたりもしていますので、そういう情報をつなげていける場所があるといいなと思います。

坂口：

ありがとうございました。

あと、10分ぐらいなので。中間領域とか広場の話、そこを少し掘ってみてもいいかなと思うんですが、いかがですか。

二郷：

今回、私がこのような場に参加できたことは、非常にありがたいと思っています。仙台市に限らず、多くの街の行政施策では、現状課題を解決し、その先に対応する事で終わり、過去・歴史に関わる部分は、捨て去り失ってきたものが結構あります。又、我々ではどうしようもない「廃城令」とか、「仙台空襲」「地震」等で

多くの歴史的建造物を失ってきました。これらの歴史的空間跡地を伝承空間に変えたり、再生活用できる空間として利用できるチャンスは色々ありました。登米、水沢の伊達屋敷跡の「国際センター」としての利用、片倉屋敷跡の「公園センター計画」、又、最後の重臣侍屋敷跡地「石母田屋敷跡地」の購入チャンスを見送り、マンションが建設される等、地域の歴史空間を再現し、「杜の都」の屋敷林を再生し、それを伝承することは出来ませんでした。大分昔の話となりますが「仙台城」の登城路を市道として整備した時「大手門」「中の門」等、地中埋設遺跡を掘削破壊して整備した事など、今思うと、残念なことが多々あります。

事前に、行政と一緒にあって、我々が失ってきたもの、歴史的事象、建造物等の復元、又、これを新たな手法、システムで再現、伝承する為の検討のステージが、今後とも必要で、やってほしいと思います。

新しい市庁舎の中には、これまでの経験を生かした多様に対応できるパブリックスペースがあり、未来につながる最先端の機能システムが整備され市民が活用し、市民生活に反映出来れば素晴らしいと思います。

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所（シティホール）」を考える

遠藤：

さっき鈴木さんが話した課題をどうするか委員会あたりにかけると、その場ができそうだが、どうでしょうか。

今野：はっきり言えばいいと思うが、民間が運営するのが一番いいかと思う。民間事業者が連携してその場を運営することによって、例えば多賀城の図書館を蔦屋が運営することによって、街の価値が上がったと感じるに市役所がなるといいと思う。協働によって、割と小ちんまりしてしまうのが残念だなと思うことがあって、あれがだめだとかこれはだめだという規制がありきではなくて、民間に思い切って任せるのであれば、大胆な施策とか運営ができるようなやり方でやっていきたいと思っている。

遠藤：

なので、何を大胆にするかという議論も必要ですね。

河村先生。

河村：

議会の話が全く出てこないで、最後に話をする。これまでの話を聞いて、結局この会の議論をまとめると、「議会は要らない」ということに限りなく近い話になってくるのではないかと。「車づげがない」とか「ガラス張り」などは、おそらく議会は嫌がるだろう。なぜなら、議会は権威づげがあって成立するからだ。当然、交渉する時に、「どういう形がいい」と何うのはいいと思うが、議会が出てきたときに対応しなければいけないだろうと思う。だから、ここに出てきたものを形にするためには、「議会とどういうコミュニケーションが必要なのか」ということがやっぱり出てくる。権限がある現状では、下手をすると「チャブ台返し」が起こりうる。「議会として、『あるべき姿の調整』が、これから大きな課題になるだろう」という提案が多かった。併せて、「セクター横断的」というのは、本来議会が担っている話で、これが出る段階で、「議会がセクターを横断してものを聞けてない」と、宣言しているに等しい。だから、委員会をつくらなくても、今回の提案は、議会がうまく機能していないじゃないか、という話になると思っている。

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

きているわけですから、その辺を見越して、もう一つは発注する技術ということで、発注する側の責任も大きくなっていくということなのだと思います。そこにも当然、ある一定の専門的な領域、やはり行政官というのはどうしてもジェネラリストのところがありますから、発注するという意味でプロフェッショナルが介入する余地というのは当然あるのだろうと思います。

いろいろ意見が出ましたけれども、少し難しい立場になってしまいましたが、伊藤さんから、ぜひ今のこれからつなげるという意味でもこの業務についてご意見いただければと思います。

伊藤：

小野田先生の分振れ幅の大きい意見と対照的に、桂さんの言われたように、やっぱり行政の立場からすると、行政としての意思みたいなのもあって委ねると言われてもということがあるんじゃないか……（「委ねると言っているわけではないです。資源を有効に活用してないと言っているだけで、建築を信じているわけでもない。ただ、合理性に欠ける、今の決め方はというだけです」の声あり）。

小野田先生が言われている残念な結果というの、いいデザイン、

悪いデザインという話ではないと思います。しかし、それを皆さん探っておられる。先程の断面イメージが、そんなにやり玉に上げられるような話なのかという気も少ししますが、やはり皆さんの意見を聞けば聞くほど、むしろ小野田先生のポリティカル・コレクトネスに陥りやすくなっていくという気もします。ただ、議会の話が出ましたけど、何で上にあるんだという話もありましたが、議会の位置は多分設計者が絶対決められないし、プロポーザルコンペで1階に議会を置く案をつくっても、落とされるか、通ったとしても上に上げることを前提に契約という話になるはず。多分、市役所の方も決められないです。決められるとしたら、多分皆さんです。前も言いましたが、ここに、議会を引っ張り出してきて、1階に議会ある市民協働と一体の市役所をつくろうという、何かそういうアクションは、おもしろい話だし、そういうことはやれることなのではないかと思うのです。それをベースいわゆる与条件にすると、ちょっとほかではない市役所になるというところに議論が落ちると、何かこの会議の意味が出てきて、高層棟の形が何であれ、そのコアがどうであれ、それは次の話であって、そこでは無く、与条件となる市役所のあり方などを本当は議論したらいいのではないかと思います。

坂口：

ありがとうございます。

あとラスト5分なので、今日、遠方から来られている桂先生に最後にコメントをもらって、僕がつたないまとめをしようと思うんですが。

新しい公共とか、場を転換するとか、あるいはさっきの広場の話もあったんですけども、そもそもどういったものをつくるかということと、広場をどう見立てるかとか、何かそのまちの捉え方自体によって、かなりその状況は変わるというところが、今日の議論を聞いてあるのかなと思ったんですけど。さっきお話があったプロジェクトも、何か物事を違った形で見ていくということも。僕は何かあるのかなと思って。それらを共有するための何かきっかけだったりとかでも構いませんし。全体的にメディアテークに対しては、皆さん非常に好意的で、ここから学ぶことがもっとたくさんあるんじゃないかということも今日議論としてだいぶわかってきたところもあるので。今話をした部分でもいいですし、

別でも構いませんので、ちょっとここだけは言っておこうというところがあれば。ラスト少しコメントいただけますか。

桂：

僕もさっきからいろいろ議会のこととか、可視化のこととか言ってますけど。可視化、視覚化とかビジュアライゼーションするということの意味というのは、多分足を運ぶことに理由をつけるというか、わざわざ足を運ばなきゃいけない理由をつくるのが、言ってみれば計画になっているんですね。例えば、図書館の計画というのは何かというと、ネットでもそれからアマゾンでも本買ったりする以外の足を運ぶ理由をつくることなんですよ。なので、新しい公共を考えるというのは、わざわざ足を運ばなきゃいけない理由を考えるということだと思えます。

それで、ここが、皆さんに、この20年あまり受け入れられてきた理由は、伊東さんの建築のあれもあるかもしれませんが、何か足を運ばなきゃいけないような気に皆さんがなったからなんじゃないかと思えます。だから、わざわざ足を運んで来られて、おのおのその過ごし方を自分なりにつくってくださっている。

そうすると、こういうものが会議で出てきたということは、逆に議会のほうに、「きちんとそういう部分が機能していないからそういう意見が出てきたのではありませんか」という話につなげられるような形で指摘をしていただかないといけない。

恐らく議会は、より権威化を望んでいると思う。自分たちが市民の代表であって、先生だからだ。ただ、ここの部分の議論は、「議会は代理人であって、先ほど出たような委員会のメンバーにも、ちゃんと法令的な正当性を持っている存在である。だから、先ほど出たように、議員も意識を変えなければいけないし、行政の意識も変えなければいけない」となる。

こういう議論を通じ、「議会がどういうふうにしてその役割を担っているのか」といったところもまた議論して、次につなげてもらえればいいと思う。

遠藤：

はい、ありがとうございます。ちょっと「セクターを超える」のところに議員さんを入れると怒られるかもしれないんですけど

も、議員さんも一つのセクターだと考えれば、議員さんもこぞって、議員というバッジを外しながら、一市民としてこの場に一緒に来て、議論するとか課題を話し合うとか資源提供してくれるとか、そういったことができるといいのかな、なんていうふうにもちょっと感じた。だから、ある意味、基礎自治体なので、代表者として議員さんと一緒に、市民として議論するところもちょっとは残されているのかなと期待したいと思うが。

河村：

議員から、「選挙に落ちた人が市民と称して我々と対等に意見を交わすのはおかしいじゃないか」って、必ず出てくる。だから、その部分の民主的なあり方自体に課題議論がある。その部分を抜きに話すると、ボタンのかけ違いが生まれるので注意が必要である。市民だから云々という話ではなく、「議会は議会としてやるべきことはこうで、市民としてそこはこっち側でやる」という形で分けて話を持っていかないと、せっかくいい意見が出て、ちょっと厳しくなってしまうと思う。

安田：

ありがとうございます。

時間がないのですが、一言言いたいところですが、小野田先生、ぜひ。

小野田：

危機感を煽るために少し踏み込みましたので、誤解を招くようなことを言ってしまったが、伊藤さんの会社ともいろいろコラボしたりして、いかにすぐれているかはよく知っていますし、桂さんの前のポストも桂さんとも一緒に仕事したから、桂さんが何でああいうふうにするのかもわかるのですが。

でも、やはりきちんとした仕組みをうまく動かして、設計者を引き込んで、住民としっかり議論してやるべきなのだけど、あまりにも決めなくていいことを一生懸命決め過ぎていたから。そうじゃなくて、もう少し設計者選定の仕組みをきちんとやって、早目に決めて、その人とある程度の時間を持って、もうそれこそ今、伊藤さんがおっしゃったように、議員の方と市民の方とどうあったらいいのかというのをオープンに話をしたらいいと思うのです。

そういうふうにするには、何でしないのかなというのはすごく思います。なぜそうなっているのかは、さまざまな付度があって、菅原室長が一生懸命めぐり抜けながらこういうすばらしい場をつくっているの、それについて文句があるわけではなく、それは本当にすばらしいし応援したいけど、でも、本当にみんなが満足する結果になるためには、そういうふうなプロセスメーキングが必要かなということなんです。

安田：

ちょうど時間でございますので、何となくまとめるのは大変なのでまとめませんが、後でここを短く締めくくるという話になるかと思いますが、1つは、最後の小野田先生のおっしゃった仕組みをきちんと決めてということだと思えます。それに向けて、余計なこと決めるなという話はまたいろいろ言われるかもしれませんが、それに向けてきちんと枠組みをつくっていくということが、基本計画検討委員会に求められているというよりは、次のプロセスへの前段として求められています、ということなのだと思います。

本日は、長時間、皆様ありがとうございました。また、もう1回

Table A1

中心部施設とのネットワークから
「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

多分、いい公共施設というのは、僕の経験からいって、大体、人の集まり方がいい。見てもいいもの。実は、シアトルのレムの公共図書館もそうだし、それから、最近建ったアムステルダム公共図書館もそうですけど。足を踏み入れて、ユーザーとしてじゃなくて、傍観者として見ても何か集まり方がいいねと思えるようなところというのは、やっぱりいい公共施設、公共空間なんです。だから、その可視化というときに、足を運ぶ理由をつくると同時に、どう見えているかというのを常に頭に入れてやらなきゃいけないかなという気もします。

それから、あと1つだけ。もう最後みたいなので。歴史のことで言うと、僕は長崎出身なんですけど、長崎は最悪のソリューションをしてしまっただけ。出島をつくったり、長崎奉行所を復元したりしてますけど。今、市外への流出が止まらないという、日本全国で有名にもなりつつあります。それは、歴史みたいなものと同時に、考えなきゃいけなかったことがマネタイズのことなんです。世界中で歴史的な建造物が残っていたり、歴史性のある都市空間が残っているところは、圧倒的にお金が集まっているんですよ。フィレンツェそうですね、それからもちろんローマそうですね、それから

スペインのいろんな古い都市もそうですね。圧倒的にお金が集まることをつくってからやっているんです。もちろんユーロの統合とかそういうのもあったのであれですけど、マネタイズの仕組みをつくらなくて、歴史に手を出すと、むしろ歴史を壊してしまうことになりかねない。だから、そこもちょっと考えながら、いいローカリゼーション、インターローカリゼーションという考え方がありますが、いわゆるどうやってそれをネットワーク、情報交換しながら、自分たちの独自性を上げていくかということを考えないと、むしろ変なことでそのせっかくの歴史性が潰れてしまうということにもなりかねないという気がします。以上です。

坂口：

ありがとうございました。

すいません、拙い進行になりましたが、いろんな観点が出たと思います。後半も議論がありますので、うまく引き継いでもらいたいと思います。どうもありがとうございました。お疲れさまでした。(拍手)

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから
「市役所（シティホール）」を考える

遠藤：
先ほどのご発言の中にも、行政として規定されていること、あと議会として法律上決まっていること、それを踏まえた上で、どうお互いを生かし合って、お互い超え合って、コ・クリエーションしていけるのかということを考えていけるといいのでしょうか。では、最後に小島さんから一言。

小島：

混沌とした時代というか、割り切れないさまざまな課題があって、それをどういうふうに解決していくかということが一つのキーワードとしてあって、そのためにはセクターを超えてというのが大きなキーワードかなというふうに思う。そういったセクターを超えて一緒に課題を解決していくというときに、当然、行政も市職員もそういったマインドを持っていく必要がある。そういった場を低層階でつくっていくべきだろうと。その上については、行政が上から目線で管理運営をするというのではなくて、民間の

ほうに委ねて、行政もそこにかかわって、いわゆるパラレルで議論をしていくということが必要なだろうというふうに私なりに解釈をした。ありがとうございました。

遠藤：

この後、議事録にして、いろいろな方に見て貰うことや、委員会に上げていくことがあるので、結構議事録を校正していただくときに、皆さんの意図がちゃんと伝わっているかってとても大事なことなので、ちょっと大変だと思うが、皆さん協力をよろしくお願ひしたいと思う。

では、きょうの議論だけではなくて、できるまで、そしてできてからも、皆さんの力で、きょう発言したことが実現できるようにクロスセクターで頑張っていければいいのかなと思った。

皆さん、どうもありがとうございました。

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や
建物配置・規模・スカイライターの構成を考える

あるかどうかはわかりませんが、まだこの先同様の場面があるかと思しますので、そのときぜひ皆さん、ご協力をいただければと思います。今日は長い時間ありがとうございました。(拍手)

Table A1

中心部他施設とのネットワークから
「市役所（シティホール）」が担う役割を考える

Table B1

市民協働・これからの仙台を担う仕組みから
「市役所（シティホール）」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や
建物配置・規模・スカイライインの構成を考える

第3回仙台ラウンドテーブル
市民と専門家による仙台市役所本庁舎建替シンポジウム

「地域コアとなる市(シティ)役所(ホール)を育む」

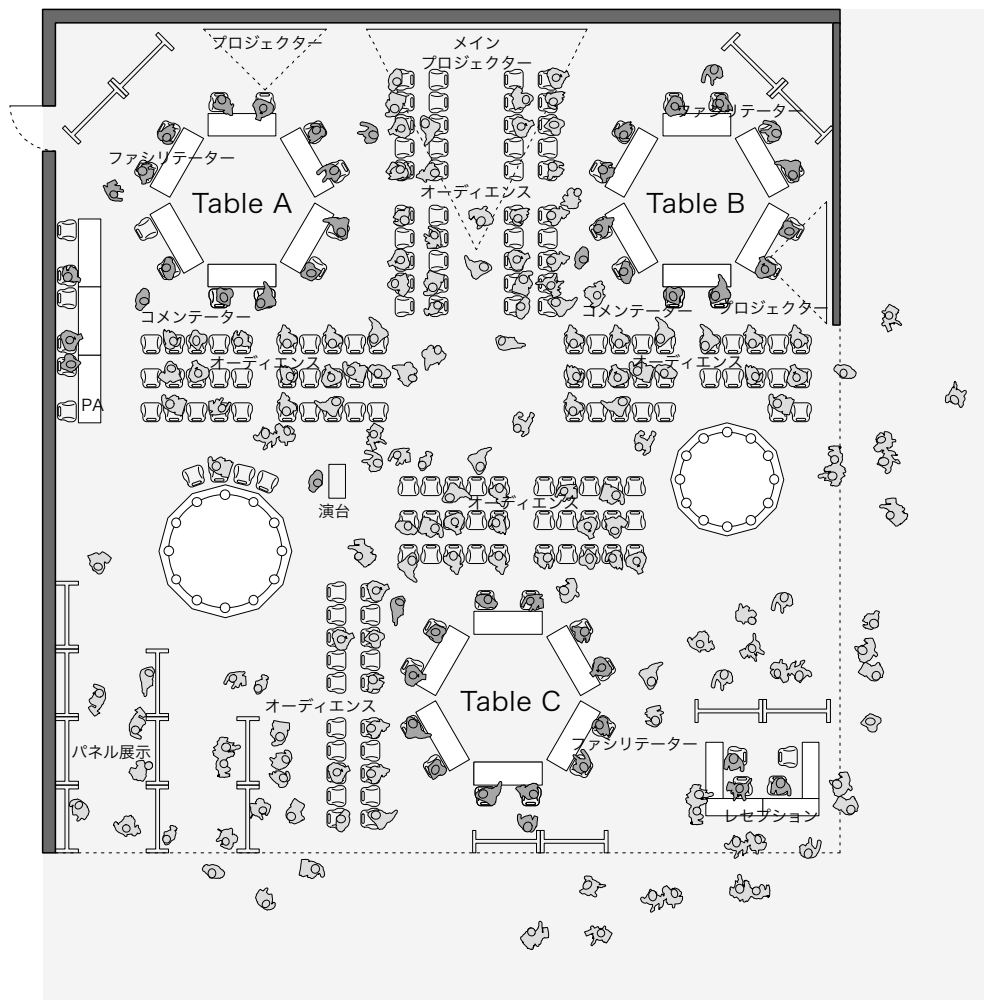
市民のための本庁舎建替プロジェクトをみんなで模索する

せんだいメディアテーク 1F オープンスクエア

2019年4月23日 [火]

13:00	挨拶・趣旨説明
13:10	前半 ラウンドテーブル
15:40	休憩
16:00	後半 ラウンドテーブル
18:30	閉会挨拶
18:45	閉会





せんだいメディアテーク1F / オープンスクエア

Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う「市役所（シティホール）」を考える

文責： JIA 宮城地域会
阿部元希

前半の議論に続き、テーブル A の後半（A2）では、周辺エリアのまちづくりの観点から、ここで担うべきまちづくりビジョンを考えます。これまでのラウンドテーブルでは、「歩行者のための、グランドレベルが解放された…」「交通ネットワークの一部となる…」など、の意見が出されてきました。周辺施設（市民広場・勾当台公園）や界限（定禅寺通等）との連携の中で、市役所本庁舎が果たすべき役割について考えます。

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

文責： 宮城県建築士事務所協会
石原修治、大宮利一郎

市役所は街づくりの中でどのように位置づけられるのかについて、これまでのラウンドテーブルの中で議論してきました。これは市役所に求められるものは中枢管理機能だけでなく、市民に開かれたシティホールであるべきとの考えが底流にあるからです。

街づくりの観点から、市役所建替えは周辺への波及効果を生み出すべきであり、また、回遊性向上に資することも求められています。そのためには、低層部は賑わいを創出するという視点が重要であると考えます。隣接する市民広場、定禅寺通とのつながり、市役所から北側街区等への市民の流れも意識する必要があるのではないのでしょうか。

公共（空間）を、主に行政が行うべき活動、管理的な業務空間「official」、参加者が共有する利害が存在する空間「common」、誰もがアクセスすることを拒まない市民に開かれ空間「open」と三つの意味に分けられるとすれば、テーブル B で議論する低層部は「official」ではなく、明らかに「common」「open」です。

賑わい創出を考えると、管理・運営手法についても、市が一括して庁舎を管理・運営する、あるいは指定管理者が管理・運営するという従来型ではない新しい発想で考えるべきではないでしょう。

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

文責： 宮城県建築士会
錦織真也、星ひとみ

仙台市は「杜の都」と言われるように、豊かな緑と都市が融合した街として認識されています。新市庁舎とその周辺エリアの「杜」は、どのように整備すれば良いのでしょうか。また、日常生活において、「杜」とどのように関わっていけば良いのでしょうか。非常時の「杜」はどのような役割を果たしてくれるのでしょうか。

テーブル C2 では「環境」を「杜」になぞらえ、様々な専門的知見から「環境」を網羅し、建築・敷地周辺・都市のスケール軸と過去・現在・未来の時間軸に整理することで、新本庁舎と周辺エリアの「環境」として捉えられる領域を探ります。

そして、80 年先まで強度のある「杜」とするために、現在の環境的課題を解決するだけでなく、広い視野から浮かび上がった「環境」から、未来の「杜」でのライフスタイルを思い描き、今何をやるべきなのかを考える拠り所となる「杜の都」の「環境」的コンセプトをあぶり出していきます。1

キーワード

Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う
「役所市（シティホール）」を考える

- 人々の活動が出来るだけ可視化されたまちのづくり
- 中心エリアの価値やポテンシャルの再考
- 市民広場という大きなパワーをどう活かせるか
- 新しい仙台の機能なり魅力をつくりだす余地が十分にある
- 10年、20年、100年先を考えた時にどうするべきか
- みんなの心に響くビジョンとはなにか
- 新しい公共、これからの公の役割というところから解き直していく
- 縦割りながら横断的なプロセスの実現ができるか
- 新庁舎をはじめ公共空間をいかに市民が使い倒していただけるか
- 仙台の魅力をより増すための市役所のつくりかたとは

キーワード

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

- 多様化した課題をコーディネートする機能
- にぎわい、回遊軸の玄関口ー広場との連続性ー西公園に魅力的なコンテンツを
- 持続可能な都市経営の視点で考えるーエリアの価値を高めて収益を出す
- 市役所定禅寺界隈を東京化した仙台駅前に対して仙台らしさで対抗する
- 行政主導の公民連携から市民が主役、行政がそれを支援する
- 公平、平等性からの公募型から専門家を入れた発注方法の見直し
- エリアマネージメントービジネスマーケット
- にぎわい創出と回遊性の意味を問い直す
- マネージメントできる市民・行政ともに人材の育成

キーワード

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

- 杜の都のアイデンティティを未来に引き継ぐ（四ツ谷用水・屋敷林・震災からの復興・市民協働）
- ハード・ソフトを統合した真の環境建築（パッシブエネルギー、インテグレートバランス）
- 環境配慮の雰囲気街を街に広げる市役所
- 周辺のマイクロクライメイト（微気候）をつくる市役所
- 子どもや市民の環境・防災学習の場としての市役所
- 地産地消の場としての市役所（サステナブル）

Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う
「役所市（シティホール）」を考える

Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う
「市役所（シティホール）」を考える

企画
手島浩之
JIA 宮城地域会

テーブル補佐
佐伯裕武
JIA 宮城地域会

テーブル補佐
阿部元希
JIA 宮城地域会

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

企画・テーブル補佐
石原修治
宮城県建築士事務所協会

企画・テーブル補佐
大宮利一郎
宮城県建築士事務所協会

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

企画・テーブル補佐
星ひとみ
宮城県建築士会

企画・テーブル補佐
錦織真也
宮城県建築士会

ファシリテータ
手島浩之
JIA 宮城地域会

ファシリテータ
坂口大洋
仙台高等専門学校建築デザイン学科 教授

登壇
杉山丞
東北大学キャンパスデザイン室 特任教授

登壇
徳永幸之
宮城大学事業構想学群 教授

登壇
姥浦道生
東北大学大学院工学研究科 准教授

登壇
山田文雄
(株)都市デザイン 顧問 (仙台担当)

登壇
齋藤敦子
コクヨ株式会社 ワークスタイル研究所

登壇
佐藤芳治
NPO 法人 都市デザインワークス

登壇
末祐介
中央復建コンサルタンツ株式会社

登壇
木村真介
上杉商事 代表

登壇
天野元
仙台市文化観光局長

Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う
「役所市(シティホール)」を考える

ファシリテータ
小島博仁
(株)UR リンケージ

ファシリテータ
遠藤智栄
地域社会デザイン・ラボ 代表

登壇
佐藤泰
仙台・宮城ミュージアムアライアンス <SMMA>事務局顧問

登壇
及川智
NPO 法人仙台バリアフリーツアーセンター理事

登壇
榊原進
特定非営利活動法人都市デザインワークス 代表理事

登壇
岩間友希
株式会社 都市設計

登壇
渡辺一馬
NPO 法人 せんだい・みやぎ NPO センター代表理事

登壇
善積俊介
カフェモーツァルト

登壇
豊島聡
せんだいディベロップメントコミッション株式会社ディレクター

登壇
洞口文人
SRM 実行委員会 公務員 TF 代表 / 公民連携事業研究センター上級研究員

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

ファシリテータ
内山隆弘
東北大学キャンパスデザイン室

登壇
田路和幸
東北大学大学院環境科学研究科 特任教授

登壇
佐藤健
東北大学災害科学国際研究所 教授

登壇
江成敬次郎
東北工業大学 名誉教授

登壇
武山倫
東北工業大学ライフデザイン学部 教授

登壇
長谷川公一
公益財団法人みやぎ・環境とくらしネットワーク 理事長・東北大学大学院文学研究科 教授

登壇
平野勝也
東北大学災害科学国際研究所情報管理・社会連携部門 准教授

登壇
村上英寛
四ツ谷の水を街並みに！市民の会 / 六七郷撮サポーター

登壇
小野寿光
JASFA 代表理事 馬淵工業所代表取締役

登壇
太田浩史
株式会社ヌーブ 代表取締役

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

Table A2

周辺エリアのビジョンの「翼を担う」を考える
「役所市(シティホール)」

佐藤：
(音声途中から) ……あと、土地が狭い中で5倍の人がいますので、住宅も世界2位の、平均の住宅価格は約1億円ということになっていまして、大体年収の10倍ぐらいの価格になっています。シンガポールのまちがどういふうにできてきたかということを示す場所があるというので、歩く途中にちょっと何か見えてきたので、少し写真を撮ったんですけども、ちょっと後で話します。日本でいう建設省みたいところの隣の奥の建物がシティギャラリーというところでして、ここが都市再開発庁の庁舎の1階から3階ぐらいを使っています。エントランスのピロティーでピアノを弾いている人がいたり、中のギャラリーに入ると、ちょうど現在、10年に1回のマスタープランの改定時期で、見直しをしているマスタープランがありまして、そのドラフト版、途中のバージョンを展示して、いろんな市民にこういう計画だよということを知らせている状況でした。いろんな人が見に来ていますね。
(全体進行のため一時中断)
フライングしましたけれども、大体1階から3階までがシティギャラリーに使われているということです。受付があって、今のマスタープランはこうですよというのが全体にわたって展示されてい

ます。中もピアノを弾きながら見られますし、かなり具体的な絵などを見ながら、でもそのテーマごとにこういった展示がなされていまして。テーマごとと、あとエリアごとですね。いろんなエリアごとに、かなり具体的な絵で計画が説明されています。セントラルエリアの土地利用の計画ですね、そういうのを本当に小さい子から大人までいろんな人が見に来ているという印象でした。右側が中央で左側は東地区です。そういうエリアの説明がパネルで仕切られてずっと続いていくわけですけども、ところどころやはり具体的な計画のエリアについては模型が置いてあって、デジタルディストリクトというIT企業を集めようというエリアの開発がこうなっていますよということや、あと海岸部の自然環境をつなぐルートみたいなものを展示していたりもしますし、さまざまなエリアの開発計画がこのように展示されています。かなり広いです。
赤いシャツを着た人が、ボランティアの説明員の方で、いろんなことを説明してくれています。1階の企画展の中で非常に大きかったのは、この全体の5,000分の1の模型に、上からプロジェクションマッピングで、正面のスクリーンの映像と連動してそのエリアのことが説明されています。公園については、ここにあって、そ

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

小島：
テーブルBは、これからの仙台を担う仕組みということで、どちらかというと行政の機能というのは事務機能というのがありますが、低層部については新しい仙台のあり方として、新しいものを取り入れようではないかというのが一つ発想としてあるんだらうと思っています。
前半の部B1では、市民協働というものに特化した議論というのですか、そういうことをしてきております。
若干ご説明しますと、さまざまな市民協働の場としては、区役所もあれば、あとコミセンとか、あるいはサポセンとかそういったものがあると。そういったものを市役所に全て機能集約化するのではなくて、多様化した課題を、セクターを超えてコーディネートしていくということが市役所に求められるのではないかと、新しい庁舎に求められるのではないかとということでございます。
それは、いわゆる従来の行政からすると縦割り行政、なかなか横の連絡、横串が通らないということがありますけれども、そういった横串というものについては市民も感じているし職員も感じていると。そういった中で、そういったセクターを超えたコーディネートをするような場というのが市役所の中にあってしかるべきで

はないかというところでございます。
そのときに、その運営という問題がありますけれども、運営については、いわゆる従来型の市が管理するというのではなくて、民間が自由な発想で、コーディネーターもそこで機能するように民間が主体となってやっていくべきではないかと、そういったことが議論されたと思っております。
前回までの議論において、市役所というのは、従来型でいくと行政サービス機能、いわゆる窓口として、また本庁舎の場合は区役所がありますから政策機能を持つというところがあります、それと市民協働交流、観光振興などのシティープロモーション機能、こういった大きな3つの機能というものがあるのではないかと、これまで議論されてきたのかなと思っております。
もう一つ、行政サービス機能といった場合に、今ネット社会になってきて、将来的には、恐らく行政サービス機能というものがネットで構築されて要らなくなるのではないかと。出てくるのは、恐らく協働とか相談といったものが出てきて、そういったものに関して市役所の一目一番地ですね、そうすることによって、新たな発想というものに取り組むべきではないかということが言われてきたような気がします。

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

錦織：
よろしくお願いたします。企画を担当しております、錦織と申します。まず、私が趣旨説明をいたします。それから内山先生に進行をお願いしたいと思います。
仙台市は、杜の都と言われるように、豊かな緑と都市が融合したまちとして知られています。今回、杜の都・仙台の環境、それから市庁舎のコンセプトを考えるとどのようになるかということをご議論できればと思います。
ちょうど今お手元にお配りしております、仙台市役所本庁舎建替基本計画ですが、検討委員会にて設備の仕様を決めているところです。同時に、BCPでどのようにやっていくかということも決めています。基本計画では、今、建物にどういふ設備を入れていくか、どういふ仕様でつくるかということを決めているところですが、今後80年間、市庁舎が使われるということを考えてみると、10年先でも設備のスペックは変わってくると思います。そうした時代の流れに左右されないような骨太なコンセプトを、

環境という視点から広く考えていきたいと思っております。BCPの資料も入っているのですが、今回ご登壇いただく先生に事前にお話を伺い、研究内容を拝見しましたところ、やはり環境や設備とBCPというのは密接に繋がっているものだと感じられましたので、そちらも議題に入れさせていただきます。
では、ここから内山先生に事例の紹介と流れを説明していただきたいと思っております。お願いします。

内山：
仙台の「環境」を考える上で、「杜の都環境プラン」というのが基本になるだろうと思っております。それから、今、仙台市役所本庁舎建替「基本計画」が検討されていますが、その前の段階で決定された仙台市役所本庁舎建替「基本構想」も今回の議論の基本になると思っております。この2つのプランにいろいろなコンセプトが書かれていますが、それを今日お集まりの皆様の見解で、より具体的には、どのようなビジョンとして描くことができるのか、その可能性を

の公園をどう計画しようとしているかや、歴史的なエリアをどうしようかというようなことが説明されていて、1つ上の階、2階に上がると、これは常設展で、いろんなこれまでの計画のマップが展示されています。古い絵地図のようなものからデジタルマップから、いろんな形のマップがずらっとギャラリーに展示されていて、年代ごとにどういう計画で進んできたのが分かるようになっていきます。

こういうのを順に見ていくと、本当にどういう形でまちが発展してきたのかというのがよくわかります。これが、1971年のコンセプトプランということで、一応40年から50年スパンのコンセプトプランをつくって、それを10年に1回改定しながら進めています。その中で、さらにその細かい10年から15年ぐらいのスパンでの計画として、コンセプトプランの下にマスタープランがあり、それに基づいて実行していくという形になっています。

それから、デジタルマップでは、エリアごとの人口密度ですとか公園の面積ですとか、そういったいろんなデータが記されていますし、あわせて模型で開発計画がこういうふうになっていましたというようなことをしっかり知らしめているコーナーがあります。それから、常設展のもう1つ、その模型のメインのコンテンツだ

ただ、別なテーブルでいきますと、まちづくりビジョンとか市役所というものが、まちづくりの中でどう位置づけられるかということが非常に大事だということも言われております。そういうことが議論されているということからすると、市役所に求められている機能は、単に、先ほど3つの機能と言いましたけれども、中枢管理機能的なものがあるというのではなくて、市民に開かれた、市民が行政と対等に行動できるというか、活躍できる場、シティホールといったものが見えてくるのだ、あるべきだろうというのが底流にあるというふうに私なりに認識しております。

先ほどのまちづくりの観点からすると、市役所建てかえにつきましては周辺への波及効果と、従来の昔風の建て方でいくと、単なる行政機能ですから、まちづくりに対する波及効果ってないということでしょうけれども、これからはそうではないだろうと思っておりまして、また、後ほど出てくると思いますが、回遊性を向上していくと、そういうことが求められているということからすると、低層部については市民協働という視点だけではなくて、にぎわいという視点も非常に大事になってくるのだろうというふうに思っております。

にぎわいとなると、仙台市にとっては市役所の目の前にある市民

探りたいと思っております。

まず、最初の話提供として、私のほうから事例を紹介したいと思っております。京都の事例です。京都は京都議定書がつくられたまちですし、それから、たくさんの寺院の庭園が点在している庭園文化の都市でもあります。その中で「雨庭」という施設がつくられております。場所は四条堀川交差点で、仙台で言えば東二番丁通りと広瀬通りの交差点のような、非常に交通量が多い場所ですが、そこに庭園の枯山水のようなランドスケープで雨を集めて地面に戻す試みが行われております。

この雨庭ですが、京都市の計画の中で段階を踏んで具体化されて実現してきたものです。上位の計画からあげると「京都市基本構想」、「はばたけ未来へ！京プラン（京都市基本計画）」、「京都市緑の基本計画」と続き、この緑の基本計画の中で「環境共生のまち」とか「歴史と伝統のまち」といったコンセプトが挙げられ、それを承けて市街地緑化の実施計画として「どこを見ても庭園のようにしつらえられている」という非常に具体性のあるビジョンになっ

と思いますけれども、400分の1の、本当に巨大な模型がありまして、（奥のほうに見える）茶色い木でできているものがまだ建っていない建物で、これから開発されるということですね。なので、今まちがどうなっているのか、あと次にこの辺にどういう建物ができるのかというのが一目でわかるということと、やはり開発する地区と、保存しているエリア（屋根が乗っているエリア）が、はっきりこの形で立体的にわかるようになってきているというのがよかったです。かなりその保全と、それから開発と両方意識して計画されているなどという感じであります。

あとは、その市民、特に子どもたちのワークショップでやったようなものを展示するギャラリーですとか、これまでのまちの歴史的なものを、廊下に沿って年代ごとに見せていくという展示ですとか、他には、いろんなプランニング、計画段階の話で、どういうふうにみんなで関わっていくかということで、都市デザインのゾーンでは、いろんなこれからのまちづくりのイメージが展示されています。あと、モビリティの交通計画についてのゾーンがありまして、いろんなモビリティの話もありつつ、自分で道路の設計をしてみようというパネルがありまして、多分これからの計画の中で、この通りというのをタッチパネルで選んでいって、

広場という、あるいは定禅寺通と、先日、グリーンループ仙台というものが行われましたけれども、市民広場というのが日常的に、にぎわいの創出空間として市民の活動のメッカになっているということがございまして、そういったつながりということと、あわせて波及効果ですから、市役所の北側とか西側ですね、そういったところへの市民の流れというものも当然意識していく必要があるだろうというふうに思っております。

事前に皆様方にお配りしたと思いますが、公共空間というものを別な切り口で定義づけると、主に行政が行うべき活動、管理的な業務空間としてのオフィシャルというものがあります。参加者が共有する、いわゆる利害が絡むわけですけれども、存在する空間としてのコモンというものがあります。あと、市民誰もがアクセスできる、拒まないというオープンというのがあります。テーブルBにつきましては、明らかに低層部についてはオフィシャルではなく、コモン・オープンということかなというふうに私なりに思っております。

そういう意味では、にぎわい創出とか低層部に求められる機能を考えていくと、第1部でも出てきましたけれども、運営については民間がすべきだというのがありましたけれども、市が一括して

て、それが実現したもものとして先ほどの雨庭がありました。

京都の寺院には枯山水庭園が多いのですが、伝統的に見ると、大きな寺院の屋根で集めた水を枯山水に流し込んで、そこで処理するというような機能があったことが指摘されています。そこに着目し、現代のまちで再現してやろうという取り組みです。

これを実現するためには、緑の部署や道路の部署、下水道の部署など、いろいろな部署が協力しながらやらないとなかなかできないことだと思います。

それから、もう一つ、通常の植え込みならそんなに手はかからないけど、こういった日本庭園にするのであれば、通常よりもグレードの高い緑を維持していくことになるので、やはり地元の人が理解し、管理に参加して行く必要があります。現状では、雨庭が実現しているのはこの交差点だけですが、今後京都市全体に広がっていくためには、「どこを見ても庭園みたいな都市」というビジョンがさらに共有されていく必要があると思われます。

今、京都市は市役所の整備を進めています。これは昭和2年につ

Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う「役所市（シティホール）」を考える

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

Table A2

周辺エリアのビジョンの翼を担う「役所市(シティホール)」を考える

道路の断面で幅員に自転車道を取りたいとか、何メートル取りたいといったことを自分で動かしてセットして投票できるというような形で、ある種の参加型のゲーム形式のような形での道路計画の展示もやっていました。

あとは、いろんなプランニングやコンサルティングの状況の映像コーナーがありました。他には、インフラについて、普段生活して見えないところがどうなっているのかを知らせるために、インタラクティブなデジタルサイネージで、5つのレイヤーになっていて、子どもが遊んで触ると動くというタイプの展示で、水とエネルギーとごみと交通と、グリーンの5つのレイヤーがどういふふうにまちを構成しているのかが見られるゾーンがありました。それから、埋め立てで国土を広げてきているわけですから、どうやって広げてきたかが分かるゾーンですとか、他には、やはり国土が狭いということもあって、立体的に上にフロアを積まなきゃいけない、あるいは地下を使わなきゃいけない、そういうことを説明するゾーン。それぞれのレイヤーごとにデジタルサイネージがあるんですね。

あとは、自分の近所にこういうものがあつたらいいというような、市民農園があつたらいいとか、カフェがあつたらいいとかを6つ

投票できるシステムがパネルになっていまして、そういう展示で近隣に何を求めているのかという情報を集めるということをやっています。

それから、歴史的な保存エリアについてのゾーンです。ショッパハウスと書いてあるのですが、1階が商店になっていて連続している、先ほどの赤い屋根のまち並みの部分についての保存エリアの話で、年代別にこういうふうになっていますよということや、どういう建物を保存してきたかなど、年代によってその古い歴史的な建物をどういふふうにリノベーションして使ってきているかということが模型断面で示されていたりします。

だんだん見ていくと、中高生の団体がたくさんやってきて見えましたね。年間に大体20万人ぐらいの来場者があると言われていまして。本当にすごいなと、私も行って改めて思いました。

保存地区のガイドツアーや、そういうツアーに案内人がついてやっているような話ですとか、あとは、カフェがありそこに専門書が置いてあるのですが、それを買えるようになっていたりですとか、あるいは、ギャラリーがあって、いろんな建築のモデルが展示されていたり、奥のほうには計画書の実物をそのまま見られます。お金を払えば印刷してもらえるとというサービスもあって、具体的

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

管理運営するという、あるいは市が、指定管理者のほうに委託するという従来型ではなくて、新しい枠組みというものがあるべきではないかと思っております。そういうことも踏まえて皆様方からご議論いただきたいと思っております。

2回目までの議論につきましては、ほかの事例を示しながら登壇者の方が、稼ぐという発想もしているのではないかとことを言っておりました。なかなか市民協働とか稼ぐという概念からちょっと違うところもあるかもしれませんが、全体を運営していくというときに、単に税金垂れ流しということではなくて、別な発想というものもいいのかというふうにも思っております。そういうことを市当局のほうにも我々として言い放しではあるのですが、こういう議論がありましたということも伝えていきたいというふうにも思っておりますので、ひとつよろしくお願ひします。

きょう、後半の部は私がメインとなりますけれども、ファシリテーターとして遠藤智栄さんもおりますので、自己紹介を兼ねてちょっとお願ひします。

遠藤：

くられた市庁舎を残して、非常に細かな工期分けをしながら長い時間をかけて、非常に丁寧に進められています。そして、庁舎の正面には大きな広場がありますが、京都市のかたに聞いたところ、今のところ雨庭はここでは計画されていないということで、それは少し残念なことでもあるかなと思います。

そのような次第で、やはり1つのビジョンを皆さんが共有していくということが重要なことだと思います。そのために、環境とかからめて具体的なライフスタイルにかかわることがこのラウンドテーブルの中で出てくるといいなと思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。

まず、1ラウンド目ですが、環境といったときに広い視点があると思いますが、どういった領域とスケールで考える必要があるのか。その範囲を確認したいと思っておりますので、先生方の自己紹介も兼ねて5分ぐらいずつお願ひしたいと思っております。事例紹介をお願いしている先生が何名かおりますので、まずはその先生からお願ひしたいと思っております。

きょう、サブでファシリテーター担当させていただきます地域社会デザイン・ラボの遠藤智栄と申します。ふだんは、東北のお仕事が多いのですけれども、まちづくりの支援とか人材育成の支援とか、あと組織開発の仕事をさせていただいております。多様な皆さんからどんなお話が聞けるのか、私も今からわくわくしております。よろしくお願ひいたします。

小島：

私の自己紹介をし忘れましたが、緊張しております。3年前まで市役所の職員でございました。今は民間企業におりますけれども、生活のために民間企業にいたみたいなので、実際に放課後にまちづくりをしております、「せんだいリノベーションまちづくり実行委員会」というのを民間グループでつくっております。公民連携で仙台市と協調しながらやっておりますけれども、公共空間とか遊休不動産、今あるものを生かしながら、いわゆる仙台市民が生き生きと生活できる、活動できる、そういうまちづくりをしようではないかということで今取り組んでいるところでございます。

それでは、早速、前もって皆様方に論点を3つほどメールで送ら

まず、太田先生お願ひいたします。

太田：

東京から来ました設計事務所のヌーブの太田と申します。私は、基本的に建築の設計をやっておりますが、以前、東北大の非常勤で環境建築の講義を受け持っておりました。それと同時に、東大の生産技術研究所、それから都市再生研究センターというところで都市再生の研究をしておりましたので、主に建築設計と都市再生という方面から環境のことを見ております。

2002年頃、国内の省エネルギー建築の事例集をつくり、環境建築と都市再生がすごく関係があることがわかり、その後リチャード・ロジャースさんの本を翻訳しまして、それがヨーロッパでは常識であることに大変強い印象を受けました。

たとえば、1994年にリード会議という集まりが開かれます。これはリチャード・ロジャース、レンゾ・ピアノ、ノーマン・フォスター、トーマス・ヘルツォークという建築家が集まり、サステイ

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

くられた市庁舎を残して、非常に細かな工期分けをしながら長い時間をかけて、非常に丁寧に進められています。そして、庁舎の正面には大きな広場がありますが、京都市のかたに聞いたところ、今のところ雨庭はここでは計画されていないということで、それは少し残念なことでもあるかなと思います。

そのような次第で、やはり1つのビジョンを皆さんが共有していくということが重要なことだと思います。そのために、環境とかからめて具体的なライフスタイルにかかわることがこのラウンドテーブルの中で出てくるといいなと思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。

まず、1ラウンド目ですが、環境といったときに広い視点があると思いますが、どういった領域とスケールで考える必要があるのか。その範囲を確認したいと思っておりますので、先生方の自己紹介も兼ねて5分ぐらいずつお願ひしたいと思っております。事例紹介をお願いしている先生が何名かおりますので、まずはその先生からお願ひしたいと思っております。

に今のマスタープランがどうなっているのかということを知ることができるゾーンもありました。

このような形で、大体2,200平米ぐらいの広さで、数億円かけてこういう展示の入れ替えをしているということで、ちょっと昔の記事で見ると、常駐スタッフも5人ぐらいいて、他にはボランティアがたくさんいました。やっぱりまちがどうなってきたかというのをちゃんと知れる場所があって、これからのまちがどうなっていくかを見られる場所がまちの中にあるということが重要だと思いました。やはり「まちのビジョンをどうやってつくっていくのか」というときに、これぐらいのことをやらないと、なかなか具体的な議論が進んでいかないのかと感じまして、ちょっとお時間いただいております。

手島：

今までラウンドテーブルを2回やってきましたが、その中で、特にまちづくりコンサルタントの末さんや、安本さん、あるいは様々な学識経験者の方々から、具体的にこのエリアだったらこうしたほうがいいのか、あるいはこういう可能性があるのではないかというようなイメージをいただいております。例えば、歩

せていただきましたけれども、シティホールとして、機能面から考えるとどういった低層機能が必要かということ、あわせて、にぎわい創出という視点で考えるということから、市役所が終点ではなくて、回遊性の向上の起点として、にぎわい創出につながるような機能はどういった機能があるのかということ、そういった低層部についてどういった運営をすべきかと、運営についてのどういう視点が重要かということ、どのような運営手法が望ましいかと、そういった3つの論点を一つ一つ皆さん方々から意見をお伺いしたいと思っております。

そのたき台というものが市役所の建替基本計画検討委員会で出されている資料の最新版にあります、その中の導入機能についてまとめたものを、皆さん方お手元に配付させていただいております。市の担当者のほうから、画像を使いながら報告をさせていただきます。

高橋：

仙台市の高橋と申します。現在の検討状況について最初にお伝えさせていただければと思います。

まず、抜粋で簡単に説明させていただくのですが、市役所

ナビリティを建築と都市の文脈できちんと捉えた会議です。会議の最後にヨーロッパ憲章が起草されまして、それがEUの環境建築とコンパクトシティ政策の連携に繋がっていきます。建築スケールでのサステナビリティと都市スケールのサステナビリティを連関させる具体的な提案を読むことができます。

源流は、ロジャースとピアノが設計したポンピドゥー・センターだと思えます。彼らは、都市再生と環境建築をアメリカで学びました。ノーマン・フォスターはバックミンスター・フラウアーから、ピアノはルイス・カーンから、リチャード・ロジャースはジェーン・ジェイコブスからだったりするわけですが、たとえばロジャースはデビュー作であるポンピドゥー・センターを環境建築であり、同時に広場を持つ都市建築だというように説明しています。そういう都市環境建築の先例があるのです。

2002年には、ロジャースのもう一人の盟友であるフォスターが設計したロンドンの市庁舎ができるのですが、個人的には、やっぱり仙台の市庁舎もこのぐらいの環境建築であってほしいと思って

行者のためにグランドレベルが開放されたまちがいいのではないかとか、あるいはジャズフェスだとかそういった都市空間を使ってきた仙台というまちからすると、人々の活動ができるだけ見えるようなまちのつくりがいいのではないかとか、あるいは平野先生のような土木の方からは、交通ネットワークというのはこれから恐ろしくかなり変わってくるので、そういった視点からも、もう1度この場所がどうあるべきかについて見直したほうがいいのではないかとお話をいただいております。

今日は、そういったことを踏まえながら、(今決められることではないこともたくさんありますけれども) 実際今後何十年かを考えて、様々な未来の可能性を想定して、どういった視点を持つておくべきかということ、とにかく重ねていければと思っております。

では、レジュメの順番に沿って話を進めていきたいと思いますけれども、まずはその定禅寺通のまちづくりの視点からということで、木村さんから、自己紹介を兼ねて、ジャズフェスなどのイベントをしている立場から、この都心エリアの価値、ポテンシャルということに関して、あるいは課題があれば、そういったことに関してもお話しいただければと思います。

の概念図になっております。1階部分、低層部ですね、1階から2階、3階くらいを市民利用機能で利用します、きょうテーマにさせていただく低層部というのは、この市民利用機能になります。そのほか行政機能に必要な部分、ロビーとかを低層部に配置しまして、中層から高層までを行政機能、その上に議会という形で現在検討しております。

この市民利用機能に関してなんですけれども、まず、何をしたいのかとか、どういう場所なのかということがわからないと決められないのではないかと思います、「まちづくりから考える新本庁舎」という資料をご用意させていただいております。まず、大前提として、現状の庁舎が3代目ですけども、続く行政機能の場として、行政機能というなりわいがあることがこの場のアイデンティティーであると私たちは考えています。

一方で、勾当台エリア、皆さんもご存じのとおり、定禅寺通とか市民広場で、こういった常々市民が主役になるようなイベントがなされているのも周知の事実だと思います。そういった素晴らしい環境とポテンシャルを持った敷地にあるということで、先ほどの低層部分、市民利用機能がまちにしみ出していくような、そういう棟内配置がいいのではないかとこのように私たちのほうで

います。ロンドン市庁舎はテムズ川の見える敷地の北側に議場をつくっていますが、この議場を浮かし、その下から新鮮空気を取り入れてボイドで上から抜く自然換気を取り入れています。建物自体は南に傾斜しており、直射日光も少ない形態になっています。この建物を実際に見ますと、パブリックスペースが豊かなことに驚きます。パブリックスペースと護岸整備が一体化しておりまして、先ほどの浮いた議場の下まで入れます。どこにボイドをつくり、それとどこそれが外部の都市環境と繋げるかということが基本計画の段階からものすごくはっきりしているということがあります。

ここからは私の自己紹介ですが、私はピクニックが好きでして、東京ピクニッククラブという団体であちこちのパブリックスペースを使っております。休日の午後に料理やお酒を嗜みつつ、集まって下る方々と都市の風景を楽しんでいるんですが、仙台でもこういうことが大事であろうと思っております。

Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う「役所市(シティホール)」を考える

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

Table A2 木村 :

周辺エリアのビジョンの「翼を担う」を考える
「役所市(シテイホール)」

こんにちは。木村と申します。2011年に震災ボランティアが高じて仙台に住みついたので、今年で8年目の仙台市民になります。本日はどうぞよろしくお願ひします。

まず、この場の在り方について私の理解を申しあげます。来年にはこの建て替えについての方向性を決めるオリエンテーションがつけられるのだと思うのですが、そこは専門家の方々が中心となってやっていくことになると思うのです。その前段階として、利用者参加型の会がこの場であると僕は理解しています。

では、僕自身がどんな利用者なのかというところを、自己紹介を兼ねて説明させていただきます。まず、僕自身は新規事業の開発のプロデューサーをやっています。企業や団体の新規事業開発で、上杉商事という屋号でやっています。例えば、宮城県の指定伝統的工芸品玉虫塗の事業開発室長であったり、楽器メーカーのヤマハにおける音楽のまちづくり推進課の東北担当などを行っています。もうひとつは、先ほどお話しいただきました定禅寺ストリートジャズフェスティバルに2011年から仕事として関わり始めて、2014年からは実行委員として開催に関わっています。任意団体から公益

社団法人になった際のビジョンとミッションの整理だったり、計画書の作成であったり、あとはフェスティバルの渉外担当の理事としてテーマやビジュアルの設定であったり、広報グッズ、協賛出店などを行ってきました。

市民活動のプレーヤーとして、市役所の利用者として今日はお話を進めさせていただきます。

定禅寺ストリートジャズフェスティバルというのは、ボランティアの実行委員が大体50名で運営をしています。ボランティアと言ったのですが、途方もない時間と労力をかけています。9月にフェスティバルがあるのですが、翌月からは次年度の予算組みを開始しています。そうそう他には例がないと思ひまして、ボランティアというよりは副業に近いかなという気がしています。お金はもらっていないですが。

メインの仕事とは別に、なぜ実行委員をやるかということ、好きなことにチャレンジしたいからです。基本みんなそうです。ジャズフェスというチームでは、毎日のように変革が起きていまして、50人近い人たちがトピックごとにチームを組んで、少しずつフェスティバルの形を変えています。

私の立場をまとめますと、副業的な形で好きなことの事業化にチャ

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

は検討しております。

そういった中で、この都心部の中で、勾当台エリアをどういった位置づけだと考えているかといいますと、仙台駅西口のほうで大体歩行者の人が回遊するエリアというのがこの白いふわっと囲まれた部分ではないかなというふうに考えております。仙台駅からアーケードを通過して、定禅寺通のほうに抜けていく、その中で市役所がある位置がこの位置ですけれども、こういったにぎわいの回遊軸の北側の玄関口になるような位置だと私たちは考えています。

そういった北側の玄関口ということも踏まえまして、市役所に関しては北への通り抜けだとか、そういった建物と敷地内を通り抜けできるような、そういう回遊性に資する場所にしていきたいなというふうに考えております。

それに対して、どういった回遊性を持たせていけばいいかといいますと、市民広場のほうで行われているイベントというのを独断と偏見でイベント分析しまして、基本的には見るだとか買うとか食べるというような場になっています。遊ぶだとかつくるだとか、そういったイベントが少ないようになっているので、体験型も踏まえた場所にしていけばいいのではないかなと考えています。そ

ういうことで、回遊性に資するようなエリアにしていきたいなというのが大前提にあります。

そんな中で、どんな機能をここに入れ込んでいくのかということの話をきょうテーマとしていきたいというふうに考えているのですけれども、現状で考えている機能が、検討委員会の皆さんにも言われた、市民とか職員の日常に使えるような食堂、カフェ、売店、あと周辺との連携機能ということで、市民広場と一体で使えるようなイベントスペース、ギャラリーだとか、あと市民協働スペースということで共用会議室、行政と市民が一体で使える会議室を設けたり、市政情報とか観光情報とかを発信する情報発信機能、あと勾当台公園が交通の結節点の場所でもありますので、地下鉄とかバスとか、そういう人たちも使えるようなロビー空間と待合スペースを兼ねた場所という形と、最後に、職員と市民が多彩な協働の場で集まれるような場所が欲しいねということで、一例として市民と職員が協働できるコワーキングスペースというのを検討しております。

下のほうは、要望とかはあったのですけれども、今後この機能を入れるかどうかというのを精査しているものになります。ざっくり検討状況の説明としては以上になります。

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

設計の実践家としては、今、阿蘇の高森駅の再開発に関わっておりまして、これは雄大な広場を持つ建築です。阿蘇のカルデラの南側の一番端っこ、東側にある終着駅なのですが、その終着駅に大変広いプラットフォームをつくらうとしています。そうすると、西側に広がるカルデラに夕日が落ちるのを見ることができる。そういう瞬間が町には必要だとも考えています。

さて、4年前まで環境建築を東北大学で教えていたのですが、ちょっとつまらなくなってやめました。それは別に東北大学のせいではなくて、事例をいろいろと紹介していたのですが、僕の好きだった環境建築というジャンルがとてつまらないジャンルになっていると思ったからです。それで、Flowtoothという言葉を考えました。BluetoothじゃなくてFlowtoothです。これは「菌の浮くような」という意味なんですね(笑)。今、環境建築はものすごく菌の浮くような説明でつけられていると思ひます。ロジャース、ピアノ、バックミンスター・フラーがやっていたような、ものすごく実験的で新しい建築、都市のサステナビリティと連続しようという昔の環

境建築の議論が、今はスペック競争に落ち込んで、環境の視点を取り入れれば取り入れるほどつまらなくなるというのがこの10年だと思います。それを仙台で繰り返して欲しくないの、そこは新しい傑作をぜひともつくってほしいと思ひまして今日は参りました。どうも長くなり失礼しました

内山 :

ありがとうございます。いろいろキーワードを出していただいてありがとうございます。それを後で深めたいと思ひます。次に、武山先生からご紹介をお願いしたいと思ひます。

武山 :

武山と言ひます。ずっと東京で仕事をしておりまして、東北工業大学に着任して3年目です。建築設計をやっていました。自己紹介を兼ねてプレゼンテーションをつくってきました。

まず、話題提供ですが、自然エネルギー利用の建築を提案、研究



Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う
「役所市（シティホール）」を考える

小島：

ありがとうございました。まだ検討状況ということなので、これで決まりというわけではありませんので、皆さん方からのご意見、これが次回の検討委員会のほうに、事務局の資料としていい形で出るようにしていきたいと思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

それでは、皆様方からご意見を伺ひたいと思ひます。先ほど言った論点1だけだと、なかなか議論が難しいかもしれないので、にぎわい創出という論点を含めてでも構いませんので、お話をいただければと。それでは、洞口さんからよろしくお願ひしたいと思ひます。

洞口：

普段、仙台市で働いているのですけれども、今日は「仙台市職員」としてではなく、「公民連携事業研究センターの研究員」の洞口として発表させていただきます。

いろいろ考えてきていたのですけれども、僕の専門は都市経営や公民連携というところだと思いますので、その観点で、いかに都

しています。仙台は、東北でも太陽に恵まれています。日本地図のバッシブポテンシャル、PSPマップです。ご覧になっておわかりのように、これは何の絵かという、分母は degree・day になりますが、どれくらい寒いかの指標です。分子は、それに対してどのくらい太陽エネルギー、日射があるかを絵にしたものです。1月だけですが、黄色いところが仙台でして、その黄色い帯は九州の北側、四国の瀬戸内側まであります。要するに、仙台は、そこそこ寒くて使える太陽熱がたくさんあるところなんです。この地図の上に、僕が幾つか設計した建物を示しています。

これは、北海道の釧路の物件です。PLEA (Passive and Low Energy Architecture) という国際会議があったときのインフォメーションセンターを設計しました。風力発電と太陽熱利用を採用してまして、今で言うZEHですね。必要なエネルギーは全部自給自足している建物を実現しています。

次は丹後半島です。京都府のコンペだったのですが、緑色のところなんです。日本海側で積雪深1メートルと雪深いところで、1年の

市経営に資する庁舎建てかえであるべきかというところのお話をしていきたいと思ひます。

最初に、論点の整理として重要なのは、ご存じのとおりアーケードと、いわゆるピンク色のところですね、完全に中央に食べられてしまったという表現をしていいのかわからないですけども、中央の商業資本が集中しているエリアだと思います。一方で、唯一、僕らが仙台らしいと言われているようなエリアというのは、まさにこの定禅寺通だったり、青葉通や西公園で、このような回遊性の玄関口になるのが、もしかしたらこのアーケードを出たこの庁舎のエリアになるのかなと思ひます。

このようなエリアをどういうふうにやっていくかという時には、ちょっと文字が小さくてすみません、恐らくこのグラウンドレベルというところが、市民広場との連携だったり定禅寺通との連携、あとは庁舎の低層部が、ちゃんと民間が運営していきながら、何かしら活気づくものになってきたりというのが、まず狙いになってくるのかなと思ひます。

ただ、僕が一つ気になっているのは、市民協働という言葉がマジックワード化していないかということが僕はとても気になっています。市民協働って僕はすごくいいものだと思うのですけれども、

半分は冬で、暖房の必要な期間です。でも、例えば春の訪れを早くする、秋の訪れを遅くすることができます。要するに、3月から増えてくる日射を上手に使う。あるいは、よその家は暖房を始めるけれど、秋から冬にかけての秋口、太陽熱利用をするというような自然エネルギー利用で、日本海側もそう捨てたことないという設計が可能です。

次は、宮城県北のほうで、登米町森林組合の太陽熱利用の木材乾燥庫です。これはエコハウスで賞をもらいました。太陽熱利用、赤いところ、オレンジのところは、もうどんな工夫をしなくてもダイレクトゲインだけで何とかなるところなのですが、そこでもZEHを、太陽熱利用を軸に実現しています。

これは東松島市です。今日の登壇者である小野さんのところで施工していただきましたが、新エネルギー利用で、元に戻すのではなくて、自然エネルギーと新エネルギーの、技術的な話ですけども、温度差で電気つくるとかそんなことも絡めて、エネルギー自給型の建物をつくるというようなことをやっています。

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

Table A2

周辺エリアのビジョンの「翼を担う」を考える
「役所市(シティホール)」

レンジし続ける市民活動のコミュニティーの一員として、僕が感じる「都市のポテンシャル」を2点お話しさせていただきたいと思います。

ひとつは、自然の近さです。山あって川があって、平野があって、海があって、これらが10キロぐらいの間で行われていますよね。それは素敵だと思います。ちょうどいい厳しさで、あまり険しくないというか、山には立ち入れないみたいなのもないし、川に入るのが大変だということもない。全部がちょっと優しい感じで近くにいます。

東京から引越してきた年に、多彩な分野の人たちと会えて創造的に協業ができて、エキサイティングだなとすごく思いました。それは非常に社会的な側面なのですが、最初にお話ししたような自然の近さみたいなものを非常に感じるがありました。友人で、今89ERSというバスケットチームのオーナーをしているデービッド・ホルトンという人がいるのですが、彼が「どこでも体を鍛えたりすることはできるけど、精神を鍛えるのは自然の中じゃないといけない」と言っていて、僕もそのとおりだなと思っています。仙台は、非常にその都市の周りに自然があることによって、自分の考えを深めるということも非常にやりやすい。

仙台に住んでいるアドバンテージだなと僕は思っています。

もうひとつは、少し文化的な側面なのですが、ここでは各々がまちに主役になれると思っています。ジャズフェスをやっているのと、2日間で大体5,000人位の人が演奏をしています。バンド数でいうと760バンド前後になります。そういう人たちが次から次へと演奏して、主役となるのです。実は、いろんなまちからいろんな人たちが視察に来てくださるのですが、いつも言っているのは、同じことをやっても同じようなフェスティバルにはならないですよと。仙台の方々というのは、すごく演奏に対して許容量があるというか、良くも悪くも、5,000人もいれば、もちろんまい人もいれば、そうでない人もいます。けれども、全員にとってその日はもう本当に一世一代の大イベントという人もたくさんいて、そういう人たちの喜びの瞬間みたいなものに対して誰も否定しない。少なくとも否定する人はあまりまちなかにその日は来ない。そういうような形があるので、結構よそから視察に来た人たちは、「いやあ、これうちのまちでやったら、ちょっとクレーム出るかも」みたいなことを言われることもあります。そのとおりだと僕は思っています。まちに主役がたくさんいて、主役が交換可能であるということが、そういうフォーマットというかソフトの文化が

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

本当にきちんとした形になるものなのか、僕はちょっと気になっていて、市民協働って聞こえはいいけれども、ここから先をもうちょっと考えていかなければならないのかなと思っています。

利活用プラス都市経営という観点から考えていこうと。都市経営というのは、まさに仙台市というのは一つの会社と見立てて、どのくらいお金が入って、どのくらいお金が出ていくか、赤字になったら夕張みたくなってしまう、アメリカだったらデトロイトみたいになってしまうということですね。

市民協働の概念、小島さんがよく言うのですけれども、我孫子市の市長が言っている話ですけれども、自治体と事業者市民と言われる市民が連携することで、公共サービスを受益者市民に対して届けることが市民協働であり、そこに対して質の向上であり、コストの削減があったりとか、もしくはもっと先にいくと稼ぐみたいな概念が出てくる、これが、まさに市民協働の概念だと思います。何となく市民と行政と一緒にいけば市民協働なのかと言われると市民協働ではなく、恐らくここら辺の話まで突っ込んでいくと、少し今回の議論がわかりやすくなっていくのかなと思います、概念を入れさせていただきました。

いい事例なのか悪い事例なのかかわからない、アオーレ長岡という

もの一つ出しました。結構アオーレ長岡、いろいろところでこれを見習ってやっていきましょう、みたいな話が出てくるので、これをもうちょっと詳しく見ていきたいと思います。

アオーレができるときの、どんな議論がされていたかを見ていくと、「市民協働のまち長岡を象徴するシティホールにしたい」とか、結構、仙台市と同じようなことを言っています。できたものが、スライドのようにホールの運営をNPO団体がやっていて、相模があったり羽生結弦君が来たりとか、そんな運営がされていて、さらに「ナカドマ」というまさに代名詞ですよ、これがあって、ここにいろいろなイベントが運営されていると。ただ、ここに生まれている風景が、持続可能な運営なのか都市経営に資するのか、これを十分に分析する必要があると思っています。

ネットで出ている情報で、NPOの財務状況を調べてみたのですが、補助金が収益の58.7%から63.4%で、さらに委託事業も入れると、恐らく97%から99%が市の公金で賄われている。平均すると、大体2億4,000万円が補助と委託金で毎年出ています。さらに、6名の市の職員が出向していて、それに6,000万円の人件費がかかっています。この低層部を運営するのに毎年およそ3億円の税金によって運営されているということでもあります。

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

環境をどう捉えるかなんですが、今、建築家が環境のことを考えただけでは通用しなくて、やっぱりラベリングや評価が行われるようになっていきます。具体的にはCASBEなんかもそうですが、分母は環境負荷になります。材料の調達はどうだったとか、できてからどんな負荷があるかです。分子は建築が実現したクオリティーです。分母に負荷があり、分子にクオリティーで、Building Environmental Efficiencyというのを数値化して評価するのですが、LEDなど、国外にもいろいろなツールがあります。そういう客観的評価でどのようにZEBを目指したかということが分かります。僕は、後の議論になるのかと思いますが、NearlyZEBやZEBReadyではなくて、完全なZEBのビジョンを示した上で、予算がなくてこれはできてないけどねっていうようなエクスキューズがあってもいいとは思いますが、やっぱり分母を考えれば、使うエネルギーを減らす、いかに省エネルギーを図るかだと思います。分子を考えれば、いかに、再生可能エネルギーやただのエネルギー、自然エネルギー

など、使えるものを上手に使うかを考える。分母分の分子であるところの環境に与える負荷を最小限にする建物を実現すべきだと思います。

この後にもプレゼンテーションがありますが、次の話題のときに使います。よろしくお願いたします。

内山：

後の事例を紹介いただいた後に、他の先生からコメントいただきたいと思っています。

次に、村上先生からお願いします。

村上：

それでは、まず自己紹介からさせていただきます。今日は市民の視点からお話をさせていただきたいと思参りました。村上と申します。よろしくお願いたします。

私は現在、四ツ谷用水と言われる、かつて城下町を流れておりま

あるというのが仙台のおもしろいポイントではないのかなと思っています。ありがとうございます。

手島：

ありがとうございます。続きまして齊藤さん、お願いいたします。

齊藤：

齊藤でございます。まだ仙台市民になっていないので、なぜ私がここにいるかということなのですが、今庁舎建設の基本計画の委員を拝命させていただいております。月1ぐらいで仙台に通っております。私は新潟に生まれたので、住んではいないのですが、観光を通じてや、友人も住んでいるので、仙台はよく知っているつもりではあります。あとは、震災の後、石巻に行っております。あと私は、現在いろんなところに所属しているのですが、コクヨという文房具・家具の会社にも所属しております。仙台に拠点があり、復興の支援についても拠点を持っていて、(私は来れなかったのですが)同僚とかが来ています。他には、南三陸の町役場、庁舎の建設を友人がやっていることもあって、コクヨも家具を提供させていただいているのですが、まさに南三陸のあの町役場が、

これだけ多くのイベント活動が収益を生まない、経済活動につながらない仕組み、運営ということになっていることが、すごい問題なのではないかと僕は個人的に思います。多分、民間の人だったら間違いなく、それって、おかしいじゃないって言うと思います。公民連携事業というのもPFIとかもあるのですけれども、我が国のPFI制度というのはかなり不完全なもので、諸外国で禁止されているのは割賦払いですね、サービス購入型のPFIというのがほとんどで、ほとんどの庁舎PFIというのはこれでできているので、都市経営としてはマイナスなものになるのではないかなと。ちょっとこれ難しい話なので割愛させていただきます。つまり、なにも稼がないPFIってよくないですよということです。都市経営的議論として、庁舎建設には大体今400億円かかりますと言われてまして、それに対してランニングコストが1,600億円、合わせて2,000億円がかかると。ただ、仙台市の公共施設マネジメントプランだと年間243億円赤字で、もう足りないとなっています。これは、ちなみに、1,600億円の中にはランニングコストとか入っているのですけれども、光熱費はこのマネジメントプランに入っていないので、大体400億円ぐらいは光熱費で入っているはずなので、こういうところもまたさらに上乗せで入ってきますし、

した用水路、今は県の工業用水となっている、四ツ谷用水の活動をしております。そして今現在、農業用水として使われている六郷堀・七郷堀の活動、若林区役所のまちづくり推進課のほうで行っている事業なのですが、その市民ボランティアのような形でスタッフとして参加しております。

私は、都市や建築、歴史の専門家ではないのですが、地元の歴史に関して非常に強い関心を持ってまして、こうした催しに参加しております。きっかけは、今から3年ぐらい前になるのですが、森林の話聞きまして、その話をいろいろ調べましたら、どうやら高祖父や曾祖父が市内の仏教や仏道に関わっていることがわかりまして、それを受け継ぐような形で、旧48号線の唸り坂というところにごさいます空海を祭ったお堂の保存や管理を行っております。そちらのお堂の地下に四ツ谷用水が流れておりまして、それもきっかけの1つになりました。

今回、この新庁舎建て替えに伴って、仙台のアイデンティティのようなものを2点ほどお話させていただきたいと思います。

皆さんご存じのように「マチドマ」という形で市民協働の開かれた場所としてプロセスを持ってつくられているというのは、すごく身近には感じています。 Table A2

今日のこのテーブルのテーマである、「都市ビジョン」については、ある意味で一番難しいところだと思います。私はコクヨに勤めながらいろいろな活動をしています、それには理由がございまして、バックグラウンドは空間のデザインなので、例えばこういう場を、アクティビティーとか人がどういうふうにするかというところから空間をデザインする仕事をずっとしております。ほかに、今色々な自治体や企業でもフューチャーセンターの必要性が言われておりまして、国もちょうどこの春に経産省の中に省庁間の横断をやらないとまずいということで、「フューチャーセンター・アライアンス・ジャパン」という組織が、ひっそりと経産省の7階にできたのですが、そういったフューチャーセンターの運営とか、それからどういうふうにする社会的インパクトのあるイノベーションや政策立案に結びつけていくかという活動をやっています。

先ほど、シンガポールの報告がありましたが、私もシティアポロには去年行かせてもらいました。その上、研究で、いろんな都市や、

先ほどの、もし庁舎の運営が民間に、それを公金でやるという話になると、そこに何億円というものが毎年乗っかってくる。これは、あまり持続可能な都市経営とは言えないのかなと僕は思っています。だんだん暗い話になってくるのですけれども、明るい話にいきます。

まとめとしては、きちんと収益を出して低層部の運営を行うことが大事だなというのと、基本計画の持続可能な事業としてちゃんとアップデートしていく、または、稼ぐ公民連携事業と、事業評価できない行政からではなく、金融機関などから事業評価を得てやっていこうということを僕は思います。

一つの代表例でオガールプロジェクトがあります。公共の土地の上に公民が合築して一緒に建物をつくって、図書館部分の真ん中ですね、サイドにある建物は民間の収益施設になります。この真ん中の施設だけは行政が後から買い戻したという形ですね。民間が建てたものを後から買い戻すというような手法でやっております。行政が、「活性化という公共」を民間に委ね、筋肉質な事業をつくっているということがまずオガールの特徴です。

あとは、PPPエージェントによってテナント先づけ逆算設計なのが特徴です。下手な話、仙台市本庁舎の場合、庁舎建てかえし

まず1つ目ですが、仙台は河岸段丘の上に築かれたまちです。仙台地域の歴史を見ても、外側の例えば国府多賀城には遺跡がありますが、今現在の仙台市の中心部には、まだ大規模な集落というのはありませんでした。それが、政宗公のまちづくりによってこれだけのまちが築かれました。その理由は、やはり荒地や湿地であったことや、あるいは川の氾濫、洪水の危険性もあったということがありました。そして、政宗公の時代になって初めて城下町が整備されたのですが、非常に問題になったのが水の確保です。水の確保をするに当たって、河岸段丘なのでなかなか難しいところだったのですが、特に農業用水や湿地や雨水などの排水、防火用水とか生活用水など、そういったものに四ツ谷用水というのが役割を担ったということになります。上水は井戸の水になります。四ツ谷用水が、仙台のまちづくりの非常に大きい役割を果たしたというのは間違いないかと思えます。

それから、2点目ですが、政宗公はたくさんの武士を抱えておりました。戦の時代が終わり、天下泰平の時代になったときに、政

周辺エリアのビジョンの一翼を担う「役所市(シティホール)」を考える

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

Table A2

周辺エリアのビジョンの「翼を担う
「役所市（シテイホール）」を考える

国内外のこういったイノベーションのスペースとかクリエイティブシティの調査もしているのですが、改めてそういった分野から仙台を見てみると、感じるがあります。（住んでいないからわからないこともたくさんはあるのですが）出張で国内外を飛び回っている仕事をしていますが、「あ、このまちっていいな」と思って、何となくそのまちの準市民みたいになるケースが結構あります。そういう都市がいくつかありますが、仙台はある意味すごく大都市で、100万人都市で、何となく私がいなくてもうまく回っているという感じがあって、結構通り過ぎてしまう感じがあります。学研都市とか杜の都という形で、何か来るとやっぱりきれいだとは思いますが、何か大きすぎて、東京から来て言うのもなんですが、大きすぎてなかなかその市民の人に出会う機会がないとか、何か目的を持って来るのだけれども、委員会とか今日とか、あとは東北大学さんとはいろいろプロジェクトで一緒にさせていただいているので、目的がないとずるずるするような感覚がなくて、やはりその仙台ならではの風景とか光景とか、場みみたいなものがもっと魅力を持って生まれてきてもいいのかなと思います。

あと、先ほどあちらのテーブルで市民協働のあり方というグルー

プで議論させてもらったのですが、もう既にいろんな活動されている方や活動体があるのですが、それがなかなか連携していけないというのは、仙台だけの問題ではなくて、日本全国世界中で起きている問題なので、（今よりも大変なことになっていますけれども）むしろある意味で、震災の経験をしている仙台から、市民による「都市ビジョン」が、（つくられたものを展示するというよりは）どういうプロセスでつくられて、そこにどれだけの市民もしくは準市民が巻き込まれていくかということが実現でき、展示出来たらすてきなだと思いますし、そこで多分重要なのが、そのジャズフェスなどの、イベントですよ。ジャズや、音楽とか食とか、もっと違う都市の魅力、エンターテインメントがあると思いますが、正直言って私海外の都市のほうが好きですね。それは、ぶらっと歩いたらいろんな出会い、アクシデントがあるのですが、そういったものが仙台ももっともってできていくと、私も多分もっと来る頻度が高くなるかなと思いました。

手島：

ありがとうございます。すごくまちづくりにとってその重要な視

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

ます。建物ができました、建物が完成するぐらいのときにテナントを入れるみたいな話になると、「あれっ、何か合わないぞ」みたいな話がある。普通であれば、テナントが、どのくらい家賃が払えるのかとか計算した上で建物のスペックが決まり、建てます。民間事業ということは、そういうことをやるということですね。

さらに、オガールとかはお金の向きは逆になって、指定管理みたいな運営になると、行政からお金が全部出ていくのですけれども、こういうやり方になると、民間が稼いで、稼いだお金でちゃんと法人税で払い、地代も払って、そのかわり民間がそこで稼ぐことを行政が許すというところをやっているのがオガールなのかなと思います。

そういったやり方というのは、もうそんなに珍しい話ではなくなって、全国でいろいろなところで動き始めているというような感じになります。大都市もありますし、こちら辺は「やっています」というぐらいの紹介にして、ここからは運営としてこんなやり方もあるよというのをちょっとご紹介します。

パターン1として、仙台市が民間に全部、丸ごと建ててもらって、リースで仙台市やテナントに貸す方式です。つまり、民間に土地を貸してしまった上で、民間が全部を運営していくようなやり方

もあれば、パターン2のように民間が建物を建設した後、建物を仙台市が買い取り、低層部を民間業者に貸してしまうみたいなやり方もある。パターン3のように、すべて全て仙台市で建設し、低層部だけを民間にマスターリースしてもらい、その民間が内装工事をする、今の考えはこちら辺ですかね。パターン4の場合、貸すのではなく、アオーレのように、ここを指定管理で入れてしまえみたいな話です。

僕は、どっちかという、一番軽くするためには、行政が持たないで民間からリースで借りてしまっ、SPCつくってやってしまふみたいなものが一番手取り早いかなと思っています。ただ、こちら辺の話だとマニアックな話になるので、今日はこれぐらいにして、もし何か話としてもうちょっと先があるのだったら、この先の話は続きがもうちょっとあるので、もしそこまでいけたら話したいと思います。以上です。

小島：

ありがとうございます。何か論点3までいっちゃった感じがしなくてもいいのですが、簡単にまとめると、まちづくりという視点で見た場合に、駅前地区というのはミニ東京化している。

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

宗公は侍を首にせず、たくさん使わせておりました。ただ、仙台藩は、それほど豊かな財源があるわけでもないののでどうしたらいいかというときに、城下町の侍の屋敷に生産性の高い樹木を植栽させて、いろいろ賄っていたそうです。それに対して、四ツ谷用水が、屋敷林を繁茂させる上で重要な役割を担いました。その後、空襲で焼けてしまうのですが、杜の都という最初の原点は、定禅寺通りのケヤキ並木ではなくて、まずこの屋敷林があって初めて杜の都の原点があったのかと思います。ですので、まず仙台の顔である仙台市役所の設計というか構想を考える上で一番重要なものが、やはり仙台のアイデンティティです。仙台というまちは一体何なのか、どこから来たのかということは、まず四ツ谷用水とか屋敷林というものを考えていかないといけないというふうに思っております。

そこで、今、画像が映っていると思うのですが、これが城下町の仙台のときに描かれた絵図で、ちょうど今現在、市役所の敷地となっているところに四ツ谷用水が流れていたことがわかります。

今、庁舎があるのはちょうど北側のところでして、初代の庁舎は南側の表小路の北側のほうに建てられました。その後、今の3代目の庁舎が建ったときには、もうこの全体を敷地として使うようになりました。

次の画像は明治20年ぐらいのものでして、初代の庁舎を建てるときに、北側が侍屋敷だったところなのですが、それが市役所を建てるということで市役所敷というふうに記載されています。北側から流れてくる四ツ谷用水が南に行き、さらに東のほうへ、旧養賢堂があったところのほうに流れていることがわかります。

これが仙台市の空襲のあった後、米軍が撮影した1948年ごろの航空写真になります。これがちょうど市役所の2代目の庁舎となっております。ちょっとわかりにくいのですが、こちら側が奥州街道の二日町です。ウナギの寝床のような感じで町屋の細長い敷地があるのですが、その裏側に四ツ谷用水が流れていたと思われ

これが今現在の航空写真です。城下町の絵図と今の航空写真を無

点をいただいたと思います。
では、続いて山田さん、お願いします。

山田：
都市デザインというコンサルタント会社におります山田と申します。よろしく申し上げます。
もともと仙台市役所に勤めておまして、定年退職後、他の会社に行き、4つ目の会社になりますが、勤めております。もともと市役所にいたときに、都市計画やまちづくりをずっとやっていたので、どちらかというともちづくりの視点からということなどでご指名があったかと思えます。
テーマがちょっと大きすぎて、なかなかその市役所本庁舎とビジョンとの関わりということで考えると、必ずしもその市役所そのものがビジョンの一翼を担うかということ、担わないのではないかなと実は思っておまして、これまでラウンドテーブル2回参加させていただきましたが、そのときにお話したのは、市役所庁舎が本当にまちづくりに影響なり力を及ぼすことがあるのかということ、歴史的に見てもそういう力はないかと。むしろ議論されているのが、定禅寺通とか市民広場との関わりの中で、市役所

定禅寺通境界は、これは仙台の個性というものが出ている、また出すべき地区で、市民との交流というのが一つのキーワードだろうということだろうと思っております。
そういった視点で見たときに、導入機能というよりも運営にかかわってくるのでしょうかけれども、利活用と都市経営ということを考えて、市民協働だからいわゆる税金垂れ流しでいいんだというのではなくて、少し稼ぐということを考えていくべきではないかということがあったのかなと。当然、市民協働の中にもさまざまなジャンルがございますので、全てというわけではないでしょうけれども、いわゆるアオーレ長岡ですかね、ああいったお祭的なイベントも含めて収益を上げないというのではなくて、上げるべきところは上げていくということが大事だろうと。そういったことを公共側は、民に積極的にその運営というのですかね、責任を委ねるという覚悟があっているのではないかとということが洞口さんのご意見かなと。運営については、また後ほどご意見を賜りたいと思いますので、そこをちょっと割愛するというふうにしたいと思っております。よろしいでしょうか。
それでは、きょうは豊島さんに来ていただきまして、この会場の中で一番若いと思っておりますが、まだ二十五、六歳かな、いわゆ

りやり重ねたような画像です。当時、測量をやって絵図を作成したわけではないので、重ねたからといってちゃんとびったり合うかということももちろん合わないのですが、大体このような感じで目安として考えたらいいかと思います。
これが戦後の航空写真と明治20年の図面を重ねたものです。ここでもわかるように、四ツ谷用水が、しっかり市役所の敷地を流れていたというのがわかります。
それで、市役所を構想する上で、先ほど申し上げたように、四ツ谷用水と屋敷林を生かすことができないかということで、新庁舎は今の市庁舎の南側につくと予定になっておりますけれども、それであれば、恐らく北側にかつて流れていた四ツ谷用水を何らかの形で再現したり、利用したりできるのでは思っております。ですので、この辺を今回、今日お話をできたらと思います。ちょっと長くなりましたけれども、よろしく申し上げます。

内山：

の建物の一部にそれを支える機能なり、そういうものを、言葉は悪いのですが市役所の建物を間借りして、定禅寺通りなどの機能と一体的にということじゃないかなと思っております。
そういう意味で言うと、必ずしも本庁舎でなくても、今の市役所のある場所で、その立地条件を生かして機能を発揮するということが必要じゃないかなと思っておりますが、具体的なアイデアがなく、いつも中途半端な発言しかできておらず、申し訳ありません。ひとつは市民広場というのが非常に大きなパワーを持っていますので、それと連続する空間として、完全に市役所の本庁舎の中に広場機能を持つ、そういうのもひとつのアイデアかなと思っておりますし、逆にむしろその庁舎の行政機能と関連してということになると、前にお話したのは、市役所の中でいろいろな委員会がありまして、数えると30以上政策を決める委員会があるのです。その委員会の傍聴するような機会だとか場所というものの環境が整っていない。そういうことからすると、そういう今後の仙台市のいろんな施策を決める場面を、より広く市民も交えて、直接参加というのはなかなか難しいですけれども、議論を目の当たりにするような、そういうスペースがあるといいかな、というのをお話したことがあります。どちらにしても、市役所

る学生の立場でも、市役所ってなかなか学生は来ないという、先ほど第1部でもそういうお話もありましたが、いわゆる市役所というものをどう捉えるかと。まちづくりという中で、どう捉えるかということがあると思うので、その学生の延長として、そこら辺の印象なり、あと今取り組んでいるまちづくり、いろいろと先日行ったグリーンループの責任者として行っておりますけれども、そういった視点も含めて、自己紹介を兼ねながらご意見賜ればと思います。よろしく申し上げます。

豊島：
せんだいディベロップメントコミッション株式会社の豊島と申します。学生としての視点は持ってくるのを忘れてしまったので、旬な話題としてグリーンループ仙台から絡めてどう考えていこうかなと思ったときに、SDCとして公共空間利活用を大きな会社の活動のミッションとして掲げています。その中で、グリーンループ仙台というのは、先ほどのマップにもありますように、白い丸の図ですね、その規模感で回遊性が向上していくことが、仙台が魅力あるまちになっていくことになっていくと思っております。
そういう中で、ただ単に人が歩けばいいという話ではなくて、歩

ありがとうございます。
田路先生から話題提供をお願いします。

田路：
東北大学の田路でございます。私自身、もともと材料開発で、ちょうど10年ぐらい前に、蓄電池の材料開発をしていて、それから蓄電池がこれから普及するのではないかと思いました。ちょうど2009年です。そのころちょうど環境省のプロジェクトをいただきまして、錦織さんや東北大学建築学科の小野田先生と、蓄電池は直流なので直流応用をやりたいということでプロジェクトを進めました。その時は、何か我々の周りに小さいエネルギーがあるのでそのエネルギーをうまく蓄電池、特にリチウムイオン電池の能力を生かしながら、我々の生活で使えないかなと考えていました。東北大学に環境科学研究科ができた頃で、何か社会に対してインパクトがあることをしたいと考えていました。それが最初のきっかけです。

Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う「役所市(シティホール)」を考える

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

Table A2

「役所市(シティホール)のビジョンの翼を担う
周辺エリアのビジョンの翼を担う」

本庁の行政機能はそれにいろんな形で設計者も含めて議論されるのでしょけれども、まちとの関わりでのその機能がどうあるべきかは、庁舎側の検討から出ていくものではなくて、やはり都心部全体のありようとか、仙台市が今後どういう政策を行政の視点で展開をしていくかというようなことの中から、それに関連するあるいはサポートする機能を庁舎の中にどう持つか、というようなことじゃないかなと思っています。

「都心エリアは、どうかな」という話がテーマでありましたので、簡単に言うと、高度成長期、昭和40年代後半から、仙台はもう圧倒的にある特定の時期に建物が建ったという状況がありまして、まちなかの半分以上がそのころの建物がまだ建て替わっていないという状況です。見方からすると、非常にその古い建物が多くて、活動が非常に停滞しているように見えるのですが、もう一方で、建て替えの予備軍が非常に多くあるということで、そういう建て替えの状況をうまくつくり出すことで、また新しい仙台の機能なり魅力をつくり出すその余地が十分にあると、そういうふうに思っています。それが都心の新しいビジョンの中で、それぞれ単純に民間の個別の建て替えということではなくて、都心全体として機能の関連性があるような建て方、あるいはそこで展開する活動、

そういうものがなされれば、より全体として魅力がアップするのではないかなという具合には思っています。以上です。

手島：

ありがとうございます。ただか本庁舎じゃないかというような話から始まったのですが、私はむしろ、これぐらい単体の建物で影響が大きいのは他にはないと単純に思っています。面積が大きいこともありますし、立地からしてもそうですし、あるいは市民との関わりの方から言っても、やはりデパートとはちょっと違いますよね。ある意味で、今後基本設計を受託する設計事務所にプレッシャーをかけるという意味でも、もっと頑張れよということ、やはり我々地域の専門家としては言うておかないと、合格点を低くしたら適当なことをやってしまいますからね。そういう意味で、できるだけハードルを今のうちに上げておきたいと思っています。

そういう意味で、もっとハードルを上げるのがうまい末さんに、お願いします。

末：

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える



Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

その後、ちょうど地球温暖化の問題もありましたし、それから2011年の大震災の影響もすごくありまして、蓄電池は盛んに普及するのですが、それまで蓄電池は高価だから余り普及しないだろうと言われていました。僕も環境省で、蓄電池は高いから絶対普及しないよと言われて、そこでバトルをしていたのですが、ちょうど日産リーフが開発途中で、僕はそれにちょっと関わっていたので、これから電池は伸びてくるだろうなと思っていました。そうしたことがきっかけで、ライフスタイルとの関係で蓄電池や再生可能エネルギーというのがこれから環境の中心になってくるのではないかな、と考えていました。たまたま社会がそのように動いてくれたので、我々の研究家が言ったことは間違っていないかなとは思っています。

私自身、環境省のプロジェクトや震災後のスマートシティのプロジェクトで、ある程度蓄電池を応用したようなシステムをつくったのですが、ちょうどこの3月、定年して、やはり残り残しがちょっとあったと思っています。何かというと、やはり蓄電池は結局お

金がかかる。先ほどもBCP対応の話もありましたけど、かなりコスト高だと思います。これはなかなか普及しないなということで、将来市庁舎ができるときには、2026年にバグキャストしてどういう社会になっているか。それから、技術は、日進月歩で変わりますので、今ある技術ではなくて、やっぱり2026年を想定して、フレキシビリティを持って技術は変えていただくようにしないといけないと思います。

建築は当然、ZEB100もありますけど、ZEBReadyまでは、もうはっきり言ってZEBでぐっと環境負荷を下げていただきたい。僕は、技術より建築の方が重要だと思っています。そこに使っている材料なども大事ですが、仙台の地のエネルギーや自然をうまく利用した建物をつくっていただきたい。それが快適性につながり、先ほど言った地球温暖化とか、資源の問題とかエネルギーの問題と克服できる1つの手段となるだろうなと思っています。仙台は、水の都なのにほとんど水が使われていない。水はいっぱいあるのですが、今はほとんど使われていません。仙台市の方に聞いて

中央復建コンサルタンツという会社で勤めております末と言います。本業は都市プランナーをやっております。その関係で、今宮城県の女川町の復興まちづくりに2011年から関わって、ずっと女川町の復興まちづくりをお手伝いしています。

その中で、いろいろとやってきたのですが、僕が担当してきたのは何なのかというと、普通に土木分野の計画というものとは並行してやってきたのは、プロセスのデザインをやってきたと思っています。意思決定をどうしていくのかとか、どういう場で住民の意見を聞いて、それを形にしていくのかということと今まで実践をしてきたと思っていて、そういった目で見ると、今回の市役所本庁舎の建て替え計画に関して思うところをいろいろと手島さんに言っていると、この場に呼ばれたという形です。

プロセスをデザインしていく中で大事な話は、今見えている前提条件を、こういった議論の中で見えてきたものを踏まえて変えていくということにあると思っています。

このテーマA2の話に引き寄せて考えますと、ここで言っている前提条件はふたつほどあると思っていて、ひとつは1階のグランドレベルを人の空間として開放していきましょうということと、明確に打ち出したほうが良いと、今までの基本構想や現在議論さ

行者増、そして消費増というところで、域内経済といいますが、というのが回っていくことが、本当に駅前がやってきた手法とは別の形でこのエリアがよくなっていくためには、域内経済が回っていくことだろうと思っています。

この中で、グリーンループというか、今の白い枠の中で回遊性を高めるというところで、一つのピンであるにとどまるのですよね。市役所のテーマというのは、とはいえ、特殊かつ重要なピンなので、しっかりと考えていかなければいけないと思っています。どう考えていくかというときに、エリアとしてのハブ、勾当台エリア、あとは官庁街エリアというところで、新たなハブとなるであろうというのに加えて、仙台というポジションからすると、東北のハブとしてどう世界にというか、見せていくかというところが大事だと思っています。

そういう中で、必ずしも行政主導で全てが、観光紹介とかそういうことだけでできるとは思っていないで、民間サービスとして稼いでいくということがとても重要だと思います。僕の中での稼ぐというのは、金もそうですし人とコンテンツということ、コンテンツを稼ぐ、人を稼ぐということも見ていかなければいけないかなと思っています。

たら、用水系のところはほとんどパイプラインが埋まっているので、昔の用水は復活できませんよと言われたこともありました。現状は現状として、何か仙台の地を生かしたようなことを今回やっていただければと思います。

僕は基本としては仙台市の特徴を生かせる設計をしてもらいたいなと思います。僕らとしては、それにうまく合うような技術を、できれば経済性をもってご提供できればと思っています。市民目線で言えば、今ある再生可能エネルギーの使い方は、いいとは思っていません。特に、車の電池はこれからどんどん廃車が出てきますので、リースの電池も出てきます。建物に蓄電池を入れると何百万もすると言うけれど、リース電池であればほとんど費用がかりません。太陽光発電のコストも大分下がりました。バッテリーも、ほとんど性能変わりませんので、リースを使えばいいです。あとは使いこなすだけです。

それから、携帯電話の充電は、太陽光発電システムからそのまま充電できてしまいます。先の北海道での震災のときも、ブラック

れている基本計画の議論の中で感じているところです。

ふたつ目は、やはり交通を変えということも視野に入れた基本計画としてまとまっていくかと思っています。具体的には、市役所の敷地と市民広場の間に走っている市道の表小路線ですね、ここをどのようにするのかということだと思っています。検討委員会の中でも、そういった議論が出されているとお聞きしていて、それに対する仙台市さんの見解もありますが、その見解を拝見すると、市道の表小路線を介して一体の空間利用が可能となる、という形になっているので、今の計画では基本的には表小路線があること前提という形になっているのかなと、思いますが、そもそもあそこに車が通る道路が要るのかということも検討してみるというのも重要な視点とされていて、本日のこのラウンドテーブルで僕が主張したいのは、そういった前提条件から見直しませんかということをお話したいと思っています。

もうひとつは、今回の計画の中での前提条件の大きな観点になっているのは、市役所に必要な面積を、約7万平米というようになっているのですが、これからの新しく働く場所の未来を考えていくという中で、本当にそういった面積になるのかどうかということも、考えていく必要があるのかなと。現在の面積は、国土交通

お金に関しては、先ほども言ったとおり域内経済を回していく、域内経済を回していくということは、域外向け、ここにいる人、来る人に対して、地元の人に対するサービスとして提供されていくものと、外貨獲得をして東北の仙台以外の人、また仙台へ観光に来る人の外貨を獲得していくというところで稼ぐ、金を稼ぐ、そして、そういう商業を起こしていくことで産業ができて人が育っていき、そしておもしろい人を、仙台のエリアでおもしろいことができる人が育っていったら、そういう人たちがたくさん出てくることで、コンテンツの競争でコンテンツ力が上がっていくのだなというシステムを僕の中では考えています。

なので、ちょっと機能というところではまだ何も言っていませんが、公共サービスのみならず、公共サービスに近い民間サービスで本庁舎の低層部は機能していくべきなんじゃないかなというふうに思っています。

小島：

ありがとうございます。先ほど、回遊性向上ということが一つのキーワードになっているコメントだと思いますけれども、仙台の魅力というものを高めていくときに、消費増につながるような

アウトした時は、市民が充電しようと思って市役所に並んだりしましたが、ちょっとした知恵を使うだけで携帯電話の充電はできます。5,000円あればできます。そうしたことでBCP対応できるということになります。ですから、太陽光発電は今安くなっていますし、こういうちょっとした知識を市民広場でやっていただくというの、ひとつのBCP対応になるのかなと思います。

こういうことをやってきた人間ですので、設計とうまく絡めてやれば良いかなと思います。2026年度、この建物ができることだと、ZEB 100は当然になりますけど、それをいかに低コストでやれるかという技術もできてくるのではないかなと思います。そういうところで少しご意見を言わせていただければと思います。

内山：

ありがとうございます。

今、4人の先生から事例をご紹介いただきました。まず太田先生から、ヨーロッパ憲章というところから始まって、ヨーロッパで

Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う「役所市(シティホール)」を考える

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

Table A2

周辺エリアのビジョンの「翼を担う」を考える
「役所市(シティホール)」

省の告示のとおりやるとこれだけぐらいです、というような出し方になっているのだと思いますけれども、それがこれから先の働き方が変わっていく中で本当に有効な算定方法なのかというような観点も必要と思っています。

手島：

ありがとうございます。では、徳永先生に交通計画の視点からということをお願いいたします。

徳永：

宮城大学の徳永でございます。急遽スライドをかき集めました、私はもともと交通計画をやっています、仙台に来てもう40年ぐらいになりますけれども、前回の2002年のパーソントリップ調査までは大に関わっていて、その当時のデータで今も議論しているという状況です。昨年15年ぶりに調査をやったのですが、最新のデータには触れられていないので、申し訳ないですけれども、そこまで見えてきた都心部の問題について少しお話をさせていただければと思っています。

これは仙台の都市計画図で、大体仙台の全域が写っているわけで

すが、この赤い枠で囲ったところが、もともとの仙台市ということになっているのですが、そこでちょっとスケール感を皆さんにもう一度認識していただきたいということで、これが仙台の泉中央から長町までの部分を切り出したものです。これ同じスケールで東京を切り出すとこれぐらいになります。山手線がすっぽり入っちゃうという、実はそれぐらいの規模だということです。ちなみに、パリも切り取ってみると、パリ全体がすっぽり入ってしまうという、そういうスケール感だということです。

そこに100万人が住むようにはなっているのですけれども、先ほど赤で囲った区域というのが、このグラフの赤のところまでなのです。ですから、昔20万人いたのが、2000年の段階で16万人ぐらいまで減っており、空洞化しているという状況です。その中で、郊外にどんどん大型店が出ていったという中で、市民が果たしてどれだけ都心に来ているのだろうかということなのです。これまでの議論を見させていただくと、人がいっぱい集まっているということを前提に考えられているような気がしますが、果たして本当にどれぐらいの人が来ているのだろうか。

その規模感、もう少し見て見ますと、これが市役所で、ここが一番町の駅ですね。これがすっぽりこう入っているスケールで切り

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

コンテンツ、あるいは別な言い方をすると一つのフィーとして市役所庁舎というのを見るべきだと。いわゆる行政機能だけではなくて、そういった消費構造からにぎわいにつながる、あるいは回遊性につながるようなコンテンツというものをそこに入れ込むということが必要ではないかということかなというふうに思っております。そういう視点で見たときに、具体的な導入機能についてはまた別として、民間サービスという視点で低層部というものをみていくということが、機能を考えるときに必要ではないかということかなというふうに承りました。ありがとうございます。続いて、伊藤さんが本当は来る予定だったのですけれども、急に所用があってボタンタッチとして及川さんがきょうお見えになっておりますので、及川さんなりに障がい者の立場としてどういった機能があればいいとか、そういったことを自由にお話いただければ幸いと存じます。よろしくお祈りします。

及川：

及川と申します。私は生まれつきの障がい、常時車椅子を利用しています。きょうは、伊藤の代理として参りました。よろしくお祈りします。伊藤から預かってきた分と、私なりに考えてきた

部分でお話をしたいと思います。

1つは、新しい庁舎の機能として、タウンモビリティのようなステーション機能を持たせたいというのが伊藤からありました。以前に、タウンモビリティという形で仙台でも実験的に行われた部分はありますけれども、今現在、グテバイクという形でいろいろなところに自転車を置いて利用してもらうというのがありますけれども、その車椅子版を市役所の場所をステーションとして実施したらどうかということでした。

今お話が出ているように、市役所の仙台市の商店、行政機能の集まっている場所です。人が集まる場所です。足の弱い人とか、どうしても移動手段がないと自由に出かけられないという問題があります。そういうことを市役所を中心にして行うことで、エリアの回遊性を高めていくことかなと思います。

もう一つお話ししたいのは、仙台が福祉のまちづくりの発祥の地だということで、そのシンボルとなるべく、市庁舎がそれを体現する機能を設けていくのがいいと。例えば、現状の市役所には1970年車椅子トイレができました。これは、障がい者市民の動きがあってついたのです。それは、全国に広がった経緯があるので、そういう文化も踏まえたことを考えていったらいいのではないかと

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

は都市再生とサステナブルというのが同時並行で行われてきた経緯の紹介がありました。その中でロンドン市庁舎というサステナブル都市を象徴するような事例のご紹介があったかと思えます。それから、田路先生と武山先生からは、まず建築を考えるときにパッシブエネルギーというのを一番最初に考えるべきだろうということで、武山先生からは太陽熱の利用についてご紹介がありました。さらに、田路先生からは、スケールの視点でいくと小さくて身近な蓄電池という技術があって、それを使うことでいろいろな知恵が生まれてきて新しいライフスタイルに繋がるのではないかとご紹介がありました。それから、時間軸でいくと、村上先生から四ツ谷用水を軸にした歴史のお話があって、そういった四ツ谷用水や屋敷林というものが都市のアイデンティティとして、仙台の環境を考える上でのシンボルとして使えるのではないかとご紹介いただきました。それから、時間軸に関連して、技術というものは日進月歩で進んでいくので、今の常識が将来の常識ではないということで、それにフレキシブルに対応できるように

すべきだというお話が田路先生からあったかと思えます。

こういった最初の話題提供に対して、まだお話ししていない先生からコメントをいただきたいと思えます。お手元の論点メモにある順番でコメントいただければと思います。まず、江成先生からコメントいただけますでしょうか。自己紹介もお願いできればと思います。

江成：

雨水を活用する庁舎ということで、実は基本構想の段階でパブリックコメントを出させていただきましたので、その紹介も含めてお話しさせていただきます。

実は、私、今日は雨水ネットワーク東北の代表という立場で参加させていただいております。雨水ネットワークというのは、雨と人、人と人をつなぐネットワークということで言っています。雨水活用や雨を主体とした水循環系の健全化等に関わる市民・企業・行政・学会等が形成する緩やかな情報のプラットフォームと説明しており

出してみました、これが泉のアウトレット、タピオ、チェルシーですね。この中でもうある意味とても満足できる、そういう回遊性を持った空間がここにあるわけですが、それに比べてこの一番町、一番町だけで見ればここだけですけれども、さらにこの仙台駅までを考えると、ものすごく広い区域になります。ですから、こういう中に多くの人が本当に固まって来てくれるのだろうかということ、それを少し意識しないといけないのかなというふうな思いがあります。

さらに、これは通勤ですけれども、いわゆる地下鉄沿線に住んでいる方がどこに勤務しているかということを持ってみたところ、残念ながら都心に通勤している方は2割しかいないのです。それぐらい少ないという現実があるということを見ていただいて、そういう中でこの市役所というのをどういう位置づけにするのかということ、そこを少し考えていく必要があるのかなと。そういうことをつらつら考えていたら、ちょっとこういう資料も見たいのですが、もともと青葉城がここにできてしまったがゆえに、仙台というのはこの扇状にしか広がりがなかったのです。もう1つ候補としては、榴岡という候補があったのですが、もしここにできていけば、仙台のまちというのはがらっと変わったのだ

と思います。

小島：

ありがとうございます。そうですね、ダテバイクって私市役所のときにつくったのですけれども、回遊性向上って、仙台市は結構広いので、障がい者の方は当然移動するというのはなかなか難しいということがありますので、非常にそういった移動手段としてタウンモビリティのステーションがあると、いわゆる障がい者と一緒に市民活動というもの、イベントを楽しむということは非常に大事だと思いますので、非常にいい意見をいただきました。ありがとうございました。

それでは、善積さんお願いいたします。

善積：

仙台でカフェを営んでいるカフェモーツアルトの善積と申します。皆さんのお話を聞けば聞くほど何か焦りというか、専門的に全然学んでない身ですけれども、そこは弱気にならずに、あえて一市民としての意見をここでお話しさせていただきたいと思っております。自分のお話をする前に、及川さんのお話を聞いて、実は及川さん

ます。最初に内山さんから雨庭の話が出ましたのでちょっとびっくりしたのですが、2008年に雨水ネットワーク会議というのを設立いたしまして、2014年に雨水の利用の推進に関する法律というのが施行されて、それをきっかけにして雨水ネットワークというふうに改名しました。

第6回の雨水ネットワーク会議全国大会を2013年8月に東北工業大学で開催いたしました。そのときのテーマが、震災から2年ぐらゐの時期でしたので、「雨から学び、雨水を活かして、つなげよう復興へ・未来へ」というテーマで全国大会を開催いたしました。その全国大会の開催を機に、雨水ネットワーク東北というのを結成いたしました。

大会後の9月に雨水ネットワーク東北を結成して、東北での雨水活用の推進と普及啓発、またさらなるネットワークの拡大ということを目指して、現在、具体的な活動として天水桶という、家庭用の雨水貯留タンクを天水桶と呼んでいるのですが、その手づくり講座を市内の市民センターなどを会場にして開催してござ

ろうなということで、これから先100年、400年の仙台を考えたときに、改めてどういうまちづくりをするのかなという、その1つの核として市役所がどういう位置づけになるのかなというところを少し考えていただかないといけないかなという、問題提起をさせていただきます。

手島：

ありがとうございます。まちの規模感というのはなかなかわからないのですが、ちょうどいい議論の材料を与えていただいたと思います。続きまして、天野さんお願いできればと思います。

天野：

仙台市役所の天野でございます。簡単に自己紹介を申しますと、私は今まで役所の人生の中では経済畑が非常に長くて、ベンチャー企業の育成とか、それからクリエイティブ産業の育成とか、そういうことをやっています、その中で例えば卸町のリノベーションとかコンバージョンとか、そういうことをやってきました。現

先週ぐらいにカフェモーツアルトメトロと言いまして、国際センター駅のほうにいらっやいまして、そのときにコーヒーとドーナツを召し上がっていただいて、覚えているのです。とてもおいしそうに召し上がっている姿を見て、僕自身、飲食業をやっていると華やかに見えて、毎日本当に同じ繰り返しでつらいのですけれども、楽しいこともあります、こういった及川さんのお客様がいらっやるといことは、本当に私にとってはやりがいがある、でも、それが自分一人のお店で障がい者の方を快く引き入れられる環境にあるかといったら、全然そんなことはなくて、そこの国際センター駅という場所、仙台市の方々の全面協力のもと、そこでカフェを営んでいるという恵まれた環境の中でできたこの出会い、そしてきょう隣にいらして、もう僕さっきすごい鳥肌立って、ちょっと泣きそうになるぐらいの出会いがあって、でも飲食店をやっている、とても感動して、このために行政と一緒にカフェをやっているのかなと思うぐらいの体験をさせていただきました。

代理で一先懸命お話をされて、伊藤さんにも申しわけないのですが、前にもいろいろな講演会で話しさせていただきましたが、僕、自転車が好きで大好きですけれども、ダテバイクに開

す。それから、雨水についての勉強会ということで雨水サロンを開催したり、天水桶をいろんな展示会に持って行って来場した市民の方に見ていただいたりしてそれを普及の助けにするといった活動をしております。

雨水活用を目指して、雨水ネットワークと建築学会で「蓄雨」という概念を生み出しまして、今、この蓄雨を広めようということで、建築学会も含めていろいろと取り組みをしております。

蓄雨というのは、雨水を敷地内にとどめることというふうに定義しております。これまで建築というのは、基本的には降った雨水をできるだけ速やかに敷地の外に排水し、それを下水道が受けて雨水を排除するという、そういうシステムが中心だったわけですが、それを敷地にとどめようというのが蓄雨です。まず雨水を敷地にとどめようということです。蓄雨を広めようということで今、建築学会と雨水ネットワークで取り組んでおります。敷地にとどめた雨水を何のために、どういうふうにするのかということから、4つの蓄雨に分けております。

Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う「役所市(シテイホール)」を考える

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

Table C2

勾当エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う
「役所市(シティホール)」を考える

在の担当としては、文化、それからスポーツ、それから観光というところですので、例えば文化イベントとか、それからスポーツイベント、例えばハーフマラソンで定禅寺を走りますとか、それから観光ではインバウンドもあります。それから、もうひとつの担当として国際交流というか、仙台に住む外国人のケア、それも担当でございます。いわゆる多文化共生というところなんです。

さまざま今まで議論があった中で、例えば視野を大きくして見ると、東北の中の仙台とか、例えば東北の中における仙台の地位、または全国における仙台の地位、それも経済的側面、それから観光の側面、いろいろあると思うのですが、話題提供としてお話ししますと、首都圏の人に仙台の観光イメージを聞きましたと、リーダーチャートでよくやるようなものです。そうすると、実は金沢と一致するんです。これはどういうことかという、期待ですね、首都圏の人の。でも、来てみるとちょっと違うよねと、金沢とは大きく違う。つまり、先ほど齊藤さんのほうからもお話ありましたが、ちょっと引っかかりが少ないという、来てみるとフックが少ないみたいところがあって、これは仙台の成り立ちとして、やはり震災で焼けて、そしてその後、金沢とは対照的に、我々市民が伝統をつくってきた。その中核として、イベントが多分位

置けられているのだらうということがあろうと思います。ですので、金沢と同じ土俵で、歴史というところで押していくのかどうかということは、観光の分野としてはあります。

それから、あと私の前の職場で定禅寺通の活性化というのを取りかかりましたが、その流れ、それを実は私のライフワークにしようと思っていたのですが、現在は担当を外れてしまいましたが、市役所の前の黒ビルの脇にイベント用に使われる大きなトイレがあります。そこをコンバージョンし、カフェというかレストランを入れてオープンカフェ化するという取り組みを今やっております。早ければというか七夕の前にオープンする予定でいます。これは、定禅寺通の活性化というのは、やはり地権者の方々がいて、慎重に丁寧に進めていかなければいけないのですが、そうは言っても、やはり何かの変化を市民広場及び定禅寺通につけていかなければいけないので、なるべく早くオープンカフェというものがどういうものなのかというのを仙台市民に見ていただくというような取り組みをしていこうと思っています。

また、話題提供をもうひとつさせていただくと、大きな視点でいくと、東北の中の仙台とか、そこにおける市役所の役割、市役所の建物としての役割というのがあると思いますが、小さく見てい

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

してはちょっと反対派です。一度乗ったことがあるのですが、癖になりそうなくらいこぎやすく、とても便利ですが、歴史ある自転車屋さんのいろいろな方々の話を聞くと、完全なる経営圧迫です。

自転車を自分で持たずにシェアできて便利に移動できる、市民にとっては本当にありがたい話ではあるんですけど、それってすごい利便性がシェアできて安全性は全然シェアできていないですし、これからヘルメットの着用を義務づけられましたとなったときに、そこにヘルメットを置いてヘルメットをシェアしますかといったら、全然そんなことはないと思うんです。なので、便利というだけで発展してって、それで新庁舎にもデタバイクが並ぶのを私個人としては見たくないのかな。それは発展とはまた違った、もちろん絶対にあっちゃだめと言っているわけではなく、本当に必要最低限でもいいのかなという意見があります。ちょっと話がずれました。

もちろん、先ほど何度も稼ぐというお話が出てきていますけれども、飲食店がカフェとして、レストランとして新庁舎に入ったときに、カフェとしてもとても重要なところで、ああいう大きいすごい話題性の建物の中でカフェができるというだけで

ても魅力的なことですけれども、私たち株式会社モーツァルトとしてふだん心がけていることとしては、その建物内でカフェを営めばお金になる、稼げるというふうに余り考えないようにしているんです。というのも、絶対にもたないのです、やっぱり。どうしても行政の部分だったり周りの人たちの利用者数だけに頼ってしまっただけでなくて、まず、その建物の意義、そこに自分たちカフェが入ったとき、外から見て、自分たちのカフェが入ったときどうなるかではなくて、自分たちのカフェが入ったときに周りの環境にとってどれだけメリットがあるかというのを真剣に考えることが必要です。

何か行政の施設で飲食店を募集しますと、公募でプレゼンで決まります、あれ正直すごい違和感を感じておりまして、もちろん市で定めているいろいろな飲食店、経験者の方からヒアリングを得てできた点数の中でももちろん選ぶという、それは当然のことなんですけれども、要するに、その点数の中でしか判断されないというのが私たちとしても悔しいという、そのテーマに沿ったことしかできないわけではないですけれども、何かそこがなかなか行政の施設の中で飲食店が発展しにくい一つの原因でもあるのかなと個人的に思います。

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

1つは、庭の水やりとか洗い物への利用です。従来からの雨水利用、水道水のかわりに雨水を利用するというのでこれを利水蓄雨と呼んでおります。

2つ目が、防災蓄雨で、大規模災害時の水需要になります。これは、最近のいろんな災害のときに、トイレの洗浄水が、水道がストップすることによって使えなくなるということが話題になります。雨水をためておくことによって洗浄水を使えるようにしようという、防災蓄雨です。

3番目は治水蓄雨です。最近特に集中豪雨が多くなってきておりますので、それを一旦にかくためます。それぞれの敷地でためて、すぐに下水道に流さない。それによって下流の浸水を遅らせる、あるいは、浸水を防ぐということで、流せば洪水、ためて治水ということで治水のための蓄雨になります。

そして、4つ目が環境蓄雨です。夏の打ち水などで涼を呼ぶとか、あるいは、地下水の涵養ということで雨水を地下浸透させる、あるいは、積極的に蒸発散させるということで環境のために使おう

という蓄雨です。

今、こういう4つの目的を持って敷地の中に雨水をためましょう、それを蓄雨として広めようという取り組み、考え方を広めようと考えております。

4つの蓄雨のうち、防災のための防災蓄雨と治水のための治水蓄雨を必須蓄雨としています。これはぜひ各個人でも、あるいは、敷地の所有者あるいは使用者が必ず取り組むということで必須蓄雨と位置づけています。そのほかの環境蓄雨とか利水蓄雨というのは、できる限りそれをやりましょうということなんです。必須蓄雨とそれ以外を必要性の程度ということで分ければ、必須蓄雨というのは必ず用意するということになります。では、必須蓄雨を誰が用意するのかということになるのですが、公共で用意すべきものと個人で用意すべきものということで分けて考えてみます。この必要性の程度と誰が用意するのかということで、2次元のグラフで表して4つの蓄雨を分けると、防災蓄雨というのは、個人が必ず努力するものということで必須蓄雨、これに対して環境蓄雨

くと、例えば一番町四丁目商店街に与える影響はどうか、それから例えば国分町、飲食店街としての国分町にどう影響を与えるのかということも、実はおもしろい視点かなと思っています。というのは、例えば国分町もやはり今変化が非常に激しくて、テナントビルの2階から3階に入っている、(いわゆるキャッチに頼った集客をしていた)居酒屋みたいなところが、「客引き防止条例」ができた影響で撤退する動きが出てきています。そうすると、テナントづけとしてはキャッチのようなお店が入っていた次に、それが撤退した後に入るテナントが、なかなかそれを超えていいテナントが入ってくるというわけにもいかないかもしれないですね、現実としては。そうすると、国分町という町のリニューアルをどうしていくのか、国分町のリニューアルというのは、必ず四丁目商店街に影響を及ぼすと。そういうときに、仙台市役所というのはどのような役割を果たすのかと。

もうひとつ付言すれば、定禅寺通に取り組み理屈のひとつとしては、やはり徳永先生の話とちょっと逆の発想になってしまうかもしれませんが、仙台駅一極集中、無個性化ということに、どうフックの効いたまちをつくっていくかということで、こちらのほうにやはり核をつくりたいというのが思いとしてあります。そこで仙

多分今回も、新庁舎ができるときに公募という形にももちろんなると思うのですけれども、要するに公募という、その10分、15分の中で決められてしまうというのが物すごく、いろいろな職人さん、いろいろなおいしい物をつくるシェフの方々、いろいろな方々が、それは仙台だけではなくて、本当に大きければ全国、世界にたくさんいらっしゃると思うのです。仙台の飲食店が、東北の食材を生かしたものをそこで振る舞う、「ぜひ東北を盛り上げてください、この新庁舎で」、何回も聞いているのですよ、そういうの。いろいろなところで。東北の食材を使った。でも、もちろんそれは復興という分野でもすごい役には立っているのですけれども、今回これだけ何かクリエイティブな話をいろいろなところで聞いているので、世界に目を向けて、全国に目を向けて、その方々が仙台の食材をいろいろな方面から見て、それを逆輸入というのですか、世界に広げるぐらいの、世界規模と言ったらあれですけれども、それぐらいの飲食店が入ることによって、自然にぎわいというものが生まれるのではないのかなというふうに思います。私も仕事柄、人と話すときは、まずコーヒーを飲もうか、まずカフェに行こうかと。でも、僕たちだけではなくて、もう仙台の皆さんそれが自然な流れになっていると思うのですね。それが、ああい

というのは、公の責任でやってもらって、目標ということでできれば用意するという、こんな分け方で考えていくようになります。建築の敷地で雨水をためることを建築蓄雨と言います。それだけで必ずしも十分できるわけではないので、そういった場合には、建築敷地を中心とした地域で考えます。それは、地域蓄雨ということで団地とか開発地域、あるいは下水道の小さな流域単位に必要な蓄雨を考えていきます。それから、さらに広域的な考え方としては、いわゆる流域単位ということで、市町村ということではなくて、流域というものを1つの単位として広域的な蓄雨を考えていきます。

今、建築学会と雨水ネットワークでは、基本的な蓄雨高というのを1平方メートル当たり100ミリの雨を一時的に敷地にためることができるようそれぞれ努力しましょうということと呼びかけをしております。

防災蓄雨量というのは、1人1日50リットルという基礎水量に、防災蓄雨対象人数掛ける3日分というものをそれぞれ個人が主体

台市役所が、建物としてどう力を発揮できるのか、ということが私の視点でございます。以上です。

手島：
ありがとうございます。貴重なご意見ありがとうございます。杉山先生、よろしくお願いします。

杉山：
東北大の杉山です。東北大のというよりも、仙台市の杜の都の環境をつくる審議会の副会長を10年ほどさせていただきまして、その中で今日の話とリンクすることを考えてきました。

過去のラウンドテーブルでの議論の中で、「都市ビジョン」がないとか曖昧だという話が出ていたのですが、やはり「杜の都」というのが最も明確な都市ビジョンであり、かつシティセールスの上でも揺るぎないものではないでしょうか。そしてその杜の都の原風景は、伊達政宗が実なる木を植えるところから始まり、それが戦災の大空襲で失われた後に、市民と市、当時の岡崎市長や、その後の島野市長のもとで、市の職員も市民も相当な努力と協力をしてつくり上げてきたものが、現在の杜の都の姿

う新庁舎にあることによって、行政の方々、市民の方々の集いの場所としてという概念でカフェがあることによって、すごい環境が作れるのではないかなと思います。及川さんにとっても使いやすいカフェができることを願って、今後ともいろいろ話を聞いていきたいと思っています。

小島：
ありがとうございます。ダテバイクのとき、山口さんに私怒られました、「一言、俺に何で相談しなかった」って言われて、しなかったのですよ。それは別として、要は、導入機能として考えられる機能の中にも、先ほど市のほうから紹介ありましたが、カフェとかいうのがあると。単ににぎわいを創出する、お金を稼ぐというのではなくて、カフェを経営する者として、そこに入ることによってどういう影響を与えていくかといった、その視点が大事ではないかということだったかと思います。いわゆるお仕着せに公募されて、それに当てはめたと。「点数がよかったです。入りました」というのではないのではないかなということかなと。一つの問題提起であろうと思っています。

実は、行ったことあるのかもしれませんが、豊島区の池袋

的に備える防災蓄雨量として考えていこうということ。この50リットル、3日間というのは、日本水道協会です。災害時の給水量の基準として設定しておりますが、さらに4段階に分かれておりまして、例えば地震の発生から3日間の間は1人1日3リットルの水を供給しようとなっています。第2段階としては、4日から10日の間は1人1日当たり20リットルということになっています。第4段階としてはほぼ被災前の給水量を供給しようと、水道協会が目標水量として設定しております。この1人1日20リットルというのをベースにして、そのほかの生活用水30リットルを加えて、1人1日50リットルを防災蓄雨量として考えましょうということで取り組みを進めています。

仙台市内の雨水を蓄えている事例としては、隣の宮城県庁舎、それからシェルコム仙台とか東北工業大学、こういったところでもう既に行われております。

こんなこともあって、基本構想の中間案に対して雨水活用をということでパブリックコメントを出させていただいておりました。

Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う「役所市(シティホール)」を考える

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

Table A2

周辺エリアのビジョンの「翼を担う」を考える
「役所市(シティホール)」

なのだと思います。ですから、その今の杜の都というのは、単に過去の遺産などではなく、仙台市と市民が共につくり続けてきた、まさに市民活動の軌跡そのものであり、仙台市、行政の成果でもありということで、かつては文字通りのトップランナーでした。

一方で、その岡崎市長がつくられた終戦直後の防災都市計画型のパークシステムと言われる幅広の並木道を核とし、西公園や勾当台公園や錦町公園、五橋公園、北三番丁公園まで全て揃えて作った後、もう半世紀以上も都心の公共緑地はほとんど増えていません。ただ、その緑の質や使われ方は市民とともに育んできているというのが現状なんだろうと思います。

先ほど佐藤さんから紹介のあったシンガポールの例などを見ますと、シンガポールはもともと何もない、資源がない貧困な国家をいかにしてシティセールスをするかという中で、ガーデンシティにしていこうという方針のもと、60年代から10年ごとの目標を設定して継続的にやってきています。60年代は緑化でシンガポールを浄化しよう、70年代は道路の緑化をカラフルな植物を利用して強化しよう、80年代には果物、果樹を植えていこう、香りのよい植物種を導入しよう、90年代には生態バランスをとった維持管理、経費の削減と、あと各公園を結ぶ回廊ですね、公園をつなぐ

緑の回廊をつくっていこうということで90年代までやってきます。21世紀に入って、またシフトを変え、今度は立体的につくっていこうとします。超高層といいますか、高層建物をいかに緑化していくか、立体ガーデンシティにしていこうという発想となり、市のほうで屋根や壁面の緑化、ベランダの緑化といった誘導をかなり厳しくやりながら、必死で緑の国、ガーデンシティというブランドをつくり続けています。

ボストンなども100年ほど前にオルムステッドが美しく合理的なパークシステムをつくったのですが、過去の遺産に甘んじずに、高速道路を地下に埋め、その地上面をリニアな公園に作り変えていくビッグディックという計画を、長い年月と約3,000億ほどのコストをかけてやっています。ニューヨークでは有名なハイラインですよね、廃線になった高架貨物鉄道が長年放置されていたものを利用して空中庭園に作り変えたことで、現在ではメトロポリタン美術館に次ぐ観光資源になっています。こうした都市緑化といえますか、都市の中に緑の資源を追加し続けている世界の都市に比べると、仙台はなかなかそれができていないというのがここ数十年の実態と言えます。しかも、単に追加していないだけでなく、例えば広瀬通のイチヨウ並木を道路拡幅の関係で伐採してしまっ

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

に南池袋公園というのがありまして、全く新しい公園に切りかえたのです。芝生のほうが有名ですけども、そこに入る、そこはレストランですけども、ラシーヌという地元の飲食店が入りまして、単に入っているだけではなくて、稼ぐだけではなくて、一緒にまちづくりをしようという、図書機能みたいなのがあったり会合する場を提供するとか、そういったところで一体的に溶け込んで、区民にも溶け込むような経営をしているということで、非常に環境がいいところがありまして、それが一つの参考例としてご紹介できるのかなと思っております。ありがとうございます。それでは、続いて渡辺さん、お願いします。

渡辺：

せんだい・みやぎNPOセンターの渡辺と申します。本業は、ワカツクという若者支援団体を運営しておりますが、きょうは、せんだい・みやぎNPOセンター代表理事として来ています。

せんだい・みやぎNPOセンターというのは、この市において初めての指定管理を受けた団体ということになります。仙台市民活動サポートセンターを指定管理するという仕組みを、当時であれば画期的な仕組みをつくり、それを民間が受託する、しかもNP

Oが受託をするということの先鞭をつけた団体で、今もその団体で指定管理を引き続き受けさせていただいています。

今回の低層階の話の中でマジックワードになっている「市民協働」、多分、仙台市域で使っている市民協働という言葉と、仙台市以外で使っている市民協働という言葉は結構意味が変わってしまっているし、確かにここに市民協働と一言置いておくだけで、何か無駄遣いが許されるみたいになるのも違うだろうとは思っています。

とはいえ、一応、市民協働的なことを推進する立場から少し申し上げると、今回の論点3つあるうちのまずは2つ、低層階の機能についてどんなことを求めるべきかということと、それがにぎわいの創出にどうつながるのがいいのかみたいのところかと思えます。1つ目の低層階の機能としては、前半戦のほうでもちょっと最後のほうお話ししたかもしれませんが、市民が市の課題とか市を発展させていくために、市民と行政が一緒に話し合うような場所になったらいいのではないかと議論が最後のほうあったと思うのです。それは、河村先生が最後に、いみじくも議会要らないのじゃないかみたいなこととお話を引き取っていたかと思いますが、まあまあ議員の方にもお入りをいただけるような場所、何か議会が一番上にあるというあたりが、もう既に何というか、そ

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

内山：

蓄雨100ミリというのを実現するためには、いろんなスケールで考えなければならないというお話もあったし、それは、個人として対応するものもあるし、公として対応する分野もあるということでした。雨水からいろいろな領域を広げていただいていたありがとうございます。

次に、小野先生のほうからコメントをいただければと思います。

小野：

一般社団法人JASFAという団体をつくっております。建築設備の馬淵工業所という会社を経営しております小野と申します。

JASFAというのは略称です。持続可能で安心安全な社会をめざす新エネルギー活用推進協議会という非常に長い名前で、震災後つくった団体です。協議会の形式をとっておりますが、一応運営する一般社団法人でございますので、私は運営側で代表理事を

務めさせていただいています。東北大学の工学科長から八戸高専の校長をやった井口先生に会長を務めていただいております。

私どもの団体は産学連携の団体で、中小企業が割合多いです。特徴的なのは、私も実業の会社をやっておりますけれども、実業の会社がそれぞれ専門分野を持って集っております。実は武山さんに先ほど紹介いただきました東松島のプロジェクトでは、建築士や技術士の方がメンバーに入っておられまして、競争的資金を取りながら運営しております。これまでも環境省の直轄事業で里地里山に関するフィジビリティをやっていました。東松島では松くい虫の被害木がたくさん出るので、それを原資とした木質バイオマスボイラーを使って施設を回そうというような、基本的な計画を立て、プロポーザルを経てそれぞれの会社が受注しています。エネルギーの循環といったようなことをテーマにしていて、例えば、私どもは発電や熱をつくる技術と、つくったものをためて使うことで蓄電の技術を提供しています。それから熱はバッファの状態80度の熱を16トンぐらいために、その熱をもとにして発電

たり、せっかく都市景観賞を取ったけやきとはぎの道という東北大川内キャンパスと国際センター駅間の道のケヤキを、国際センター駅の駐車場の関係で、半分ぐらいぱさりと切ってしまったりと、杜の都を強化するどころか逆の方向で過去の遺産を食いつぶしてきているというのが最近ではないでしょうか。

例えばの提案ですが、梅田川や広瀬川、七北田川といった主要な川沿いの緑を強化するとか、四ツ谷用水の跡を、水は無理でも緑で復元していくとか、あるいは西道路を広瀬通りに繋げずに地下化して中心部を通さずに駅の東側まで抜くことで、その広瀬通を定禅寺通り並みに公園化していくといった、大胆な施策によって緑の資源を補強していかないと、かつての仙台市あるいは仙台市民が必死につくりあげてきた杜の都というブランドが廃れていくのではないかと危惧しています。

その話と、市役所建替えがどうつながるかと言いますと、市役所周辺の勾当台公園というのは、仙台市においては都心北側の緑の核になっています。都心西側には大きな西公園と広瀬川、それに青葉山もあり、都心南側には片平キャンパスの緑がありますが、都心北側には勾当台公園から錦町公園につながる緑地しかありません。こうした資源をより活かす形で、できればその勾当台公園

うということだろうと思う。

市民に開かれる、ただ、市民に開かれるというときの視座が多分大切ではないかというふうに思っていて、単純にさっきの冒頭の説明だと、会議室があればいいのかとか、もしか今要件となっているNPOの使えるような場所があればいいのかということでは全然ないと思っておまして、仙台市がずっと昔から培ってきた、行政も市民も一緒になってまちをつくってきたというものを、もう一度市役所の低層階で実現をしていくこと。

仙台市の今、大多数の行政的作法の中での市民協働は、市役所の中で決めた仕様に基づいて、「発注者である民間がいる」を市民協働と言っているわけにしかすぎないので、それは市民協働ではないわけですね。課題は市役所がつくる、仕様も市役所がつくる、さっきのお話あったみたいに点数づけも市役所が決めているので、我々がこういうことをしたいと言っても、市役所の基準の中で決められた中の点数づけで受注者が決まるという。それは民間を生かすかという、民間は実は生かせないような構造にだんだん変わってきてしまっているというところは、20年前からかなりフェーズは変わっているのだなというふうには思っていて、あえていえば、市民協働ではなくて、行政が民間の活動に協働するとい

をし、太陽光の発電と一緒に施設に循環するようになっています。先ほどの武山先生の紹介にありました、パッシブ建築の中のハードな部分をしっかりと構築して、エネルギーが循環するような業務に携わっております。

私は建築設備ですので、仙台市役所本庁舎建替基本計画検討書に書かれているような設備の内容に関してはいろいろと思いがあります。とりあえず環境という側面から建築設備を考えると、エネルギーの循環のことにしても、今、要素技術はたくさんあります。私は、熱と水と空気の3つを考えているのですが、熱の利用に関しては、カスケード利用は当然ですが、熱があることによって電力ができます。先ほどの東松島でも温度差発電というのを取り入れておりますし、そういう熱をどう使うかということが非常に大きなファクターになるのではないかと考えています。

もちろん熱は何らかの燃料、熱のもとになるものが必須です。これまでの化石燃料ではない自然由来のものにするというのは当然考えていくべきことですが、こういう市庁舎という大きなスケ-

の緑あるいは県庁前の緑といったものに繋げて強化する形で、新市役所の敷地の中にも広く取り込み、杜の都仙台における見本となる、手本となるような建物のつくり方というものをぜひ実現していただきたい。これを見に来た方が、さすが杜の都の市庁舎だというふうに入感していただけるようなものをつくっていくというのが、仙台の大きな都市ビジョン、杜の都というものに積極的に参加していくということであり、そういった視点、杜の都の環境を強化するための市役所のあり方という視点をぜひ忘れずに、配置計画あるいは低層部のデザインというものをやっていただきたいというのが私からの強いお願い、今日そのことを伝えたいと思ってやって来ました。

あともう1点、今の話とも関係しますが、低層部をどのように設えていくのか、緑の話だけじゃなくて人の話も出てくるわけですが、第1回目のこのラウンドテーブルで、ソフトについて話すテーブルにいたのですが、そこで先ほども紹介されたシンガポールのシティギャラリーのようなスペースが必要なんじゃないかという話をしました。例えば杜の都というと、何か伊達政宗の遺産が残ってるだけなんだろうと思っている人が多いのが実態で、実は仙台市民が大変な努力をして育ててきたものなのだと

うフェーズにもう来ているのではないかと考えています。

むしろ行政協働であろうと。行政が金を集めて再配分するところに、民間がおこぼれに預かるという仕組みから、私たち市民は、それは市役所の職員さんたちも含めて全く構わないのだけれども、私たち市民がこういうまちにしたいので、行政というエネルギーとか仕組みとかを借りたいから低層階で議論をするとか、低層階でそういうことを言い続けるとか、そういうような場所に低層階なりその低層階の上の行政の仕組みがちゃんとつながっているといいのかなというふうに思っています。

きょうは、そこの論点までいかなければいいと思いますが、そのときの市民とは、どこまでを市民とするのかというのが、この都市であるからゆえにすごく難しいなと思っていて、住んでいる人、通勤通学する人までは何となく市民というふうには見ているけれども、もちろん国籍というところで市民と見ながらない方々もいるし、住民票があるということでもいいとか、国籍が日本じゃなくてもいいとか、もしかしたら、さっきのダテバイクの話みたいに、どこが仙台市をフィールドとして活用したいと思って責任を持って、お越しになる方々も市民として受け入れたいのか、よそ者で金を収奪する主体だから使うなという相手なのか。

ルのものに果たしてそういうものが合うのかという議論があるのではないのでしょうか。

もう一つ、水の利用、今、江成先生がおっしゃったように、雨水の利用とか水の循環といったようなことは当然私どものテーマにもあります。東松島のトイレは、1回水を使ったら、それが浄化設備の中で完全にまたきれいな水になって循環するという、いわゆる微生物、バクテリアを使った循環型のトイレを導入します。そういう水の循環、あるいは、水をためて使うということも当然考えられます。

そして、エネルギーの基幹となります電気は、太陽光をはじめさまざまな電気のつくり方があり、それを蓄電する技術もあって、それを庁舎内でうまく使うということは当然考えられます。しかし、私の経験から一番大切だと思っているのは、実はインテグレートバランスをきちんと組み立ててインテグレートしていった、各要素がきちんとした力を発揮する、高効率で力を回すということのバランスだと思います。

Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う「役所市(シティホール)」を考える

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

Table A2

周辺エリアのビジョンの「翼を担う
「役所市(シティホール)」を考える

う、市政や市民活動の歴史であるとか、それに絡めて広瀬川や梅田川の浄化とか様々な市民活動の実態が全然伝わっていないというように思います。なので、そうした歴史や現状、さらには将来計画までをきちんと伝えるとともに、それを見た市民が自分の活動を始めるきっかけになるような設えにできないか、願わくばそれがおもしろおかしくつくられていれば、勉強しに来るのではなく、面白そうだから見に行こうという場所にならないかと。それも、固定した展示では1回見たら飽きますので、今月は梅田川についてとか定期的にテーマを変え、関連した展示やレクチャー、シンポジウムがあるとか、まちづくりに関する様々な議論の場とし、そこに議会の方も絡んできたりして、仙台シティフォーラムと呼べるような場を1階につくれないかと。これからの時代においてはそういった市民と職員、議員が共に市政を考え、学び、議論する場所というのが市役所の低層部にこそふさわしいのではないかと考えます。

建物をつくる場合には、時代とともに「変わっていく/変えていくべきもの」と、「変わらない/変えてはいけない部分」をよく把握して計画すべきだと思いますが、変えてはいけない部分としては、先ほどの杜の都を強化する配置や佇まいであり、ここは叡智

を結集してデザインする必要があります。一方で、低層部のあり方というのはそのときそのときの時代にに応じて新しいアクティビティを受け入れられるぐらいにフレキシブルに変わっていきけるデザインにする必要があります。あまり今現在のアクティビティに1対1で対応して作り込んでしまうと、将来的な変化に対応できなくなりますので、市民活動に対してははかなり緩く自由度をもたせ、都市的なスケールに対してはきちんとつくっていくという二段構えで、新市役所については考えていただきたいと思っています。

手島：

ありがとうございます。おっしゃるとおりだと思います。本当に、今この都市空間が、例えば定禅寺通が評価されているのも、70年前の人たちが一生懸命頑張った成果です。もしあの人たちが頑張らなかったら、伊達政宗が遺してくれたものは70年前にもう断絶し何も残っていなかったのだと思いました。続きまして、姥浦先生お願いいたします。

姥浦：

す。だって、仙台市が税金を使って極端にいい物をつくって、そこで安い商売をされて、そこでもうかったとしたら、周りの商売潰れてしまうわけですよね。山口さんが怒るみたいな話なのです。「おいっ」みたいな。でも、それが山口さんのところからすると、ダテバイクがあったから違う売り方、スポーツバイクをちゃんと売らないとうちの会社潰れるなどと思って、スポーツバイクをちゃんと売るとかスポーツバイクのメンテナンスをするということで、稼ぎ方を変えるということで、まち全体としてはアップデートをしていくということは可能だろうと。

その観点からすると、市役所の低層階がにぎわいをつくって、なおかつそこで金を稼ぐということで、周り稼ぎ合うという視点になるならそれはありだけれども、ただ、それが圧倒的にコストが安いからとか民間に安く出して稼ぎやすくし過ぎると、ずるをして稼いでいる人たち対真っ当にやっている人になってはだめだから、仙台市役所で、エレベーターでおいてくるだけで何千人と働いている人の中でやっているんだから、4割ぐらいはおまえ所場代払えよみたいな、えげつない商売をしないと多分やっちゃいけないんだと思うんですね。それぐらい、エリアとしてどう稼ぐのかというふうな観点で、低層階、もしも稼ぐという観点を入れ

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

冒頭でも話したみたいに、何だかJRの駅周りは、ある意味では東京にお金を召し上げられる装置ではありますがけれども、でも、彼らはそこで市民としてやっている人たちでもあるし、どこまでを市民とするかって結構難しい議論だなとは思っている。でも、私個人としては、仙台資本がもうちょっと稼げるようにあえて誘導するような市役所づくりとか、にぎわいづくりのほうがいいだろうなどは思っています。だって、東京の人たちとかか資本というのは動けるから、仙台市がもうかるから仙台市に来ているだけであって、仙台市がもうからないとわかれば出ていだけなので、仙台市にいたいと思う方々をできるだけこひいきして、このまちににぎわいをつくるということが必要ではないかと僕個人としては思っています。

もうひとつ、にぎわいの創出という観点とか、もしか低層階をどういうふうにして持続可能にするかというところでは、洞口さんの意見に半分賛成で半分反対であり、でも多分視座をぎゅっとこっちに持ってと、同じことしか言っていない話ですけれども、まちとして稼ぐということをしなくちゃいけないことはすごく同意します、ただし、低層階を軸にして稼げるようにしなくてはいけないという部門最適化をすればするほど、まちは廃れると思っています

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える



東北大学の姥浦と申します。よろしくお願ひいたします。
一応論点は、それぞれの視点から都心エリアの価値、ポテンシャル、現在の課題をとのことですよね。とは言うものの、何か皆さん結構好きにお話されているので、私も好きにお話させていただきます。

まず、日本全国、多分世界も含めてだと思ふのですが、これまで拡大してきた中で、外をどうつくっていくのかということと、あと中はをどう大きくしていくのかということか高くしていくのかというのは、これまでの大きな課題の2つだったと思ふのですが、だんだん人口も落ち着いてきている中で、今考えないといけないことは、外をどうするというのもありますが、中をどう再構築していくのかということが非常に大きな流れになってきていて、その中でどう稼ぐのかということですね、それと非常に大きく結びついていて、そういう中で都市間競争だとかイノベーションをどう起こしていくのかだとかという話がされていると思ふのですが、その意味で、まず仙台の中でこの都心全体というものは非常に大きな意味を持ってきていて、その流れというのはこれからもう少し続くだろうというのがまずひとつ目でございます。そういう中で、この都心の構造というのは、先ほど天野さんもお

るとしても、エリアとしての価値を高めるための稼ぎ方ってきつとあるだろうというふうには思っています。

もうひとつ、自分でそう言うとおきながら違うことを申し上げますが、市民協働というか、市民に行政を開くという観点での市役所低層部であってほしいなどは思っていて、そこには、この資料7のほうに書いている「仙台の文化を発信・体験する場を整備」というふうに書いているのですが、何か別にそこに、どこかの市役所みたいに、場所が余っているから、とりあえずおみこし置いていますみたいなことをしないでいいと思っていて、仙台がこれからこういうふうに変っていくために、例えば障がい者がもっと生きやすいようなまちをつくるために、こんなプロジェクトがありますよみたいなものがそこに置いてあったり、そのためにはこういう手伝いが必要で、こういうことがないとこの問題は解決しませんみたいなことがいっぱい低層階に置いてあったら、それを見に来たり、その課題には私はこういう手伝いができますよということを表明する方が来たりとかと、そのような意味のにぎわいが例えばあって、だからいっぱい人が来て、そこに来ると、そこにカフェがあってもいいけれども、別にそこにカフェがなくても、近くのカフェでコーヒーを買って、その打ち合わせに行っ

そのバランスは何かといいますと、負荷です。どれくらいの負荷がその建物の中にあるのか。負荷には、日中の負荷、朝の出勤時の立ち上がりの負荷、夕方の負荷、そして相当少なくなるのですが夜の負荷があります。ただ、夜は、例えば太陽光発電をしない時間帯です。太陽光発電であれば、一番発電をする日中に負荷も非常に大きいです。この負荷のバランスをとるのが、蓄電池というバッファです。

ほとんどの建物でそういういろいろな技術を導入しますが、実際に使い出すと、やはり建物を使うのは人なので、建物は生き物のようになります。生き物になると、負荷バランスをとるのが非常に難しくなってくる。現実的というよりも技術的な話になって恐縮なのですが、最終的に環境を考えると、どれくらいのバッファにするか、あるいは、足りないときどうするか、余ったときどうするかという負荷バランスを最初から想定するようになります。足りないときは商用を繋いでおけばいいのですが、余ったときどうするかというほうが非常に難しい。そういうことが、現在のい

しゃいましたけれども、今かなり駅前に集中している形で、その駅前を潰す必要は全然ないと思ひますが、そこにせっかく人が来てくれている、福島とか山形とか、福島の人それはそれで問題なので、どうするという話はあるけれども、我々からするとやはりそういうところから来てくれている人をどうさらに、定禅寺もそうですし、そうじゃない本町だとか青葉通のほうでもいいのですが、そちらのほうにどう人をより流していくのかということとその2つ目の課題で、そのためにはやはりここをどれだけ魅力的にするのかということが非常に重要になってくるということでございます。

多様な空間が必要なんでしょうけれども、そういう中でこのエリアの一番の特徴は何かというと、やはり2つあると思ひていて、ひとつは杜の都を代表するこの定禅寺通がすぐ近くにあるということと、それからもうひとつが、市庁舎に関してですけれども、市庁舎というのは、先ほど山田さんもおっしゃいましたが、その広場の延長線上としての市庁舎という部分もあると思ひますが、やはり市庁舎独自の機能を持っていると思ひまして、それが広い意味でのその政治だとかまちづくりだとか、そういうものをどうするのかということを考える場であり、決める場であ

てみんなで飲んで帰れば別にそこにカフェそのものはなくても、周りのカフェが潤うからそれでいいじゃないかみたいな、いかに市役所という機能に掛け算して人が来る理由をつくれるのか、単純に勾当台公園駅に近いところで立地がいいから商業施設をやるのではなくて、上にある行政棟との掛け算で、もっといい低層部の使い方ってきつとあると思ひているときに、政策の立案機能だったりレビュー機能みたいなものを低層階に持っていたらいいのではないかなというのが私からの意見でございます。

小島：

ありがとうございます。非常に示唆に富んだコメントで、市民協働というものがだんだんだんだん形骸化して、行政がNPOに発注することによって、もう行政が自己満足してしまっているところをご指摘したのかなというふうには思ひまして、私も3年前までいて反省しておりますけれども、市民協働というか、私は公民連携という言葉を使いますが、行政が主体的になるというのではなくて、民間が主体で、行政がそれを支援するというのですかね、ついていくというのかな、そういったことをしていくべきだろうと。そういった視点で低層機能を見ていくべき

わゆる再生可能エネルギーを使ってさまざまなことをやろうとする際の課題だということに気づきました。今後、どのようなアイデアや技術を落とし込めるかということが大切だと思ひています。というようなことで、私は建築設備側としましてもそういう課題に非常に興味がございます。今回は、お招きいただきありがとうございます。

内山：

ありがとうございます。小野先生のコメントは、最初は要素技術のハード的なところでしたが、その後、インテグレートバランスということで、その中で負荷というものが重要だということでした。負荷を考えると、やっぱり人間がどうそれを使うのかということや、どこでどういう生活をその建物の中でするのかということと切り離せないと思ひます。このソフトの視点というのは、重要だと思ひます。この後深めたいと思ひます。次に、佐藤先生から、防災的な観点からコメントをいただけない

Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う「役所市(シティホール)」を考える

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

Table A2

周辺エリアのビジョンの「翼を担う」を考えると「役所市(シティホール)」

り、実際に実現していく場でありということだと思っております。そういう中では、こういう定禅寺だとかそれから市民広場だとかというオープンスペースとどう連携させながら市庁舎を使うことで、その魅力をさらに高めることで、駅前に行った人たちが、あっちのほうにもちょっと行こうかという感じにさせるのかということがまずひとつ。

それからもうひとつは、その市庁舎本来の役割であるまちづくりを考えるだとか政治を考える、まさに今日みたいな場というのがまさにそれに当たると思うのですけれども、こういう場が多分新市庁舎で行われればすばらしいと思うのです。そういうときに、その広場でやっているイベントがこういうところに入ってきてもいいですし、逆にこういう場が広場に広がって行って、広場でも何かやっている、何かサブでやっているのかオープンになっているのかわからないのですけれども、そういう場になればいいなと思っております。その場合に可変性をどう持たせるのかということところが非常に重要になってくると思うのですが、例えば平時は何もないときは、先程佐藤さんにご紹介いただいたようなものが展示されていて、でも何かイベントをするときは、それちょっと横に置いて、広い空間として広場でやっている何かイベントをこっちの

中に持ってくるだとか、もしくは逆にこういうディスカッションなどをする場合には、またそれは横に置きながらそういう場をつくって、それが広場にも広がりながら、あっちで何をやっているのだろうという、そういう形にするというのが何かあるかなと。ですから、このエリアというかあそこのエリアの最大の武器は、広場なり定禅寺通りというものと、それから市庁舎自体というその2つだと思っております。その2つをどううまく融合させながら相乗効果を持たせながら、でも限られた空間だけれども、それをうまくやりくりしながらつくっていくのかという、何かそういうのが重要なかなというように思っております。

手島：

ありがとうございます。まさに本当に今回建てる建物は、仙台市内で唯一の機能で、このような機能を持つ建物は他にはあり得ないので、その本来の機能をどう全うするかということも、まちづくりと並行して重要なんじゃないかという、すごく貴重なご意見でした。ありがとうございます。芳治さん、お願いします。

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考えると

であって、当然、東京資本が凌駕している仙台駅に対する対抗軸というのですかね、対立軸として定禅寺通周辺も含めて仙台市庁舎を見ていくべきだろうと。いわゆる地元資本が動けるような環境が必要だと。その際に、部門最適化ということで、庁舎に全部カフェも入れるという話ではなくて、エリアの価値が高まるような視点で何が必要かというものを見ていくべきかということかなというふうに思いました。

次、岩間さん、お願いします。

岩間：

はい、よろしくお願いします。株式会社都市設計という会社と、それから自分で立ち上げたLLPモダンタイムスという組織、2つまいでお仕事をしています岩間といいます。よろしくお願いします。

私いろいろなエリアにかかわってまして、まず都市設計のほうでは、残念ながらあの図の白い円から都心なのに外れているのですけれども、仙台駅前の東口で、JRさんと組んで「EKITUZ I」という期間限定の広場を企画運営しておりました。一方で、LLPモダンタイムスのほうでは、空き家がかなりふえている中

山地区ですね、郊外で、別に補助金とか受けることもなく、「単に素敵な空き家だったから、これ仲間と一緒に活用してみない？」という視点から、やりたいからやっているという郊外のまちづくりにもかかわっています。

そんな視点がある中で、日々感じることは、本当にミニ東京と言われる駅前、駅前もやっぱり細分化できて、東口で求められていることと西口で求められていることと、それからよく話題に上がる定禅寺通、それから市役所のエリアで求められていることは全く違って、求められていることをすればいいんだろうというのが自然な感覚ですね。まだイメージですけども、買い物天国である駅前に比べると、もっと定禅寺通とか市役所エリアというのは、ゆったりとしながら仙台下しきというものを全身で味わって、かつ市役所という機能があつてという、より買い物というより暮らしに近いような、そういうエリアなのかなというふうに感じています。

市役所に求める機能とにぎわいの創出ということ、低層階に求められる機能と創出のにぎわいということですけども、私一市民として市役所建て替えてかって考えたときに、まず真っ先にきっかけから考えたんですよね。何を自然に思いつくかなというところ

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考えると

でしょうか。

佐藤：

災害科学国際研究所の佐藤と言います。私は、バックグラウンドは構造とか防災ですので、基本構想の災害対応とか危機管理が主な守備範囲だと勝手に思っておりました。今日は環境配慮の部分にすごく密接なテーマ設定かと思っております。今の皆様のお話を聞いておまして非常に、災害に強い庁舎と一言で言っても、それを実現するのは単に構造の技術による貢献だけではなくて、環境、コンセプト融合、技術融合のような、何かそういうことが重要なというのをしめじみ知らされております。

内山：

ありがとうございます。

次に、長谷川先生からコメントをお願いします。

長谷川：

私は、東北大学の文学研究科で社会学を教えています。社会学の中でも環境社会学というのが専門分野で、環境社会学というのは、一口で言うと、大変抽象的なのですが、環境と社会、環境と人間の間の相互作用の間の環境を考える。人々が環境をどういうふうに意識するかとか、環境をどういうふうに人々が重みづけるか、ごみをどう処理するかなどを含めて、あるいは、節水とか、あと例えば太陽光発電を自分の家に設置するかどうかとか。結局、環境にかかわることというのは、やっぱり結局は人間の選択の問題です。企業であれ、自治体であれ、国家であれ、最終的にはやっぱり社会の側が選択をしないとイケないわけです。ですから、今日は自然科学的な分野から環境の問題を考えている方が多いですが、社会学、社会科学の中でも経済学とか教育学とか、社会学だとか倫理学だとか哲学だとかも、環境と社会ということを経験的に考えています。特に1990年代以降は非常に強まっています。今日は、環境社会学という観点とともに、私は、1992年のリオサミッ

佐藤：

都市デザインワークスの佐藤と申します。定禅寺通のまちづくりの視点からというお話をいただいておりますが、もう今まで皆さんからお話いただいているとおりでして、今本当に地域の地域の方々と定禅寺通まちづくりの検討会をつくって、やはりここをどうしていこうかということは議論しています。ですので、議論しながら今年から少しずつアクションを起こしていこうということでワーキンググループをつくり、地域の方々がこういう活動をしていこうという、そういう地元発のいろんなことをやりながら、定禅寺はどうやったらいいのだらうということを考えていこうというような流れとなっています。

我々そのお手伝いもしているのですが、色々な議論の中でやはり出てくるのは、勾当台から西公園はじめ青葉山、それらをつないでいるゾーンが定禅寺通だろうということで、国分町のようなああいう夜の繁華街の雰囲気から、こちら側の少し住宅地の雰囲気から、すごく色々な種類の町をつないでいくゾーンでもあります。その一番の核になるのが市役所の部分だと思えますし、そういう意味でも人の流れの起点になるような機能が市役所の低層部にあってほしいなと、それは市民広場と一体での、今姥浦先生から

ろから考えると、まずは普通に土日にあいてほしいということと、あと、ずっと市役所の人とわかり合いたい。バリアフリーも含めてということと、あと最後、職員の人にもっとハッピーな顔で働いてほしいと。ハッピーな方もいらっしゃるのですが、何かもうちょっとみたいところが、日々結構お仕事柄いろいろな課のところにお邪魔するんですけど、そんなことを……が、きっかけです。

3つきっかけを感じたときに、だんだん意見をまとめていくと、市役所ってオフィシャルでないと言いつつ、やっぱり働く人にとってはオフィスですよね。かつ、仙台の機能が集まっているオフィスであり、市民にとってもイベント的に何かを得たい場所というよりは、それこそ小島さんがおっしゃっていた、今後の時代に多様化した課題を横口で解決するための何かを、何か困ったとかハテナとか、そういうことを解決するために来る場所ですよね。区役所とかは、もうやりたいことが決まっています、印鑑証明を取りたいのだとか、それに対して、市役所に足を運ぶときって、何かもやもやしている時です、大体は。何月あたりに公園を使いたいだけでも、まずどこに行ったらいいですかとか、どこに行ったらこれは実現できますかということも、もやもやしながら

トを契機に宮城県にも環境NGOをつくろうということでできた、公益財団法人みやぎ・環境とくらし・ネットワーク（MELON）という、環境団体の理事長を2007年からやっております。江成先生も評議員の一人です。このMELONは、いろいろな環境活動をやっています。気候変動の問題もやっておりますし、自然エネルギーの問題にももちろん取り組んでいます。食と農、「水の神様を探せ」という大変魅力的なプロジェクトもやっています。そのプロジェクトでは、四ツ谷用水や仙台市近郊及び宮城県の伝統的な水神様が大体どういうところにあって、どういう歴史があって、今どうなっているのかということも調べております。それから、4R的なごみの問題もやっています。

今日ここまでの先生方のお話を聞いて、私も本当に同感いたします。端的に言うと、共通理念については一定規模の都市の県庁所在地の街が新しい市庁舎をつくる場合、どの地域でも多分この基本構想の4つ、まちづくり、災害対応・危機管理、利便性・環境配慮、持続性は考えざるを得ないと思います。この4つはどれも

あったようなお話だと思います。

先ほど、そのシンガポールのシティギャラリーのお話をさせていただいたのですが、では今その定禅寺通に何かビジョンがあるかという、確かにだいたい前につくった定禅寺通のまちづくりの方針というのはあるのですが、それが知られていないですし、地元の方も何か知らなかったという人も多いです。まちづくりの色々なルールを決めて、こういうふうにやっていきたいと思いますというようになって、こういう定禅寺通ができていますけれども、その計画していたときからもう30年ぐらい経っていて、次の世代の人たちがそれをよくわかっていない。わかっていないというか、もちろん世代的にわからなかったということもあって、そういうところを改めて議論していかなくちゃいけないだろうなという形に今なっています。ですので、それをどうのように議論していくのかというのは、実はその地域の協議会でもこれからの課題ですけども、ああいうシンガポールのシティギャラリーにあるようなまちの模型があって、こういうふうにするよというふうなことですとか、何かそういう具体的なものを見ながら議論できる場が欲しいなと。何かそういうのに寄与するような活動を、我々としてはNPOとしてこれまでも少しずつですがやってきたつもりで

行ったら、余りハッピーじゃなさそうな人が「この課とこの課とこの課ですね、あと消防と道路ですね」みたいな、何かそれもつたないないって思うのです。市民にとっても何かを解決するために来る場所というのであれば、やっぱり求められる機能ってそこなんじゃないかって思うのですよ。

イベントスペースというのは、本当に稼ぐということをやったときによく言われるのですけれども、カフェを適当にやってイベントスペースをつけてと言われるのですけれども、まず、そもそもイベントスペースだけだったら、やっぱり屋外で、市民広場ありますし、定禅寺通というすごくポテンシャルがあるストリートもあります。やっぱり私、渡辺さんのご意見に賛成で、エリアとして稼ぐということを考えて、にぎわいというものの中でも静と動であると思うのですけれども、動的なイベントはやはり屋外のイベントスペースに任せてしまい、静的な意味での人が集まってそういった市役所としての機能をきちんと果たしている低層階というものがあつたほうがいいんじゃないかなというふうに思います。

ここから先は、そう思い至ってからの例えの話になるのですけれども、先ほど渡辺さんも市民協働という話をしていましたけれど

大事ですが、特にどこにアクセントを置くのか、どこで仙台式さを出すのかを、全国的なレベルで、あるいは国際的なレベルで、仙台ってどんな街なのかということも社会的にアピールすることを考えると、都市のマーケティングや都市デザインの観点からも、やっぱり杜の都ということではないでしょうか。これから2020年代、2030年代に杜の都をどう考えるのか。それから、たまたま今、平成から新しい令和の間もなく始まるようになって、2026年に順調にいけば市庁舎ができるというお話を聞きました。そうすると、令和で言うと、令和の8年とか9年とか、それぐらいにできるということになります。少なくとも東日本の大規模な公共建築の中では、恐らく令和の時代になって少なくとも東北6県の中では一番早い建物ということになるのではないのでしょうか。社会的にもどういう価値を体現した市庁舎なのかということはとても大事です。そのとき、基本構想の4つの項目はどれも大事なのですが、とくに新しい杜の都とは何かということが私は非常に大事なのではないかと思えます。

Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う「役所市（シティホール）」を考える

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

Table A2

周辺エリアのビジョンの「翼を担う」を考える
「役所市(シティホール)」

はありますが、ともにまちをつくっていく、ビジョンをつくっていく、そういう議論を生み出す場が必要かなというように思っているところです。

手島：

ありがとうございます。

最初のラウンドテーブルのときから「都市ビジョンがない」という話は沢山出てきました。それに対して、「いやいやちゃんと仙台市はつくっているよ」という話があって、総合計画がまさにそうだとすることは、もちろんもう僕らも何回も議論して重々承知しているのですが、都市ビジョンが本当にビジョンとして成立するのは、やはりそれがみんなの心に響いて、みんながそっちに向かっていくと楽しいなど、幸せになるなどというふう実感できるということまで投げかけないと、なかなかそれはビジョンになっていないところもあると思います。多分、ないと言われているのはそういうところですね。おおよそ総合計画の言っている方針は間違っていないと思います。間違っていないのですけれども、何かこう心に引っかかるフックというのをどうつくっていくか、みんなの共感を得るためにもう一歩何を踏み出すのかとい

うことだと思います。そんなときに、あのシティギャラリーのようなものがあるといいなという話であるとか、あるいは姥浦先生から話があったような、市役所にはやっぱりみんなで議論して何かビジョンを見つけるような場があったほうがいいのではないかなというふうなご意見をいただいていた。続いて、坂口先生お願いします。

坂口：

坂口と申します。よろしくお祈いします。

私は、主に建築の文化施設とか文化的なアクティビティーの調査とかをやっておりますが、今日前半のこのA1のほうで、同じようなテーマで少し議論をさせていただきました。そこで出てきた話の1つとしては、新しい公共といいますか、公の役割みたいなことから解き直していこうという話がまずひとつありまして、もうひとつは、今、各先生から話があったことに関連すると、そもそも足を運ぶ理由をどうつくるかというところが出ていました。それは、仙台というまちと同時に、少なくとも数十年前に比べるとインターネットが始まったり社会全体においていろんな変化がある中で、これからここに人が集まる理由、あるいは足を運ぶ理

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

ども、私も郊外で活動する中で、最近は中山を通り越して長命ヶ丘によく行くようになっていっているのですが、その一緒にやっているメンバーと、「ほんとに長命ヶ丘はバスつらいよね」みたいな話をしている、それこそ「ダテバイクを長命ヶ丘に延ばしたいよね」ぐらいに言っているのです。結構それが経済を圧迫しているという、行政の財政を圧迫しているということももちろん知りながら、そういう街がこうなったらよくなるのにねみたいなことって、結構私の周りには若い人でも話している。ただ、「じゃあ、どうすんの？」といったときに、市役所まで行って、何課と何課と何課と回って、あと道路課へ行きますかといったら、絶対に行かないですね。なので、低層階にカフェ的なものなのかわかりませんが、コモンな空間があって、何となくそこに行ったら、もやっとしたハテナを解決できる、市民にとって、私は何かを解決したいから市役所に来ているのだよという、機能を果たす空間があることが大事じゃないかなというふうに思いました。

小島：

ありがとうございます。一つ出てきたのは、いわゆる「E K I T U Z I」を、中央資本の最たるところのJ Rさんと協働してやっ

たと。協働というのはいいのだと思うのですけれども、いわゆる駅前との対峙関係でいくと、もう定禅寺エリア、市役所も含めて暮らしというのが一つの、市民の暮らしというものがベースにあるエリアだろうということ、いい言葉かなと思っております。求められる機能としては、広場との連続性とかそういうことがあるにしても、いわゆる動的なもの静的なものと、市民の多様な課題を解決する場だけではなくて、活動という点での静的な場というものが低層階にあっているのかなということだったかと思えます。ありがとうございました。

それでは、榊原さん、よろしくお祈いします。

榊原：

都市デザインワークスの榊原です。市民主体のまちづくりを応援したり、自ら実践したりということをしております。必要機能の話と、にぎわいとか回遊性、この2つでいいですか。そもそも「何で低層部なんだ」という意味もあるのですが、何か低層部に入れることが限定になっていて、先ほど向こうでも議論していたのですが、本当は市民協働という低層部と機能を分ける必要はないかなと思うので、ある種、低層部にある部分もあるし、オフィス

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

歴史的には、村上さんが非常に正確に詳しくお話ししてくださったように、杜の都は、藩政時代の屋敷林や寺社林に起源を持っていて、それは震災もあって焼けたことになっています。逆に言う、我々仙台市民はその屋敷林を本当に守ってこなかったということです。私は、仙台市民は反省すべき歴史を持っていると思います。そういう意味では、村上さんが言われた市庁舎のところにちゃんと四ツ谷用水の名残があるはずだということは、すごく大事だと思います。仙台は伊達の城下町ですが、大崎八幡や瑞鳳殿はありますが、それ以外に藩政時代のものが目に見える形で残っているかという、残念ながら残ってない。それから、明治時代の建物は本当に残ってない。大正の建物も昭和初年の建物もほとんど残ってないです。

それだけ開発圧力が強かったということでもあると思うんです。私は2020年代に、この1600年から420年ぐらいの歴史を持っている仙台市の価値をどういうふう現代的に再生するかということすごく大事だと思います。四ツ谷用水のようなものを市庁舎

にきちんと活用するとか、そして江成先生が言われたような雨水利用的な設備と重ねるといことになると思います。また、武山先生が最初に強調されたような、仙台が日照の条件が東北地方の中では最もいいということは、基本的な事実です。今、太陽電池も随分薄くなって、太陽電池を壁面などに取り付けることも、フライブルクとか、ヨーロッパでは大変盛んにやっています。さらに環境社会学者として強調したいのは、太田先生が最初に強調されたように、市役所というところに広場的な機能があって、人々が何だかんだで集まっていく。そのときに子供も含めた市民の方たちがある種の環境学習の場として市役所を利用できるということが、すごく大事なんじゃないかと思えます。内山先生が最初に京都の例を出されましたけれども、京都の場合には、京エコロジーセンターというのがあります。市の中心部からはちょっと外れてはいるのですが、東北大学の環境科学研究科のところたまきサロンがありますけど、あれをもう少し機能を膨らませたような形で、集った市民がこの市庁舎がどういう形でエコビルディ

由というものはどう考えるかというところがありました。そう考えたときに、まず思ったのは、木村さんが冒頭にジャズフェスの話をされたのですが、ジャズフェスの話でいくと、恐らく仙台市で道路が止まるイベントというのは相当少ない。例えば、ハーフマラソンとかよさこいとかページェント、公的なイベントはもちろんそうですけれども、ジャズフェスのようになんか民間主導で実行委員会のやっているもので、道路を止めるイベントは実は相当少ない。逆に言うと、道路を止めることができる市民協働のシステムが実は相当あるということでも言えると思います。足を運ぶ理由と同時に、そういった公共を担っていく仕組み自体は、市役所ではないかもしれないけれども、実は相当ノウハウはある。それをどういかに引き継いでいくということが、今各先生がおっしゃったことに関連して思ったのは、まずそこがちょっとヒントとしてあるなと。都市ビジョンをどうつくるかと同時に、ビジョンを動かしていく仕組み自体は、仙台市のまち全体は難しいにしても、いくつかあるというふうに思いました。

もう1つは、今僕は職場が名取ですけれども、名取から仙台に通動したり通っている人は相当いるのですが、恐らく仙台市庁舎の議論には全く関わっていない。多分富谷もそうだと思うのですが、

東北全体まで担わなくても、恐らくこの仙台市、いわゆる商圏としても職業圏としても、仙台市街地に来る理由はもともとあるのですが、そういった人たちのニーズではないですが、その声を拾っていく仕組みみたいなものを考えていくと、ここでこうつくりられているビジョンみたいなものが、もう少し私ごととか私たちがごとに変換する部分もあるなというように、冒頭の佐藤先生のシンガポールの例を聞いて思っています。あそこに来るのは、恐らく仮に仙台市庁舎にそういったものができたとしても、その人たちをどれぐらいの想定で考えるかというときに、市庁舎以外のフリンジのところをどうつくるか。姥浦先生から、中と外の議論で、中をどう再構築していくのかというお話があったと思うのですが、多分そのフリンジの部分というものがどんどん縮小していくときに、そのフリンジで実際にかかっているつながりみたいなものを、このコアのところはどう引き寄せてくるのかということとは、こういった議論からもヒントがあるように思いますし、今日皆さんの意見をぜひ聞きたいと思っています。

手島：
ありがとうございます。



ング的になっているのか、さっきのZEB的なものや太陽電池とか雨水利用などが一種の標本的にモデル的なものになっているのを見ることができて、それで例えば自分がちょっとエココンシャスな住宅をつくるときに、それはどういうふうにしてその技術を活用できるのかを考えられる。あとは、ごみをどういうふうにして循環的に利用できるのか、雨水をどう循環的に利用できるのかということを知る。そういう環境学習の場を兼ねたような市庁舎であってほしいなと思います。

内山：
ありがとうございます。1ラウンド目で、いろいろな領域や時間軸、スケールのお話を出していただいて、2ラウンド目で、じゃあ仙台では具体的にどういったことができるか、仙台だからこういう生活をみたい話に繋がる、すごくいいまとめをしていただいたと思います。
平野先生、まずは環境について広く領域を出していこうというこ

となんです、景観のお立場からいかがでしょうか。

平野：
平野と申します。所属は災害科学国際研究所で形式的には佐藤先生の部下でございます。が、専門は全然違っていて、全然災害のことややってなくて、復興まちづくりのお手伝いをずっとやっていたら、復興のことをやるということで災害系に所属しております。専門は土木の景観やデザインです。だから土木です。
市役所の建て替えを考えるときに、どれだけ市役所の建物が環境性能の高いものになったとしても、あんまり影響が出ない。せいぜい市長が誰か来たときに自慢するぐらいの話でしかない。それだと市民的には全然意味がないと思います。なので、やっぱり環境性能を高めているということのある種の雰囲気というものを、ちゃんとまちににじみ出して、まち全体の雰囲気がよい環境を志向している仙台である、ということに結びついていくことに初めて意味があると考えています。なので、ぜひ建築系の皆様も外

Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う「役所市(シティホール)」を考える

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

Table C2

勾当エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

Table A2

周辺エリアのビジョンの「翼を担う
「役所市（シティホール）」を考える

ほぼ一巡しましたが、今回の企画の趣旨としては、今までいくつかまちづくりのビジョンとしてこういうことがあるよということを何人かの方からお話をいただいていた。ここで、実際誰かが何かを決めるわけじゃないのですが、ただやはり今まで、震災復興も含めていろんな議論をしていて、最終的に思うのは、一番当たり前に一番真つ当な議論や意見というのは必ず通るんですよ。一番当たり前に「これはやるでしょう」と思えることは必ずそうなっていると思います。そういう意見をきちんと積み重ねていって、それが対応できるようなことをしておきたい。それぞれの専門家の方にいらっしやっていたので、今後10年か20年か40年か50年かわからないですけども、普通に自分たちの専門性から見たらこんなことになるよと、例えば交通計画からするとこういうことは多分想定されるべきなんじゃないのということを、ある程度きちんと積んでおきましょうということがやればいいかなと思っています。

末さんがちょっと準備してきてくださっているんで、その話をお願いします。

末：

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

棟というところにもあってもいいかなと思いつつ、低層部に限定しないで、新庁舎にあるべき機能という形でちょっと話をしたいなと思います。

市役所ができるのって、多分早くも8年後、10年後ぐらいになるということ考えたときに、10年のスパンで考えるとどうか、と思いつつ、震災から今8年ぐらいの時間の流れというのを、どのようにこれからの10年を見ていくか、というのを少しイメージしながら、と思っています。先ほど市民協働の区役所とかコミセンとかサボセンの話が、前回出ましたという話ですが、多分それって活動する上での現場かなと思っています。一方で、そこで活躍している人は、今風でいうと意識高い系の人というか、市民をあえて「志ある市民＝志民」と考えたときに、何か地域課題を解決したいとか地域に貢献したいと思っている人たちをいかに増やすかという場所となる都市機能を今回市役所にあるべきかと、思っていました。

それはもしかしたら「志民」と考えれば行政職員もそうかもしれないし、ハッピーで働いてもらう環境もそうかもしれない。一緒になって地域課題を解決するとき、先ほど一馬君が言っていたように、対等に協働するためには、お互いに同じレベル感の情報

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

から見てほしいなと思っています。まちの外から見て、ぜひ敷地の外から、この市役所を考えてほしいと。

敷地の外から考えるキーポイントは、3つあると思います。1つが緑です。次が水、最後がまち、まち並みと言うべきですかね。恐らく、今のお話を聞いてると、緑と水の話は村上さんがなさってくださいったと思います。

緑に関しては、もともと仙台は商売をする気があまりないまちで、貿易と言うべきか微妙ですけど、政治のまちとして武家屋敷率が非常に高いまちとして、高い系は全部石巻にお任せという形で、武家屋敷だらけのまちだったので屋敷林が多くありました。その屋敷林が杜の都をつくっていた。戦争でアメリカに焼かれまして、ほとんど丸焼けになった状態から、先人たちが頑張って震災復興区画整理というある種の土木事業で、当時の歴史を残しながらすばらしい設計をしてくれたのですが、国分町通り、奥州街道も同手筋である大町通りも一切拡幅をしてないのです。区画整理事業をやったのに拡幅しないで、歴史的な形を丸々残して事業を進め

資料を持ってきました。何かというと、今ヨーロッパとかアメリカだと、1階のグランドレベルを歩行者に開放しましょうという動きが10年ぐらい前から盛んになってきていて、そのプロジェクトが大体完成してきていて、だいぶ都心の中にインパクトが大きいということです。日本の国土交通省も、そういったところに着目をしていて、最近、車ではない交通モードについても、もう少し優先度を高めましょうという形になっていて、歩行者や自転車を重視する道路のつくり方や運用をこれから盛んにしていくことに取り組み始めている。そういったことに敏感で都市間競争を勝ち抜いていこうとする自治体は、施策として取り組み始めています。

仙台市は、もともと定禅寺通というすばらしい資産があるので、当然その流れに乗っていくべきだと思いますが、そういったところと、非常にインパクトの大きい市庁舎の建て替えが、あまりリンクしていないという問題点があると思っています。そういった財政局側で持っている市庁舎の建て替えというプロジェクトに、都市局側も関わっていくという形で、新しい時代の仙台市として総合的に都心をつくっていくことに取り組んでいったほうがいいと思っています。

ないといけません。行政が持っている情報はやはり多いので、それを勉強しましょうといつてやるとかなり大変。そこにワンクッション楽しい要素、その部分が必要ですが、「志民」をいかに増やせるかということをやっていくかないと、多分、町内会活動もままならない、10年後にはとイメージするので、もしかしたら新しい町内会のあり方みたいな話は議論されているかなというところがありました。

2つ目の賑わいという部分、これ本当に個人的な超意見です。都市計画的にいうと、多分、仙台駅からの回遊性みたいな話を言っているのですが、多分、もう「ノード」をつくるしかないかなと思っています、その「ノード」というのが集客装置としてのノードか、もう交通結節点しかないと思います。仙台駅が何であんなに強いかというと、交通結節点だからです。東西線も仙台駅で結節してしまったので、勾当台公園駅では地下鉄で1万5,000人ぐらいの利用で、仙台駅だと地下鉄東西線だけで3万7,000人と多分4万、5万人ぐらいで、そこにJRを入れると8万人だから14.5万人いるわけです。もう10倍違う。あとノード性が全然違うのであれば、その交通結節点をどう作るか、しかも10年後なので、自動運転が進んでいる可能性があるんで、先ほど、モビリティ

をしています。それだけでなく、屋敷林がなくなってしまったあとに、定禅寺通りを始め、これだけ震災復興区画整理事業で街路樹を植えたまちはないです。その先人たちのおかげで、屋敷林を失ったのですが、何とか杜の都というイメージに踏みとどまったのがこの定禅寺通りです。

そうすると、これから、多分上善寺通りのケヤキもいつまでもこの状態でいられないです。どこかで更新をしなきゃいけない。杜の都が一遍失われたのを街路樹で再生したのですが、それが更新の時期を迎えたときに、一体杜の都というイメージをどうやって担保していくのかというのはすごく大事で、そこをどうするかというところをちゃんと考えていく必要があるかなと思います。だから、1つは、やっぱり屋敷林の復活という形で市役所の敷地があたかも屋敷林に囲まれている、それを使った環境性能の高さを演出していくなんていうのが1つの方向性かなと思っています。

もう一つが水です。雨水の話も随分ございまして、それも含めて、雨庭の話されたと思います。せっかくある四ツ谷用水。残ってい

そういう歩行者系を重視していきましょうということを、この数年続いていくプロジェクトの中でも考えたほうがいいと思っています。海外の都市ではどんなことをやっているかというだけご紹介し、こういったことも仙台市の中でも考えていったらいいということを紹介したいと思います。

このスライドは、コペンハーゲンのど真ん中にある駅周辺を、以前は車が非常に錯綜していたようなところでしたけれども、車道を1車線片方向全部潰してしまって、下の図にあるように歩行者空間を大きく広げて、車道を縮めたというプロジェクトです。この写真にあるように、地下鉄の駅の周りに車道が走っていて、車がたくさん集まっていた、そういう中央駅だったのですが、この車の通りを減らして歩行者空間を拡幅して、たくさんの人が集まれる空間にしたという事例です。ひとつの都市の一番中心の駅なので、大量に自動車交通が集まっていたのですが、そこを歩行者に開くというビジョンを優先して、交通計画そのものを変えるということをやっています。

これはコペンハーゲンの事例ですが、こういったことをパリだとかウィーンだとかロンドンなんかもやっている。そういったことによって都心の魅力をつくっています。ウィーンでは、都市の全

体の中のど真ん中のエリアに通っているマリアヒルファー通りが、この右上の写真のように、車道のほうが広がった道路を、歩行者と自動車が混在して走っていい空間に再編し、歩行者に配慮しながらじゃないと走ってはだめだという交通規制を取り入れて、歩行者空間を広げたという事例です。社会実験をやりながら、そういう道路の運用に、市民の方々にも慣れていただきながら合意形成を図っていくというやり方を進めてきたという形です。

ここでご紹介したかったのは、この道路の空間を変えていくということに、市庁舎の中の60の部門があるうちの半分ぐらいの部門が、このプロジェクトに関わっていて、それぞれ、景観であったり、プロジェクトの全体管理であったり、交通であったり、ストリートファニチャーであったりというような、それぞれの部門が所管している所掌事務をそれぞれ尊重しながら、都心に歩行者空間をつくっていくという同じ目的のもとにそれぞれが協調しながら進めていったというプロジェクト体制をつくっていて、縦割りですけれどもちゃんと横断的に物事が進んでいくということ、このウィーンの市行政はやっている。やり方によってはできるということだと思います。なので、仙台市が現在進めようとしている市庁舎の建て替えを契機に、この都心をどういうふうに変えていき

Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う「役所市(シティホール)」を考える

の話題がありましたけれども、モビリティステーションみたいな交通結節機能をどう作っていくかということと、市営バスもどうなっていくかよくわからないですが、バスターミナルを仙台駅からもうひっぺ剝がして、こっちに持っていくぐらいの話をしちゃうとか、いかに仙台駅の交通結節機能を弱め、こっちをどう強めるかをしないと、多分それぐらいの話をしないと、なかなか厳しいかなと思ったところです。

3つ目に稼ぐという話がありましたが、行政の稼ぎ方って、民間に稼がせて都心の生産性を高めて固定資産税で回収するというのが多分基本ですよ。だから、いかに、さっきも言ったエリアで稼いでもらうかという仕組みをどうつくっていくかという話も出てくるし、家賃として回収するというのもあると思うのですが、その辺、民間として行政庁舎が建つことで自分たちの商売が成り立つみたいなのが、何かそういう稼がせてもらえそうだなという臭いをどれだけ醸し出せるかなとか、そのデザインもそうかもしれないし、仕組みもそうかもしれない、というのが3つ目でした。以上です。

小島：

るところをちゃんと復元しつつ、雨水だけじゃなくて、遣り水として使えば、せつかく先人たちがつくった遺構が、多分ある程度は生きているはず。埋め殺してしまったところも結構あるような気がするのですが。そういうのをきちんと復活させて広瀬川の水を引き込んでくることによって、この仙台というまちの環境性能全体を高めていくということも、すごく大事です。用水そのものは必要ないと思うのですが、環境性能を高めるために現代的に四ツ谷用水が再び必要になってきていると僕は思うので、それをどう展開し直すかというのが、外からの視点として大事かと思っています。

3つ目がまち、まち並みの話です。このところ仙台で大きなビルが建つと必ず、容積率ボーナスが欲しいので、公開空地という広場、みんなが使える広場を使うと、サービスで容積率が緩和されたりします。なので、敷地にぼーんと高い建物建ると、必ずその周辺は全部広場になります。そういう広場って、うまく使われていけばいいのですが、使われてないケースではすごく殺風景な

ありがとうございました。第1部でも、今、榊原さんがお話しした、志ある人をいかに増やすかと、それは民間いわゆる市民だけではない。実は行政側も一緒に対等におつき合いするためには、行政がそこを変えていかなくてはいけない、というのがあって、行政も今8年と言いましたけれども、8年間何もしない、いわゆる施設設計だけすればいいというのではなく、8年間あればそういう行政職員の教育、人材育成すべきだというのがあり、同じような意見かなと思いました。

あと、「ノード」いわゆる交通結節点みたいなものをダイナミックに変えていくということが必要だろうと。いわゆる賑わいとして消費行動だけに頼って、そこに回遊性いわゆるコンテンツを持つのではなくて、交通結節点という大きな発想の転換をしていくということも必要ではないかということかなと思いました。

一つの事例ですが、先ほど洞口さんから出た紫波町というのがあって、図書館を作ったのです。図書館の脇に色々とそういう市民利用施設みたいな、商業施設みたいなものがあるのですが、図書館で人が来る、人が来ることをうまく使って商業の展開を回す、そういう相乗効果のような、ノードみたいなものだと思うのですが、そういった視点を行政側でも取り入れながら、稼ぐという空間エ

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

景色をつくります。なので、高層ビルを建てるときは、いかにちゃんと建物としての表情をまちなに見せるかということがすごく大事になってきていて、そうでない建物は、どう建てるかというのがすごく大事です。

ただ、定禅寺通りはすごく景観の規制を、全国に誇るべくきつい規制をしています。なんです、規制ではつくれないですよ。規制というのは、どうやってもだめなものをつくらせないことはできるのですが、みんなでよいものをつくらうというのは全然できないです。よいものをつくるには、やっぱり誰かがいいものをつくって、それがまちなかに反映されていく、波及していくというプロセスを絶対踏まなきゃいけないです。

せんだいメディアテークが定禅寺通りにできて、評判になって、こういうガラス張りの建物が周辺に波及していつているというのは、まさにそういう効果だと思います。だから、せんだいメディアテークが定禅寺通りの景観の向上に貢献したのは、そういう波及効果の部分がすごく大きいと思っています、そういう市役所であっ

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う「役所市(シティホール)」を考える

たいのかというビジョンを共有して、それに向かってそれぞれの担当部署がそれぞれやるべきことをやるという進め方を考えていかれると市民としてはうれしいと思っています。

手島：

ありがとうございます。都市ビジョンというのは多分そういうためにあるのだろうということを説明していただきました。

定禅寺通も、半分車道を潰すということがあるようなので、これをどういうふうになんかにつくっていくかというのはかなり重要なプロジェクトですよ。市庁舎建て替えもリンクしてくるのでしょうか、総合的にやるとかなり大きな効果があるのかなと思いました。

では齊藤さん、お願いします。

齊藤：

私もコペンハーゲンによく行くので、ちょっと補足というか、「そうだな」と思ったので、発言させていただきます。2点あるのですけれども、1点は今のストリートの話で、やはりニューヨークもそうですけれども、今のヨーロッパの主流は、「車に占拠されて

いたストリートを人に取り戻す」というムーブメントが、多分もう建築家の方からすると当たり前というか、常識になっていて、でもなかなか日本だとこれが実現できないのは、公民連携の難しさとか何というか…、私より皆さんの方がご専門だと思うのですが、それを何とかこの仙台で乗り越えたら、これはすごく話題になるし、日本の希望にもなると思います。

ノアポートの駅の周辺は、私もたくさん歩きました。コペンハーゲンに行かれた方がいらっしゃればご存じだと思いますが、そういったパブリック空間の作りがものすごくうまくて、「まちを人に開放する」ということがまさに都市ビジョンになっているので、ある意味そのシティホールやパブリックスペースで、或は外で、こういった様々な議論を行いたいというのは、コペンハーゲンの人たちのマインドだと思います。あのまさに通りの面しているところにマーケットがあって、そこに北欧で一番おいしいコーヒーショップがあり、ものすごい数の観光客で賑わっていて、だからまちや通りを開放するだけではなくて、そういったコンテンツがちゃんとあります。「きちんとプロモーションされていないとそこに人が来ない」という先ほどの先生のお話になりかねないので、そこにいかに仙台市の人もしくは外の人を連れてくるかとい

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

リアを作っている、ということからすると、そういう私も全然発想なかったのですが、交通結節点を新しく作ると、なかなかおもしろいなと思いました。ありがとうございます。

最後になりましたけれども、佐藤さん、実はこのメディアテークに初期段階からかかわっていただいて、運営もしていただいていると。そういった、先ほど「ノード」という言い方をしましたけど、にぎわいを創出するとか、回遊性というものを見たときに、よく佐藤さんから、西公園は何もコンテンツがないので、ここでとまっている人の流れとかがあると思うのですが、メディアテークの運営をいろいろと経験しながら、市役所というのはどうあるべきかという視点でご意見賜れば幸いです。

佐藤：

元メディアテークの副館長の佐藤泰といます。今日この会に初めて来て、ただ会場はここでやっていたので、「聞いてなかったのか、おまえ」みたいな感じがあるのです。ちょうどほかのことがあってということ。

それで、今お話を聞きながら、まずこの市役所を検討するに当たって、少なくともここで出ているのが協働のことであるとか、にぎ

わいのこと、あとは回遊性のこととかというのが出てきている中で、本当にそれ市役所をつくるときに必要なだろうか。市役所は本当に無駄をとりあえず省いて考えていったらオフィスですよ。本当に必要なことは、オフィスとしての機能があれば市役所は事足りる。そこにあって別な機能を持ち込むということが本当に必要だとすれば、それが中途半端に、「どうせ市役所を作るのだから、ちょっとにぎわいも欲しいよね」とか「回遊性もやっぱり考えないとね」とか「そういえば協働のスペースね、あれちょっと入れておかないとだめだよ」みたいな、そういうことだと絶対だめだと思うのです。それをやったら、どこにでもある市役所がまた一つ増えるだけなので、まず本当に市役所として最低限必要なものは何かというところをがっちり固めた上で、さらにどうしても必要なものを真剣に入れる、やるのだったら真剣に入れるということを考えるべきなのかなと思います。

今、その回遊性の中で、いつもお話するときに西公園、あそこは誰も行かないのに回遊性をつくると。この図をいつも見るのですが、見るたびに寂しい気持ちになるのですよね。西公園まで行って青葉通まで行くと、その間、街の裏庭を寂しく歩いているような感じがしますね。こう言ったら、今一生懸命頑張ってい

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

てほしいと思います。要は、まち並みをきちんとつくっていくためのイニシアチブ、リーダーシップをとる。もしくは、「そうか、こういうふうに住れば、床面積とまちの表情を両立して、まちなかの活性化に貢献できるんだ」ということを民間の方々にわかっていたかのような、そういうきっかけになる建物にする。まとめますと、緑の話と水の話とまちの話とをぜひ敷地の外から見えていった市役所になればいいなと思っています。

内山：

ありがとうございます。平野先生から、建築単体の環境性能を越えて雰囲気をつくっていくというお話をいただきました。その中で緑と水とまち並みがあるのですが、緑はやっぱり人が更新してかなきゃいけないし、水も人がかかわっていくものだし、まち並みも規制ではなくて人間の理解を広げていくようなものだと思います。そうすると、やっぱりソフト的な領域がかなり大きいかなと思います。

それで、2ラウンド目として、仙台でのライフスタイルということと環境ということを関連させて考えて、仙台だからこそこういった環境を進めたいのではないかという、何か具体的な像が見えてくるといいかなと思っています。

まず、太田先生から、ヨーロッパの都市のお話がありました。まさにヨーロッパの都市は、平野先生がおっしゃるように、個々の建築が雰囲気をつくって、まちとしてのサステナブルな都市のようなことがあると思います。それから、最初のプレゼンテーションではちょっとスバク競争になっているような環境建築ってあんまり面白くないとおっしゃっていました。最近はピクニックに取り組まれていて、都市空間を人間が利用するという視点なのかなとも思うのですが、そういったところからコメントをいただけたらと思います。いかがでしょうか。

太田：

はい。今、お話をいただいたんですけど、その前にちょっと

うコンテンツを同時につくる必要がありますし、その通りにマーケットがあるほかに、デンマークって、裏にバスケットのコートとかがあるのです。仙台も健康都市だと思いますが、デンマークは町中にそういったパブリックスペースがあって、ストリートが開放されていて、そこにバスケットコートがあって、屋外でいろんなスポーツできる環境が見事にデザインされています。(屋内との) 反転というか、ストリートこそが人の集う場所であるという考え方で、真冬でもみんな外でビールを飲んでいる国民性なので、仙台もそれぐらいのビジョンがあったらおもしろいなと思ったのがひとつです。

もうひとつは、さっき手島さんが言っていた「将来どうなるか」についての専門家的な知見をこの場で出していかなければいけないと思っています。テクノロジーとか働き方というところについては、コクヨで専門的に研究をしています。シティホールは50年、100年先を考えていかなければいけないと思うのですが、100年先に多分生きている人はここにはいないと思います。では、例えば20年ぐらい先を考えたときに、でも20年先って「シンギュラリティ」みたいな話があり、いろいろなものがAIなどで自動化される世の中になって、「ホワイトカラーはどういう仕事をするの

る人たちがいるので支障があるとも思いますが、ただ、そういうのが実感としてあります。西公園が仙台の裏庭のような、そういう感じがある限りは、回遊性といっても本当かなというところがあります。

それを考えるのであれば、先ほどお話があったように、例えば市役所のこともあるかもしれないけれども、そこを回遊のための拠点として考えるのであれば、さらに西側にもう一つ大きな拠点がないと、市役所の拠点は意味がないと思うのです。それを前提にして、だったら市役所の拠点、回遊性のことを考えようね、というふうに流れていくべきだと思うのですが、それをとりあえず置いて市役所だけ考えたって、基本的に余り意味ないかなと思います。だから、西公園のほうとか、それから川内のほうを本格的に観光の拠点としてもっと徹底的に整備して行って、そこに観光客たちがががんと集まる、そこで回遊性が生まれてくるというような、例えばですが、そんなことを真剣に考えると、そういうことを前提にした上で市役所を考えるということがあるかもしれない。

あと、協働の話も、さっきの前半の話の中で「議会が要らないじゃない」みたいな、これって市役所にとって本当はすごく深刻に考

いいですか。

今回の会の目標が、これの資料のレビューということなので、多分皆さんのほうが指摘するのにふさわしいので簡単にとどめますけれども、環境に関しての4回目の資料5というのを見てちょっと不安に思ったので、これで大丈夫かということを誰かが指摘しなくちゃいけないなと思いました。

というのは、パッシブについて、それも武山さんなんかがふさわしいので簡単に言いますが、パッシブ建築の捉え方がちょっとミスリーディングであるということです。つまり、自然通風と書いてあるのですが、いかに自然の力を使ってエネルギー利用を少なくすることがパッシブの基本なので、底を使うというのは、パッシブ手法のなかでも限定的な方法なので、自然通風などと結びつきにくい。また、例えばダブルスキンという言葉が出てこない。せんだいメディアテークは、ダブルスキンですけれども、この建物はダブルスキンを想定しないということなのでしょう。また、エコボイドという言葉が出てきますけれども、自然

でしょうか」みたいなことが民間企業で言われているわけですが、多分行政のサービスも、そういったタームで考えていく必要があります。今日は多分中身の話までする時間はないとは思いますが、さきほどの「7万5,000平米の面積が必要か」の話についても、本当にそれが普通の「机が並んでいる今の行政サービスのあり方、ワークプレイスでいいのか」ということも、多分話していかなければいけないですし、ある意味「市民のための行政」ということを考えたときに、多分その100年後を想定して建築を考えるのに、今すごく難しい時代にはなっていると思うのですが、まさに「庁舎の足元周りをどう設計するか」はすごく重要ですし、20年ぐらい先のことだったら読めるので、そのあたりを考えていきたいなと思います。

あとは、自動運転、健康都市ということあまり仙台の人は売っていないような感じを外から感じてはいるのですが、デンマークもすごく健康とかウェルビーイングということは推しているのですが、そこは多分仙台の売りであると思います。「社の都」であり、すてきな定禅寺通があるのですが、市役所の周りのほとんど全部のブロック歩きましたが、正直全然つまらないです。コペンハーゲンみたいにわくわくしないし、例えば前泊してここに来ようっ

えなければいけない問題なはずですね。だから、議会も片手間、協働も片手間ということになったら、本当にそれはどうしようもない。それは本当にどうなのか。市の行政を回していくために、どういう手続がどういうふうにならなければならないのか、そこに協働という新しい考え方をどう組み込んでいくのか、それと議会の関係はどうなるかということが、もうちょっと明確にみんなで共有できるようにになっていかないと、何か気持ちだけ協働、ああ頑張ったねということでは、それも本当に限界があるかなと思うのですよね。

にぎわいもそうですね。にぎわいは本当に必要なのかっていうことですよ。一番町とか国分町にとりあえずににぎわいが今ある。そのにぎわいを市役所まで引っ張ってくる理由があるのか、ということですよ。その辺も回遊性と関係の中で、あそこのにぎわいは意味があるというように、戦略的に考えないとちょっとどうかということを感じながら、何かお客さんのように批判ばかりですみません。

そのように思いつつ、ただ、私がここに呼ばれた理由というのは、メディアテークにかかわってきて、そのコンペが行われたのが平成6年でした。その前に、ここの施設のそもそもの立ち上がりの

換気となるとやはりどれだけ、どうやって空気を動かすかということがテーマになってきます。断面図を見ると細いエレベーターシャフトのように描かれていますが、本当にそれでいいのか。つまり、パッシブをものすごく矮小化していないかということは、言わなくちゃいけない。

ほかの庁舎のZEB事例でも、特に秋田市庁舎は、大きな吹き抜けをとってそこで自然換気をしているのですが、自然通風という言葉だけで説明されている。吹抜の導入は計画の初期段階に決まないとできませんから、自然通風にとって一番重要な空間が抜けている資料は、大きな吹き抜けをとらないという計画を想定しているものという印象を受けました。特に資料のさまざまなボリュームスタディに吹き抜けがほとんど書かれていなくて、実質、自然通風とか空気熱利用というものができないようになっていて、それでよいのかということです。

配置計画については、建物が南に面しておりますから、大変日射量が増えてくると思います。その中で、この配置計画するなら、

Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う「役所市(シティホール)」を考える

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

Table C2

勾当エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

Table A2

周辺エリアのビジョンの「翼を担う
「役所市(シティホール)」を考える

て、正直思わないですね。それはなぜかなと思ったら、やはりその都市計画が計画でしかないのであって、そこにあるコンテンツとの整合はとれていないのだと思います。そして、それをやる人が都市部に集積されていないという問題があるので、人が本当にここに来るのかということもそうですし、テクノロジーをどういうふうに扱うかということは、同時に考えていかないと、これから高齢化社会になるので、自動運転も含めた都市のあり方というのはぜひ考えていきたいなと思います。

手島：

ありがとうございます。先ほど天野さんからおっしゃっていただいたような、そのオープンカフェを仙台にという話がありましたけれども、徐々にやっぱり仙台もそっちの方向には向っていますよね。「公共空間をどうみんなで使い倒していくか」という方向には多分行っていると思います。

もうひとつ、齊藤さんからお話がありましたけれども、今ちょうど、テクノロジー発展の影響もあって、いろいろな意味で社会の転換期ですよね。そのところをどう考えていくかというのは難しいと思います。

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

きっかけになったのが、ギャラリーを新設してほしいということで、それは平成元年に地元の美術館の団体が仙台市に陳情したのが始まりです。ここにあった交通局の車庫を、大学病院のほうに移すに当たって、ここの空き地にとりあえずギャラリーをつくるということで始めて、まさにメディアテークは平成とともに歩んできたというふうに今改めて思ったりもするのですが、それだけ長い時間をかけてこの施設は計画段階から立ち上がり、設計競技をすることにより、こんな斬新なデザインが選ばれたのです。

このようなことは、市役所はもともと考えていなかったのですね。とりえず複合施設として、ギャラリーの機能と図書館の機能を持ち込んだ建物が、ちょっと変わったデザインでも、設計競技するのだからいいかな、みたいなことで始めたことですが、ただ、その結果として、この空間はもう本当に壁のない空間で、公共施設としても文化施設としても従来ないような提案が行われたと。普通だったら市役所は断るのだけれども、そのとき断れなかったのですね。断れなかったのはなぜかという、そのとき直前に市長が逮捕されるということがあって、オープンな場で議論をされて提案されたものを、否定できるような市役所の立場的な強さは余りなかったということもあって、それをとりえず受け入れま

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

それなりの南の日射に対しての措置が必要で、それは庇を出すというレベルのものではないのではないかと考えております。素人で大変恐縮ですが、このボイドを入れるか入れないかで全体のボリュームの計算が違ってきます。ちなみに、高さが全部4メートルになっているのですが、ここのせんだいメディアテークのように、1階部分に7メートル近い大きなホールをとると、そのボリュームも全部、ボリュームスタディも変わってきます。それが無い、という時点で結構経学が誘導されているような、つまり要素技術だけで全部やれというような意図を持っているように聞こえますので、ここで指摘するのが大事なかなと思いました。まち並みや都市に関しての環境的テーマのあり方についてなんですけれども、ちょっと今の話と似ておまして、都市生活と環境建築をどう繋ぐかというときに、やはり周りのオープンスペースをどう利用するかだと思います。市民参加のためのイベントを開くなど、適切なマネジメントの重要性は皆さん指摘されると思いますが、まずは、そこがどれだけ透水性があって、それからヒー

木村さん、お願いします。

木村：

ありがとうございます。歩くというところは、僕もすごい好きで、今、この上杉商事というブランドのとおり、上杉地域にいます。私が東京に住んでいたときは、代々木上原というところから渋谷まで大体歩いて15分ぐらいのところに住んでいて、居住地とまちなかのシームレスな様子というのを楽しんでいました、まちがどんどん盛り上がりていく感じ。

おっしゃるとおり、仙台には結構大きな道路がいくつかありますけれども、定禅寺通もそうですが、上杉から街中に出るときも北四番町通り、北六番町通りがあって、その信号というのが長いのですよ。ですので、道路を私がこっちに歩いてくる、本当に歩いてだけの時間でしたら15分ぐらいですけど、信号に引っかかる大変な目に遭う、倍とは言わないですけど。だから、うまい道、あんまり信号がない道を見つけると楽しくなってきます。そこはすごくいつも意識しているところでした。

定禅寺ジャズフェスも歩ける範囲で行うことを意識しています。

山川平野海、自然に近い都市ということで、山にもこだわりたい

しょうと。だから、消極的ではあるけれども受け入れざるを得ず、それでこの施設がすくすくと育っていったというところはあるのですね。

すくすくと育っていくに当たって、行政からすると、「この意味のわからない大きな空間どうするの?」とか、それ税金使ってつくるのに、どうやって市民に説明するのかということは常に引っかかるのですよ。健全な役所であれば、そこで引っかかって、止まった可能性のある部分は、このメディアテークにはいっぱいあります。でも、とりえずこの空間を、ギャラリーにもできるし図書館にもできるから、わからないところは目をつぶっても、市民からも色々な機能が欲しいと言われてるので、それを実現するからやりましょうということで進めてきて、その結果としてでき上がったものが、仙台市として考えていた4つの機能の複合をはるかに超える、全く新しい、今私の言い方で言うと、空っぽの空間ができたのです。

空っぽの空間が、空っぽだけど、そこに人が集まる、それは空っぽの空間の質が人を呼んでいる。空っぽの空間で人を引きつける質がなければ、それはそれで終わるのだけれども、ここの空間には人を引きつける魅力があった。それは場所的なものもあったと

トアイランド軽減に効果があるかということと言わなくてはいけないので、まずは、余り暑くならない透水性もしくは自然の土、芝のものを利用して、そこでできた冷風、涼風を建物の中に導入するかというのを多分、通風の環境条件を調べた上で利用するのかなと思います。そういうマイクロクライメイトをつくるという視点が必要です。実際それをやると、ピクニック的には大変気持ちがいいです。公園のつくり方でよく真ん中に芝を広々とつくるっていうのがありますけど、あれは子供が走り回るだけで、居心地よくないです。一番いいのは、木を分散配置して、その下で酒を飲むというのが一番いいのです。適度にオープンスペースも日射遮蔽というか、木で日当たりを避けてあげないと、暑いから、みんなビニールのテントを持ち出します。でも、景観的には良くないので、イベント広場のようなものは1個きちんとつくってもいいと思うのですが、私としては、木の分散配置をしてすぐクーリングのできるオープンスペースをつくって、それから1階のオープンスペースを介して建物内に導入をする。そういう方法もあり

のですが、青葉山には森があって木があって、定禅寺通というのも、定禅寺通単体で考えちゃいけないと思っています。定禅寺通は、あくまで青葉山のほうから森が下りてきている感覚、広瀬通とか青葉通なんて一番きれいだと思うのですが、仙台駅から見ると、本来青葉通というのは青葉山に抜けてほんとは行っているはずですけど、ちょっと今いろいろ建ったりとか、何か横っちゃになったりしていますけど、「仙台にある東西に走る道は、青葉山につながっていて、そこから木が下りてきているというイメージ」で、新しい「杜の都像」はつくれるはずだと僕は思っています。

もう1点、展示の話がちよいちょい出ているなと思ってまして、僕も展示についてはすごく興味があります。ただ、展示博物館みたいなものって、基本的には何か「我が国はこうである」みたいな話とか、「私たちの土地はこんな町です」みたいな、そういうちょっと押しつけがましさと考えています。そうではなくて、東京の「KITTE」という場所に「インターメディアテク」という場所があるのですが、郵政と、東京大学が一緒になって、あそこで行われていることというのは「東京とは何か」、「生きるとは何か」とか、「生物って一体何でこの場にいるんだろう」みたいな、「地球はどのようになっていけばいいのか」みたいな、もっ

思うのですが、空間が息をするという呼吸を始める。もちろん図書館とかギャラリーとか展示する場所はあるけれども、でも、基本的にはそこで何か明確的に提供するものが空間以外にはない。そういうときに、メディアテクを運営する側としては、この空間の価値を失わずに、みんなで使っていくためにはどうすればいいかということをごく考えたのです。

それを考えるに当たって、例えばこの「オープンスクエア」というのですけれども、このスペース、このオープンスクエアの使い方、壁が出せるようになっていて、壁を出すと小さなホールのような使い方ができるのですね。だから小さなホールのように使おうとすると、最初はここを借りた人は全部閉めて、中でコンサートをやるとかということ始めたのですね。ただ、それって、この空間が持っている開放感とかを無くしてしまう。つまり、それを無くしてしまったのでは、この空間をみんなで共有することのメリットが失われていく。それは物すごく残念なので、とにかくこの空間が壁を立てないままで、向こうでガチャガチャ食事をしていても、向こうの入り口から人が入ってきて、何か騒がしくてもその空間を共有して、そこで何か成り立つような事業を、取りあえず色々モデルをつくっていきこうということを始めました。

ますよということをお話しするべきかと思いました。ということで、レビューを含めてお答えさせていただきました。

内山：

ありがとうございます。マイクロクライメイトを考えることの重要性についてご指摘があり、ただの広い芝生ではなくて、何か森みたいなもののイメージに繋がるお話だなと思いました。ありがとうございます。

次に、では小野先生のほうからお願いできますか。

小野：

先ほどちょっとインテグレートバランスというお話をさせていただきました。今、実は私も、資料5では自然換気できないかもしれないと思っていたので、太田先生がお話いただいたことは、全くそのとおりだと思いました。多分、効率といったものをすごく求めていてこんなふう凝縮されているのかなと思います。

と大きな視点における博物館であると私は思っていて、そこを東京大学という日本随一の大学がサポートというか、言ってみれば彼らが所蔵しているものを公開していく。ああいうことぐらいやってほしいなとか。博物館をつくりましょうという具体的な提案をしてるわけではないですが、もしその都市、市役所の中に何かできるんだしたら、東北大学の所蔵品の公開もお願いしたいと思っていました。

手島：

ありがとうございます。杉山先生お願いします。

杉山：

先ほど齊藤さんの話を聞いて思ったのですが、今回のテーマの「都市ビジョンの一翼を担う市役所本庁舎とは何か」という言い回しが何かわかりにくいと思ったので、多分それ言いかえると、「仙台の魅力を増やすためには市役所はどうつくったらいいか」ということだと思いますよね。ですから、今だんだん魅力がなくなってきて、まさに「前泊する気はない」と言われるまちなってしまった状況から、市役所だけでは変わらないけれども、それをきっか

これはメディアテクの事業として、このオープンスクエアをどう使うかということの色々な事業のモデルを行うときは、とりあえず壁は立てないということを繰り返すことによって、ここを使う人たちが徐々にそういう使い方、こういうふうに使おうと何か全然予期しなかったお客さんがふらっと中に入ってきて、おもしろい空間があるなみたいなことがわかってきて、そのことによってこの空間の使い方がまた命を持っていくというようなことがあります。

そういうこととか、例えば7階も、そういう場所で活動するときに、その活動を施設側が提供するワークショップを通じてというよりは、何かいろいろな持ち込まれたものを、どういうふう施設があって、うまく協働していくかみたいなことを考えながらやっていくとか、あるいは空間の使い方に対して、利用する側は施設側にクレームをつける。施設側は、利用者のクレームなのでそれに応えなければいけないという構造の中で運営をしていると、そのクレームを言った人のことについては応えて何か解決していくのだけれども、そのことによっていろいろな機能が閉ざされていくことがあるのです。本当にいろいろな自由な使い方とか、もっと可能性のあることをそこで閉ざしてしまうということが起きて

私の専門分野である、いわゆる空調とか給水、排水、衛生といった分野のことだけ1つとっても、冷温水発生機の仕事率COP 1.0よりヒートポンプの仕事率COP 4.0のほうが良いというのは、いわゆるカタログ値で言えばほんとにそのとおりです。じゃあヒートポンプを使いましょうと言った瞬間から、じゃあ電気はどうするのかとか、また別のエネルギー源の問題が出てきます。あるいは、冷温水配管や冷媒管の最短化ということをやったおりましたが、これもそういう方向に誘導というふうに見てとれないことはない。冷温水配管で最適にバランスをとるには、最短化でやるのではなく、例えばヘッダー配管のように1つのヘッダーから圧力を全部均等にもっていくというのではなく、配管の途中に小さなポンプをつけることによって、小さなポンプを少しずつインバーターで制御すれば、今はヘッダー配管を使わなくても冷温水配管を回すことができるという技術もあります。そういうのがインテグレート技術でありますので、ここに書かれていることは間違いなく、今現在であればこういうものを積み上げれば建築設備とし

Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う「役所市(シティホール)」を考える

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

Table C2

勾当エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う
「役所市(シティホール)」を考える



Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

しまうので、クレームが悪いと言っているわけではないですけども、みんなでクレームを共有して、議論して、その場をどうつくっていくかということもメディアテークの大事な事業にしていこうみたいなことを考えて、そういう活動をまた7階でやろうと。そのときの事業の名前を「カフェクレーム」という名前はどうか、と思ったのですが、それはさすがに実現してないのです。最後に、そういうことを前提にして市役所の低層階で、そこで何か機能を持たせるといことを考えるとしたら、私は、もちろんにぎわいとかいろいろあるかもしれないけれども、市役所がここにある理由とか、そこでやっている市の仕事は一体何のためにやっているのかということがわかる仕組みとか、それは単に市の仕事を紹介するというのではなくて、もうちょっと空間的なシンボリックなものとしてわかるような仕掛けや、だから市役所があるという意味だけではなくて、市民がこの土地に集う意味やその必然性みたいなこと、あるいはこれを失ったら我々はこのまちを見捨てるかもしれないとか、そういう大切なもの、このまちにとって大切なもの、自分たちが大切だと思っているもの、などその場所に行くとか何となく伝わる、何となく感じられるというような、何かそういう仕掛けがあったらいいなという、ちょっとこれは夢

想ですけども、具体的に何かというのはわからないけれども、でも、そういうものがあつたらいいのではないかと思います。

小島：

ありがとうございました。確かに単体というか敷地単位で見た場合に、市役所というのは当然オフィス機能、行政機能ということになってくるのですが、このラウンドテーブルの一つのテーマとして、先ほど渡辺さんからエリアの価値を高めると。岩間さんからも、いわゆる生活・暮らしというのが駅前と違う空間だろうと。そういった空間の中でどう見せていくかということが大事で、別な機能を持ち込む理由というものも明確に、ただあればいいという話ではなく、それでは潰れてしまうと。しっかりとそこを仕掛けていく、仕込んでいくということが必要だろうということだったと思います。

先ほど言った導入機能について言い足りなかったことと、あわせて管理運営についてご意見を賜りたいなと思っております。その際、運営も含めてだと思っておりますけれども、いわゆる回遊性を産むために市役所というのは必要なかという議論もありましたけれど、消費者の視点で見た場合に、そこに何かなければ当然行動し

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

てそれなりの形になると思いますが、これが先ほどどなたかがおっしゃったように、10年後本当にこれでいいのか。ましてや20年後、30年後、80年後、80年後にはもちろん設備は更新されているはずですけども、でも、10年後、20年後の技術で見たら、間違いなくちょっと古いんじゃないのと言われるようなものが積み上げられているように見えます。

ちょっとだけ違う話をさせていただきますと、BCPの観点から市役所、シティホールを見ているということが書かれておりますが、BCPは当然大事です。BCPのために何かを用意しておくというのではなくて、何かがあっても、必ず日常使いのものが翻ってBCPとして緊急時に使えるという考え方があろうかと思えます。

昨年末、オランダへ行ってまいりました。オランダの農業の事例をお話しさせていただきますと、天然ガスを使ってCHPを回して農地に温水を回します。これはよくある話です。CHPですから発電もします。発電で売電もしております。これが農業経営を

助けます。それだけではなく、買電の値段が下がったら売電をやめて、バックアップで持っている普通のガス炊きのボイラーで温水だけ回すというようなことをやっております。つまり、それは、バックアップのボイラーを使って電気を売って経営を助けながら、しかし、電気が安くなったらそれをやめて我々は自活できるよという、常にそういう相対してバランスをとるような考え方を持って農業経営をしています。

さらには、最近大規模集積の農家というか施設園芸が多いのですが、そういうところでは、地下水を掘り、地下水の熱源をもとにして、安定した熱源をもとにして農家の経営を助けています。同じようにガスも使ってCHPを回しているのですが、熱源が余ります。大規模農家が集まってやりますので。余った熱源を有効に使ってもらうために、その農地の一面にGAF Aのどこかのデータセンターを1つ集約して、そこにいわゆるサーバーの冷熱源としてその地下水の熱を使うというようなことをやっています。これも要するに、バックアップを使いながら、自分たちの日常使い

けとして魅力的にしていけるかということを考えていったときに、やはり2つ、ハードの面とソフトの面の課題があると思います。ハードとしては、先程の繰り返しになりますけれども、過去の遺産を食い潰さず追加する心意気で、より杜の都らしい空間にする必要があります。例えば、今回の市役所の敷地の右側1/3か2/5ぐらいはもう緑地にして、勾当台公園や県庁前の緑と一体となったひとつの大きな杜の都のシンボリックなエリアとして作りながら、この緑地と一体となったデザインによる市役所を西側に残った敷地の中につくることができれば、仙台市にとって貴重な杜の都の資産が新しく追加されるとともに、市役所を魅力的にする十分なアプローチを緑地と一体でつくこともできます。杜の都の市役所としては、このくらいの、敷地と緑地を生かすお手本を示す配置を考えていってほしいと思いますね。

ソフトの面では、市役所の低層部に魅力的な展示やイベントがあり、それを見たいがために人が街中に出てくる、といった流れを生み出せるインパクトのあるものがつくれば街も活性化するわけです。ただそれをどうつくっていくのか、先ほど紹介のあった、東大がKITTEでやっているようなものを仙台市でやれといっても、多分なかなか難しい。仙台ができそうな、得意な分野は何

かと言えば、地味ですが、仙台市が今考えていることはこういうことですよ、こういうまちをつくらうと思っていますよ、あるいは今までこうやってきましたよということ、分かりやすく伝えることだと思います。その、わかりやすくする展示の仕方は色々な民間の方の協力を得る必要がありますが、やはりそこから始めるのが正攻法だと思います。

市政情報センターなんて名前ではピンと来ないですが、そこに行くと、今市が何を考えているか、これから10年スパンで何を目標しているか、あるいは何故音楽ホールをつくらうとしているのかなど、様々なことがそこでわかり、意見が言え、その意見が職員や議員にも伝わり、議会で取り上げられることに繋がったりする場所です。そこから、「市役所に行ってみよう」とか「市役所で意見を言ってみよう、やってみよう」という人の流れが生まれ、そこから街も活性化して魅力的になっていくという展開を思い描いています。

手島：

ありがとうございます。確かに、市民協働が仙台市の誇りだと言いつつ、最近ちょっと停滞気味だぞという視点、指摘は今までも

ない。行動した上で、より価値を求めるためにサーチしていく、これが回遊性だ。事業者は、そういった消費者の行動を見据えながら、よりよいサービスを提供するということに努力していく。努力することによって回遊性がまた生まれるという相乗効果だということを誰かが言っていたのを読んだことがありますけれども、そういった視点で市役所というのを捉えた場合に、定禅寺通、市民広場、市庁舎という流れというもの是非常に大事だと思っています。その運営等も、そういったところも含めての管理運営という視点で見た場合に、どういった運営があるべきか、というところに議論を移したいと思います。

その前に、いろいろと市民協働についてお話も出ましたので、前半分についてまとめていただきました遠藤さんから少しコメントいただければと思います。

遠藤：

私からのコメントは、前々回と前回の議論でどんなお話が出ていたのかということ、今回につながるかなと思うものを共有したいなと思います。

にぎわいに直結はしないのですが、間接的に近いかなと思ったの

のものをちゃんと相手にも供給することで地域として成り立つというやり方をやっています。

何を言いたいかというと、市役所の敷地は仙台市のご真ん中です。市役所は非常に有効な建物だし、これからお金をかけていろんなことができます。私から1つだけ提案があるのは、仙台市はガス局を持っていますので、天然ガスをパイプラインと船積みと両方で得られるようになっていきます。天然ガスが枯渇する危険性は非常に小さい。天然ガスというのは、実はマイナス162度で液化して保存していますので、そのマイナス162度というのは、非常に有効な冷熱源ではないかと思えます。それを、例えば、新しい市庁舎の地下に冷熱のタンクとして持っているということであれば、これだけの冷熱源はさまざまなエネルギーのもとになるという考え方ができると思います。それはバックアップにも使えますし、日常使いにも使えます。私たち設備の側から言うと、例えば、そういうような提案を持っています。

が、低層部に市役所機能があるわけですから、市で持っているデータ、大学で持っているデータ、いろいろな機関で持っているデータや情報をきちんとわかりやすく、場合によっては緻密にも見ることができ、そういったオープンデータが活用できる場があり、課題が公開化されていると、それを解決する事業やビジネスが起きてくる、それを何とかしたいと思う人たちが集まってくる。そういったことでのにぎわいと事業づくりとか、政策提言につながったりビジネスになったり。そういう機能や情報がばらばらになっていて、それが無い。そういうものが市庁舎の低層部にあるということが重要ではないかと。だから、それがすぐのにぎわいでないけれども、次の仕事とかにぎわいを生み出す可能性があるのかなというふうに思いました。

先ほど議員さんのお話があったかと思いますが、前回の議論の中では、市庁舎のある意味重要な部分で議会ゾーンというのがあるわけですよ。そこが本当に上層部でいいのか、低層部のほうがいいのではないかというお話とか、議員さんが自分の成果を上げるために、地域の課題を自分のものに抱えてしまうというケースもあるのではないかと。議会がチーム議会として地域の課題をきちんと受けとめられるような、いわゆる議会事務局がきちんとコー

内山：

エネルギーをどう使うかというお話になってきましたので、ここでちょっと順番を変えて、武山先生から、先ほどの続きのお話で今の流れを受けてコメントをいただけたらと思います。

武山：

平野さんの話がとてもよかったです。僕も同じようなことを考えていました。100万都市仙台の市庁舎がいかに環境性能のいい市庁舎をつくっても、市民のものにはならないですよ。だから、つくるプロセスとつくった後、それがどういう景色を見せるかということがすごく大切です。世界遺産のバイカル湖ですが、僕らが必要な世界の中水の20%はここにあります。つまり、地球は水の星だと言われていますが、北極と南極には氷の状態だし、海の水は塩水です。年間降水量を、意図を持って並べて背比べさせました。日本はたくさん雨が降ります。アマゾンのある熱帯雨林のブラジルよりも多いです。これを人口1人当たりでコマ割りし

Table A2

周辺エリアのビジョンの「翼を担う」を考える
「役所市（シティホール）」を考える

いくつかあります。本当にそのとおりなのかもしれないです。もうひとつは、杜の都、前回の議論でもちょっと出たのですが、勾当台公園と比べて定禅寺通あるいは市民広場は、何がすばらしいかという話が出ていたのですが、それは多分、その空間が活用と一体になっているということが重要で、人々が本当にこれを使い倒しているというか、ただの単なる杜じゃないことがポイントだということを誰かが言っていました。それを、これだけうまくバランスよくやっているのは、なかなか他の場所ではないのだろうなと。それがおそらく、仙台市の誇りたるゆえんかなと思いました。徳永先生、如何でしょうか。

徳永：
少し話が交通寄りになってきましたが、先ほど仙台市全体というところに広がってしまったのですが、ここで言っている周辺エリアというのがどの範囲を想定しているのかなというのがいまひとつよくわからないというところもあります。それともうひとつは、その周辺エリアとの活動をどう結び付けるかというときに、何かものすごく活動的な人、何でも顔を突っ込むというか、そういう

人を想定した中でのネットワークづくりを考えていませんかねというところがちょっと気になります。残念ながら、仙台市民というのはそんなに活動的ではないですよ。だいたいまちに買い物に来るといっても、お店の近くの駐車場に停めて、そこで用事が終わればそのまま帰ってしまっています。そのとき「別のところでこんなことをやっているよ」という情報を得たとしても、じゃあそっちにも行ってみようかという形で、そういう活動をやっている人って意外と少ないということも踏まえた上で、そういう人たちをどう巻き込んでいくのかということとセットで考えていかないといけないのかなと思っています。そのときに、やはり移動に対する抵抗ですよ。先ほどの定禅寺から榴岡までということまでいかななくても、例えばそういう市民活動をやっている人でも、市役所付近で何かやっていると、アエルでもちょっと関心あることがやっているとしても、そこまで行くのはちょっと遠いよねということで、ちょっと踏みとどまってしまうんじゃないかというところがあります。そもそもそういう情報がなかなか入ってこないという問題もありますが、それも含めて情報と、その行きやすさをどう担保するのかということと、そこに行くバスとか交通手段があればいいといっても、残念ながら

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

ディネーターになって全市的な課題を集める。区の課題は区で集めますし、地域の課題の中には自分で解決する人は自分たちで解決すると。その中で全市的な政策横断型の、テーマ横断型のものを持ってくる場所がわからないよねと。だから、チーム議会として、窓口があったほうがいいのではないかなというような議論もありました。前半のテーブルで、今は1年後、3年後、5年後どんな社会になっているかというのも読めない時代であるので、そこを地域課題や協働や公共のこと、これからの仙台の都市経営のことも考えると、柔軟性のある場所、機能的で可変可能でフレキシブルに使えるような、そういう場所が求められるのではないかと。そういうことで、いろいろなニーズに合わせて、あと時代や社会変化に合わせて使える場所になるのではないかなというようなご意見が出ていました。

小島：
ありがとうございます。もう一つ、前半の参加者の中から、いわゆる市民協働という言葉でいくと、例えば障害者であったとしても子供とかがかかわれないと。そういう議論をしていくと、市

役所というのは我々の関係ない世界だというふうになってしまう、でも、そうではないと。非常に多様化した課題に対して取り組むという姿勢は大事だし、市職員もそのように育成しなくてはいけない。けども、そこに行くことによって何か楽しいとか、何かがあるという期待値があると。そういったことを踏まえたときに、いわゆる高邁な議論だけをする場ではないと。ちょっと行って相談できる雰囲気とか、あるいはそこでくつろげる場とか、そういったことがないと、市民の市役所に期待する、市民が期待する場とはなかなかなれないと思います。いわゆる従来型の行政機能だけになってしまうという意見もございました。そういったご意見等も踏まえながら、運営って非常に大事なのだと思いますが、先ほどの導入機能についてはまだ言い足りないところも含めて、運営管理について皆様方からまたご意見いただきたいと思います。

洞口：
いろいろ話を聞いていて思ったのは、モーツァルトさんの話を聞いて、低層部の運営に行政が仕様を決めて行政が評価して、どのレストランを入れるとか、どの飲食店を入れるようなしよぼい話になってはだめなんだろうとは思いますがね。グサいですよ。

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

てみましたが、本当に悲惨です。この日本が飲める水でうんちとおしっこを流しているというのは、もう本当に信じられないです。要するに、水が足りない。仮想水という概念があるのですが、足りない水はどっかから手に入れています。アメリカから大豆、トウモロコシ、牛、ヨーロッパから牛乳とか、そうしたもので仮想水を輸入しています。牛はベジタリアンですから草がないとお肉ができません。草は雨が降らないと生育できない。つまりお肉と一緒に海の向こうに降った雨も輸入しているという見方があります。その数字を積み上げると、灌漑用水は、使っている分よりも輸入しているほうが多いという話になります。それで、僕も四ツ谷用水の絵を用意してきました。やっぱり仙台の水、四ツ谷用水、これを景色にする。それが市庁舎プロジェクトであるべきだと僕は思います。体験型の環境学習施設として市庁舎が機能する。そのことによって市民が目覚め、まちが変わる。そういうきっかけになるべきで、誰がどうつくるかはこれからですけれども、そのためにいろんな専門家の知識を投入していく。

ちょっと危機感があるのは、一生懸命市庁舎の心配をしているお役所の人たちが、いろんなところに行っているんな勉強をして、要素技術を集めてきて、これが全て設計条件になったら、僕はやっぱりやり過ぎだと思います。それよりはもうちょっと大きな、市民の要望として四ツ谷用水の記憶をよみがえらせるとか。あと、屋敷林ですよ。江戸は火消しがいましたけど、仙台はいなかったの、距離をとって燃えない木を植えていく。でも、今、多分無理です。仙台の駐車場をプロットした地図を見たことがあるのですが、駐車場だらけですよ。あそこを緑化すべきだと思います。いかがでしょうか。

内山：
四ツ谷用水のお話になったので、江成先生、コメントいかがですか。

江成：
実は四ツ谷用水については、村上さんと一緒に連絡会をつくって

ら仙台市民はそんなに乗り物を使ってくれないので、歩いていくということを基本的に移動するものすごい距離抵抗があるというところ。それを打破するためには、たとえばヨーロッパみたいに共通乗車券とか、2時間乗り放題であるとか、そういうような運賃システムも含めた議論までしていかないと、なかなか仙台市民を活動的にはできないのではないかと考えています。

手島：
ありがとうございます。どうでしょう、どなたかまた。はい。

山田：
今までの議論の中で、市民という言葉がずっと使われていますが、仙台のその中心部、都心というのが、仙台の都心だけではなく、東北をターゲットにしたような都心という機能も当然あるだろうと思いますし、それから市民でない人、準市民と言ったらいいのかわからないですが、いろいろ観光客だとか仕事で来られる方は当然ですけれども、例えば学生のように、学生時代だけ仙台にいて、また外に出ていくとか、単身赴任で来て、住民票は仙台にしていらないというような人たちもたくさんいて、そういう人たちが実は

それは何が問題かという、公民連携と言いながら公共事業になってしまっているということなんですよ。まさに行政主導の公民連携と言われるもので、だめな公民連携だということは専門の人だったらすぐすぐわかってしまう話であって、指定管理も含めて全て行政がこういうことをやって、「おまえら、こういうふうによれよ」という主従関係のもとやっているというものになっています。

カフェ運営とは、民間事業であって、本当はお客さんにどれだけおいしいコーヒーを飲んでもらうということの事業なはずなのに、行政の事業に成り下がってしまうということが一番の課題。例えば、行政が庁舎の建てかえしたときに、そもそもカフェを入れることが正しいのかということもありますが、そもそも、それを行政が決めること自体も僕は間違っていると思うんですけれども、ここに書いてある食堂、カフェ、売店が入るとかイベントギャラリーが入るとか自体を、行政が決めるべきものではなく、民間事業がそこにマーケット価値があると思ってやるのであればいいと思うんですけれども、民間がマーケット価値が作り出せないのであればやる話ではないし、そして、そのマーケット価値をまずつくれるのは行政ではない。それは行政の思い上がりとい

いろいろと取り組みをしている段階ではあります。四ツ谷用水の機能ということで、ちょっとお話も出ましたけれども、杜の都を形づくった要素の1つが四ツ谷用水であると思います。四ツ谷用水は地下水を供給しました。昔の用水ですから、今のようにコンクリートの3面張りということではないですから、地下に結構浸透して、それが井戸水になって、あるいは緑の水になって、それで杜の都を形成できたと言われてます。

その仙台の地下水の条件、飲み水はそのころは井戸水だったのですが、その井戸水も比較的浅いところからくみ上げられた。それから、市内には割と湧き水が多く存在していたということもわかっています。それは、どうも仙台の地下の地盤構造が関係しているということで、背斜軸が幾つかあって、そここのところ地下に水がためられて、そこから湧き水があったということも、水の文化史研究会の柴田さんの研究でわかってきつつあります。

そういうことから、実は先ほども指摘があった資料5のところの本庁舎の目指す環境性能で幾つか書かれているのですが、水の

まちを支えているのかなという気がするのです。そういう人たちにとって仙台の魅力に対するその関心の高いものって何だろうなと思っていて、逆に仙台市民って、比較的日常ずっと長く住んでいると当たり前みたいになってくるのですが、来街者や市外から移住した人たちの視線がどういうものかというのを、ちゃんと発掘というかデータを調べて、それをよりブラッシュアップすることが大事ななと思っています。

ちょうど正面に天野さんがいるので、昔のことを思い出したのですが、このメディアテークが完成した時にフランスの国営放送に取り上げられて、フランスから仙台のまちなかの建築を見たいという人たちがいるので、たしかジェットロカ何かですね、見学できるマップをつくったらどうかという話があったのですが、いろいろな捉え方をされる資源が本当はいくつかあるだろうなと思っていて、新しい市役所そのものが訪問先になるほか、歴史巡りだとか寺巡りもあるでしょうし、そういうところをどうやって発掘して、来た人にプレゼンできるかなみたいな、そんな機能もあってもいいかなと思いました。

手島：

うか、行政の勘違いなのかなと思います。

なので、僕が重要なのは、「行政が考えなければいけないところ」と、民間であるエージェントだったり、行政の代理人であるまさに榊原さんなんかその代理人たる仕事を、今、荒井東とかの話とかでもまさにしていってらっしゃると思うので、そこに通じる部分はあると思うんですけれども、公と民の役割分担がまずされた上で何をやるかという話になるのかなと思うんですけれども、まず、行政がやらなければいけないのは、ここでどう地域経営課題があって何を解決したいのか、庁舎建替えるのに、そのエリアの何を变えたいかというのは、明確なビジョンをつくる必要があるなと思っていて、それは恐らく現在、基本計画でつくっているような、ここにこんな配置にするとか、そういう話では恐らくないと思うんですね。

例えば仙台市の問題として子育てが問題あるとして、子育てという切り口で民間に何かそこでやってほしいだとか、起業で何かしたいとか、もうちょっと漠としたようなビジョンを行政がつくった上で、行政の代理人であるPPPのエージェントに対して委ねていく。委ねられたエージェントは、そこで本当に事業として成り立つマーケットをつくっていくわけですよ。そこにカフェが

問題については、衛生設備のところ節水型の衛生器具を採用する。それから、洗浄水は中水、井戸水などを想定するということが書かれています。井戸水を使ったら、必ずその井戸水を涵養するところまで考えないといかんと思います。それに加えて、さっきも私が申し上げた雨水をフラッシュ用水に使うことを考えていく。そして、その雨水は、防災のためにもなるし、それから環境用水として蒸発散が行われることによって気候緩和にも繋がるというふうな、そういう自然水をうまく利用していくということを考える必要があります。

その1つとして、昔あった四ツ谷用水を、全部復元するわけにいかないの、復元できるところはぜひ水面を地表に出すということを考える必要があるだろうと思います。先ほど村上さんが指摘したような、市役所の今の敷地のところでその可能性があるのであれば、ぜひそれをやって水面が見えるような形にする。その水で市役所の中に昔の屋敷林を想定できるような、そういうものを設置して、そこを環境学習の場として役立てるというアイデア

Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う「役所市(シティホール)」を考える

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

Table C2

勾当エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

Table A2

周辺エリアのビジョンの「翼を担う」を考える
「役所市(シティホール)」

ありがとうございます。どうでしょう、姥浦先生お願いします。

姥浦：
理想としては、多分市役所自体がその海外からの目的地になるのが理想だと思うのですが、市役所自体というよりは、先ほどから出ている歩行者なり歩く人なりという話で、ちょっと周りの話になってしまいますけれども、個人的には市庁舎の中でもいいですし、それからその周りでもいいのですが、私は歩くよりは、どちらかという座って酒を飲むほうが好きですけども、理想はやはり昼間からビールを飲んだりとかコーヒー飲んだりとかという、何かそういうことができる場所があるといいなと思っています。基本的に、カフェというのは屋内にありますので、何かそこの中ではなくて外の空気を吸いながら、今は昔と違って車走っていてもそんなに汚くありませんので、そういうのを見ながらのんびりできるような、それが多分成熟時代のまちであり、仙台の駅前ともちょっと違う雰囲気を出す要素のひとつなのかなと思っています。そういう中で、ちょっとディテールの話になりますが、重要だと思っているのは、やはり一番町のほうからずっと来て、それで市役所までを、どこかにも書いてありましたが、

どうつなげていくのかといったときに、表小路も非常に重要だと思えますが、それは言うまでもないですが。もうひとつ重要だと思っているのは、一番町を出てすぐのところですよ。あそこが今車のたまり場になっていて、あそこを避けて歩行者は行くわけですよ。だから、途中まで市役所が見えますが、市役所が見えなくなって横断歩道を渡るという、あのおかしな状況をまずは何とかしないとイケないと思っています。最低限その歩行者の道路というか、その道路を、それから多分同じようにパークビルディングですか、あの前も同じようなことができると思うのですが、そのあたりは交通をどうするというあたりと非常にリンクしてくる話だと思いますが、そういう自動車も昔は、最初に申し上げましたとおり、どんどん増えていく中でどう処理していくのかという話でしたけれども、これからそのような成長も見込めない中で、もしくは逆に公共交通にどう乗ってもらうのかというマネジメントも含めて考えると、あそこの空間をまずどうするのかということもひとつ目と、それからもうひとつ恐らく重要になってくるのが、その隣のビルですよ。あれをどう考えるのかということも、やっぱり時間的にはかなり同じような時間で考えていく必要があると思っています、某新聞に出ましたけれども、あそこ

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

必要だとかレストランが必要だという事業計画になれば、それはカフェとかモーツァルトさんに、「ここへ入るには幾ら幾らの家賃ぐらいですけども、どうですか」というお話で決めていけばいい話で、その部分を現在は行政がやっているいて、さらには、そこに入るコンテンツをそもそも行政のプロポーザルとかでやってしまうと、変なところが入ってきたりとか好ましくないとか、市民が本当に求めているものが入ってこないみたいな話になってきてしまうのかなと思うので、むしろ岩間さんが言った暮らしに近い感覚とかが大事で、その暮らしに近い感覚みたいなものをどのようにマーケットにしていくかということも、考えるのがまさに民間なのかなと思います。なので、多分、公民の役割分担みたいなものがされていけば、まさに行政主導みたいなところから抜け出して、先ほどの仕様主義、行政主導の仕様でがちがちみたいなものから脱していけるのかなと思いました。

の意見を言おうというときに、行政が管理運営したほうがいいのか、民間がしたほうがいいのかというのを確認したかったのですよ。そういう視点ではっきりと物を言ってもらっても構わないかなと思っていますので、言い足りなければもっと言ってもいいですし、ほかの方に委ねても構いません。

小島：
ありがとうございます。洞口さんは行政マンでもあるので、若干オブラートに包んだ言い方をしているかもしれません。先ほど前半では、市役所反対とかというのではなくて、提言しよう、我々

洞口：
基本、僕は民間運営だと思いますし、そもそも役所を建てるのも、行政の仕様発注で庁舎を建てるべきではないと思っています、基本は性能発注でPPPエージェントがSPCを設立してちゃんと建てて、行政がリースして長期リースで床を借りるぐらいのほうで軽くしたほうが良いと思っています。そうすれば、別にこれから人口が減って役所の職員が減少し、さらにAi化も進んで、役所の職員がそもそもAiに切りかわったりすることで床が余ったりすれば、そこはまた床は別の民間の例えば企業誘致とかしながらそこに誰か、どこか東京から引っ張ってくるとか、それは下の低層部の何か相性の良いコンテンツ力の高いものを引っ張ってくるとか、そういうやり方でやれば良いと思うので、さらにエリアマネジメントも組み込むべきで、エリアとしてのマーケットをつくるとい

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

があってもいいのではないかなと感じました。

最後に一言。今日の議論を聞いて、環境ということで市役所の建て替えを考えたときに、仙台はやっぱり杜の都というイメージがものすごく強い。外からも杜の都という話が結構ありますし、そういう意味では杜の都仙台を彷彿させるような、あるいは、それを思い起こさせるような市役所にしてもらいたい。それが、環境というものを考えたときの本庁舎あるいは市役所の一番のポイントではないかなということを感じました。

が多くて非常に嬉しいです。別に申し合わせとかはしてないのですが。何か四ツ谷用水に対しての関心が高くてありがたいなと思います。

内山：
ありがとうございます。
江成先生から四ツ谷用水に関連してコメントありましたけど、村上さんから補足があればお願いします。

繰り返しになるのですが、やはり杜の都の象徴というのは、まず屋敷林から始まったと思います。やはり空襲で焼け野原になって、それで都市計画道路ということで拡幅してそこにケヤキ並木を植えて、今これだけ育っているわけですけども、ケヤキ並木のケヤキ側からすれば、正直こういう環境というのは人工的でむしろ迷惑な状態だと思います。ですので、逆に何か自然があふれるみたいな感じで思われるかもしれないのですが、やはり山に生えているのが一番自然な形だと思うので木にとってみればえらい迷惑です。

村上：
四ツ谷用水のことにに関して、何かすごく共感していただける意見

であれば、いかに今のケヤキに対して負担のかからないようなことを、もちろん市役所のこれからの構想に含めていくか。例えば道路をもう少し透水性のある自然に近いようなものにする。コンクリートやアスファルトで覆うのではなくて、もっと自然と本当

で建て替えるのか、それともちょっとずれるのか、全然違うところで建て替えてもらうのか、その場合にどのようにするのかというところも含めて、市役所ともかなり、それから広場ともかなりリンクするような話だと思っています。ですからあそこの空間をどうするのかというところが非常に市庁舎とそれから市民広場だけじゃなくて、こっちの定禅寺までつなぐという、まさに庁舎に行くまでに何か関所が2つぐらいあるようなイメージなので、そこを多分ハードとしては何とか抜かないと、どうしようもないのかなという気がしています。ちょっとディテールに入りました。

手島：
ありがとうございます。さて、どうでしょう。では、末さんお願いします。

末：
ディテール続きでいきますが、姥浦先生が言われているように、一番町通りから市民広場をつなぐ部分と、市民広場と市庁舎の敷地をつなぐ部分は、どうつなぐのかについて交通計画をしっかりとやらないといけない話で、これは市庁舎の設計業務の役割ではな

う話になれば、エージェントに対して、周辺の不動産オーナーたちも出資して、周りのエリアマネジメント的に何かやりたいとか、公園の管理をもっとさらに市民広場とか、その管理まで一緒にやっていくみたいな話もやっていけばいいのかなと思うので、民間が入るともうちょっと、庁舎建てかえだけではなくて、もっと大きいエリアとしてのビジネスマーケットをつくれるのではないかなと思います。

小島：
ありがとうございました。

豊島：
僕も民間主導でやっていくことには大いに賛成でして、この論点、議論の流れにもちょっと違和感があって、運営手法を考えるとというのが最初にあるべきだと思います。無責任に機能だけを語って、本当に要るのか要らないのかということろを機能として当て込んでしまうと、やはり失敗で終わって負の遺産と言われてしまうかもしれないところがあるので、本当に担い手がいるのか、その担い手がその機能を果たせるのか、それが公共性を持った事業とし

てに調和が図れるようなものにしていくということを考えていかないといけないと思います。その上で、やはり屋敷林構想というのをこれからどうやって、未来に向けてどうやって取り組んだらいいかということを考えていけないと思っています。

それから、やはり四ツ谷用水のところでは、雨水や地下水はもうフルに使って、そしてあとは災害時にはそれを給水する。震災のときは広瀬川に水をくみに行く方もおられたということなので、四ツ谷用水は今コンクリートで塞がれて県の工業用水として使われていますけれども、コンクリートもちょっと壊して開けさせてくれ、水を使わせてくれという話もあったぐらいですので、緊急時に濾過してそれを給水できるようにするとか、そういうこともできるのかなと思います。

あと、市役所だけ新しくなって、それでそこにいろんなコンセプトが入っても、やはり市役所だけではまちっていうのは何も始まらないので、何か理念というか、仙台が何で仙台であるのかという理念がしっかり発信できるような拠点でないといけないのかな

い。ですから、それはそれで別に検討しないといけないもので、かつ市庁舎の設計と同時並行でやらないといけないものなので、そういった動きも仙台市役所の中でどこかがリードする形をとっていただく必要があると思っており、そこはぜひ期待したいところです。

表小路にしても、一番町通りから市民広場をつなぐ南北の通りにしても、交通量としてもネットワーク上の重要度としても、車に対してそんなに広い空間を配分しておく必要がない道路なので、表小路は道路廃止するなり歩行者専用道路にするなりということはやるべきところ、検討すべきところだと思いますし、一番町通りから市民広場をつなぐ部分に関しては、半分車道を潰して一方通行にして、歩行者空間の配分量を増やすということも考えられると思います。

また、この市庁舎そのものに対して車でどうアクセスするのかということも考えておかないといけない話で、これは完全に交通計画と市庁舎の設計とがリンクしないといけないところですが、今のところの基本計画のゾーニングでは、北側に駐車場が配置されているという考え方で、南側に車寄せがあるという形になっている。これはしかし、市民広場側が歩行者空間だから、車寄せをそっ

て、公共事業としてかもしれないし民間事業かもしれないところでやっていけるのかというのは、相互にフィードバックしながらやっていかなければいけないと思っています。

先ほどのお話で、公共の場のカフェのプロポーザルに違和感がある。民間はやりたいことがいっぱいあって、それが公共性を持って課題を解決できることも大いにある中で、縛られてしまうというのはマイナスですし、隣に天野さんいるのでちょっと怒られてしまうかもしれないですけども、ライブラリーパークもほぼ委託業務の中であれだけの見せ方をしつつも、やらなければいけないことが余りにも多過ぎ、今までの観光も発信しなければいけない部分があったので、コンセプトを遂行し切れなかった部分が結構あって、大変でしたねという話で終わってしまうかもしれないのですが、その個人的な経験からも、ある種自由にできる環境整備というのはすごく大事なかなと思います。

小島：
ありがとうございます。庁舎を民間が運営するという、自主運営というのですかね、全て行政が民間に委ねると、民間が責任を持ってそれを運営するという、恐らく市役所本庁舎の建てかえ、

と思います。もっと言えば、時間軸というところでは、まさに仙台がまだまちができる前の荒れ地で、さらに広瀬川すらまだ形成されないような時代からですかね。そこからさらに政宗公が「千代とかぎらずせんだいのまつ」というふうに言っているように、もう千年後とか千年に限らず、さらにもっと先まで見えるような、それぐらいのことができるぐらいのことを市役所から発信していただければいいのではないかと思います。何か1つのそういうスペースを設けてそこに仙台の今まであるいはこれからも発信できるような、そういう拠点もあったほうがいいのかなと思います。

内山：
ありがとうございます。屋敷林構想というのはやっぱり、先ほど平野先生がこれは戦災復興で整備されたものだというお話をされていましたが、これは非常に都市的な緑だと思うのですが、さらにその次の時代の2020年の森っていうのはもっと土があるというようなことに繋がるようなお話かなと思いました。それから、

Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う「役所市(シティホール)」を考える

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

Table A2

周辺エリアのビジョンの「翼を担う」を考えると「役所市（シティホール）」

ちに持ってくるのはあまり得策ではないと思っていて、完全にその北側に車両関係の動線を全部集約するという形のほうが、交通処理上は有利になるし、敷地の有効活用もできるだろうと思います。ただ、その辺があまりこれまでの検討委員会の中の資料では出ていない、検討されているかどうかがよくわからない状態だったので、交通処理の部分に関しても、別途検討をしていただくほうがいいと思っております。

手島：

ありがとうございます。じゃあ、どうぞ。

徳永：

今のお話に付け加えてですが、地上部分もそうですけれども、やはり地下鉄との関係ですね、それはしっかり考えていただきたいなと思っています。残念ながらその市役所というのは、駅からにしても一旦離れて、それからまた中心部というのかな、そのエリアのほうに向かっていくという形になるので、どうしても寄り道しなきゃいけないという感覚になってしまいます。ですから、その寄り道感をなくすということも考えていただきたい。建物と交

通は別のところで考えるというのがこれまでのやり方で、建物が建ってから、後から交通の取り回しを考えていって、結局何か使えづらいねという話になりがちなので、そこはぜひしっかり考えてもらいたい。

さらに言えば、バスもかなり拠点としての機能を持っているので、現在のあのバス停の環境の悪さですね、あれもぜひ、できれば建物の中に待合空間というものをしっかりつくってあげるとか、そういうこともぜひ考えていただきたいなというところです。どういう人がどういう経路を取って行動されているのか、さらに動くところだけじゃなくて、先ほど姥浦さんが言ったように、とまって過ごす場所とか、車の駐車場問題もそうですが、どうもその「停まる」ということに対して、（自己反省でもありますが）これまでの交通計画はあまり重視していないのです。どこからどこに運ばばそれで終わりという感じになるのですが、実際は「停まっている車」をどうしなきゃいけないかという問題もあれば、それから「乗り物に乗るまでの待つ時間」というものをどうするのかというようなことも含めて、その停まっているところをもう少し丁寧に計画してあげたらいいのかなと思っています。

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考えると

市役所の運営として、全国的に例が、洞口さんあるのでしょうか。紫波町は別としてですが。

洞口：

あるはあると思うのですが、まだ庁舎でやっているのはないですよ。庁舎建てかえを受ける、PFIとかのサービス購入型みたいなやつで、割賦払い式みたいなモデルはありますが、ちゃんとしたPPPのモデルはないので、ほんと日本初のPPPに挑んでいるだろうなと僕は解釈しております。

小島：

わかりました。洞口さん言ったのは恐らく、市庁舎全体をPPPということを念頭に置いているのでしょうかけれども、きょうのテーマは低層部ということですので、置き換えたいと思います。

洞口：

そこの低層部に関するマネジメント、プロデュースに関しても、どうなのかわからないですけど、高いフィーを払って、きちんと高い水準でできる人材に対して、人材を置いてクオリティーを

担保していくことが大事だし、多分責任も大にあると思うので、そこに関してきちんと対価を払ってマネジメントしていくことが大事かなと思います。

小島：

ありがとうございました。よろしく申し上げます。

善積：

ちょっと論点からずれてしまうかもしれないのですが、にぎわいをつくるためにいろいろな取り組みが今の話の中で出されていますけれど、仙台というまちというのは今凄く発展していて、いろいろな新しい施設もできて、そこに新しいもの好きの仙台市の人たちがみんな集まってにぎわっている。果たしてそれがいつまで続くのかという問題も多分この先たくさん出てくる中で、一市民として、僕この庁舎を「あっ、建てかえるんだ」って純粋に、すごく根本的に思ってしまった、「えっ、建物を壊しちゃうの」みたいな感じです。

というのも、僕も全然詳しくないのですが、海外の話でスペインのパレンシアの庁舎は、もうそのままの、現在活動しているのか、

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考えると

先ほど太田先生がおっしゃったマイクロクライメイトをつくることいったときに、やっぱり土の状態というのも結構重要なのかと思ひまして、非常に関係があるなと思いました。

エネルギーをどう使うかという話から、BCPを普段使いで日常から何か使っていこうというお話ですが、先ほど佐藤先生からいろんな技術を融合させて防災をというお話もありましたけど、それについて何かコメントをいただけないでしょうか。

佐藤：

今日申し上げたいなと思ったことは、先ほどから、まず長谷川先生ですか、庁舎を子供たちの環境学習の場というお話があって、武山先生も江成先生も関連したお話があったと思います。私も申し上げようと思っていました。

要するに、環境配慮のさまざまな、いろんな仕掛けやコンセプトが具体化されたものを、子供たちが理解できるように見える化してほしいという話をさせていたどうかと思っておりました。

前回、前々回のラウンドテーブルでも、それが防災の側面から構造で免震でも制震でもいろんな要素技術が実装されたものを、子供たちが防災の側面から見学できるように市庁舎を学びの素材にしてほしいという話を前もさせてもらったのですが、全く環境配慮についても同じだなと思っています。ですから、先ほど平野先生からもお話がありましたけど、市長が自慢できる市役所ではなくて、やっぱり子供たちが自慢できる市庁舎になってくれるといかなと思っています。

内山：

ありがとうございます。では、エネルギーの普段使いというところで、田路先生から少しコメントをいただけたらと思います。

田路：

環境、お金をかければ何でもできる時代にはなっているという前提ですが、さまざまなすばらしい設備はいっぱいあるので、そこ

手島：

ありがとうございます。おそらく、交通はこれから全く変わってくると思います、5年、10年、20年経つと。そのときに、全部予測するのは無理だと思います。ただ、今から見てここからこれぐらいの振れ幅で、まあ変更することを想定していいだろうということも明言しておく、多分変更できますよね。それを明言せずに整備すると、せっかくつくったのだから50年はもたせましようというような話になるので、もし我々の今の知恵で想像つくところがあるのであれば、これは20年後に見直しますよということをはっきり言って整備するというのもひとつの手かなと思っています。そういったことにも地域の専門家が協力してやれば、いい計画になるのではないかなと思っていますけれども、さて皆さんどうでしょう。天野さんどうですか、何かお願いします。

天野：

市役所とそれから市役所の近辺の話に限ってお話しますと、まずひとつはお題であった「10年後、20年後どうなっているのだろう」ということについてですが、私の今やっている仕事の中だと、

中は機能しているのですかね。でも、そのままの形で残っていて、そこに別に理由がなくても行くのではないですか。その絵はがきも売っています。これも失礼な話になるのですが、今の庁舎が絵はがきになって買う人はいるかといったら、多分そんなことはないと思うのです。

これも話が大きくなってしまうと思うのですが、フランスの大聖堂が燃えてしまったと、ニュースを見たときに、その燃えている姿を見て泣いている小さい子供がたくさんいました。何かそれってすごいことだと思って、その大聖堂に育てられて、代々もうおじいちゃんの代からお母さんの代、自分の代、その燃えている姿を見て泣いている光景を見て、それだけ歴史的な建造物の重要性というのが、あれだけ世界規模でニュースになっているというのが物すごいことだと思っています。

僕も幼いころその大聖堂に行ったことがあるのですが、幼いながらも居心地がいいというか、そこに歴史があって、そこでしか味わえない空気感、何かそこに行く理由というか、そういう本当に根本的な話ですけれども、集まることに、理由なんて要らないのかなと。でも、そこに人が集うことがごく自然なことで、その街で育っていることがすごく素敵だなと私は思っています。

で何かやっぱりお金をかけない工夫をしてみてもどうでしょうか。僕自身も、そういう意味では、いっぱいお金を使ってモデルシステムはいっぱいつくらせていただいて、結局普及しないのがっかりしました。

だから、やっぱり真似してもらえ、普及させられるような市庁舎。緑を植えたり、何か景観を良くしたりというのは結構真似できるじゃないですか。それから、お金かければBCP対応は幾らだってできるのですが、その割にあんまり意味がないかなと思います。確かに建物に対するレギュレーションや国の環境規制もありますから、その部分はやらざるを得ない。それ以上のことをやると、費用対効果はよくないです。だから、それよりも先ほど言ったように、ここの仙台市に少しお金のかからない普及させられるような知恵を取り入れると、小さくてもみんながちょっとずつできるかなと思います。それから、仙台市、市庁舎が全てのBCP対応をする必要はなくて、仙台市全体が小さなBCP対応するような仕組みを勉強できるとか。何かそういうようなことを市役

やはり「多文化共生」の部分が大きくなるだろうと思います。つまり、外国人が多くなってくだろうということで、実は、多文化共生を進めるための困り事相談みたいなことを30年ぐらい前からやっているわけですけれども、30年前は留学生の相談でした。留学生からのさまざまな相談を受ける。しかし今はどんどん変遷していて、留学生の相談というのはもう東北大学さんがしっかりやるようになったので、留学生が相談には来なくて、住民としての外国人の相談が増えているという状況です。これは今後もっともっと増えていこう、20年後はもっと増えるだろうと思います。そうすると、例えばダイバーシティということかもしれませんが、そういう「多様な人が行き交う」という見せ方をどういうふうに市役所がするかということはあるだろうなと思います。それで、言ってみれば「多文化のフューチャーセンター」みたいなものということになるのですが、そこでちょっとセルフプレストをすると、市役所は区役所じゃなく本庁舎、ヘッドクォーターの役割ということになるので、ではどんな人が来るかなと、一般市民は来ないかなと考えてみると、我々は意外に小学生、中学生の社会学習の受け入れはやっているのです、各課で。例えば、私のところだと観光はどうなのかという学習をしたい子ども、環境

Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う「役所市(シティホール)」を考える

先ほど佐藤さんからメディアテークの話をいろいろ伺って、僕も幼いころからメディアテークで育って、小学校の高学年のときアニオタで全然友達がいなくて、ランドセルを背負ったままメディアテークに行って、7階で毎日エヴァンゲリオンを見に行くという。そういうこともあって、大学生になって写真部だったのですが、写真部でこのギャラリーを使わせていただいて、今、大人になってこうやってこの場でセミナーに参加させていただいて、ずっとこの場所で育てられていて、すごい愛着があるのです。しかし大変失礼なのですが、すごいこの場所は昔から代々歴史がある建物かといったらそうでもない。

幼いころに父親にアメリカに連れていってもらったときに、MoMA(ニューヨーク近代美術館)にメディアテークの建造物の模型があったときに、「これメディアテークだよ」って。すごく驚いたのです。幼いながら。「何で家の近くにあるメディアテークがここにあるの」ってというような。でも、それって、この圧倒的な建造物の破壊力というか、先ほどちょっと小耳に挟んだ小野田教授の話で、少しやり過ぎたプロジェクトで批判が多かったという話も聞けけれども、でも今こうやって育って人が集まっている場所をつくれているというのがすごい、ほんとそういうことだな

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

所で発信する。それが新しい仙台モデルみたいなものになればいいのかなと個人的には思います。

それから、抜けている議論が1つあるのは、空調で湿度コントロールはやっぱりちょっと考えてもらいたいなと思っています。デシカント空調というのもあるけど、僕も入れようと思ったのですが、はっきり言って費用対効果は悪いですよ。僕、意外と物を燃やすのが好きで、バイオマス燃やして湿度コントロールをしてはどうでしょうか。CO₂は出ますけど。湿度はやっぱりバイオマスが一番暖かいし、体感できます。だから、僕は、エコラボつくるときも学科の新棟をつくるときも建物の中に薪ストーブを入れたかったです。すると、CO₂が出る、危ないといろいろ怒られました。それから、水についても、環境科学研究科のエコラボをつくるときに雨水を周りにためたいと言った時は、反対されました。どういう理由で反対されたかということ、ボウフラがわくなど、色々なこと言われました。実際、水が周りがあると、雰囲気がいいではないですか。景観もすごくいいと思います。ボウフラ対策だった

Table C2

勾当エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

Table A2

周辺エリアのビジョンの「翼を担う
「役所市(シティホール)」を考える

局だったら環境の学習をしたいと、いろいろあるわけですね。先ほど佐藤さんのほうから話があった「シティギャラリー」みたいなまちづくりの学習というのは、なかなかないものだなと思いました。博物館に絵図があって、江戸時代の仙台の町割とかの勉強はできるけれども、現代の町割を勉強するところはないなど。例えば、そういうまちづくりにコミットする市民を育てるといっては上から目線になりますが、そういうことを考えるのであれば、もしかしたら小学生とか中学生を受け入れるシティギャラリーみたいなものというは大いに可能性があるのではないかと思います。

それから、今度は周辺の話ですけれども、私はヤン・ゲールが大好きで、もうほとんど宗教のように信じているわけです、ヤン・ゲールの全くの受け売りですが、私も商店街の振興をしていたときには、通行量調査をやり、1日にどれぐらいの人が通行していれば価値があるのだというような、振り返ってみればちょっと浅はかだったなど。つまり、ゆっくり歩く人のほうがいいよねと、歩く人のスピードが遅い通りのほうが尊いということを考えれば、そこにアクティビティーという話が出てくるわけですが、仙台市役所近辺のその市民広場とかさまざまなところの、単に人数

ということで考えずに、もうちょっとアクティビティーとか滞留時間とかそういうところで考えたいなという気が大にします。そこから、実は先ほどお話ししました黒ビルの隣でオープンカフェを5年間という長きにわたってやろうと思ってはいますが、そういった取り組みをします。

ひとつだけ、ちょっと話題提供ですけれども、昨年テンポラリーにオープンカフェをほぼ1年間やりました。木造のもので、馬場先生にデザインしてもらったものですが、そこでこういうシーンがありました。お昼時に、近所というか近くで勤めるサラリーマン、ネクタイをしたサラリーマンの男性がそこに来て、実は無料で腰掛けられるストリートファニチャーを置いていました。そこに奥さんとおぼしき人がベビーカーに子どもを乗せて、そして3歳ぐらいの子供を連れてやってきて、お弁当を家から持参して、そしてお父さんと奥さんと子ども2人で仲良くお弁当を食べていました。そういうのも、今後そういう働き方というか、ランチ時には子どもと一緒に飯を食べるといふこともあり得るのかなと思いました。

手島：

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

と思って……。少し論点がずれてしまったのですが、やはりその場所に集まるために何をするかという、新しいことになり過ぎるよりは、何かもう少し今の本庁舎の中で何か残せるものだったりとか、もちろん今は少し古びたりとか、暗く働いている人もいるという岩間さんの話もありましたけれども、それでもこの仙台を支えてきたことは、絶対に否定はできなく、それで育ってきているので、温故知新ではないですが、何かそれこそ行政っぽくなってしまってもいいかもしれませんが、そういうのは物すごく大事なかなと私は思っております。

小島：

ありがとうございます。普通の市民として、そこに行くのに理由は要らないと。何で集まるかと。そういった愛着を持つようなもの、これがいわゆるベースとして市役所を建て替えしなくちゃいけないらしいけど、建て替えるにしても、そういったものがうまく生まれるようなものにしてほしいということかなと思いました。

渡辺：

ら、そこで鯉も飼うのがいいのではないかと思ったのですが、みな反対するのです。建築屋さんが反対していました。だから、今日の先生方がいたら反対されなかったと思うのです。2回チャレンジして2回反対されました。確かに水はすごく重要です。青葉山でやろうと思ったのですが、青葉山には水がなく、地下水を掘ろうと思いましたが、広瀬川底まで掘るために1億円かかるので、無理だということになりました。

議論はすごくいいと思うのですが、これを実現化するプロセスを皆さんに検討していただきたい。確かに技術は変わります。だから、その技術が変わったときに、仙台で取り入れるべき技術と入ってはいけない技術というのがあります。エコキュートもヒートポンプも、仙台は寒いから得意ではないです。だから、やっぱりいいものを選んで欲しい。僕は木を切ってもいいのではないかと思っているので、バイオマスのようなものを使うのはどうでしょうか。今でしたら煙突もよくなっていますし、火の粉もあまり出ないから、そういうのを入れたら意外とよいのではないかと思います。

さつき佐藤さんがお話をしてくれた、「どうせつくるんだから」と言えるようなものではないものは何だろうと改めて考えていたのですが、低層階の運営をどうするかということも、もちろんあるのですが、その手前の市役所という機能とか、もしくは我々が地方自治とか都市を統治するということをどう捉え直すかと考えたときに、入れなくてはいけない機能はきつと、結果、僕は変わらなくて、市民と行政職員がきちんと話をしたりとか課題を開いていったりとか、もう少し言えば、それは行政が課題を自分たちで設定して、下請的に市民に発注するような市民協働から、課題を共に考え、「何が課題だっけ」とか「どんなビジョンをつくるんだっけ」であるとか、もしかしたら、それをきっちり伴走できるような機能を市役所が持っているとか、そういうときの市役所の形のあり方ってきつとあるだろうとは思ったところなんです。

とはいえ、低層階は、仙台市民広場との接続などを考えると、市役所のただのオフィスとなってしまうと流動性もなくなりそうで、市民がふらっと入りやすくなるはなさそうだなと思ったので、何らか入りやすい機能があったほうがいだろうと思っています。そうした場合には、運営をするとか、ここで今まで議論があったみたい

に、運営する主体は結構自由な立場の人たちができるような仕組みは火は癒やしになるから、そういうのを含めて、少し違うものを入れたらどうでしょうか。少し違う、通常では入れないものを入れたらどうでしょうか。囲炉裏みたいなものもいいのではないのでしょうか。囲炉裏を入れて、エネルギー量としてではなく、そこに人が集まって暖くなる光景など、意外といいと思いませんか。だから、昔の仙台のライフスタイルのようなものを取り入れて、そこではエネルギー効率悪くてもいいのです。そういう意味では心を大事にしたようなものがあるのもよいと思います。ただ単に、仙台市役所に囲炉裏があるというのもよいのではないかと思います。

内山：

今のお話は、技術的なところから来て、やはり最後は心の問題だということだと思っております。火を使うということも、建物の中に火があるのはすごくいいと思います。庭に水があること。でも、それはいいと思うのですが、ボウフラがわくという理由で反対意見があるのですね。雨庭にしても、まちなかにたくさんつくと

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

火は癒やしになるから、そういうのを含めて、少し違うものを入れたらどうでしょうか。少し違う、通常では入れないものを入れたらどうでしょうか。囲炉裏みたいなものもいいのではないのでしょうか。囲炉裏を入れて、エネルギー量としてではなく、そこに人が集まって暖くなる光景など、意外といいと思いませんか。だから、昔の仙台のライフスタイルのようなものを取り入れて、そこではエネルギー効率悪くてもいいのです。そういう意味では心を大事にしたようなものがあるのもよいと思います。ただ単に、仙台市役所に囲炉裏があるというのもよいのではないかと思います。

ありがとうございます。すばらしいですね、もしそういうふうにできれば。もううちの娘は大きくなっちゃったので、多分そういうことには付き合ってくれないでしょうけど。10年早ければ、私もそういうことを味わえたと思います。さて、どうでしょう。じゃあ、齊藤さんお願いします。

齊藤：

今の局長の話で、ヤン・ゲールさんの事務所に、私もこの間お伺いしました。本人はもう高齢ですけども、デンマークで建築家センターがあって、そこが子ども向けの教室を持っているんですよ。そこでは、子どもに来てもらって、それは授業の一環としてまちの未来のモデルをみんなで作ったり、まちのプロトタイプモデルをつくったりしていました。ヤン・ゲールさんはずっとそういうこともやっていらっしやっていて、そこから出たビジョンをこういった「まちづくりのビジョン」に循環させていくような場として、例えばシティホールの一角だったり、その周辺にあるとすごくすきだと思います。ちょっとさっきもお話したのですが、私いま、文科省の学校の業務改善アドバイザーってやっていまして、今小中学校の先生がもうすごく疲弊されています。例

み、仕掛けにしてあげる必要があり、そうすると、行政とかがつくった評価システムの中のコンペで決めるとなると、何か違うタイプの人がはまりそうだから。何かそれは2階建てにするのか何階建てにするのかわからないけれども、評価の仕方にワンクッション挟むような形で、運営が自由な形でできるようにしたほうが、まちが開かれたりとか、課題が開かれたりするのではないかなと思います。

今から石づくりの建物をつくるわけにはいかないだろうから、きつと鉄筋の50年も使えば古びちゃうようなものをつくらざるを得ないのかと思うのですが、でも、市民である私たちが、あの場所があったから、この仙台というまちは豊かだよとか、楽しいまちだよ、ということが起きるような場所であってほしいとは思っていて、どうやら税金を納めて、余り基本的には行かない場所と思われるよりは、あそこで何か楽しくディスカッションなど、あそこであんな話をしたから2年後こんなお祭りができたねとか、こんなふうにルールが変わったよねということがわかるような場所であったら、シティホールというのがあってよかったとか、我々もシティホールとか仙台のまちをつくるということに関われた、という場所だったらいいなと思いました。

人が落ちて危険だと、言われるのです。そうすると、最後は技術と人の問題になると思うのです。先ほど技術をどう選択するかというお話、長谷川先生からありましたが、それについてコメントありますでしょうか。

長谷川：

今の内山先生の問いにストレートに答えられないのですが、まだ出てきていない議論で、環境という視点からも非常に重要なことは、地産地消ということだと思うのです。先ほど平野先生から話がありましたが、せんだいメディアテークをどういうふうに評価するかというとき、今日は新緑が映えて、1年で一番外側がきれいに見えているときです。この透明な柱は木のイメージらしいのですが、この建物はほとんど木を使ってないのです。1階から7階まで徹底的にこの建物は木を使ってないのです。伊東豊雄さんの設計です。伊東豊雄さんも、震災後は木を使うようになったようですが。

えばアウトドアスクールの公民連携でそういった学びの場を市役所の低層部に設け、もしくはそれも行政だけに任せるとすごく大変になってしまうので、民間も入ってNPOも入ってそういったものが組めるのであれば、先生方に課せられている社会に開かれた学びみたいなことも、すごい何かもっとスムーズに進むと思うのです。このシティホールの使い次第で、いろんなその社会課題が公民連携で解けそうな可能性があるなと思います。

手島：

ありがとうございます。姥浦先生、お願いします。

姥浦：

細かい情報提供ですけども、今地理の時間が変わるみたいですね。今まで我々勉強してきた地理というのは、自然地理というか、ここ首都は何とかでみたい、何かそういう話を中心でしたけれども、将来を考える地理、だからかなり都市計画に近いと思うのですが、いわゆる人文地理だけじゃない分野に入っていくというの、あと1年か2年ぐらいで始まるはずでして、そういうときにどうしていくのだろう、多分今度は逆に先生方が困ら

小島：

ありがとうございます。ある人が公民連携の本を書いていて、そこに書いてあったのは、同じことを言っていて、運営が大事だと。自由に運営ができるようにすると。いわゆる行政って公平性、平等性があるので、そこを公募して評価しちゃえという話があるけれど、2段階にすると、先に公募して、アイデアがあって、その人と一緒に運営について次の公募の条件を設定する。そこで、その人はもうそういう特許をもらって議論をして、次の公募につなげる。その人はまた公募に出してもいいと。その人は有利だけど、そういうやり方をしないと、いいものはできないということを言っていて、まさしくそうかなと思いました。

岩間：

そうですね、運営手法のところちょっと議論があったと思いますが、私も、これまでの議論の中で浮かび上がってきている、低層層にはよりフレキシブルな場所が必要なんじゃないかとか、コモンな場所だよとか。でも、一方で市役所として、オフィスとして、最低限の普通の機能をきちんと満たしている場所でもあ

その意味では、今までは屋敷林の話になっているのですが、田路先生も言われたみたいに木をどう使うのかということを考えるべきです。私たちはコストの問題もあってなかなか木を使えません。山林の所有者たちは、国産材は安くて魅力がないと言いますし、私たちは、自分の狭い小さな家をつくるときに、せめてどこかに地元産材使いたいと考えても大工さんに相手にされません。地元産材を使うことはコストがアップするだけだと言われます。

地元産材を使うことがすごく難しいのです。宮城県の例えば津山杉とか、それから南三陸町も随分杉があって、今、随分南三陸町も木を使った建物をつくっていると思います。宮城県の中の中心都市仙台の市庁舎ですから、全面的にというのは難しいですが、先ほどの環境学習のコーナーとか市民が集う場所とか、そういうところには、仙台市にはどんな木が生えているということを説明したり、材木として木を使ったり、それはこんな木肌の色で、染めたりするとこういうふうになります、ということが分かるようになっていたり。ケヤキでできた仙台筆筒は我々古い人は知って

Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う「役所市(シティホール)」を考える

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

Table A2

周辺エリアのビジョンの「翼を担う
「役所市（シティホール）」を考える

れると思うのですが、そういう中でこういうのをうまくできるといいなと。個人的には、私今専門は都市計画ですけども、都市計画という言葉を知ったのは大学3年生のときなのです。それでちょっと諸般の事情で回り道しているのですが、そういう悲惨な子どもがもうこれから出ないようにするためにも、ちゃんとストレートに行けるように、そういう道もあるかなという気がしました。

手島：

ありがとうございます。じゃあ、坂口先生どうですか。

坂口：

今のお話の続きになるかどうかかわからないのですが、屋外空間の使い方というと、屋外空間のルールの部分というのが、やはり今の話と逆行しているのが相当あって、公園もだいぶ変わってきましたが、例えば紙芝居ができないと。昔は紙芝居屋が公園に来て、上演できたのですが、例えば飴を売ってはいけない。僕の専門で言うと、西公園も一時期までは東京の唐組などの劇団などが来ていたのですが、今はテント公演ができないんです。実は、広場と

か公園もたくさんあり、インフラもつくったほうがいいと思いますが、ちょっとルールを転換するとか、あるいはルールじゃなくて何かまちがそういった人たちがやっていることを許容するような空気をつくっていくことが、今姥浦さんおっしゃったように、例えば小さい年齢から、まちがどうかだけじゃなくて、よその人が来て受け入れるような土壌ができるような部分があると、そもそもものをつくらなくてもできるのが相当出てきていて、逆に言うと、つくる部分はこうだと逆算していける部分もあるのかなとお話聞いて思いました。

手島：

ありがとうございます。さて、どうでしょう。そろそろ疲れてきたかもしれないですけども。最後に一言ぐらいですけど、どうですか。じゃあ、私が何かしゃべろうかな。

今日最初からいろいろ話をしていると、いくつかやっぱりポイントがあって、ひとつは、「この本庁舎建替えが本当にまちづくりにどう寄与するかどうか」という課題です。これについて、市役所本庁舎の本来の機能とは違うのですが、あそこの立地であるが故に、仙台市の中心に立地するがゆえに負わなくちゃいけない宿

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

るよね、みたいなものを聞いているときに、低層階を全て民間といたったときに、結構民間からするとリスクあるなって思います。ここからこのスペースは民間が運営するよ、だけれども、ここからこのスペースはやっぱり市役所としての、公平性、平等性を当たり前求められるけど、それもちょっとやってと言われたときに、「結構制限かかるだろうなあ、うーん」って思います。なので、私は、まだ本当に漠然としたイメージで話をしているのですが、民間が運営するスペースと行政が運営するスペースを切り分けて運営する形が良いと思います。

この機能のところ、自分の自社がかんだら、もしかしたら補填できるから、イコール稼げるから全然手伝いますよ、みたいな、形はないけれども稼げるポイントみたいなものも、民間に一部任せるといったやり方でできないのかなということは思っていました。以上です。

小島：

ありがとうございます。そうですね、低層部といっても行政機能みたいなものも入ってきてしまうところがあって、なかなか運営について全て民間というのは難しいところがあると思います。

民間が運営する民間の自由さというものがあるのだということが今日の基調かなと思いますので、それをベースとして市当局のほうには提言するというのが望ましいかなと。ただ、実際にやるときには非常に悩ましい問題が出てくると思います。ありがとうございました。

榊原：

この議論の前に、TableC1で小野田先生が、発注する技術という話をされていて、きょうの議論はまさにそうだなと思ったのですが、発注する側にしっかりプロの目線、専門家がいて、要求水準を作成しながら、プロセスメイキングも作成するという、発注する技術というのが行政側にも求められるというのも、先ほどの設計の話等だったのですが、民間にどこまでどうやるかとか、何をどう決めていくかとか、そこというのは多分行政内でやってしまうと、行政がつくった仕様書に基づいて、もう定量的なものに置きかえられ、何かさっきの質のクオリティーコントロールとかも、全く関係なくなって、変な人が受注するみたいな話に陥るなと思ったので、そこを何か発注する仕組みを、それこそ行政内だけではなくて、オープンな場所で何をもって評価するのか、どの

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

いるかもしれないけど、若い人たちはもう仙台筆筒にあまり触れてない可能性もあります。だから、そういう意味では仙台のケヤキや宮城の「こけし」は、どういう素材を使っているのか知る場をつくってはどうか。また、仙台市は柳生和紙の伝統もあり、宮城県の白石には白石和紙が、丸森の石もあります。仙台市内だけではなく、仙台市を中心に宮城県内の地元の資源が、いろいろあるわけです。私は、宮城県は水産県で農業県だと思っていて、自然資源というのがいろいろあります。それを生かしながら使ってきた歴史性を体験させられる場が重要です。人工的な素材だけではなく、地産地消的にそういう木をどういうふうを活用しているかという、循環を体験するようなコーナーがあるべきだと思います。

内山：

ありがとうございます。杜の都仙台の原点になった屋敷林もそうです。食料や用材、燃料など、利用ということとセットになって

いました。

平野先生、森やその利用などに関連して、何かコメントありますか。

平野：

別なこと言っていていいですか。

内山：

どうぞお願いします。

平野：

太田先生のコメントを聞いて、ああそうかと思いました。メタテーマ、僕、完全に忘れていたので。メタテーマは、基本計画のレビューなのです。

内山：

レビューはレビューなんですけど、それを広げてという形でお願



Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う
「役所市（シティホール）」を考える

ように話すのかということも議論というか、どこかの部分で決めていく、そのプロセス自体がもう協働になっているだろうし、そこが一つ重要ななと思いました。

運営のことかと思いますが、先ほど洞口君が、都市経営的議論としてライフサイクルコストを含めて2,000億円かかるとのことでしたが、さっきの議論は、庁舎を建てると80年使うと言ったので、年間25億円、月でいくと2億円。最低6万6,000㎡で2,000坪です。ということは坪1万円ですよ。そう考えると、回収できると。オフィス需要と考えれば月1万円、ここで1万円だったら全然貸せるので。長期で、と考えればできるなと思います。数字的には計算できるけれども、本当にさっき言ったように、責任も含めリスクをどこまで民間に負わせるか、行政としてもどこまで税負担するかしないかみたいなところは、ここでは決められないのですが、そういう新しい仕組みとして、折角なのでうまくできると、もしかしたらビジネスチャンスにも繋がるかもしれないので、そこを是非やってほしいなと思いました。以上です。

小島：
ありがとうございました。閉ざされた中で、行政だけで発注の仕

いしています。

平野：
まず仙台市役所本庁舎建替基本構想ですが、専門家の方にちょっと集まっていたいで議論しただけでいろいろな話が出てくるのに、書いてある基本コンセプトというのは、全部単なる前提条件に過ぎない。コンセプトというのは、本当にコンセプトにしなければならなくて、この前提条件をどう具体化してどうやっていくのか。利便性や環境配慮について、例えば、杜の都の復元に、もしくは、持続可能な杜の都としてどういう手を打つのかちゃんと考えましょうということです。具体性を持ったものになってないので、これは前提条件であってコンセプトではありません。今の時代の当たり前の前提条件です。
仙台市役所本庁舎建替基本計画も、残念ながらいろいろな大事なことが何も書いてありません。何をこの計画の中で実現して縛るのかということが書かれていない。例えば、先ほど言ったまち並

組みを考えてみると、全く従来から発想が出ないということで、それはオープンにすべきだということだったと思います。ありがとうございました。

佐藤：
運営のことを考えると、運営には運営のプロというのがいると思います。それは、誰にでもできることではなくて、いろいろな経験とかも必要だしセンスも必要だし、それこそオリエンタールコントロールのできる人でないとだめだということがあると思います。その辺が、役所でやるとなかなかそういう人選もできないし、或いは、空間をつくる準備段階からそういう人を置いて、その人を中心にして動かしていくことも実際なかなかできないということがあって、実際つくってはみたものの、経験のない人が来て、折角の性能がほとんど活かせないみたいなことになりかねない。そういう意味では、多分10年後にできるとしても、本当に数年後には、少なくともどういう空間をつくるか、これからですけれど、その空間を本当に運営できるプロの人を置いて、その人たちが中心になって、そこを使っていく人たちと一緒に、その場所をつくり込んでいくというようなことがないと、それは実際なかなか

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

みの話で言うと、一番町と市役所の空間的な繋がりがあって、そのまち並みの連続性を担保する計画でなければならないといいましたが、これがコンセプトです。それをちゃんと制約条件として表現していかないとだめなのです。なので、これは、基本構想も基本計画も、最低限やらなければならないことがまとめられているだけで、それ以上の部分がありません。そこに知恵出しましょうという部分が全然ないのです。僕の意見は、こういうイベントをやるという取り組みはすばらしいと思うのですが、それ以前に本体のほうを、もう少し何とかしていただきたいです。
今日もすごくいい話を聞かせていただいたのに、それが反映される場所もないように感じています。その割に、基本計画の段階で設備に関してだけ、そこまで細かくやるのは、早い感じがします。建物そのものが、僕は仙台のこれからのまちづくりの手本になってほしいのですが、宮城県内のほかの自治体が市庁舎、町役場の建て替えするいうときに、この資料を、参考にされてしまうのです。やっぱり仙台市はこのレベルではないと仕事受け取らな

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

Table A2

周辺エリアのビジョンの「翼を担う
「役所市(シティホール)」を考える

命といいますか、そういったものだと思います。

もうひとつ、前半の議論の中でもやはりメモリアル施設の話が出てきていたのですが、世界的に見ると、これは震災復興の総仕上げとして見えるだろうということです。多分それは仙台市がというよりは、東日本大震災があって、社会がどう変わったか、これによって社会が変わると誰もがあのときに思ったと思うのですが、その結果としてこの市役所が何かおそらく背負わされると思うのです。この建替えて、これまで通りの当たり前のものをつくってしまうと、僕らは何にも反省をしなかった、何も勉強しなかったということになると思います。それを担えるような市庁舎をどうやってつくるか、あるいは社会をどうやってつくっていくかということ、多分問われているのかなと思いました。

最後は、「都市ビジョンをどうやって実現させてゆくか」という課題に対して、どうするかです。それに対して僕らの社会はどうやって挑んでいくかという、この施設だけじゃない問題だと思っております。「複合的に課題を設定し複合的に手法を使って問題を解決する」ということが必要でだと思いますが、なかなか今まで僕らの社会はそれをうまくやり切れなかったと思います。そういうことを言うと何か市の人に申し訳ないですが…。

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

活きるものではないなと思います。だから、運営ということでは考えると、一つはそういうことがあるかなと。人の問題ですよね。もう一つは、民間が役所なのかという話ですけど、もちろん民間でできることはいっぱいあって、そこで自由に展開していくことにメリットがあるというのは確かだと思いますけど、ただ公平性とかとただだけではなくて、50年とか100年とか、その土地の50年先、100年先のことについて、そのことについて責任とれと言われてたって、民間はそれちょっと勘弁してくださいって言うしかないですよね。でも、役所とかその土地に責任を持って運営していく立場からいったら、そこはやっぱり考えなければいけないし、そこをきちっと育てていくようなやり方というのを考えていく必要がある。そこは、民間の資金だけでは回せなくて、そのことに同意してくれる人たちによる税金をそこに投じていくしかない。投げ方が、これまでちょっとうまくいっていないというか、折角そうやって税金を集めてやってきたことが、硬直化するだけで余り実を結ばないということがあったので、そういうことだったら民間に自由にやらせてもらえばいいや、というようになりがちなところもありますが、それは一方で、そのことによって民間が背負い切れない、さっきからも話が出ていますけれど、それまで

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

いという、仕事の意味でもぜひリーダーシップを発揮してほしいと思っています。次回以降、基本計画の次は基本設計です。基本設計段階の資料は、全国に誇れる資料にしていきたいと思っています。環境、景観の話も、仙台だからこういうものをちゃんと織り込まなきゃだめだという話をきちんと明示した上で展開するというのがすごく大事だと思います。基本計画までは、レベルが低いように思います。前提条件であってコンセプトではないです。前提条件で検討したことになってないので、やっぱり市役所が頑張ると、請け負っているコンサルタントの方々がもっと責任感を持ってやってほしいと思います。

すいません、辛口で。

内山：
ありがとうございます。締めコメントとして非常に重要なことを言っていたと思います。
このラウンドテーブルができて、「環境」をテーマにテーブルが設

木村：
ビジョンのところで、やはり最後にもう一度お話ししたいなと思ったのですが、先ほど天野さんの話が、まさにビジョンのうちのひとつだったと思います。「社員が、子どもと一緒に昼ご飯を食べられる様子」って見えますよね、ビジョンじゃないですか。ビジョンって、前回のラウンドテーブルの時もお話ししたのですが、基本的にはいくつかの分野別に分かれてしかるべきだと思っていて、天野さんが先ほどおっしゃってくれたビジョンは福祉的、教育的なビジョンであって、ビジネスのビジョンではないですし、防災のビジョンでもない。ですが、そういう各プロフェッショナルがせっかくなら集まってきていて、「こういう1日見たい」とか、「こういうシーンを見たい」みたいなところを何か最後もし聞けたらうれしいなと思っていて、私に関しては、もうそのジャズフェスのような1日ですね。ぜひ皆さんの「この1日見たい」「このシーン見たい」を教えてください。

坂口：
先程のように、紙芝居ができないかと思えます。紙芝居、実は300

やってしまったのでは、本当に50年後、100年後はどうなるかわからないということになります。そこも考えていくところが、多分民間でやるべきことと税金を使ってやるべきことの境目になっていくのだろうし、そこをまさにもうちょっとこれから、この空間、場所を運営していくに当たって、本当にしっかり考えていく必要のあるところなのかなと思います。

小島：
ありがとうございました。メディアテークを運営している、今もさせていただいておりますけれども、言葉が重いかなと。私の落としどころは、どちらかという行政から運営主体を外してしまうというところが、このミッションかなと思って勝手に考えていまして、そういうことに皆さんの意見をいただいたところでございます。ありがとうございます。

ただ、岩間さんや泰さんもおっしゃいましたけれども、稼働というシチュエーションのある部分とそうでない部分というのは当然あるので、そこをどう全体として判断していくかというのは非常に悩ましいところではあると思いますが、でも、ベースとしては、行政が丸々抱えて管理をするぞということだと、別に市役所に

けられたというのは、現状では多分足りないということ仙台市の方は意識されていて、この部分を広げたいということだと思います。それで、かなり具体的なイメージが今日のテーブルで出てきたので、このようなことが文言として、設備のスペックや要素技術のカタログのようなものではなくて、何か新しいあり方、ビジョンみたいなものとして書かれるというのが、この議論が生かされる一つの方向かなと思います。

錦織さん、何か補足があればお願いいたします。

錦織：
私は、今回企画をやらせていただいているのですが、仙台市役所本庁舎建替基本計画の検討委員会にも参加している委員です。それで、私の力不足というところもあるのですが、やっぱり基本計画を見ていてコンセプトの部分が足りないというのは常々感じています。

今回、環境というところに焦点を絞って議論させていただいたの

枚の人もいるのです。長編、昔は自転車で来ていて、いわゆる連続ドラマと同じで、ぎりぎり終わるわけです。300枚の紙芝居師は、多分80歳の高齢のかたで日本におそらく数人しかいない。その人たちが、もし仙台で、例えば市役所の前で、全くの市民広場で10人ぐらいのちびっ子を集めて紙芝居をするということは、その人がここで仕事をしているということでもあるし、あるいはそういったことを許容できるシステムを再構築できる機会でもある。市役所の前で、市役所をちょっと批判的に見るような紙芝居をしているとすると、それはある意味広場の復活な感じもするので、僕が今木村さんの問いに答えるとすると、多分そういったことで、そういったインフラを一生懸命専門家がつくるとするのがちょっとおもしろいかなとは思いました。

手島：

ありがとうございます。どうですか、どなたか今の木村さんの問いかけに。じゃあ、末さん。

末：

僕の外部空間のイメージは、先ほどからお伝えしているような感

ざわい空間は必要ないということになってしまうので、にぎわいをここに持ってくると、市民協働も含めてですが、持ってくるといのであれば、官としては民に委ねる覚悟を持ってということかなと。当然、委ねられた民も、50年間というのは厳しいところがあるでしょうけれど、そのぐらいの覚悟を持つということを探していくということかなと思います。ずっと市民協働で前半部分ご議論いただいた、遠藤さんからもその運営について、皆さんからのご意見も含めて少しご意見いただければと思います。

遠藤：

今日は、運営の話まで皆さんからご意見を伺うということでしたが、運営は民間がいいのかどうかということも含めて、その運営形態ももっと議論して、ある意味パターンをつくりながらも議論していかないと、多分、市でも審議会でもいろいろな組上に乗っていかない可能性もあるのかなと。だから、今日で結構終われないというか、もっとも私達も勉強し、いろいろなケースを考えていかないといけないのかなと。だから、洞口さんの役割はすごく大きいなと考えたりしたのですが、あとは、さっき榊原さんが前のセッションで、発注する技術というのもありました

ですが、環境とか設備にかかわらず、全体に波及していけるようなコンセプトが出てくるといい思っていたのです。いろいろ皆さんからお話を伺っていると、四ツ谷用水のことだったり、仙台の都市の成り立ちだったり、緑がどういうふうに関係と結びついてきたかということや東北ならではのエネルギーの使い方なども出てきているので、環境という視点ではあるのですが、全体のコンセプトとして影響できるようなものとして最終的になっていけばいいと思っています。以上です。

内山：

ありがとうございます。

すでに、こちらの期待していた以上の意見は出たと思うのですが、ほかに何か補足のコメントとかありましたら。いかがでしょうか。

田路：

車との関係があると思います。やはりこれから車が大幅変わる時

じですが、今回できる新しい市庁舎の中で、行政の職員さんと、まちをどうにかしたいと思って活動しているような人たちが議論をしていたり、あるいは市役所の人たちがその働き手として、このまち、このエリアをどのようにしていくかということを活発に議論している場所ができていくというような、そういった市役所の職員の皆さんが企画の機能だったり、そのネットワーキングを、盛んにあちこちで行っているイメージです。経済局の人だけじゃなくて、文化観光局の人もやっているし、都市整備局の人もやっているというような、そんな感じのところが多層にたくさん展開しているという場所が、この市庁舎にできると、震災復興後に起こっている動きがまさに視覚化されているというか、実際に空間化されている形になるので、そういった場所にしていきましょうということも、もうひとつのビジョンとしてあってほしいと思います。

手島：

ほか、どなたかありますか。私は今の問いかけ、すごくいい問いだと思います。震災復興以降、あるいはこういうラウンドテーブルのチャンスを頂いて以降に思うことがあります。やはり地域に

けれど、協働のいろいろな仕組みもどんどん変えていかないといけないですね。その協働の仕組みの制度変更もなかなかできていないって私は思う部分があって、そういったところも別に協働の仕組みだけではなく、仙台市の仕組みのリニューアルと一緒に議論しながら、どんどんバージョンアップを仙台はさせていく、そんな場にもできるというのかなと。それが、運営にもあり方にもかかわっていくということになるのではないかなと、皆さんのお話を聞いていて感じました。

洞口：

発注の話が結構重要になってくるなとまさに思っていて、最後にはなりますが、僕がちょっとつくって見たんですけど、RFP方式とかあるんですけど、例えば仙台市がPPPでいきますとなったら、代理人としてエージェントと契約を結んでやりやすくなったときに、今までだったら仙台市がダイレクトにプロポーザルをやって終わっていたんですけど、エージェントがプロポーザルを代理人としてやると。そこに、RFP方式を使うと、普通だと、建築だけでやるんですけど、今回の場合、建築だけではなくて、そこにランドスケープが入ってもいいでしょ

代に入る。それから、僕が気になっているのは、仙台駅のところは結構発展しているのだけど、市役所側が少し寂れてきているじゃないですか。だからやっぱり仙台駅とまちの活性化を考える際、やはりこのあたりと駅とをどううまく関係づけて、人が流れるかを考えたほうがいいのではないかと思います。そこに、仙台でしたらDATEBIKEみたいなものもあるといいです。それから、これからスローモビリティや、その地域実証も始まるので、市役所が中継点になりながら人の移動も含めて考えたほうがいいのかと思います。そこには環境があるような移動の仕組み、そういうのをうまく取り入れていく。車の乗り方をはじめとして、まちと移動の関係も5年たつと大分変わるのではないのでしょうか。それから、地下鉄の関係。主要な地下鉄から仙台市に来られる方、市民のこともあるけど、地方から来る方もたくさんいます。仙台が発展するためには大事です。それも含めて、市庁舎を見に来ていただくためにはやはりアクセスは大事ですから、それも含めて考えたかどうかと思いました。

Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う「役所市(シティホール)」を考える

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

Table A2

周辺エリアのビジョンの一翼を担う
「役所市(シティホール)」を考える

住む住人、しかも様々な専門性のある(専門性というのは社会から教えてもらって専門教育を受けてそういうことを身につけさせてもらっている)市民の皆さんが、やはりちゃんと、社会参加することが重要だと思います。地域のことは自分の家のことと同じなので、専門性を持った様々な市民が責任を持って社会に参加することが重要だと思います。しかし、なかなかその仕組みが今ないですね。僕らもそれなりの年齢になれば、それなりの責任負って社会に対して発言するべきだと思うし、そういう参画の仕方ができるような市庁舎になればいいかなと思います。ほかありますか、どなたか。

佐藤:

フューチャーセンターについてお伺いしたいのですが、どのような場をそう呼ぶのでしょうか。

齊藤:

フューチャーセンターは、スウェーデンで1996年に生まれたのですが、市民協働だけではなく、セクターを超えてその未来を共創していく、コクリエーションしていくという考え方で、それはや

はり物理的な場が大事だという思想のもとに始まっています。コペンハーゲンや、アムステルダムや、デンハーグなどにはそういった場がちゃんとあって、機能しています。デンマークは日本よりずっと小さな国ですけれども、日本よりも公民の連携はすごく密です。そこには、今日のラウンドテーブルのような場が成立しています。「ここちょっと今日寒いけど、皆さんももっと何かお話をしたいし…」「ここに芝生があったら、もし何かピクニックみたいだったらもっと違うアイデアが出るかもしれないし…」、そういうようなイノベーションの場をフューチャーセンターというのです。時間が過ぎておりますので、もしご興味があったら、またお話しさせて頂きたいと思います。

以上

Table B2

低層部の必要機能と運営手法を考える

うし、何か床を持つような、もし長期リースとかやるんだったら、床を持つデベロッパーみたいな人が入ってもいいですし、それは事業体によっていろいろな共同企業体にプロポーザルで入ってもらって、プロポで選ばれた人たちがきちんと基本計画とか事業計画の委員会に入り、計画の策定することができます。先ほどの別のテーブルでも話題になっていた発注のときに、イギリスであれば基本設計に入る前に、そもそもちゃんとした専門家が入って、やる人たちが入って計画つくっていくけれども、仕様発注と現在の仕組みでやると、もう行政が勝手に基本計画検討委員会をやって、これでやるのでよろしくねみたいな感じで、建築家も入る専門家も結局ただの下働きというか、行政の言いなりでやるしかないみたいな話になってしまうんです。けれども、代理人が主導してデザイン会議みたいな何かしらの会議とかを置きながら、そこでちゃんとした、彼らが責任を持った、自分たちで出資してお金を出すのであれば責任を持った事業計画を練ってやって、そこが最後SPCかなんかをつくってそこに発注すればいいんじゃないかなと思います。これは、かなり右寄り左寄りといったら大分こっちに寄っているのかわからないですけれども、どっちかに振り切った提案ではあると思うんですけれども、こういった一つの

考えはあるのかなと思っております。

小島:

ありがとうございました。一つ最後に、私も公務員だったのですが、仙台市役所職員で非常に優秀、民間に行くと初めて優秀だというのがわかりました。ただ、優秀であったとしても、佐藤さんみたいにずっとメディアテークにかかわっているというのは逆に珍しいですよ。人事異動があります。宿命ですよ。そうすると、宿命の中でこういった皆さん方のご議論を実行するというときに、市に委ねたとしても、人事異動でどこかで瓦解するというか歯車が狂っちゃいますよね。そういう意味では、今、洞口さんが提案というよりも、そういう仕組みの考えを披歴しましたけれども、エージェントというのが、市民協働も前半部分もそうだったのですが、一つの大きなキーワードなのかなと思いました。いわゆる民に委ねる覚悟、そのときに民としても、エージェントとしてそれを機能するということが期待されているだろうと思いました。ありがとうございました。

以上

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

内山:

ありがとうございます。ほかにありますか。

村上:

一言だけ。先ほど木をどう使えばよいかという話が出たと思うのですが、今、新国立競技場も木を使っているのですが、木造で庁舎を建てるのもいいのではないかとこのふうにも思います。あと、これは実際技術的に可能かどうかかわからないのですが、より遠い将来を考えたときに、例えば自然に戻るような素材でつくれないかと思えます。泥を使ったような工法でお家を建てているというアースバッグ工法というのがあるんですけど、そういうものに近いような素材です。例えば、地球上どこでも確保できるような素材でつくれないかとか、環境に負荷がかからない、調達の時点から負荷がかからないような、そういうものをつくれないかなというのを思っていました。

あと、やはりこれだけのものをつくるのであれば、世界中から注目されるような、視察に来てもらえるぐらいの、世界に先駆けてそういうものをつくれたらいいのではないかと思います。

太田:

それを受けてのコメントなのですが、僕も世界中から視察に来るような建物になってほしいと思うのですが、基本計画の資料5を見ると、少なくとも環境建築としても、恐らく建築一般としても、凡庸な建築ができる可能性が高いと言わざるを得ません。パッシブ建築の大事な部分がいちいち抜けているというのがその理由です。例えば、蓄熱について抜けております。ナイトパージが別の資料では出ているのですが、夏と冬の負荷をきちんと調べ、どのようにすればZEBが可能なのか、そのアプローチを示すべきでしょう。ここでは環境条件に言及がなく、地域に合った要素技術が何なのか分からないのです。秋田県庁舎には秋田県庁舎の環境条件と敷地条件があるでしょうし、ほかのところにはまた気候条



件と敷地条件があると思うので、それぞれの市庁舎で暖房が幾ら、冷房が幾らというのもきちんと見ていかないといけないと思います。ZEBゼロというゴールだけがはっきりしてそこに至る方法が書かれていない。特に基本計画は建築の全体の配置計画、意匠を決めるところなので、環境のことを考えた挙げ句、凡庸になりましたとらないようにしてほしい。最初に「Flowtooth」という言葉をご紹介しましたが、歯の浮くような話を並べるのは止めた方が良いでしょう。ぜひともフォスターやピアノやフラーがやったように、環境を考えることで世界中から見に来るような先進的な建物が実現できるよう、気を引き締めて計画を進めたほうがいいかと思っています。

内山：

ありがとうございました。

すごくいろいろな意見をいただいて、かなり充実した議論ができたと思います。これをまとめて発表するのですけれども、この後、

まとめ切れるかちょっとわかりませんが、なるべく頑張りたいと思います。

あとは、ここで交わされた議論がどうやって仙台市役所本庁舎建替基本計画に結びついていくのかということが重要だと思います。何度かこういう話し合いを交わしていくうちに、ここだけの議論ではなく、もっと社会全体の議論として共有され、それが最終的に、仕様書に文言として書かれるというふうになるのがいいかと思っています。

今日はいろいろと貴重なご意見をいただきまして、本当にありがとうございました。(拍手)

以上

Table C2

勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える

手島浩之

公益社団法人 日本建築家協会東北支部宮城地域会

東北らしく新しい市民社会を体現する 市役所（シティホール）

第一回仙台ラウンドテーブルで、「欧米でのシティホールとは、行政でなく、市民の代表が集まる議会の象徴であり、市民社会の象徴である」との意見が共感を呼んだ。市民活動・市民協働の歴史を看板とする仙台のシティホールは、「これからの市民協働・公民連携を踏まえた、未来の市民社会の象徴であり、市民・議会・行政が対話する場」であるとのイメージが共有された。この新しい庁舎は、市民・民間企業・議会・行政など多様な主体が関わりながら市政課題を解く仙台の中心的な場であるべきことが共有された。

①震災復興の総仕上げとして世界に向けて発信するシティホール

- ・世界的に見ると、この市役所本庁舎建て替えは、世界中の耳目を集めた東日本大震災（以下、震災）からの復興の総仕上げとして映り、「未曾有の大震災を乗り越えたこれからの社会の在り方をどう体現するか」が求められているとの指摘が出された。仙台市は震災復興都市として世界中から視察を受け入れ、その舞台としてはこのシティホールが相応しい。また、札幌・仙台・福岡・四都市の中でも「東日本大震災復興都市」というアイデンティティの獲得は重要であり、その態度表明はこの建替えプロジェクトに掛かっているとの意見が多く上がった。
- ・大きな社会的転換点とも言える震災直後の混乱の中で整然と列に並ぶ姿は、東北ならではの気質によって成し得る光景であり、震災復興の過程でも「静かな合意形成」が平然と出来る東北の風土に、新しい社会運営の姿を垣間見たという意見が多くあった。その東北の代表都市として、「震災を乗り越え、市民協働も含めた新しく東北らしい市民社会を体現するシティホール」だとのビジョンが共有された。

②「次世代の杜の都」として未来に引き継がれるシティホール

- ・数十年で壊し建替えてしまうこと自体への疑問が多く指摘され、これからは、市民の愛着が湧き取り組み（市民に開かれた計画プロセスと運営への参加）の必要性が指摘された。
- ・仙台のキャッチフレーズである「杜の都」は、四谷用水・屋敷林や戦後に植樹された榎並木街路樹などを、先人たちの努力の積み重ねの賜物である。今、私たちが「新しい杜の都」を未来に残さなければ、「杜の都」というアイデンティティを次世代に引き継ぐことが出来ず、「環境共生社会の実現」という世界的潮流にも乗り遅れてしまうとの意見が多く出された。
- ・環境性能などスペックについて、数値目標を求めるだけでなくその考えの中心を明確にし、時代を経ても陳腐化しない努力を継続することの重要性が指摘された。
- ・これまで積み重なった歴史の痕跡を残す整備の必要性が多く指摘された。

③「社会教育」の生きた教材としてのシティホール

- ・子どもの社会教育の見学対象となるために「市政や社会の仕組みが可視化された場」であるべきだとの指摘が多くだされた。また防災教育・環境教育の教材として、或は、市民協働の在り方、働き方や労働環境のモデルケースとしても活用するべきとの指摘もあった。

④市民イベントの在り方を変え、街に波及効果を生むシティホールと勾当台公園市民広場

- ・定禅寺通・勾当台公園市民広場周辺エリアは、歩行者に開かれ人々の市民活動が見え仙台独自の風景がある。オープンカフェなどが日常的に展開されるまちづくりにより、周辺エリアへの波及効果が期待される。低層階を市民に開かれたつくりとすることで、まちの構造と人の流れが大きく変わり、回遊性の向上、周辺エリアの活性化の波及効果が多く指摘された。
- ・新しい本庁舎は、毎週のように行われ仙台市民の誇りである市民イベントのメインステージの一部となり、光のページェントや定禅寺ストリートジャズフェスティバル・青葉祭・とっておきの音楽祭などの在り方も大きくグレードアップできるとの指摘が多くあった。
- ・当該敷地は地下鉄・バス等公共交通の拠点であり、今後の交通システムの変化を考え併せると、この整備如何により公共交通環境は大きく変わる。また、この建替えは、多くの職員の職場の再配置であり、分散庁舎の跡地利用を含め、物理的な意味でのまちへのインパクトは大きいとの指摘も多くあった。
- ・仙台には東北の玄関口としての機能が期待されており、（市民広場が東北全域の物産イベントで使用されていることを考えると）宮城県、東北各地への案内機能の充実により、東北全域への波及効果が期待される。

⑤開かれたプロセスによって醸成する「仙台らしさ」

- ・脱スパイクタイヤ運動や市民イベントの成り立ちストーリーなど、市民協働・市民活動が仙台の看板として掲げられている。市役所本庁舎の建替えという最重要プロジェクトに際して、市民力を活かし「次世代の市民協働」の姿を具現化するべきとの指摘が多くあった。
- ・「仙台らしさをどうつくるか」との課題に、「らしい形」を作っても陳腐化してしまうこと、「仙台らしいやり方・仙台独自の取組みのプロセスこそが、未来の仙台らしさを生む」という考え方と共に、それを目に見える象徴として可視化することの重要性が共有された。
- ・生活圏拡大運動など、バリアフリーの先駆的な取り組みでも名を馳せた歴史を持っており、庁舎建設のプロセスの中でどう踏襲するかも重要である、との指摘がなされた。

⑥市役所本庁舎低層部と市民広場の運営について

- ・最後に、このような未来の実現のために、低層部の運営は、従来の市役所主体や指定管理だけでなく、民間事業者や市民が担うような新しい運営手法の検討の必要性が指摘された。

仙台ラウンドテーブルを通じて、「計画前から完成後の運営プロセスまで市民に開かれ、議論を積み重ねる場の重要性」が共通認識として浮かび上がった。様々な分野の専門家でもある数多くの市民が参加し、「私たちの社会」という認識を共有し、専門知識を駆使して具体的プロジェクトについて議論を深めた意義は大きい。これは東北・仙台ならではの特質だと言えないか。個人の意見はどうしても偏るが、議論を積み重ねることにより「意見の広がりはどこからどこまであり、関心の中心はどこにあるか」が共有され、ひとつのぼんやりした共通認識を形成する。こうしたラウンドテーブル的合意形成の試みを「仙台方式」として、仙台市の未来をつくる様々なプロジェクトに広げてゆくべきであるとの共通認識に至った。



主催

主催

仙台市財政局理財部本庁舎建替準備室

一般社団法人 宮城県建築士会

一般社団法人 宮城県建築士事務所協会

公益社団法人 日本建築家協会東北支部宮城地域会

企画委員会

菅原 大助	仙台市財政局理財部本庁舎建替準備室
高橋 香奈	仙台市財政局理財部本庁舎建替準備室
吾妻 光	仙台市財政局理財部本庁舎建替準備室
石原 修治	宮城県建築士事務所協会
中居 浩二	宮城県建築士事務所協会
佐々木 昌喜	宮城県建築士事務所協会
大宮 利一郎	宮城県建築士事務所協会
川口 裕子	宮城県建築士事務所協会
奥山 和典	宮城県建築士事務所協会
栗原 将光	宮城県建築士事務所協会
高橋 直子	宮城県建築士会
清本 多恵子	宮城県建築士会
小林 淑子	宮城県建築士会
錦織 真也	宮城県建築士会
石井 順子	宮城県建築士会
辻 一弥	JIA 宮城地域会
松本 純一郎	JIA 宮城地域会
手島 浩之	JIA 宮城地域会
安田 直民	JIA 宮城地域会
阿部 元希	JIA 宮城地域会
佐伯 裕武	JIA 宮城地域会

報告書編集

安田 直民 JIA 宮城地域会

付記

本誌に掲載されている登壇者等の肩書、所属は各回の仙台ラウンドテーブルが開催された当時の物です。

宮城県建築士事務所協会とは「一般社団法人宮城県建築士事務所協会」を、宮城県建築士会とは「一般社団法人宮城県建築士会」を、JIA 宮城地域会とは「公益社団法人日本建築家協会東北支部宮城地域会」を指します。

本誌に掲載されている事例報告、各団体等の活動報告、ならびにラウンドテーブルの討議録は、当日の録音及び発表原稿をもとに文字におこしたものです。一部、録音の不鮮明な部分、口語体で理解が難しい部分については加筆をおこなっています。

内容については上記の文責のもとに原稿を作成いたしました。

市民と専門家による仙台市役所本庁舎建替シンポジウム

CITY HALL

第3回仙台ラウンドテーブル

「地域コアとなる市役所（シティホール）を育む」



2020年8月17日 第一刷発行

著作・監修：

仙台市

一般社団法人 宮城県建築士会

一般社団法人 宮城県建築士事務所協会

公益社団法人 日本建築家協会東北支部宮城地域会

発行所：

公益社団法人 日本建築家協会東北支部宮城地域会

〒980-0811 仙台市青葉区一番町4-1-1

仙台セントラルビル4F

<http://www.jia-tohoku.org/archives/author/miyagi>

電話 022-225-1120 FAX 022-213-2077

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

本書の無断複製（コピー）は著作権法上での例外を除き禁じられています。

また、代行業者等に依頼してスキャンやデジタル化することは、

たとえ個人や過程内の利用を目的とする場合でも著作権法違反です。

© 2020 City of Sendai, Miyagi Society of Architects & Building Engineers, Miyagi Association of Architectural Firms, Miyagi Association, the Japan Institute of Architects Tohoku Chapter

ISBN978-4-903378-32-9

本書の内容に関するご意見・ご感想は下記までお寄せください。

仙台市財政局理財部本庁舎建替準備室

E-mail : zai003075@city.sendai.jp